

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2020年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000003554

国立国語研究所

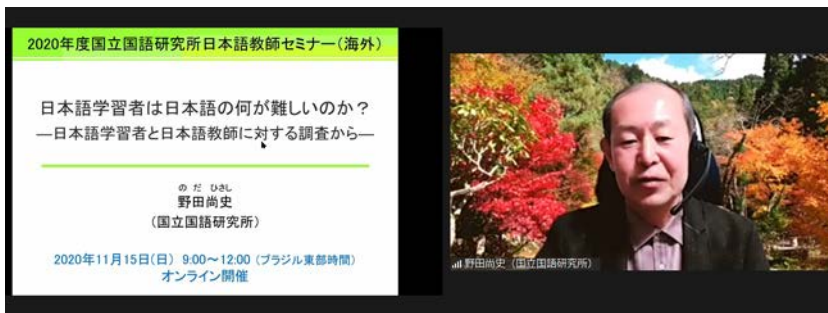
年報

2020 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動 (2020 年度)



NINJAL シンポジウム
「言語コミュニケーションの多様性」
(2020 年 10 月 3 日, 国立国語研究所/Web 開催)



2020 年度国立国語研究所
日本語教師セミナー (海外)
「日本語学習者は日本語の何が
難しいのか? —日本語学習者と
日本語教師に対する調査から—」
(2020 年 11 月 15 日, Web 開催)

令和 2 年度国立国語研究所
日本語教師セミナー (国内)
「対話システム研究と日本語教育」
(2021 年 2 月 27 日, Web 開催)



国立国語研究所オープンハウス 2020
(2020 年 9 月 10 日, Web 公開)



第15回 NINJAL フォーラム

「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま、何をしなければならないか—」
(2021年2月27日, Web開催)



創作方言劇「ヒュームンの生まれた海」
鹿児島県沖永良部島知名町との協定に基づき、
方言復興のための創作方言劇を共同で制作。
(2021年2月23日, おきえらぶ文化ホール)



ニホンゴ探検 2020

「ことばのミニ講義」(田窪所長)
(2020年8月19-21日, Web上に順次公開)



「国立国語研究所 言語学レクチャーシリーズ」 (試験版)

大学生から大学院生を主な対象として、
言語学の基礎を学ぶことができる動画教材
を制作。2020年度中に8本の動画を公開。

目 次

2020 年度年報の発刊に当たって	1
I. 概要	3
1. 沿革とミッション	4
2. 2020 年度の活動の概略	4
3. 組織	7
(1) 組織構成図	7
(2) 運営組織	8
・ 運営会議	8
・ 外部評価委員会	8
・ 所内委員会組織	8
(3) 構成員	9
・ 所長・研究教育職員・特任研究員	9
・ 客員教員	10
・ 名誉教授	11
・ プロジェクト PD フェロー	11
・ 外来研究員	11
4. 2020 年度の予算および決算	12
II. 共同研究と共同利用	13
1. 共同研究プロジェクト	14
2. 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト	28
3. 外部資金による研究	30
4. 2020 年度公開中のコーパス・データベース	33
5. 学術刊行物	41
(1) 所員による著書・編書	41
(2) 国立国語研究所論集	42
6. 研究成果の発信と普及	44
(1) 国際シンポジウム	44
(2) 合同シンポジウム・研究発表会	50
(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会	53
(4) NINJAL コロキウム	68
(5) NINJAL サロン	68
(6) 講習会・セミナー	69
7. センター・研究図書室の活動	71
(1) 研究情報発信センター	71
(2) コーパス開発センター	72
(3) 研究図書室	72
III. 国際的研究協力	75
1. 世界の大学・研究機関との提携	76
2. 国際シンポジウム・国際会議の開催	76
3. 日本語研究英文ハンドブック	76
4. 海外の研究者の招聘・受入	77
IV. 社会連携と広報	79
1. 地方自治体との連携	80
2. 見学・研修・視察等	80

3. 学会等の後援・共催	80
4. 広報	81
(1) 刊行物	81
(2) Web 発信等	81
(3) 一般向けイベント	82
(4) 児童・生徒向けイベント	82
V. 大学院教育と若手研究者育成	85
1. 連携大学院	86
2. 特別共同利用研究員制度	86
3. NINJAL チュートリアル	86
4. 優れたポストドクターの登用	87
VI. 教員の研究活動と成果	89
略歴, 所属学会, 役員・委員, 受賞歴, 参画共同研究, 研究業績 (著書・編書, 論文・ブックチャ プター, コーパス・データベース類, 展示など, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究 調査, 学会等の企画運営, 一般向けの講演・セミナーなど, その他の学術的・社会的活動, 大学 院教育・若手研究者育成	
VII. 資料	167
1. 運営会議	168
運営会議規程	168
2020 年度の開催状況	168
運営会議の下に置かれる専門委員会	169
2. 評価体制	170
(1) 自己点検・評価委員会	170
(2) 外部評価委員会	170
(3) 基幹研究プロジェクトの評価	171
3. 所長賞	171
4. 研究教育職員の異動	173
VIII. 外部評価報告書	175
令和 2 年度業務の実績に関する外部評価報告書	177
はじめに	178
1. 評価結果報告書	180
令和 2 年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」に関する評価結果	182
令和 2 年度「管理業務」に関する評価結果	265
2. 資料	271

2020 年度年報の発刊に当たって

2020 年度の年報をお届けします。いよいよ 2022 年 4 月 1 日から第 4 期中期計画が始まります。第 3 期中期計画は言語研究の基礎となるデータの収集と整理・公開、その活用方法の提示を行い、「コーパス言語学」を創成するという目的で実施されてきました。第 4 期では、第 3 期の研究をより発展させ、データの収集方法、コーパスの作成方法、その公開方法に関しても新しい提案をさせていただく予定です。第 4 期中期計画ではこの目的のため「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究の共創」と題し、国立国語研究所(国語研)のこれまで蓄積してきたデータをデジタル化し、公開していく作業と並行して、日本中に眠っているデータを掘り起こして、アーカイビングしていきます。同時に、それらの利活用の新しい方法も提案する予定です。

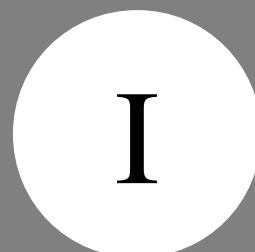
Mouton Handbooks of Japanese Language and Linguistics 全 12 巻は、今年度中にすべての巻の出版準備がととのい、2022 年度中には全巻出版されるかと思います。特に、特定の理論に偏らず、広く日本語に関する記述的、理論的研究が概観でき、かつ、執筆した著者による最先端の研究が紹介されており、現在の日本語研究の水準を示すものとなっています。第 4 期からは De Gruyter Mouton 社との新たな協定の下に、Mouton-NINJAL Library of Linguistics という新たなシリーズをスタートいたします。すでに、何冊かの原稿は完成して、2022 年度中には出版される予定です。ご期待ください(<https://www.degruyter.com/serial/mnll-b/html>)。

2022 年 4 月から始まる第 4 期でも、国語研は大学共同利用機関として、日本語・日本語教育の共同研究の中核的拠点としての役目を果たすために最大限の努力を重ねていきます。これまで以上に地域の活性化に寄与し、大学や地域をつないで、大学自体の活性化にも寄与できるような活動を行っています。

同時にそれらの活動を世界中の研究機関との共同研究につなげて、かつ、成果の発信をしていかなければなりません。そのため、2021 年度はハワイ大学との MOU に基づく密接な協力関係のもと、日本の危機言語・危機方言および周辺地域の危機言語研究の成果を世界に発信していくために Brill 社と協定を結び、オンライン出版を行います。現在、3 冊の日本の危機言語・危機方言のオンライン出版の準備を行っており、そのうち 1 冊は来年度早々には出版が可能と思われます。このオンライン出版は、国語研関係者・ハワイ大学関係者については、厳正な審査の上、出版費用を国語研が負担する形で出版されます。それ以外の方は、出版費用を確保の上、審査を受けてください(<https://brill.com/page/2538?language=en>)。

国語研の研究はそのほとんどが共同研究プロジェクトからなります。第 4 期では、さらに多くの共同研究を行うために、2021 年度から国語研の設備や資料を用いて行う共同研究を新設しています。国語研が 70 年間以上収集・整理してきた未公開資料などを利用しながら研究を行っていただくものです。これまでと異なり、修士論文や博士論文などの執筆のために利用することも可能になるかと思います。随時受け付けていますので、多くの応募をお待ちしています。詳しくは国語研ホームページをご参照ください。

2022 年 3 月
国立国語研究所長
田 窪 行 則



概要

1

沿革とミッション

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論がおこなわれてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究をおこなう機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が昭和23年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を收拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国立国語研究所は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国立国語研究所は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては、研究所の英語名称“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国立国語研究所の役割である。

2

2020年度の活動の概略

国立国語研究所では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個々の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、第三期中期計画の6年間に於いてそれらの土台となるのは「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という第三期機関拠点型プロジェクトの研究目標である。この目標の達成に向けて2016年度に研究領域に合計6件の共同研究プロジェクトとコーパス開発センターでの研究テーマのもとに、数々の共同研究プロジェクトを開始し、継続している。2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大によりシンポジウムや研究活動に大きな影響を受けたが、オンラインに切り替え、計画を変更しつつ実施した。

国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」、NINJAL国際シンポジウム「第11回日本語実用言語学国際会議（ICPLJ11）」、国際ワークショップ「Japanese/Korean Phonology」（ソウル大学人文学部との共催）、および国内研究会等59件をすべてオンラインで予定通り開催した。

日本語研究の国際化に向けては、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員、外来研究員として招聘するとともに、中国・北京日本学研究中心、台湾・中央研究院語言學研究所等、アジア10機関、英国・オックスフォード大学人文科学、米国・ハワイ大学マノア校等欧米4機関との学術交流協定に基づき、引き続

き共同研究を実施した。また、言語学分野で定評のあるドイツ・De Gruyter Mouton 社との協定による日本語研究英文ハンドブックシリーズ(全 12 巻)については、順次刊行し、2020 年度に 1 巻追加した(既刊は 8 巻)。

学術研究により得られた多くの成果物を電子化し、ウェブサイト上で公開している。専門家向けに『国立国語研究所論集』などの刊行物、一般向けに『ことばの波止場』などの冊子、研究資料・研究材料として 6 点のコーパス・データベースを新規公開、26 点のコーパス・データベースを追加・拡充した。コーパスの一部はオンライン検索システムを通して無償公開されており、利活用を推進するためコーパスの利用講習会を多数開催したほか、利用に関するビデオチュートリアルを 7 本新規に作成して公開した。これらの取り組みにより、大学の授業でコーパスを利用できるオンライン検索アプリケーション「中納言」の講義用アカウントを 101 講義分(昨年度比 220 %), 2841 名の学生等(同 268 %)に発行するなど、大学等の授業でコーパスが広く活用され、共同利用による大学等の研究・教育力強化への貢献を拡大している。

また、大学院から大学院生を主な対象として、言語学の基礎を学ぶことができる動画教材「言語学レクチャーシリーズ」試験版を制作し、国立国語研究所 YouTube チャンネルにてオンライン講義の補助教材として大学に向け 8 本の動画を公開した。

例年対象者別に開催している国際シンポジウム、コロキウム、チュートリアル、フォーラム、セミナー、ニホンゴ探検などのイベントは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンライン(一部は対面との併用)に切り替えて開催した。

異分野と融合した文理融合研究を推進するため、高エネルギー加速器研究機構、生理学研究所、統計数理研究所、国立国語研究所など 4 機構の研究機関が参画する機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の情報神経物理学」において、機能的磁気共鳴画像装置(fMRI)を使用し、短歌の鑑賞に関わる脳活動と言語情報の深層学習結果との関連を調べる研究を共同で推進した。

言語資源を活用した異分野融合研究の推進のために、リクルート社 Megagon Labs やワークスアプリケーションズ徳島人工知能 NLP 研究所との共同研究を引き続き実施してオープンソースライブラリの更新等を行うとともに、レトリバ社との共同研究を新たに開始し、国立国語研究所が提供する話し言葉コーパスを活用して音声言語に適応した深層学習モデルを構築して同社より 2021 年 3 月に公開した。

地方自治体との連携による地域社会への研究成果還元の一環として、大学の機能強化への貢献のために、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で昨年度に刊行した『地域文化の可能性』をもとに出版準備を進めた。また、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所(東外大 AA 研) LingDy3 と共同で昨年度刊行した『フィールドワーク事前研修報告書』をもとに『フィールド言語学の手引き』の出版準備を進めた。

鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との協定に基づき、方言復興のための知名町公民館講座を令和 2 年 6 月から毎月 1 回オンラインで開催したほか、創作方言劇『ヒーヌムンの生まれた海』を知名町と共同で制作し、令和 3 年 2 月 23 日におきえらぶ文化ホール・あしびの郷・ちなにおいて上演した。和泊町においては、言語復興について職員と協議を重ね「島ムニ継承推進協議会」の発足に協力した。また、鹿児島県薩摩川内市との協定に基づき、令和 3 年 1 月に甕島の全中学校(3 校)を対象に、ことばと方言に関する啓蒙講演をオンラインでおこなった。

展示を通じた最先端の言語研究成果を社会へ発信するために、2021 年 3 月からの民博特別展「復興を支える地域の文化—3.11 から 10 年」に「災害と方言」のテーマで参加し、3 台のモバイル型展示ユニットを展示した。また、9 月に静岡英和学院大学で「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」を、3 月に東京都八丈島で動画作品「八丈島のことばと文化」の展示を開催した。

日本語教育水準の向上のため、日本語学に関する研究成果を広く海外の日本語研究者に伝え、日本語研究の更なる国際化を目指すために、ソウル大学との学術交流協定に基づき国際ワークショップを開催したほか、日本語実用言語学国際会議を誘致しオンラインで開催した。またオックスフォード大学との学術交流協定に基づき「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートを、北京外国語大学日本学研究センターとの学術交流協定に基づき日本語習得過程調査の分析を進めるなど、海外ネットワークを強化した。

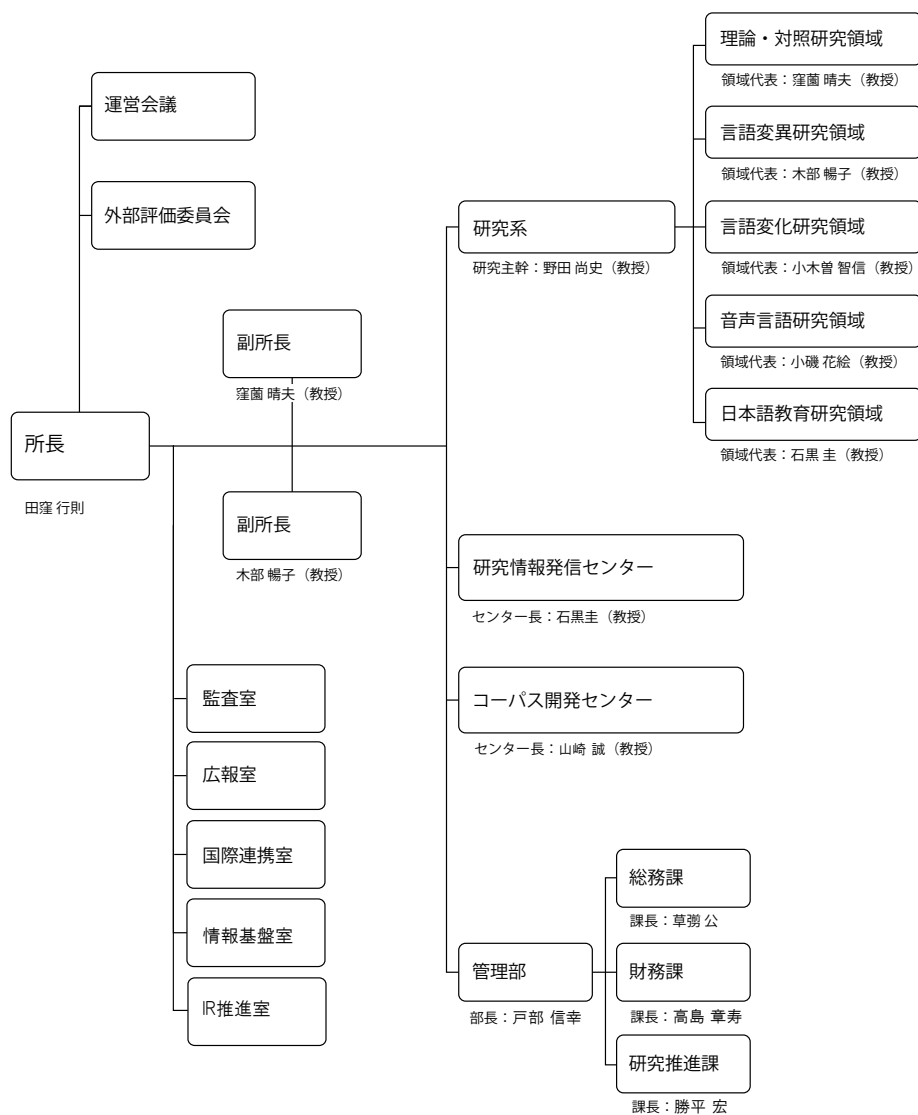
大学等研究機関と連携して、日本語学に関する研究成果を広く海外の日本語研究者に伝え、日本語研究の更なる国際化を目指すために、主に海外の若手日本語研究者(日本語教師・日本語学習者を含む)を対象とする NINJAL 日本語学講習会を 4 回、NINJAL チュートリアルを 2 回、いずれもオンラインで開催し、合計

442 人が受講し日本語教育のスキルアップに貢献した。特に、海外においては、ブラジリア大学と連携し、現地時間に合わせてセミナーを開催し、60 名の参加があった。

活動・成果の詳細は各項目をご覧ください。

(1) 組織構成図

2020 年度



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

伊東祐郎	国際教養大学専門職大学院教授
上野善道	東京大学名誉教授
呉人恵	富山大学人文学部教授
近藤泰弘	青山学院大学文学部教授
樋口知之	中央大学理工学部経営システム工学科教授
福井直樹	上智大学大学院言語科学研究科教授 / 国際言語情報研究所所長
益岡隆志	関西外国語大学外国語学部教授
馬塚れい子	理化学研究所脳科学総合研究センターシニア・チームリーダー

(内部委員)

木部暢子	副所長 / 教授
窪蘭晴夫	副所長 / 教授
野田尚史	研究主幹 / 教授
石黒圭	研究情報発信センター長 / 研究系 / 教授
山崎誠	コーパス開発センター長 / 研究系 / 教授 (2020 年 4 月 -)
小木曾智信	教授

任期：2019 年 10 月 1 日 - 2021 年 9 月 30 日 (2 年間)

外部評価委員会

上山あゆみ	九州大学教授
沖裕子	信州大学名誉教授
小野正弘	明治大学教授
片桐恭弘	公立はこだて未来大学学長
坂原茂	東京大学名誉教授
砂川裕一	群馬大学名誉教授
橋田浩一	東京大学教授
森山卓郎	早稲田大学教授

任期：2020 年 10 月 1 日 - 2022 年 9 月 30 日 (2 年間)

所内委員会組織

- ・所長室会議 (所長, 副所長, センター長, 管理部長)
所長室会議のもとに, 以下の委員会を設置
 - 国立国語研究所第 4 期中期目標・中期計画準備委員会
- ・連絡調整会議 (所長, 専任研究教育職員, 管理部長)
連絡調整会議のもとに, 各種委員会を設置
 - ▶ 管理運営関係
 - 自己点検・評価委員会
 - 情報セキュリティ委員会
 - 情報基盤運用委員会
 - 知的財産委員会
 - 情報公開・個人情報保護委員会
 - ハラスメント防止委員会
 - 研究倫理委員会
 - 施設・防災委員会

- 研究図書室運営委員会
 - ・ 選書部会
- 将来計画委員会
- ・ 学術・発信関係
 - コーパス開発センター運営委員会
 - 研究情報発信センター運営委員会
 - 広報室運営委員会
 - 研究情報誌編集委員会
 - 論集編集委員会
- ・ 共同研究プロジェクト推進会議
- ・ 安全衛生管理委員会

(3) 構成員

所 長

田窪行則 理論言語学, 韓国語, 琉球諸語, 言語ドキュメンテーション, 危機言語

教育研究職員・特任研究員

- ・ 理論・対照研究領域
 - ・ 領域代表 / 教授
 - 窪蘭晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言
 - ・ 教授
 - Prashant Pardeshi 言語学, 言語類型論, 対照言語学
 - 松本曜 意味論, 認知言語学
 - ・ 准教授
 - 窪田悠介 理論言語学 (統語論, 意味論)
- ・ 言語変異研究領域
 - ・ 領域代表 / 教授
 - 木部暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 危機言語
 - ・ 教授
 - 五十嵐陽介 言語学, 音声学
 - ・ 准教授
 - 朝日祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学
 - 井上文子 方言学, 社会言語学
 - 熊谷康雄 言語学, 日本語学
 - 山田真寛 言語学, 形式意味論, 言語復興
 - ・ 特任助教
 - 青井隼人 言語音声学, 音韻論, 琉球語学
 - 麻生玲子 言語学, 記述言語学, 琉球諸語, 八重山語, 波照間方言
 - 籠宮隆之 音声科学
 - 中川奈津子 コーパス言語学, 方言学
- ・ 言語変化研究領域
 - ・ 領域代表 / 教授
 - 小木曾智信 日本語学, 自然言語処理
 - ・ 教授
 - 大西拓一郎 方言学, 言語地理学, 日本語学
 - 山崎誠 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

- | | |
|--------------|--|
| 横山詔一 | 認知科学, 心理統計, 日本語学 |
| ▶ 准教授 | |
| 高田智和 | 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理 |
| 新野直哉 | 言語学, 日本語学 |
| ▶ 特任助教 | |
| 間瀬洋子 | 日本語学, 日本語史, 計量言語学, コーパス言語学 |
| • 音声言語研究領域 | |
| ▶ 領域代表 / 教授 | |
| 小磯花絵 | コーパス言語学, 談話分析, 認知科学 |
| ▶ 教授 | |
| 前川喜久雄 | 音声学, 言語資源 |
| ▶ 准教授 | |
| 柏野和佳子 | 日本語学 |
| 山口昌也 | 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学 |
| • 日本語教育研究領域 | |
| ▶ 領域代表 / 教授 | |
| 石黒圭 | 日本語学, 日本語教育学 |
| ▶ 教授 | |
| 宇佐美まゆみ | 言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学 |
| 野田尚史 | 日本語学, 日本語教育学 |
| ▶ 准教授 | |
| 野山広 | 応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究 |
| ▶ 特任助教 | |
| 岩崎拓也 | 句読法, 表記論, 日本語教育 |
| ▶ 研究員 | |
| 福永由佳 | 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策 |
| • コーパス開発センター | |
| ▶ 教授 | |
| 浅原正幸 | 自然言語処理 |
| ▶ 特任助教 | |
| 石本祐一 | 音声工学, 音響音声学 |
| 岡照晃 | 計算言語学, 自然言語処理 |

客員教員 (2020 年度在籍者)

- 客員教授
 - ▶ 理論・対照研究領域

Wesley M. JACOBSEN	ハーバード大学教授
岸本秀樹	神戸大学教授
小泉政利	東北大学教授
斎藤衛	南山大学教授
John WHITMAN	コーネル大学教授
吉本啓	東北大学教授
 - ▶ 言語変異研究領域

狩俣繁久	琉球大学名誉教授
新田哲夫	金沢大学教授
佐々木冠	立命館大学教授

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 渋谷勝己 | 大阪大学教授 |
| 岩崎勝一 | カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授 |
| 長田俊樹 | 総合地球環境学研究所名誉教授 |
| 五十嵐陽介 | 一橋大学教授 |
| ・言語変化研究領域 | |
| 金水敏 | 大阪大学教授 |
| 橋本行洋 | 花園大学教授 |
| 岡崎友子 | 東洋大学教授 |
| ・音声言語研究領域 | |
| 伝康晴 | 千葉大学教授 |
| 大野剛 | アルバータ大学教授 |
| 菊地英明 | 早稲田大学教授 |
| 丸山岳彦 | 専修大学教授 |
| ・日本語教育研究領域 | |
| 砂川有里子 | 筑波大学名誉教授 |
| 迫田久美子 | 広島大学特任教授 |
| 籾山洋介 | 南山大学教授 |
| ・客員准教授 | |
| ・理論・対照研究領域 | |
| 秋田喜美 | 名古屋大学准教授 |
| Alastair BUTLER | 弘前大学准教授 |
| ・言語変異研究領域 | |
| 下地理則 | 九州大学准教授 |
| Anna BUGAEVA | 東京理科大学准教授 |
| ・言語変化研究領域 | |
| 青木博史 | 九州大学准教授 |

名誉教授

角田太作	2012.4.1 称号授与
John WHITMAN	2015.10.1 称号授与
迫田久美子	2016.4.1 称号授与
Timothy VANCE	2017.4.1 称号授与
影山太郎	2017.10.1 称号授与
相澤正夫	2019.4.1 称号授与

プロジェクトPDフェロー (2020 年度在籍者)

守本真帆	理論・対照研究領域
井戸美里	理論・対照研究領域
鈴木彩香	理論・対照研究領域
松崎安子	言語変化研究領域
宮部真由美	日本語教育研究領域
烏日哲	日本語教育研究領域

外来研究員

林由華 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)

「琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明」 (2017.4–2020.12)

横山晶子 (日本学術振興会特別研究員 (PD), 受入教員: 木部暢子)

「危機言語の継承に向けた実践的研究—琉球沖永良部語を事例に—」 (2017.4–2020.6)

玉村禎郎（京都産業大学教授，受入教員：山崎誠）

「日本語語彙の計量的研究」（2019.7-2021.6）

蘇克保（東呉大学准教授，受入教員：窪園晴夫）

「台湾人日本語学習者発音指導についてー日本語母語話者の聴覚許容度を中心にー」（2019.9-2020.8）

4 2020 年度の予算および決算

国立国語研究所の2020年度の予算および決算を下表に示す。

（単位：千円）

	予算額（当初）	決 算 額
収 入	1,133,670	1,268,405
運営費交付金	1,081,417	1,163,228
版権料	0	11,544
科学研究費補助金等間接経費収入	13,782	60,930
その他雑収入	1,363	842
寄附金収入	5,548	1,256
受託研究等収入	3,824	3,624
受託事業等収入	2,736	1,981
施設費収入	25,000	25,000
支 出	1,133,670	1,212,484
研究経費	19,148	7,380
共同利用経費	429,358	419,211
教育研究支援経費	21,150	35,885
人件費	529,777	589,001
一般管理費	102,677	132,570
受託研究経費	3,824	2,267
受託事業経費	2,736	1,170
施設整備費	25,000	25,000

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として、(4) 2020 年度公開中の各種コーパス・データベース、(5) 学術刊行物、(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催し、および(7) センター・研究図書室の活動状況を掲げる。

1 共同研究プロジェクト

第3期中期計画における国語研全体の研究課題は「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」である。これを達成するため、5 研究領域とコーパス開発センターでは共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究領域・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。また、この研究課題は、国語研が所属する人間文化研究機構における、機関拠点型基幹研究プロジェクトの1つとして位置付けられている。

2020 年度は、「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」のプロジェクトとして基幹型(6 件)、新領域創出型(3 件)、および共同利用型(13 件)の3タイプと、コーパス基礎研究(1 件)を実施した。

なお、基幹型プロジェクトの概要については、『大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所令和2年度業務の実績に関する外部評価報告書』の各プロジェクト・センターの評価から抜粋した。

詳細は、第VIII章を参照。

(1) 【基幹型】6 件

基幹型プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。5 研究領域の専任教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

- ・対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
 - ・プロジェクトリーダー：窪蘭晴夫(理論・対照研究領域・教授)
 - ・研究期間：2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i) 世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii) 一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii) 日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語(諸方言を含む)を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得(第一言語獲得、第二言語習得)はもとより、言語に関係する他の学問分野(心理学、認知科学他)との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性(普遍性)と相違点(個別性・多様性)を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班(サブプロジェクト)を組織する。音声研究班は「語の

プロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集(英文、和文)の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図(電子媒体)の刊行を目指す。

《2020年度の主要な成果》

1. 研究

対照言語学研究を推進するために、国内研究者5人を共同研究員として追加し、国内外あわせて157人の組織で事業を遂行した。コロナ禍にあって対面形式のイベントは実施できない状況となったが、オンラインを活用して例年以上の活動を行った。具体的には4つの研究班ごとの公開研究発表会を計23回(国内学会でのワークショップ1回を含む)、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 5)を1回、国際シンポジウム・ワークショップを2件開催した。これら26件の企画において計53件の研究発表が行われ(うち学生が筆頭発表者のもの8件)、計1676人(延べ)の参加者が得られた(うち海外機関研究者112人、大学院生を含む学生381人)。

共同研究の成果を取りまとめる執筆・編集活動に注力した結果、プロジェクト全体で図書10冊、論文99編(ブックチャプター60編含む)、学術発表・講演85件(一般向け除く)を公開・刊行した。このうちプロジェクトの所内メンバー(教員5名)が下記6冊の図書(研究書2冊、研究論文集4冊)および論文23編を刊行し、さらに7冊の研究書・研究論文集の編集・執筆を行った。

- ・『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』(パルデン プラシヤント、堀江薫 共編、ひつじ書房) 2020年5月
- ・*Type-Logical Syntax* (Yusuke Kubota and Robert D. Levine 共著、MIT Press) 2020年9月
- ・*Broader Perspectives on Motion Event Descriptions* (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.), John Benjamins) 2020年8月
- ・『移動表現の類型論と第二言語習得』(吉成祐子、眞野美穂、江口清子、松本曜 共著、くろしお出版) 2021年2月
- ・『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』(窪蘭晴夫他 共編、開拓社) 2021年2月
- ・『一般言語学から見た日本語のプロソディー』(窪蘭晴夫 著、くろしお出版) 2021年3月

2. 共同利用・共同研究

学術交流協定に基づき、神戸大学大学院人文学研究科と上記の Prosody and Grammar Festa 5 を、ソウル大学と国際ワークショップ(Japanese/Korean Phonology)をそれぞれ共同開催した。また日本語・韓国語の対照研究のためにイギリス・ヨーク大学と学術交流協定を締結し、共同研究を開始した。

データベース等の構築・公開については、名詞修飾表現の言語地図 The World Atlas of Noun-Modifying Constructions (WANMC) を完成し、当初の計画より1年早く一般公開した。また諸言語の移動動詞に関する文献目録(英文)の増補改訂を行い公開した。

この他、国際シンポジウムの開催や出版企画についてアドバイザーボードのメンバーに意見を求め、その意見を査読者の選定や第4期のプロジェクトテーマの立案に活用した。

3. 教育

若手育成としてPDフェローを2人雇用し、それぞれ研究指導を行った。またプロジェクト全体で5人の非常勤研究員を雇用し、対照言語学の事業を推進した。海外の大学から大学院生2名(アメリカ、ロシア)を特別共同利用研究員として受け入れ、研究指導を行った。

さらに大学院生4人、学振PD1人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内/国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ8人の大学院生(筆頭発表者)に発表の機会を提供した。

イベントとしては、主に国内の大学院生を対象に第36回NINJALチュートリアル「カテゴリ文法入門」(令和2年9月)を開催し、海外では中国(常州工学院)の日本語学講習会および主にインドを対象にしたNINJAL日本語学講習会(4日間)において、学生と教員を対象に日本語学に関する講習会を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計7件、それ以外の講演を6件行った。このうち所内メンバーは鹿児島県薩摩川内市と交わした連携協定に基づき、同市・甕島の中学校(全3校)において中

学生・教員・地元住民を対象として方言講演会を開催し、計 100 人(中学生 60 人, 教員・一般 40 人)の参加者を得た。またアジアの日本語研究者を対象とした日本語学講習会(4 日間)では延べ 276 名の参加があったが、そのうち約半数が現役の日本語教師であり、社会人の学び直しの機会となった。

5. グローバル化

海外の出版社から 2 冊の研究書/研究論文集を国際出版した(MIT Press および John Benjamins)。イベントについてはコロナ禍において大きな影響を受けたが、オンラインを利用して合計 2 件の国際ワークショップを開催し、合計 105 人の参加を得た。このうち Japanese/Korean Phonology のワークショップはソウル大学との学術交流協定に基づくものである。また海外(主にインド)の日本語研究者を対象とした NINJAL 日本語学講習会をオンラインで 4 日間開催し、延べ 276 名の参加者を得た。

・共同研究員数: 140 名

・共同研究員所属機関:

放送大学, 九州大学, 金沢大学, 京都大学, 大阪大学, 東京大学, 一橋大学, 室蘭工業大学, 神戸大学, 筑波大学, 熊本大学, 東京外国語大学, 名古屋大学, 富山大学, 新潟大学, 愛知教育大学, 北海道大学, 東京農工大学, 岐阜大学, 鳴門教育大学, 宮崎大学, 三重大学, お茶の水女子大学, 弘前大学, 国立民族学博物館, 熊本県立大学, 島根県立大学, 公立小松大学, 大阪府立大学, 東京都立大学(首都大学東京), 前橋工科大学, 京都産業大学, 慶應義塾大学, 北星学園大学, 同志社大学, 早稲田大学, 上智大学, 法政大学, 大東文化大学, 大阪保健医療大学, 福岡大学, 聖心女子大学, 京都外国語大学, 東京理科大学, 麗澤大学, 美作大学, 獨協大学, 亜細亜大学, 立命館大学, 関西外国語大学, 神田外語大学, 安田女子大学, 実践女子大学, 神奈川大学, 関西大学, 南山大学, 国際基督教大学, 名古屋学院大学, 志学館大学, 理化学研究所, 防衛大学校, 神戸市立工業高等専門学校, 武蔵野大学, 日本女子大学, 日本大学, 國學院大学, 沖縄大学, 目白大学, 九州国際大学, カリフォルニア大学バークレー校, カリフォルニア大学ロサンゼルス校, カリフォルニア大学サンタクルズ校, ルンド大学, 徳成女子大学校, 韓国外国語大学, 国立東洋言語文化大学, マサリク大学, スタンフォード大学, ライス大学, チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学, アンカラ大学, ネワール言語文化研究所, ラドバウド大学, エディンバラ大学, デリー大学, ミシガン大学, 内蒙古大学, 東アフリカカトリック大学, DefindCrowd Corporation

・統語・意味解析コーパスの開発と言語研究

・プロジェクトリーダー: Prashant PARDESHI (理論・対照研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス(ツリーバンク)が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用推進の一環として、最終年度までに 5~6 万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シ

ンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。

《2020 年度の主要な成果》

1. 研究

- ①統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会（オンライン版）を 1 回開催し、計 56 名（延べ）の参加者が得られた。
- ②弘前大学と連携し、津軽方言のコーパス構築を進めた。
- ③検索インターフェース NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル（第 1～25 節；25 節以降は準備中）の日本語版と英語版をプロジェクトのホームページで公開した。
- ④NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果論をまとめた英文文集 Verb-Verb Complexes in Asian Languages (Taro Kageyama, Peter Edwin Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) Oxford University Press, 571 頁＋前書き・索引) の編集・校閲作業を終え、出版社に提出した。
- ⑤日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を刊行した。この教材の一部の練習問題を NPCMJ を使って解くためのインターフェースを開発し、刊行と同時に公開した。

2. 共同利用・共同研究

- ①統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、7 名の非常勤研究員（うち PD フェロー 1 名、大学院生 3 名、フルタイム 1 名、パートタイム 1 名および技術補員 1 名）を雇用し、プロジェクト共同研究員と共にプロジェクトの事業（コーパス開発、チュートリアル開催、データの著作権処理等）を進めた。
- ②学術交流協定に基づき、弘前大学と津軽方言のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加するための共同研究を行い、データの一部に対して試験的にアノテーションを試みた。また、津軽方言の有対動詞のデータを収集・分析し、「使役交替言語地図」(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)) に格納して、公開した。
- ③昨年に続き、本年も宮田 Susanne 教授（愛知淑徳大学）との共同研究を進め、子供の日本語習得のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加し、公開した。
- ④業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーション付与作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題のインターフェースを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。また、竹内孔一准教授（岡山大学）と連携して NPCMJ のデータの一部に意味役割とフレームの情報を付加し、公開した。

3. 教育

- ①若手研究者を育成するために、PD フェロー 1 名、非常勤研究員数名 5 名を雇用し、アノテーション方法の研究およびアノテーション付与作業を推進した。
- ②7 名の大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、そのうち 2 名に公開研究会における発表の機会を提供した。
- ③オンライン方式の講習会を 1 回開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・インターネットを通して、検索インターフェース NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル（第 1～25 節）の日本語版と英語版を公開し、NPCMJ コーパスとともに一般に発信した。

5. グローバル化に関する計画

- ①英語による研究成果として、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を 2020 年 10 月にひつじ書房から刊行した。この教材の一部の練習問題を NPCMJ を使

いながら解くためのインターフェースを開発し、刊行と同時に公開した。

②英語インターフェースと日本語インターフェース、ローマ字表記のデータと仮名漢字表記のデータが選択できるようにした。

③The International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC) 2020 (マルセイユ, フランス, 2020 年 5 月 11~16 日)(新型コロナウイルス感染拡大によるオンライン開催)で研究成果を発表した。

・共同研究員数: 49 名

・共同研究員所属機関:

神戸大学, お茶の水女子大学, 名古屋大学, 東北大学, 鳥取大学, 弘前大学, 東京大学, 岡山大学, 東京外国語大学, 国立情報学研究所, 国際教養大学, 関西外国語大学, 実践女子大学, 立命館大学, 立命館アジア太平洋大学, 愛知淑徳大学, 同志社大学, 南山大学, 上智大学, 名古屋経済大学, 大阪大学, 慶應義塾大学, 九州国際大学, マサチューセッツ工科大学, ヨーク大学, ペンシルベニア大学, マサチューセッツ大学アマースト校, デラウェア大学, コーネル大学

・日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

・プロジェクトリーダー: 木部暢子(言語変異研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4-2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009 年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている 8 つの言語—アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、沖縄語、国頭語、八丈語—が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1) 日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析, (2) 音声・映像資料(ドキュメンテーション付き), 「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備, (3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催, (4) 若手育成のためのフィールド調査の手引き書の作成。

なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

《2020 年度の主要な成果》

1. 研究

【フィールドワーク】

全国 40 地点で調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止とした。

【研究発表会等】

その代わりに研究発表会を充実させた。実施内容は以下のとおり(すべてオンライン開催)。①2020 年 6 月 14 日 プロジェクト第 1 回研究発表会「格・情報構造(本土諸方言)」, ②2021 年 3 月 14 日 プロジェクト第 2 回研究発表会, ③2021 年 3 月 6 日・3 月 21 日「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」(「対照言語」文法研究班と共催), ④2021 年 3 月 28-29 日「アジア・アフリカ地理言語 2020 年度第 2 回研究会 Classification and symbols for a geolinguistic study of grammatical relations」(東外大 AA 研共同利用・共同研究課題「アジア・アフリカ地理言語学研究」, 科研費 18H05510 と共同開催)。その他、科研費と合同で異分野融合の研究発表会を開催した。⑤2020 年

8月17-18日「遺伝学・言語学・考古学の成果から見る宮古諸島の人の多様性」, ⑥2020年9月19-20日「係り結びと格の通方言的・通時的研究」, ⑦2020年12月19-20日「日琉諸方言系統論の展望」。

【研究成果】

前年度に実施した青森県八戸市方言調査の報告書を3月に刊行した。また、『うちなーぐち活用辞典』『及位の方言』を刊行した。

【教材・教育プログラム】

東外大 AA 研 LingDy3 と共同で『フィールド言語学の手引き』の編集を、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」、鹿児島大学と共同で『地域文化の可能性』の編集を行った。これらは2021年度出版の予定である。

【受賞】

琉球朝日放送株式会社と共同で制作した「くとうばどう宝 ～消滅危機言語を守る人～」が第26回プログレス賞 奨励賞を受賞、本プロジェクトが刊行した『鳩間方言辞典』の著者 加治工真市氏が琉球新報活動賞(出版活動部門)を受賞した。

【大学との組織的な連携】

東外大 AA 研 LingDy3 との連携協定に基づき、クロスアポイントメントにより特任助教1人を雇用し、「フィールド言語学ウェビナー」、教材『フィールド言語学の手引き』の編集、若手育成等を実施した。

2. 共同利用・共同研究

【データベース等】

『日本語諸方言コーパス(COJADS)』モニター版のデータの更新、追加公開を行った。公開データは62地点、60時間となった。COJADS モニター版は2019年5月の公開から1年半で中納言の利用契約数が3,206件となった。また、自然言語処理研究等の有償利用申請が3件あった。『アイヌ語口承文芸コーパス』はアイヌ語千歳方言の民話8話を追加し、公開説話数は38話となった。『日本言語地図データベース』(LAJの原データの電子化)は25項目のデータを追加し、ダウンロード可能なデータは100項目となった。

【方言辞典】

昨年度刊行した『鳩間方言辞典』の全用例に音声を付けた『鳩間方言 音声語彙データベース』、『多良間島方言辞典』(渡久山春英, セリック・ケナン)を国語研リポジトリで公開した。また、首里・那覇方言の『うちなーぐち活用辞典』(宮良信詳著), 旧山形県及位村方言の『及位方言辞典』(高橋良雄著)を刊行した。

【講習会・講演会】

NINJAL チュートリアル(オンライン)で「コーパスを使った方言研究」を開催した。

【研究成果】

NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」, Proceedings of Methods XVI (2020年4月)等においてCOJADSを使った研究を公開した。

3. 教育

【プロジェクト非常勤研究員の雇用】

若手育成のために、非常勤研究員を9人雇用した。

【大学院生、学振PD等の参加】

大学院生6人、日本学術振興会特別研究員5人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、学会や研究発表を支援した。今年度の発表件数は大学院生、学振特別研究員合わせて10件である。

【講義】

2020年12月5-6日に東外大 AA 研 LingDy3 と共同で、フィールドワークに関する講義「フィールド言語学ウェビナー」を、2021年2月11-12日に九州大学 言語学講座 下地理則研究室と共同で、大学院生の研究支援を目的とする「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキルWS」をオンラインで開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献

【地域社会との連携】

宮崎県椎葉村との協定に基づき、機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で、『椎葉村方言語彙集』の刊行準備を進めた。2021 年度に椎葉村と共同出版の予定である。また、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との協定に基づき、方言復興のための公民館講座を 6 月から毎月 1 回オンラインで開催するとともに、沖永良部の方言ミュージカル『ヒーヌムの生まれた海』を制作し、2021 年 2 月 23 日に知名町あしびの郷文化ホールにおいて上演した。

【研究成果の社会への普及】

NINJAL フォーラム「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま、何をしなければならないか—」を 2021 年 2 月 27 日に東大 AA 研 LingDy3 と共同で開催した(オンライン)。文化庁、気仙沼市等と共同で「危機的な状況にある言語・方言サミット(気仙沼)」を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、次年度に延期となった。

【展示】

「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、モバイル型展示ユニットによる展示を以下のとおり実施した。①2020 年 9 月 25 日-12 月 17 日 静岡英和学院大学「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」の展示。②2021 年 3 月 4 日-5 月 18 日 民博特別展「復興を支える地域の文化—3.11 から 10 年」に「方言と地域文化—沖縄県八重山と東北各地の方言」のテーマで参加し、「危機に瀕した言語・方言」「地震・津波・方言」「がんばっぺ 東北」を展示。③昨年度に開催した企画展示「ハワイ：日本人移民の 150 年と憧れの島のなりたち」を踏まえ、2021 年 3 月 15 日-5 月 9 日に山口県周防大島町、周防大島町教育委員会が主催する「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」(周防大島文化交流センター)に共催として協力した。

【社会人のスキルアップ】

知名町において役職職員や市民が参加する公民館講座や方言劇制作を実施し、方言の保存と復興に関する技術訓練を行った。また、和泊町職員と協議を重ね、「島ムニ継承推進協議会」の発足に貢献した。

5. グローバル化

【海外の研究者との連携】

海外の研究者 4 名を共同研究員に加え、共同研究を推進した。オンラインのシンポジウムでは、海外の共同研究者 2 名の発表を含め、研究発表とディスカッションを行った。

【国際共同研究発表会】

毎年実施しているハワイ大学マノア校との共同研究発表会は、新型コロナウイルスのため日程の調整がつかず、今年度は中止とした。

【国際出版】

ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language, 2018 年の国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集の刊行準備を進めた。また、ハワイ大学との協定に基づき、消滅危機言語を中心とするオープンアクセスの電子書籍シリーズを Brill 社から刊行するための協議を行った。

・共同研究員数：57 名

・共同研究員所属機関：

金沢大学、一橋大学、琉球大学、福岡教育大学、千葉大学、九州大学、長崎大学、岡山大学、東京外国語大学、岩手大学、広島大学、東北大学、鹿児島大学、島根大学、東京学芸大学、熊本県立大学、愛知県立大学、東京都立大学(首都大学東京)、北星学園大学、東京理科大学、立命館大学、志学館大学、沖縄国際大学、安田女子大学、日本女子大学、弘前学院大学、跡見学園女子大学、関西大学、南山大学、別府大学、國學院大学、立正大学、東京大学、駒澤大学、静岡英和学院大学、中京大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、フランス国立科学研究所、オークランド大学、シンガポール国立大学

・通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

・プロジェクトリーダー：小木曾智信(言語変化研究領域・教授)

・研究期間：2016.4-2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトは、上代(奈良時代)から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」(平安仮名文学作品)、「室町時代編」(狂言)等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」(代表者・高田智和)と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

《2020年度の主要な成果》

1. 研究

- ・通時コーパス活用班のグループ研究発表会を3回オンラインで実施した。
- ・昨年度新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった「通時コーパス」シンポジウム2020(本来は2020年3月13日予定)を9月13日にオンラインで開催した。
- ・「通時コーパス」シンポジウム2021を3月13日にオンラインで開催した。
- ・研究成果として、書籍5件、論文・ブックチャプター等38件、発表・講演65件、コーパス・データベース等6件を公開した(原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むもののみ。コーパス・データベース等はアップデート版を含む)。
- ・日本語学会2020年度秋季大会でワークショップ『『日本語歴史コーパス』活用入門』を開催した(10月24日、オンライン)。

2. 共同利用・共同研究

- ・新規に『日本語歴史コーパス』「明治・大正編IV近代小説」と「江戸時代編IV随筆・紀行」の松尾芭蕉作品を整備し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した(一般公開は2021年4月)。
- ・共同研究員等によって別のプロジェクトで構築された「春秋雑誌会話篇」を再整備して「明治・大正編III明治初期口語資料」として、また「延喜式祝詞」を再整備して「奈良時代編III祝詞」として『日本語歴史コーパス』に追加し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した(一般公開は2021年4月)。
- ・令和3年度公開のために「鎌倉時代編III軍記」「明治・大正編SP盤落語」(テキスト版)、「明治・大正編新聞」のデータ整備を行った。
- ・語誌情報ポータルサイトへの「語彙研究文献語別目録」データ登載準備を行った。

3. 教育

- ・『日本語歴史コーパス』中納言の講習会を日本語学会ワークショップの中で1回、独自に1回、NINJALチュートリアルで1回の3回実施した。

- ・『日本語歴史コーパス』の解説ビデオを公開した(国語研オープンハウス動画)。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・国語教育グループで「通時コーパス国語教育活用ワークショップ」を開催し、中高の国語科教員および教職課程履修生に通時コーパスの講習を行った(2月23日)。
- ・通時コーパスでの『新編全集』の利用契約を発展させて、(株)小学館と国語研との間で連携協定を締結した。

5. グローバル化

- ・シンポジウム・研究会をオンラインで公開し、海外から多数の参加を得た(「通時コーパス」シンポジウム2020オンラインは12ヶ国24名、「通時コーパス」シンポジウム2021は9ヶ国21名)。
- ・時差に対応するため、シンポジウムの録画をオンライン(YouTube)で公開し国際的に発信した。

・共同研究員数: 71名

・共同研究員所属機関:

大阪大学, 群馬大学, 三重大学, 千葉大学, 埼玉大学, 筑波大学, 東京大学, 北海道大学, 東北大学, 九州大学, 福井大学, 富山大学, 愛知教育大学, 信州大学, お茶の水女子大学, 岩手大学, 茨城大学, 福岡教育大学, 高知大学, 名古屋大学, 統計数理研究所, 京都府立大学, 東京都立大学(首都大学東京), 福岡女子短期大学, 鎌倉女子大学, 中央大学, 中京大学, 明治大学, 関西学院大学, 常葉大学, 昭和女子大学, 白百合女子大学, 立命館大学, 名古屋女子大学, 日本女子大学, 駒澤大学, 青山学院大学, 上智大学, 花園大学, 二松學舎大学, 東京女子大学, 國學院大學, 成城大学, 玉川大学, 関西大学, ノートルダム清心女子大学, 東洋大学, 神戸松蔭女子学院大学, 日本大学, 早稲田大学, 国立情報学研究所, 産業技術総合研究所, 理化学研究所, コーネル大学, オックスフォード大学, 啓明大学, シカゴ大学

・大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

・プロジェクトリーダー: 小磯花絵(音声言語研究領域・教授)

・研究期間: 2016.4-2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1)多様な日常場面の会話200時間を取めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2)語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、(3)会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4)語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の4つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査にもとづき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパスベースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が21世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉のデータやBCCWJの小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

《2020年度の主要な成果》

1. 研究

- 2020年3月に開催予定であったが新型コロナウイルス感染拡大防止のために延期した「ことば・認知・インタラクション8」をオンラインで2020年6月27日に開催した。口頭発表4件、参加者は246名（うち学生66名、海外機関所属者13名）であった。
- プロジェクト全体の研究成果を発信するために、各班合同のシンポジウム「日常会話コーパスVI」を令和3年3月4日にオンラインで開催した。口頭発表7件、参加者は254名（うち学生73名、海外機関所属者21名）であった。
- 会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同で、シンポジウム「ことば・認知・インタラクション9」をオンラインで2021年3月6日に開催した。口頭発表4件、参加者は188名（うち学生35名、海外機関所属者12名）であった。
- 以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文7件、ブックチャプター6件、発表・講演35件、一般向けの講演・セミナー等3件、データベース等4件（うち1件はプロジェクト内限定）として公開した。

2. 共同利用・共同研究

- 1950～1970年代にかけて国語研究所で録音された音声資料を対象とする『昭和話し言葉コーパス』について、2018年度にモニター公開した独話17時間に加え、会話27時間を追加で整備し、計44時間の話し言葉コーパスとして、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年3月15日に本公開した。独話については『日本語話し言葉コーパス』と、会話については『日本語日常会話コーパス』と比較することにより、話し言葉の経年変化を実証的に研究できる基盤が整備された。今年度、4184件に及ぶ新規利用申請があるなど、多くの関心を集めている。
- 2018年度にモニター公開した会話データ50時間が広く活用されるようになり、利用者から増補の希望が寄せられたことから、当初の計画にはなかったが、追加で会話データ50時間（計100時間）を整備し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年2月17日に一般公開した。中納言の今年度の新規利用契約は5156件、検案件数は昨年度25,751件に対して82,580件（昨年度比320%）となるなど、飛躍的にコーパスの利用が増えた。
- これまで共同研究員およびその指導学生に公開してきた『日本語日常会話コーパス』100時間に対し、追加で50時間（計150時間）を公開し、研究・教育に活用した。
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対する話者情報（話者名・性別・年代）付与について、NDC情報の増補に伴い新たに対象となった225サンプルに追加で話者情報を付与し、オンライン検索システム「中納言」で2021年3月30日に公開した。
- 国立障害者リハビリテーションセンター研究所からの協力要請を受け、『日本語日常会話コーパス』に参加した協力者のうち60名を対象に自閉症スペクトラム傾向指数調査を実施した。これは、自閉症スペクトラム傾向指数と言語運用との関係を明らかにし、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出すことを目指すものであり、『日本語日常会話コーパス』の利用可能性を広げる新たな取り組みである。

3. 教育

- コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を2回開催した。これまでコーパスの利用法を中心に講習会を開催してきたが、受講者からの希望を受け、1回をコーパスの構築法を学ぶための講習会とした。
- コーパスの利用者からの要望を受け、オンライン検索システム『中納言』や全文検索システム『ひまわり』の利活用法、『日本語日常会話コーパス』利活用のための仕様等を説明する一連のビデオチュートリアルを新たに作成し、ホームページで公開した。公開後、計4400件以上のアクセスがあるなど、広く活用されている。

- ・若手研究者を育成するため、非常勤研究員 5 名を雇用した。R を用いた統計勉強会を開催するなどし、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。また共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで、博士論文 1 本、修士論文 1 本、卒業論文 7 本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献

- ・プロジェクトで構築した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話しことばコーパス』、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で 17718 件の新規利用申請があり、研究教育に広く活用された。

5. グローバル化

- ・今年度は新型コロナウイルスの影響で中止となった国際会議等も少なくなかったが、Speech Prosody や O-COCOSDA などオンラインで開催された学会を中心に 4 件の発表を通じてプロジェクトの成果を発信した。
- ・NINJAL チュートリアル「コーパスを活用した日常会話の研究」を韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催でオンライン開催した。国外機関所属者数 66 名を含む 91 名が参加した。

・共同研究員数：47 名

・共同研究員所属機関：

一橋大学、熊本大学、東京大学、九州大学、お茶の水女子大学、千葉大学、宇都宮大学、名古屋大学、京都大学、はこだて未来大学、東京都立大学(首都大学東京)、筑波大学、早稲田大学、明治大学、文教大学、同志社大学、関西学院大学、慶應義塾大学、日本女子大学、専修大学、愛知学院大学、同志社女子大学、フェリス学院大学、東洋大学、十文字学園女子大学、東京福祉大学、目白大学、岐阜女子大学、国際交流基金日本語国際センター、NHK 放送文化研究所、株式会社リクルート、アルバータ大学、株式会社レトリバ

・日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

・プロジェクトリーダー：石黒圭(日本語教育研究領域・教授)

・研究期間：2016.4–2022.3.

《研究目的および特色》

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、自然な日常会話をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本

語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

《2020 年度の主要な成果》

1. 研究

宇佐美まゆみ(編)『日本語の自然会話分析』くろしお出版を刊行した。日本語聴解教材および読解教材作成に関する論文集の編集作業を行った。国内外の日本語教育研究者 199 名による共同研究体制を組織し、PD フェローを 2 名、プロジェクト非常勤研究員を 14 名、技術補佐員を 7 名雇用し、共同研究を推進した。

2. 共同利用・共同研究

学習者の言語使用では、BTSJ 自然会話コーパスの構築を継続し、69 会話のデータを追加・公開するとともに、NCRB のプラットフォームを構築し、BTSJ 自然会話コーパスを搭載した。また、I-JAS では中納言のユーザーに役立つデータ整備を行うとともに、B-JAS では第一次文字化作業・チェック作業を終了した。学習者の言語理解では、読解・聴解コーパスの構築を継続し、各 20 件のコーパスデータを新たに公開するとともに、ウェブ版読解教材として 3 レッスン、ウェブ版聴解教材として 8 レッソンの教材を公開した。オンライン日本語基本動詞ハンドブックでは、15 見出しの追加・公開を行った。プロジェクト内の共同シンポジウムとして「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！」を Web 開催し、263 名の参加を得た。

3. 教育

第 11 回 ICPLJ を NIJAL 国際シンポジウムとして Web 開催し、多くの大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。韓国向けの NINJAL チュートリアル「日本語学習者の作文の研究方法」、国内向け NINJAL チュートリアル「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」を Web 開催し、大学院生等に研修を行った。「I-JAS 完成記念シンポジウム」を Web 開催し、若手研究者を中心に 284 名の参加を得た。

4. 社会との連携及び社会貢献

ビジネス専門日本語教育の共同研究を富士通研究所と推進し、論文や書籍を刊行した。ブラジル向けの海外日本語教師セミナー「日本語学習者は日本語の何が難しいのか？」と国内日本語教師セミナー「対話システム研究と日本語教育」を Web 開催し、前者は 66 名、後者は 180 名が参加した。

5. グローバル化

天津外国語大学日本語学院および西安外国語大学日本語科と日本語教育関係の共同プロジェクト、学術交流協定の締結に向けて準備を進めた。また、第 11 回 ICPLJ を NIJAL 国際シンポジウムとして Web 開催し、二日間の参加者の異なりの合計 462 名のうち、海外研究者 108 名の参加を得た。

・共同研究員数：173 名

・共同研究員所属機関：

北陸先端科学技術大学院大学、京都大学、埼玉大学、東京外国語大学、一橋大学、広島大学、東北大学、宇都宮大学、島根大学、名古屋大学、琉球大学、金沢大学、東京大学、大阪大学、福井大学、東京学芸大学、京都教育大学、神戸大学、佐賀大学、九州大学、山口大学、東京海洋大学、岡山大学、お茶の水女子大学、国際教養大学、東京都立大学(首都大学東京)、都留文科大学、山梨県立大学、麗澤大学、南山大学、名古屋学院大学、関西学院大学、東京福祉大学、日本女子大学、聖心女子大学、中京大学、中央学院大学、東京経済大学、岐阜聖徳学園大学、東京工芸大学、清泉女子大学、実践女子大学、早稲田大学、明海大学、名古屋外国語大学、大阪産業大学、国際基督教大学、長崎外国語大学、学習院女子大学、法政大学、武庫川女子大学、神戸女学院大学、東亜大学、大手前大学、関西看護医療大学、愛知学院大学、大阪女学院大学、愛知文教大学、國學院大学、名古屋商科大学、東海大学、日本大学、立命館大学、立教大学、新潟大学、島根

大学、敬和学園大学、国立情報学研究所、神戸市立工業高等専門学校、国際交流基金、平谷村役場、富士通研究所、富士通株式会社、山野日本語学校、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、アルバータ大学、大連外国語大学、中国人民大学、ミネソタ大学ツインシティー校、ミュンヘン大学、江南大学、重慶三峡学院、無錫職業技術学院、天津外国語大学、ハノイ工科大学、華中科技大学、華南農業大学、中山大学、洛陽師範学院、クイーンズランド大学、ブダペスト商科大学、サンフランシスコ市立大学、グルノーブル・アルプ大学、オークランド大学、コロンビア大学、ハワイ大学、北京外国語大学、カリフォルニア大学バークレー校、西安外国語大学、サンフランシスコ州立大学、明知大学校、広東外語外貿大学、メルボルン大学、元智大学、チュラーロンコーン大学、ヨーク・セント・ジョン大学、パリ・ディドロ大学、リュブリャナ大学、ジャパン・ソサエティ、東海大学、黒竜江大学、長春師範大学、ロイヤルメルボルン工科大学、ラトローブ大学、台湾政治大学、北京語言大学、北京師範大学、ニューヨーク大学、ブラジリア大学、西安交通大学、フエ外国語大学、湖北第二師範学院、ハルビン師範大学、成都理工大学、東華大学、ベトナム国家大学ハノイ校、ベトナム国家大学ホーチミン市校、ウィスコンシン大学マディソン校、カンタベリー大学

(2) 【新領域創出型】3件

第3期中期計画において、新たな研究領域の創出に資するため、外部研究者をリーダーとする共同研究を実施している。新領域創出型は、研究領域や基幹研究プロジェクトの枠を越えて、新たな研究の展開・創出を探るための萌芽的研究として外部公募により採択されたプロジェクト。

・現代語の意味の変化に対する計算的・統計力学的アプローチ

- ・プロジェクトリーダー：持橋大地（統計数理研究所・准教授）
- ・研究期間：2019.4–2022.3.

《研究目的および特色》

現代および近代日本語において、あるいは現代語一般に、単語の意味は時間を通じて一様ではなく、常に変化し続けている。こうした中、(1) どのような単語が、(2) どのように意味変化を起こしたのか、またそれはどのようなメカニズムで起きうるのかを理論的に調べることは、国語学および言語学において最も重要な現代的課題の一つであると考えられる。

特に、国立国語研究所において提供されている通時コーパスなどを用いれば、デジタル化されたテキストデータが大量に得られるため、上記の(1)においては適切な統計モデルに基づくデータ解析によって目的を実現し、(2)においては、無数の言語使用者が周囲の影響を受けて確率的に言語使用を変化させる統計力学的描像によって、その理論的性質を解明する。研究は統計数理研究所のほか、国立国語研究所、東京都立大学、産業技術総合研究所人工知能研究センターによる横断的組織によって進める。

- ・共同研究員数：5名
- ・共同研究員所属機関：

東京都立大学（首都大学東京）、統計数理研究所、産業技術総合研究所

・多文化共生社会における日本語の言語的障壁の低減に関する研究

- ・プロジェクトリーダー：庵功雄（一橋大学・教授）
- ・研究期間：2019.4–2022.3.

《研究目的および特色》

政府の外国人受け入れ政策の急展開により、定住目的の外国人が日本国内で急増することが予想される。その際、日本語に関する様々な問題が生じることが予想されるが、そうした日本語に関する言語的障壁を少しでも低減することは日本語研究に課せられた大きな使命である。

本研究では、こうした認識のもと、外国人にとって生活上重要なものでありながら読解・産出が困難な類型のテキストについて、自然言語処理との協働により、その簡略化の方策を研究する。

具体的には、次のようなテキストを対象とする。

1. 外食チェーン店のオペレーション・マニュアル
2. 介護施設における申し送り書

これらのデータを収集し、そこから言語的特徴を抽出し、その定型化を行う。その後、文書を構成するパーツを取り出し、それを組み合わせ、これらの文書作成用のエディターを開発する。

- ・共同研究員数：2名
- ・共同研究員所属機関：
一橋大学、専修大学

・発達障害児の聞き取りの困難さの要因を探る実証研究

- ・プロジェクトリーダー：藤野博（東京学芸大学・教授）
- ・研究期間：2019.4–2022.3.

《研究目的および特色》

知的発達に遅れがなく言語を獲得できる自閉スペクトラム症（ASD）や注意欠如・多動症（ADHD）の子どもの中には、文章レベルの聞き取りが困難な者が少なからず存在する。しかしこれまで国内では発達障害児の聞き取りの困難さにつながる認知特性に関する研究は非常に少なく、体系的な実証研究はほぼ皆無といえる。そこで本研究は、知的に遅れない発達障害児を対象とし、音韻知覚の特異性が語や文の理解のつまずきや、授業などでの学年相応の聞き取りの困難さの要因となるかどうかを検証する。具体的には、①発達障害児の音韻知覚の特性を多角的に検証するとともに、②語や文の構造理解の特徴と、文章・段落レベルの「聞き取り」の力を縦断的に検討する。そして最終的に①と②の結果を総合して、「聞き取り」の困難の要因を探る。さらに、その結果を国際基準による言語検査の開発および子どもの認知特性に合った支援法の提案につなげることを目標とする。

- ・共同研究員数：4名
- ・共同研究員所属機関：
東京学芸大学、愛媛大学

(3) 【共同利用型】 13 件

共同利用型は、大学等に所属する研究者が、国語研が保有する研究資料・言語資源・分析装置等を利用して研究をおこない、日本語学、言語学及び日本語教育研究のさらなる発展を図ることを目的とするもの。

・音声の個人内変化を推定するためのコーホート分析の有効性に関する実証研究

プロジェクトリーダー：尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学・教授）

・感謝表現研究における「各地方言収集緊急調査」資料の活用

プロジェクトリーダー：田島優（明治大学・教授）

・訓点資料の精密解読によるデジタルアーカイブの検証

プロジェクトリーダー：小助川貞次（富山大学・教授）

・言語接触における英語のインパクト：語彙の英語化に関するウェルフェア・リングイスティクスの視点から

プロジェクトリーダー：久屋愛実（立命館大学・准教授）

・難解用語の言語問題に対応する言い換え提案の検証とその応用

プロジェクトリーダー：田中牧郎（明治大学・教授）

・北海道調査データを再活用した言語変化の実時間プロセスの解明へ向けた研究

プロジェクトリーダー：高野照司（北星学園大学・教授）

・東北方言の地理的・世代的動態についての研究

プロジェクトリーダー：半沢康（福島大学・教授）

・音声談話資料を利用した大分方言 60 年間の変化の研究

プロジェクトリーダー：二階堂整（福岡女学院大学・教授）

・日本語の自然発話における卓立認知に関する研究

プロジェクトリーダー：水口志乃扶（神戸大学・名誉教授）

・日本語研究の戦前と戦後一国立国語研究所草創期に関与した研究者を通して明らかにする日本語の研究史一

プロジェクトリーダー：斎藤達哉（専修大学・教授）

- ・国研の蔵書から見た海外言語地理学・言語地図の歴史と現状の研究
プロジェクトリーダー：沢木幹栄（信州大学・名誉教授）
- ・大規模コーパスを利用した言語処理の計算心理言語学的研究
プロジェクトリーダー：大関洋平（東京大学・講師 / 理化学研究所革新知能統合研究センター・客員研究員）
- ・第二言語学習における音声生成能力の向上が音声知覚能力に与える影響
プロジェクトリーダー：末光厚夫（札幌保健医療大学・教授）

(4) 【コーパス基礎研究】1件

基幹型プロジェクト等で構築される予定の日本語史、日常会話、方言、日本語学習者に関するコーパスの高度化や効率的な構築・利用等を実現するために基礎研究を実施している。

- ・コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究

・プロジェクトリーダー：浅原正幸（コーパス開発センター・教授）

・研究期間：2016.10–2022.3.

《研究目的および特色》

形態論情報つきコーパスの整備が進む中、より高次の情報を付与することが言語研究において求められている。コーパス開発センターは、統語・意味・音声の三つの班により、既存のアノテーションの拡張手法、複数のアノテーションの統合手法、またその自動化の基礎研究を行う。統語班は、文節係り受け・述語項構造・節境界に関する研究と、統語アノテーションの国際化プロジェクトである Universal Dependencies プロジェクトに参画し、言語資源整備を進める。意味班は、『分類語彙表（増補改訂版）』を中心とした拡張として、UniDic 語彙素番号–分類語彙表番号対応表（現代・古典）や『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）、『日本語歴史コーパス』（CHJ）に対する分類語彙表番号アノテーションを行う。音声班は、『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）に対する声質情報自動付与、調音運動データベースの設計、音声・テキスト自動アライメントの精度向上とともに、形態論情報と同期した音声ブラウジング環境の開発を行う。

・共同研究員数：25名

・共同研究員所属機関：

東北大学、茨城大学、東京外国語大学、東京大学、京都大学、九州大学、統計数理研究所、千葉工業大学、中央大学、早稲田大学、立命館大学、甲南大学、宇都宮大学、目白大学、理化学研究所、日本アイ・ビー・エム株式会社、株式会社リクルート、内蒙古大学、モナシュ大学

2 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。国立国語研究所もそれらのプロジェクト等に参画している。

(1) 広領域連携型基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構を構成する6機関が協業して、国内外の大学等研究機関や地域社会と連携し、新たな人間文化研究システムを構築するとともに、異分野融合による新領域創出を目指すもの。

- ・日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

国語研・歴博が主導機関となって、「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」と題する連携研究を2016年度に開始した。日本列島において地域が直面しているさまざまな課題、特に地域社会の変貌や災害によって多様性が失われつつある状況が惹起する諸問題とその解決のために、人間文化研究機構の各機関が相互に連携し、地域における大学・博物館等とも協働しながら調査研究を推進している。〈国語研ユニット〉方言の記録と継承による地域文化の再構築

- ・研究代表者：木部暢子（言語変異研究領域・教授）
- ・研究期間：2016.4–2022.3.
- ・共同研究員数：15 名
- ・共同研究員所属機関：

岩手大学，千葉大学，広島大学，九州大学，長崎大学，鹿児島大学，東京大学，愛知県立大学，南山大学，弘前学院大学，駒澤大学，別府大学，オークランド大学
- ・地域社会の変貌により，地域の貴重な文化資源である方言が急速に衰退しつつある。国語研ユニットでは，自治体や各地の大学・研究者と連携して地域の方言の記録や方言の継承活動を行うことにより，方言を主軸とする地域文化の再構築の可能性と方言の持つ文化的意義について研究を行う。

・異分野融合による「総合書物学」の構築

歴史的典籍の「書物」としての面に着目して，従来の書誌学に異分野融合の観点を加え，「総合書物学」という研究分野の構築を目指す。国文研が主導機関となり，歴博，国語研，日文研の3機関の共同研究を基礎に，分野横断的な研究の進展を促し，新たな研究分野である「総合書物学」を構築することを目標としている。

〈国語研ユニット〉表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化

- ・研究代表者：高田智和（言語変化研究領域・准教授）
- ・研究期間：2016.4–2022.3.
- ・共同研究員数：16 名
- ・共同研究員所属機関：

千葉大学，東京大学，富山大学，京都大学，高知大学，国立歴史民俗博物館，国文学研究資料館，京都府立大学，専修大学，國學院大學，筑波大学，関西学院大学，岐阜工業高等専門学校，人文情報学研究所
- ・文献学と言語計量的手法により，言語単位（単語，文節，句，文など）と表記・書記単位（仮名字体，漢字字体，連綿文字列，句読点等表記記号など）と書物や版面の形状（装丁，料紙，版型，頁遷移，行遷移など）との相関関係を明らかにする。また，国語研で構築している『日本語歴史コーパス』に表記情報と書誌形態情報を加え，言語・表記（文字）・書物の重層構造を精緻に記述した言語コーパスのプロトタイプを作成することを目標としている。

(2) ネットワーク型基幹研究プロジェクト

・日本関連在外資料調査研究・活用事業

欧米にある日本関連資料の中には，現地の日本文化研究者の不足や個人所蔵であることから，所在情報や資料価値の把握がされていない貴重な資料が多数存在する。本事業はこうした文書，音声，実物資料を含む多様な資料の調査研究を進めると同時に，その成果を国内外で活用し，海外における日本研究者育成や日本文化理解を促進する。

〈国語研プロジェクト〉北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築

- ・研究代表者：朝日祥之（言語変異研究領域・准教授）
- ・研究期間：2016.4–2022.3.
- ・共同研究員数：13 名
- ・共同研究員所属機関：

国立歴史民俗博物館，国文学研究資料館，東京都立大学，大阪大学，明治大学，桜美林大学，専修大学，名古屋外国語大学，周防大島町教育委員会，海外移住資料館，シンガポール国立大学
- ・主として近現代に北米に移住した日本人，つまり北米の日系移民に注目し，言語史・社会史・生活史を基点としながら，日系社会に関連する資料についての資料調査・研究を行っている。劣化や廃棄リスクが高まっている日系人に関わる音声・映像資料について，データ救出と資料の評価を行うとともに，日系社会の歴史のうち，これまでに十分に光が当たってこなかった領域を取扱い，移民をめぐる新たな資料論へとつなげることを目指す。

(3) 研究資源高度連携事業

人間文化研究機構を構成する6機関および国立国会図書館並びに京都大学地域研究統合情報センター等が開発・蓄積したデータベースの横断検索が可能な統合検索システム（nihuINT）に次のデータベースを提供している。また、国立国会図書館が運用するジャパンサーチ（2020年8月正式版公開）にも、人間文化研究機構を通じてメタデータを提供している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録（図書）データベース
- ・蔵書目録（雑誌）データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』画像データベース
- ・『方言文法全国地図』画像データベース
- ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文データベース
- ・国立国語研究所学術情報リポジトリ

(4) 博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

機構の機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や学界並びに社会との共創により研究を高度化する研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築し、新領域創出を目指す。

〈国語研事業〉消滅危機言語・方言の展示を通じた最先端研究の可視化・高度化

- ・代表者：木部暢子（言語変異研究領域・教授）
- ・研究期間：2017.4–2022.3.
- ・地域の大学や博物館、市民と協業して当該地域の危機言語・方言の研究に取り組み、情報科学と連携して展示を制作し、その展示を各地域で巡回し、社会との共創による研究展示システムのモデル構築を行う。「言語・文化の多様性」を未来の目標に設定し、その実現に向けた「言語の展示」の企画、情報科学との連携、情報発信の仕方を検討し、実際に展示を制作・公開することを通じて研究を可視化・高度化し、新たな研究領域である「言語・文化情報学」の創出に繋げることを目標とする。

3 外部資金による研究

科学研究費助成事業（科研費）

研究種目	研究代表者	研究課題名	直接経費 交付額 (千円)
国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化(B))	迫田久美子	日本語学習者コーパスによる教育と研究のグローバルネットワークの構築	3,700
新学術領域研究 (研究領域提案型)	麻生玲子	南琉球八重島諸語における伝播過程の解明と言語系統樹の構築	1,900
新学術領域研究 (研究領域提案型)	林由華	日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて	1,500
基盤研究(A)	窪蘭晴夫	消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築	7,400
基盤研究(A)	小木曾智信	昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究	9,200
基盤研究(A)	野山広	基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究	7,400

基盤研究 (A)	浅原正幸	日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション	6,600
基盤研究 (A)	宇佐美まゆみ	語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的な研究	8,000
基盤研究 (A)	木部暢子	日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓	5,700
基盤研究 (A)	迫田久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築および言語習得と教育への応用 (繰越)	390
基盤研究 (B)	松本曜	空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究	3,500
基盤研究 (B)	高田智和	訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新	3,500
基盤研究 (B)	田窪行則	言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究	3,200
基盤研究 (B)	五十嵐陽介	比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築	2,600
基盤研究 (B)	小磯花絵	多様な場面の日常会話データに基づく子どものコミュニケーション行動の解明	5,000
基盤研究 (B)	前川喜久雄	リアルタイム MRI 動画による日本語調音運動データベースの構築と公開	3,000
基盤研究 (B)	山田真寛	琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究	3,800
基盤研究 (B) (特設分野研究)	小磯花絵	地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化	3,200
基盤研究 (C)	山崎誠	シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用	1,300
基盤研究 (C)	朝日祥之	北海道北見市常呂町岐阜方言の方言敬語に関する調査研究	1,100
基盤研究 (C)	西内沙恵	多義語に対するプロトタイプ義の量的分析—クラウドソーシングによる大規模調査—	1,400
基盤研究 (C)	鎗水兼貴	首都圏における言語資料の高密度収集と言語動態分析	600
基盤研究 (C)	石本祐一	自発会話コーパスを用いた「会話の間合い」に関わる音声・言語特徴の解明	900
基盤研究 (C)	窪田悠介	汎用的な範疇文法ツリーバンクの構築	1,000
基盤研究 (C)	西川賢哉	名詞句の飽和性と意味機能との相互関係についての理論的・実証的研究	1,100
基盤研究 (C)	飛田良文	近代小説 100 冊における外来語の研究 (延長)	428
基盤研究 (C)	布施悠子	中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供	600
基盤研究 (C)	山口昌也	ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究 (延長)	228
基盤研究 (C)	吉田夏也	日本語の母音無声化における心内処理に関する基礎的研究	700
基盤研究 (C)	渡邊美知子	日本語と英語の平行コーパスを用いた言い淀みの対照言語学的研究	700
基盤研究 (C)	大島一	複数性の本質を求めて：統一的な枠組みで捉えた日本語諸方言における「ら」の意味用法	1,000
基盤研究 (C)	籠宮隆之	韻律ラベルを付与した補聴システム装用者の発話データベースの構築	1,000
基盤研究 (C)	福永由佳	言語レパートリーの構造と形成に関する研究	700
基盤研究 (C)	松崎安子	中古・中世のコロケーションに関する研究—生活語を中心として—	1,200
基盤研究 (C)	柏野和佳子	コーパス分析による書き言葉的「硬・軟」度と話し言葉的「硬・軟」度の語への付与	1,300
基盤研究 (C)	山口昌也	多段階の振り返りに対応した協同型教育活動支援システムに関する研究	800

挑戦的研究(開拓)	小木曾智信	日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築	7,500
挑戦的研究(開拓)	大西拓一郎	古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開	3,000
挑戦的研究(萌芽)	前川喜久雄	定量的分析による条件異音存立基盤の再検討: 音韻論スリム化の試み	1,600
挑戦的研究(萌芽)	浅原正幸	コーパスからの比喩表現収集とその分析	1,700
挑戦的研究(萌芽)	宇佐美まゆみ	コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—	1,200
挑戦的研究(萌芽)	野田尚史	日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究(延長)	550
挑戦的研究(萌芽)	高田智和	時代差・地域差・分野差を集積した漢字字形情報通覧基盤の構築研究	1,800
若手研究	岡照晃	アクセント情報付き大規模単語データベースの構築	800
若手研究	鈴木彩香	属性叙述を含めた包括的なテンス・アスペクト体系の解明	700
若手研究	Celik Kenan	南琉球宮古語の語彙体系の多様性を探る: 通方言的な音声付の語彙データベースの構築	700
若手研究	宮崎早季	ハワイ日系人の戦時抑留体験をめぐる記憶のポリティクス	1,100
若手研究	片山久留美	コーパスを用いた近世読本のルビと漢字表記の研究	800
若手研究	服部紀子	蘭語学・英語学における文法用語の基礎的研究	1,000
若手研究	川端良子	多様な場面における参照の相互認識達成のための方略の研究	1,000
若手研究	八木下孝雄	明治期英語教科書の翻訳本データベース化による欧文の直訳的な表現の研究	700
若手研究	大村舞	日常対話コーパスにおける述語項構造アノテーションの作成と分析	800
若手研究	麻生玲子	日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究	700
若手研究	井戸美里	日本語とりたて詞の複合における否定呼応現象の統語と意味	700
若手研究	佐藤久美子	日本語諸方言におけるイントネーションの対照研究	700
若手研究	中川奈津子	日本語・琉球語における情報構造と述語類型	500
若手研究	横山晶子	危機言語コミュニティにおける言語生態系と言語移行の関係—琉球沖永良部語を事例に—	1,000
若手研究	白田泰如	日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析: 定量・定性の両面から	1,400
若手研究	間淵洋子	新語彙定着期の言語変化—コーパスに基づく通時的語彙研究の実践	2,000
若手研究	宮部真由美	日本語支援のための国語科教材の言語的知識による理解過程の可視化にむけた基礎的研究	1,000
若手研究(B)	林由華	宮古語諸方言の言語記録のための基礎的研究とデータ収集(延長)	695
若手研究(B)	山田真寛	琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究(延長)	58
研究活動スタート支援	呉寧真	古代語複合動詞の敬語の研究	1,000
研究活動スタート支援	柳原恵津子	平安時代後半期記録語の記述的研究、および総論的考察	1,100
研究活動スタート支援	越智綾子	感情と態度を表す日本語語彙文法の研究: 言語使用域の多様性を通じて	1,100
研究活動スタート支援	中澤光平	淡路方言の系統の解明と西日本方言の区画の再検討(延長)	1,000
研究活動スタート支援	宮部真由美	日本語教育支援のための中学校社会科教科書の言語的困難点に関する基礎的研究(延長)	250
研究活動スタート支援	守本真帆	母語にない調音動作の習得過程: 磁気センサシステムを用いた流音の研究	1,100
研究成果公開促進費(学術図書)	福永由佳	顕在化する多言語社会日本	900

研究成果公開促進費 (学術図書)	近藤明日子	コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究	1,300
奨励研究	井上雄介	社会に魅せる研究力：研究成果の社会への貢献からみた新たな研究力指標の策定と可視化	370
特別研究員奨励費	林由華	琉球諸語および八丈語の諸方言における係り結びの類型化と機能の解明	1,100

上記の表は、2020 年度に交付のあった研究課題および 2019 年度が最終年度であり、補助事業期間を 2020 年度まで延長した研究課題を掲載している。

寄附金 (2020 年度受入金額)

該当なし

4 2020 年度公開中のコーパス・データベース

ウェブサイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベース類を公開しているが、2020 年度は、下記資料の公開 (ないし公開の継続) をおこなった。

コーパス

国立国語研究所で構築したコーパス (言語を分析するための基礎資料として、書き言葉や話し言葉の資料を体系的に収集し、研究用の情報を付与したもの) を記す。

・現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

現代日本語の書き言葉の多様性を把握するために構築したコーパスで、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって、無作為に抽出した約 1 億 430 万語のデータを格納している。すべてのサンプルは、長短ふたつの言語単位を用いて形態素解析されており、文書構造に関するタグや精密な書誌情報も提供されている。また、著作権処理も施されている。オンラインおよび DVD で公開している。

・BCCWJ 全文検索サイト『少納言』

国立国語研究所で開発された Web アプリケーションで、初心者でも簡単に BCCWJ 内の文字列を検索することができる。セキュリティ上の問題が発生したため、2021 年 2 月 12 日に公開を休止した。代替の検索ツールとして、文字列情報を利用した検索サイト「梵天」を開設している。

・NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ) を検索するために、国語研と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムであり、名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示できるのが最大の特長である。

・日本語話し言葉コーパス (CSJ)

日本語の自発音声を大量に集めて、多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースであり、国立国語研究所、情報通信研究機構 (旧通信総合研究所)、東京工業大学が共同開発した、質・量ともに世界最高水準の話し言葉データベースであり、音声言語情報処理、自然言語処理、日本語学、言語学、音声学、心理学、社会学、日本語教育、辞書編纂など幅広い領域で利用されている。

・日本語歴史コーパス (CHJ)

日本語の歴史を研究するための資料を集めたコーパスであり、将来的に上代から近代までをカバーする通時コーパスとすることを目標に開発が進められている。全てのテキストに読み・品詞などの形態論情報が付与されているため、従来の紙の総索引の代わりになるだけでなく、より高度な検索や集計がおこなえる。構築済みで、公開中のものは以下のとおりである。

・奈良時代編 (I 万葉集・II 宣命・III 祝詞)

・平安時代編 (収録作品：古今和歌集・土佐日記・竹取物語・伊勢物語・落窪物語・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・平中物語・堤中納言物語・更級日記・讃岐典侍日記・蜻蛉日記・大鏡)

- ・鎌倉時代編 (I 説話・随筆・II 日記・紀行)
- ・室町時代編 (I 狂言・II キリシタン資料)
- ・江戸時代編 (I 洒落本・II 人情本・III 近松浄瑠璃・IV 随筆・紀行)
- ・明治・大正編 (I 雑誌・II 教科書・III 明治初期口語資料・IV 近代小説)
- ・和歌集編 (収録作品：古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集)
- ・国語研日本語ウェブコーパス

ウェブを母集団として 100 億語規模を目標として構築した日本語コーパスで、検索系『梵天』に格納して公開している。格納データの基礎統計は、収集 URL 数：83,992,556、文数 (のべ数)：3,885,889,575、文数 (異なり数)：1,463,142,939、国語研短単位数：25,836,947,421 である。ウェブ上の日本語テキストを利用して 100 億語を超える規模の現代日本語コーパスを構築することによって、稀言語現象の言語学的、心理学的および情報処理的視点からの究明の可能性を開くことを目的としている。具体的な応用として、言語研究のための用例収集、日本語使用実態の定量的な把握などを想定している。
- ・中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス (C-JAS)

日本語学習者 6 人 (中国語母語話者 3 人、韓国語母語話者 3 人) の 3 年間の縦断的発話データを公開している。収録データ量は、約 46.5 時間分で、総語数は約 57 万語である。オンラインで検索システムが使える、形態素単位や文字列で用例を検索することができる。さらに、文法習得の観点から、統語・文法・発音の誤用には、誤用タグが付与されている。
- ・多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)

日本を含む 20 の国と地域で、異なった 12 言語を母語とする日本語学習者 1000 人および日本語母語話者 50 人の話し言葉および書き言葉の収集を完了し、公開している。発話データ (ストーリーテリング、ロールプレイ、対話、絵描写)、作文データ (ストーリーライティング、エッセイとメール文 (任意))、発話の音声データを所収している。
- ・近代語のコーパス

明治・大正時代の日本語を研究するために構築されたコーパスであり、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』を公開している。
- ・コーパス検索アプリケーション『中納言』

国立国語研究所で開発された、日本語のコーパスを検索することができる Web アプリケーションで、単純な文字列検索のほかに、短単位・長単位・文字列の 3 つの方法によって、コーパスに付与された形態論情報を組み合わせた高度な検索をおこなうことができる。
- ・アイヌ語口承文芸コーパス―音声・グロスつき―

木村きみさん (1900–1988、沙流川上流域のペナコリ出身) がアイヌ語で語った物語 10 編 (ウエペケレ (散文説話) 8 編、カムイユカラ (神話) 2 編) 約 3 時間分の音声に、日本語と英語による訳とグロスや注解を付けた、初めてのアイヌ口承文芸デジタル集成である。
- ・統語・意味解析情報付き現代日本語コーパス (NPCMJ)

現代日本語の書き言葉と話し言葉のテキストに対し、文の統語・意味解析情報をタグ付けしたものであり、簡単にコーパス内のツリー (統語構造付き文) を検索、閲覧、ダウンロードすることが可能なウェブインターフェースとともに公開している。
- ・名大会話コーパス

129 会話、合計約 100 時間の日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。
- ・オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス

単語情報・統語情報などの包括的なアノテーションを施した上代日本語のフルテキストコーパスであり、現在のバージョンは「万葉集」など上代の全ての和歌のテキストを収録している。
- ・BTSJ 日本語自然会話コーパス

シナリオのない自発的な自然会話を、場面、年齢や性別を条件統制して収集した会話データ (トランスクリプトと音声・動画) をまとめた世界最大規模の母語話者・学習者双方を含む相互作用研究・話し言葉研

究のための自然会話コーパスであり、現在、446 会話、112.5 時間分を公開している。

- NPCMJ Child Language Development Timeline

NPCMJ Child Language Development Timeline (NPCMJ-CLDT) はそよごツリーバンク (子供の日本語の統語解析情報付きコーパス) を時系列に沿って対話的に表示するインターフェースであり、大きな特徴として、子供の言語の形態・統語的分析を年齢・月齢フィルターを通じて、検索・精査することを可能にしている点が挙げられる。このインターフェースを利用することで、特定の語彙や構文に関して個人の習得過程に容易に焦点をあてることができ、日本語を習得しつつある子供の形態・統語的発達のパターンを発見するチャンスにつながる。

- 危機言語データベース

日本の消滅危機言語・方言の音声データを紹介しており、様々な方言の基礎語彙に加え、生の方言で語られているたくさんのお話 (談話資料) も公開している。

- 日本語諸方言コーパス (Corpus of Japanese Dialects: COJADS)

日本各地の方言の談話音声を大量に集めた、日本で初めての諸方言コーパスで、元のデータは、日本全国 47 都道府県の 200 地点あまりにおける、約 4000 時間の方言談話の録音テープからなり、一部は『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』(2002-2008, 国書刊行会) として刊行されている。本コーパスは、標準語と方言の両方で検索可能で、検索結果はダウンロードできる。

- 日本語非母語話者の読解コーパス

日本語非母語話者に日本語で書かれたものを読んでもらいながら、その理解過程を母語か母語に準じる言語で話してもらい、それを文字化し、日本語訳をつけたものである。

- 日本語非母語話者の聴解コーパス

日本語非母語話者に日本語で話されたことを聞いてもらいながら、その理解過程を母語か母語に準じる言語で話してもらい、それを文字化し、日本語訳をつけたものである。

- NINJAL-Okubo コーパス

日本語を第一言語として獲得する幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のため、大久保 (1967) のデータにアノテーションを付与したものである。

- 日本語日常会話コーパス (Corpus of Everyday Japanese Conversation: CEJC)

さまざまな場面における自然な日常会話をバランスよく収めたコーパスである。研究の可能性を広げるために、映像まで含めて公開している映像付きの大規模日常会話コーパスは世界初の試みである。

- 昭和話し言葉コーパス (Showa Speech Corpus: SSC)

1950 年代から 1970 年代にかけて国立国語研究所で録音された音声資料を集めたものである。約 44 時間分の音声 (約 53 万語) が含まれる。「中納言」および「配信データ」の 2 通りで利用可能である。

- 現日研・職場談話コーパス

1990 年代にいち早く行われた先駆的な試みで、職場での会話を調査協力者自身に録音してもらい、自然な談話を収録するという方法で得られた、たいへん画期的なものであると評価されている 2 つの調査研究『女性のことば・職場編』および『男性のことば・職場編』で得られた談話の文字化テキストを元に作成されたコーパスである。

オンライン辞書

オンラインで検索できる辞書・用例集である。

- 基本動詞ハンドブック

日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりや図解なども用いて分かりやすく解説したオンラインツールである。例文、コロケーションなどの執筆には、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」(約 1 億語) や筑波大学の「筑波ウェブコーパス」(約 11 億語) などの大規模日本語コーパスを積極的に活用し、他のレファレンスには見られない生きた情報を提供している。

- 複合動詞レキシコン (国際版)

「光り輝く、投げ入れる、書き上げる」のように日常よく使われる動詞 + 動詞型の日本語複合動詞 (2,700 語以上) に意味や用法の情報を付与した、言語研究および日本語学習用のオンライン辞書である。日本語研究の専門家だけでなく、外国人日本語学習者を含む一般の利用者にも使っていただくことを意図しており、様々な検索方法が可能である。個々の複合動詞の見出しから、コーパス検索システム (NLB: NINJAL-LWP for BCCWJ) にリンクを張り、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) の例文と関連づけることを可能とした。また、外国人学習者や、言語対照の研究者にも使っていただけるように、新たに、意味定義と用例に英語・中国語・韓国語の翻訳を付け、利便性を向上させた。

- トピック別 アイヌ語会話辞典

1898 年に刊行された『アイヌ語會話字典』を底本とし、底本の表記のほか、口語訳、アイヌ語のローマ字およびカナ表記、語釈 (グロス)、英訳など、アイヌ語学習の助けとなる項目を付け加えたコンテンツであり、アイヌ語沙流方言 (貫気別) の音声も収録した上で、2010 年にブエガワ (他) がロンドン大学のウェブサイトで公開した『音声付きアイヌ語辞典—新編 金澤版アイヌ語会話辞典』のコンテンツにトピック検索 (日本語・英語) と見出し語 (アイヌ語・日本語・英語) 検索機能を追加し、さらに未公開のビデオ資料 (約 130 見出し) と動植物や道具の写真 (72 見出し, 86 枚) も加えた、新たなバージョンとして公開するものである。

- 寺村誤用例集データベース

日本語教育研究の礎を築いた故寺村秀夫氏が、1985–1989 年度の科学研究費補助金特別推進研究「日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究」(研究課題番号: 60060001, 研究代表者: 井上和子) の一環としておこなわれた分担研究「外国人学習者の日本語誤用例の収集・整理と分析」の資料をまとめた報告書である『外国人学習者の日本語誤用例集』を電子化し、オンラインで公開するものである。原著をそのままの形で画像データにした pdf 版と、原著に、品詞や国籍等による様々な検索機能を付加したデータベース版の 2 種類を公開している。

- Web データに基づく用例データベース

複合動詞、形容詞、サ変動詞の用例のデータベースである。用例は、語ごとに構築した専用の Web コーパスからおこなっている。構築に際しては、(1) 語ごとに一定量以上の用例を収集できること、(2) 収集用例の偏りの軽減に配慮している。

- 語誌情報ポータル

『日本語歴史コーパス』と併用することにより、日本語史の理解をより深めることができるデータを検索できるサイトとして公開している。コーパスからの統計情報、古辞書、言語地図、言語記事 (言葉について書かれた新聞・雑誌の記事) が収録されている。検索結果の多くはグラフや画像 (外部サイトを含む) で確認できる。

言語地図

言語の多様性・分布を地図に表現した資料である。

- 使役交替言語地図

世界の言語の形態的関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベースであり、約 80 名の研究者から提供された、日本語を含む諸言語 (約 95 言語) の有対自他動詞の類型論的な情報を、世界地図およびチャート (表) 上で可視化し、有対自他動詞を、個々の動詞対の派生型の選好 (意味と形式の類像性の可視化) および各言語の派生型の選好 (各言語の「類型論的な特徴づけ: typological characterization」の可視化) の 2 つの観点から分析できるウェブアプリケーションである。

- 『日本言語地図』地図画像

各地の方言で、どのような語形や発音がどこに現れるかを表示した言語地図 (方言地図) で、全国の方言の地理的分布を一望できる基礎資料である『日本言語地図』所載の地図の画像 (全 300 図) を公開している。

- 『方言文法全国地図』地図画像

文法事象の全国的な分布を展望できる言語地図 (方言地図) で、方言研究における基本的な資料である『方

『言文法全国地図』所載の地図の画像 (全 350 図) を公開している。

- 言語地図データベース

日本で刊行されてきた方言地図・言語地図のデータベースである。地図集 (アトラス) の書誌 (著者・書名・刊行年・調査時期・調査対象地域などを含む), 地図集に収録されている各地図の内容 (タイトル・内容の分類などを含む), 地図の画像 (可能な限りジオタグを付与) から構成されている。

- 全国方言分布調査 (FPJD)・新日本言語地図 (NLJ)

全国方言分布調査 (2010–2015 年度実施, 全国 554 地点) のデータおよび関連情報 (調査項目, 準備調査結果, 調査マニュアルなど) に加え, 調査結果を地図化した『新日本言語地図』関係のデータを公開している。

- The World Atlas of Noun-Modifying Constructions

様々な言語の名刺修飾構文の言語地図である。現在は, 日本語を含む 10 の言語 (アルメニア語・ブルシャスキー語・日本語・ジンポー語・クメール語・キルギス語・マラーティー語・シンハラ語) のデータを公開している。

画像・PDF

方言地図や貴重書の画像ファイル, 論文の PDF ファイルなどである。

- 日本語史研究資料 (国立国語研究所蔵)

国立国語研究所研究図書室蔵書のうち, 日本語史資料として著名なものや, 歴史コーパスの原材料として利用できるものを選定し, デジタル画像や翻字本文を順次公開している。

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(LC Control No.: 2008427768) のうち, 桐壺・須磨・柏木の原本画像を閲覧できる。また, 原本画像と翻字本文を対照表示させることも可能である。

- 大英図書館蔵天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』画像

大英図書館提供の天草版『平家物語』『伊曾保物語』『金句集』『言葉の和らげ』『難語句解』(Shelfmark: Or.59.aa.1) の画像をパブリックドメインにて公開している。

- 大英図書館蔵天草版『伊曾保物語』原本画像・翻字本文対照

大英図書館蔵天草版『伊曾保物語』の原本画像と翻字本文の対照表示システムを公開している。

- 国語研変体仮名字形データベース

変体仮名の字形画像を, 読み・字母・Unicode で層別したデータベースであり, 出典元資料画像との相互リンク機能, 資料画像と翻字本文との対照表示機能などがある。

ツール

言語資料を扱うためのプログラムや Web 上で利用するツールである。

- UniDic

国立国語研究所の規定した斉一な言語単位 (短単位) と, 階層的見出し構造に基づく電子化辞書の (1) 制度設計およびその実装としてのリレーショナルデータベース (2) UniDic データベースと, そのデータベースからエクスポートされた短単位をエントリ (見出し語) とする, 形態素解析器 MeCab 用の解析用辞書 (3) 解析用 UniDic, の総称であり, (3) の解析用 UniDic を公開・配布している。

- 形態素解析ツール Web 茶まめ

各種の UniDic を使って形態素解析を行うためのツールであり, 形態素解析に必要な一連の作業を, Web 上でわかりやすいインターフェイスによっておこなうことができる。

- (方言研究の部屋) データとプログラム

『方言文法全国地図』全データ (1–6 集), 最新版 PDF『方言文法全国地図』(1–6 集), 方言文法全国地図作成の機械化 (イラストレータ用プラグイン・白地図・記号), 準備調査 (調査票と地図・データ), 言語地図データベースを公開している。

- 全文検索システム『ひまわり』

コーパス, 用例集, 辞書といった言語資料を全文検索するために開発されたソフトウェアであり, XML

で記述された言語資料を全文検索し、検索文字列に対する前後文脈や付与情報（書誌情報など）を表示することができる。『太陽コーパス』、『日本語話し言葉コーパス』、『分類語彙表』などの既存の言語資料に加え、自分で作成した XML 文書も検索することができる。

- 教育活動観察支援システム FishWatchr

ディスカッション練習、ロールプレイなどの教育活動では、学習者が互いの活動を観察、評価するプロセスが存在する。FishWatchr は、リアルタイムに進行する活動や、ビデオ撮影された活動に対する注釈づけを実現するとともに、注釈付け結果を用いて、グループでの振り返りを支援する。本システムでは、ディスカッションを観察対象としているが、進行中の活動に注釈づけする（FishWatchr で録音、あるいは、別機器で録画し同期）、録音・録画ファイルを再生しつつ、注釈づけするなどの状況で利用することを想定しており、協調学習の観察、日本語教育、議事録作成支援などでの活用も考えている。

- NPCMJ Child Language Development Timeline

NPCMJ Child Language Development Timeline (NPCMJ-CLDT) はそよごツリーバンク（子供の日本語の統語解析情報付きコーパス）を時系列に沿って対話的に表示するインターフェースであり、大きな特徴として、子供の言語の形態・統語的分析を年齢・月齢フィルターを通じて、検索・精査することを可能にしている点が挙げられる。このインターフェースを利用することで、特定の語彙や構文に関して個人の習得過程に容易に焦点をあてることができ、日本語を習得しつつある子供の形態・統語的発達のパターンを発見するチャンスにつながる。

- 『国語研日本語ウェブコーパス』(NWJC) 検索系「梵天」

国語研日本語ウェブコーパス (NWJC) の検索系として構築されたもので、(1)文字列検索：単位の切れ目を気にせずに文字列を検索できる。あくまでも「出現した表記」の検索なので「こくご」を調べると「国語」はヒットしない；(2)品詞列検索：品詞列の情報を条件式として指定し、その条件にマッチする語を検索できる。例えば接尾辞「ばい」が出てきた例を調べたい場合、語彙素「ばい」で検索すると表層形「ばい」「つばい」「つぼく」「つぽ」がヒットする；(3)係り受け検索：品詞列の情報に加え、係り受け関係の情報を条件式として指定し、その条件にマッチする文節を検索できる。例えば「私は」が動詞に係る例を調べたい場合、文節「私＋は」（→係り先→）文節「品詞：動詞—一般」で検索すると、「私は」が動詞に係っている文がヒットする；の3種類の検索方法を提供している。また、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) のデータの文字列検索システム『少納言』の公開休止に伴い、BCCWJ のデータの検索も可能となっている。

- まとめて検索「KOTONOA」

複数のコーパスを同時に検索し、その集計結果をグラフ化して視覚的に観察できるサービスである。従来のコーパス検索システム『中納言』は、その中のコーパスをそれぞれ“個別”の画面で検索し、結果を閲覧する（個別検索）のに対し、KOTONOA は、「まとめて検索」の名前の通り、中納言の中のコーパスを一度にまとめて検索し、その集計結果を表示する（これを専門的な用語で「包括的検索」「串刺し検索」「横断検索」という）。

カタログ・データベース

図書・研究資料などの書誌情報や国立国語研究所が調査・研究で収集したデータを中心とする資料である。

- 雑誌『国語学』全文データベース

日本語学会の(旧)機関誌『国語学』全巻(第1輯：昭和23年-終刊第219号：平成16年)の全文テキストデータベースである。誌面の PDF ファイルも公開している。

- 日本語研究・日本語教育文献データベース

日本語学、日本語教育に関する研究文献のデータベースであり、1950年代から現在までに発行された関係論文・図書が検索できる。

- 国立国語研究所蔵書目録データベース

国立国語研究所研究図書室の所蔵する図書約15万冊と雑誌約5,800タイトルに加え、貴重書や視聴覚資料、特殊文庫の目録・所蔵情報の検索ができる。

- ことばに関する新聞記事見出しデータベース

国立国語研究所が作成した 1949 年から 2009 年 9 月までのことばに関する新聞記事を集めた「切抜集」に所収の新聞記事の発行日・新聞名・見出し等を収録した「見出し（目録）データベース」である。

- 国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所における学術研究・教育活動の成果および国立国語研究所が所蔵する学術資料を電子的形態で収集・保存し、Web 上で公開している。国語研創立（1948 年）から現在に至るまでの、国語研の刊行物を検索可能なデータベースである「国立国語研究所刊行物データベース」のデータについても、本レポジトリへの移管をおこなっている。

- 国立国語研究所研究資料室収蔵資料

国立国語研究所がこれまでに実施した調査研究において収集・作成した研究資料（調査カードや収録音源など）の概要および目録類を公開している。

- 北米における日本関連在外資料目録

ハワイ・北米の日系社会で収集された資料（音声・映像資料、写真等）を、現地の所蔵機関別に目録として提供している。これらの資料は、現地の言語・文化・歴史・社会を調査研究するために、現地の人が収集している。日系社会の言語生活史をより知るために広く使用されることを目指している。

- 先駆的名論文翻訳シリーズ

日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を選定し、英訳して公開している。

- 『日本言語地図』データベース（Linguistic Atlas of Japan Database：LAJDB）

国立国語研究所編『日本言語地図』（LAJ）の原資料の保存と利用の高度化を目指して、語形の分布情報と言語地図編集に使われた原資料カードの画像を電子化、データベース化したものである。

- 日本語学習者会話データベース

学習者言語に関わるさまざまな研究に資することを目的とし、(1) 多文化共生社会に対応した日本語教育方法・内容の構築に向けた基礎資料を提供すること、(2) 多角的な観点からのデータベース作りを試み、成果を報告することによって、複合領域としての日本語会話研究や日本語教員養成の新たな展開に貢献すること、(3) 口頭能力テストの重要性や多義性について喚起するとともに、その評価の過程やフィードバック等を通じて得られる情報の有意義性に関する認識の深化を促すこと、の 3 点を目標として構築されるものであり、全米外国語教育協会認定の面接式口頭能力テスト（ACTFL-OPI）を活用して収集されたものである。

- 日本語学習者の文章理解過程データベース（語彙の理解）

日本語学習者がどのように文章理解をおこなっているか、その読解過程を調査・収集したデータベースである。

- うちな一ぐち活用辞典テキストデータベース

「宮良信詳（編著）『うちな一ぐち活用辞典』，東京：国立国語研究所言語変異研究領域，2021」を原本とするデータベースである。

- 鳩間方言音声語彙データベース

鳩間方言音声語彙データベースをデータベース化して音声ファイルとリンクさせたものである。

その他データ

各種言語調査データを含む種々のデータ類である。

- 『分類語彙表 増補改訂版』研究用データ

分類語彙表とは、「語を意味によって分類・整理したシソーラス（類義語集）」である。書籍版の『分類語彙表—増補改訂版—』の元となったデータを、データベースソフトに取り込めるよう、CSV 形式に加工したものである。レコード総数は 101,070 件である。

- 現代雑誌 200 万字言語調査語彙表

「現代雑誌 200 万字言語調査」（2001–2005 年度実施）の成果として、学術研究・教育利用を目的として

語彙表を公開している。

- 「学校の中の敬語」 アンケート調査データ

国立国語研究所が「現代敬語行動の研究—学校生活における敬語の研究—」（1988–1990 年度）および「現代敬語行動の研究—小集団内の敬語行動—」（1991–1992 年度）の研究課題で、東京・大阪・山形の中学生・高校生を対象に実施した敬語使用と敬語意識に関する調査のうち、無記名自記式によるアンケート調査で得られたデータである。回答データ、調査票、設問対照表を公開している。

- 岡崎敬語調査データベース

国立国語研究所が中心となって、愛知県岡崎市でおこなった敬語調査のデータベースである。岡崎敬語調査 (OSH) は、1953 (昭和 28) 年、1972 (昭和 47) 年、2008 (平成 20) 年におこなわれ、戦後の 55 年という長いタイムスパンの実時間の変化が分かる。なお、報告書も国立国語研究所学術情報リポジトリで公開している。

- 沖縄語辞典データ集

国立国語研究所資料集 5『沖縄語辞典』の本文篇、索引篇、地名一覧表のデータである。

- 『日本語教育のための基本語彙調査』データ

国立国語研究所報告 78『日本語教育のための基本語彙調査』(1984) の「基本語彙五十音順表」、「意味分類体語彙表」、「分類項目一覧表」を電子化したものである。

- 『幼児・児童の連想語彙表』データ

国立国語研究所報告 69『幼児・児童の連想語彙表』(1981) の「全連想語彙調査表」および「頭音連想語彙調査表」を電子化したものである。

- 甕島方言アクセントデータベース

推定話者数 3,000 人の危機方言である甕島 (鹿児島県薩摩川内市) の方言音声 (アクセント) を教育研究に資する目的で公開している。

- 鶴岡調査データベース

国立国語研究所が中心となって、1950、1971、1991、2011 年の 4 回にわたって山形県鶴岡市でおこなった共通語化調査の回答データである。

- X 線映画「日本語の発音」

日本語発音時の調音運動を撮影した X 線映画 (1965、1967 年撮影) である。

- 寺村秀夫連体修飾論文英訳集

1970 年代から 1980 年代にかけて日本語学・日本語教育の学術的基盤を築くのに大きく貢献した故・寺村秀夫教授 (1928–1990) が残した学術論文の幾つかを英語に翻訳して提供している。

- 日本語史研究用テキストデータ集

国立国語研究所共同研究プロジェクト等で作成したテキストデータ (TXT、XML など) を公開している。

- 『方言談話資料』データ

『方言談話資料』全 10 巻 (1978–1987 年刊) の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- 『方言録音資料シリーズ』データ

『方言録音資料シリーズ』全 15 巻 (1978–1987 年刊) の本文テキストデータと音声ファイルを公開している。

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』(全 54 冊、LC Control No.: 2008427768) の翻字本文 (電子テキスト) を公開するとともに、全 54 巻を対象とした文字列検索も提供している。

- フコト点図データベース

漢文訓読の記号であるフコト点図のデータベースであり、フコト点図の種類、付与位置、記号形状、読みなどをキーに、フコト点を検索することができる。

- 尚書 (古活字版第三種本) 訓点情報データベース

国立国語研究所蔵尚書 (古活字版第三種本) の訓点情報 (フコト点、合符、声点、語順点など) のデータベースを公開している。

- ・「外来語に関する意識調査Ⅱ(全国調査)」回答データセット

社会的な情報の伝達に使用されている外来語・略語およびそれらを使う場面のコミュニケーションについて、国民の意識と言語生活の実態を明らかにすることに加え、分かりにくい外来語・略語を分かりやすく伝えるための、受け手に配慮した言葉遣いの工夫など、問題解決策の検討に資する科学的データを蓄積・提供することを目的としている。

- ・「行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査(自治体調査)」回答データセット

行政情報の発信者である自治体の首長・職員を対象に、住民に分かりやすい言葉で伝える工夫や、住民との円滑なコミュニケーションを図る工夫についての意識を調査・研究することによって、行政用語の見直しや、住民に分かりやすく伝えるための言葉遣いの工夫に資する、科学的データを蓄積・提供することを目的としている。

- ・分散表現データ NWJC2vec

国立国語研究所が構築した『国語研日本語ウェブコーパス』に基づく単語の分散表現データである。

- ・事前学習済みモデル NWJC-BERT

国立国語研究所コーパス開発センター超大規模コーパスプロジェクト(2011–2015年度)で整備されたウェブテキストコーパス(2014年第4四半期データ)から訓練したBERTモデルである。

- ・「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」データ

研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究(日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究)」(2006–2009年度前期:国立国語研究所研究開発部門言語生活グループ)における、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」(企画・実施:尾崎喜光)の調査結果データである。

- ・ことばのミュージアム

日本各地で話されている色々なことばを見たり、聞いたり、学んだりできるウェブサイトである。日本語共通語に似ていることばもあれば、まったく違うように見える/聞こえることばもあり、まずは興味のあるタグをクリックして、出てきた記事を読んでみることで、地域を訪れて、そこで話されていることばを少し話してみたい、と思えるようなウェブサイトを目指している。

5 学術刊行物

(1) 所員による著書・編書

- ・Asahi Yoshiyuki (ed.)

Proceedings of the sixteenth international conference on Methods in Dialectology XVI, Peter Lang., 2020.4.30, ISBN: 978-3-631-80115-4.

- ・小椋秀樹(編), 小椋秀樹, 富士池優美, 宮内佐夜香, 金愛蘭, 柏野和佳子(著)

『日本語の語彙・表記』, 朝倉書店, 2020.5.7, ISBN: 978-4-254-51652-4.

- ・プラシャント・パルデシ, 堀江薫(編)

『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』, ひつじ書房, 2020.5.13, ISBN: 978-4-8234-1036-9.

- ・Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.)

Broader Perspectives on Motion Event Descriptions, John Benjamins, 2020.8, ISBN: 9789027205667.

- ・Yusuke Kubota and Robert Levine

Type-Logical Syntax, MIT Press, 2020.9, ISBN: 978-0-262-53974-6.

- ・Wesley M. Jaconsen and Yukinori Takubo (eds.)

Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics, De Gruyter Mouton, 2020.10.12, ISBN: 978-1-61451-288-2.

- ・宇佐美まゆみ(編著)

『日本語の自然会話分析—BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明—』, 岩波書店, 2020.10.16,

ISBN: 978-4-87424-835-5.

- 福永由佳 (編著)
『顕在化する多言語社会日本: 多言語状況の的確な把握と理解のために』, 三元社, 2020.12.20, ISBN: 978-4-88303-521-2.
- 朝日祥之, 那須昭夫, 北森葵, 入江祐希奈, 西村大佑 (編著)
『筑波大学キャンパスことば集』, 筑波大学, 2021.2.1.
- 窪園晴夫, 野田尚史, プラシヤント・パルデシ, 松本曜 (編)
『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 2021.2.22, ISBN: 978-4-7589-2298-2.
- 吉成祐子, 眞野美穂, 江口清子, 松本曜
『移動表現の類型論と第二言語習得: 日本語、英語、ハンガリー語学習の多元的比較』, くろしお出版, 2021.2.25, ISBN: 978-4-87424-849-2.
- Kageyama Taro, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.)
Verb-verb complexes in Asian Languages, Oxford University Press, 2021.2, ISBN: 9780198759508.
- 小林隆 (編), 小林隆, 篠崎晃一, 井上文子, 松田美香, 竹田晃子, 熊谷智子, 椎名渉子, 津田智史, 佐藤亜実, 櫛引祐希子, 尾崎喜光, 中西太郎 (著)
『全国調査による言語行動の方言学』, ひつじ書房, 2021.3.16, ISBN: 978-4-8234-1071-0.
- 窪園晴夫
『一般言語学から見た日本語のプロソディー 鹿児島方言を中心に』, くろしお出版, 2021.3.25, ISBN: 978-4-87424-854-6.
- 石黒圭, 熊野健志 (編), 青木優子, 浅井達哉, 井伊菜穂子, 石黒圭, 井上雄太, 岩崎拓也, 熊野健志, 佐野彩子, 鈴木英子, 田中啓行, 布施悠子, アンドレイ・ベケシュ, 蒙榎, 柳瀬隆史, 横野光 (著)
『ビジネス文書の基礎技術—実例でわかる「伝わる文章」のしくみ—』, ひつじ書房, 2021.3.30, ISBN: 978-4-8234-1085-7.
- 中川奈津子, 木部暢子 (編)
『青森県八戸方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2021.3.30, ISBN: 978-4-910257-08-2.
- 岡部玲子, 八島純, 窪田悠介, 磯野達也 (編著)
『言語研究の楽しさと楽しみ: 伊藤たかね先生退職記念論文集』, 開拓社, 2021.3, ISBN: 978-4-7589-2300-2.
- 山田真寛, 森澤ケン
『与那国の人とことば2020年』, 言語復興の港, 2021.3.

(2) 『国立国語研究所論集』 (NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表および所内若手研究者の育成を目的として、各年度に2回(原則として7月と1月)、オンラインの形態で発刊している。なお、2020年度までは、冊子体でも発行をおこなっていた。

第19号 (2020年7月)

- NAGAYA Naonori, SUZUKI Yui, and ENOMOTO Emi
“Variation in the Encoding of Motion Events in Turkish”, 1–30 頁, DOI: 10.15084/00002827.
- 菊地礼
「文法形式と比喩の関係: 知覚動詞を用いた直喩について」, 31–45 頁, DOI: 10.15084/00002828.
- 上野善道
「北奥方言の外来語のアクセント資料」, 47–88 頁, DOI: 10.15084/00002829.
- 佐々木藍子
「日本語学習者における接続助詞「～から」の発達過程: 学習環境の違いと接続助詞「～ので」との比較から」, 89–108 頁, DOI: 10.15084/00002830.

- ・蒙堀, 中井陽子
「中国人社員と日本人上司による許可求めのロールプレイ会話の分析: 会話参加者の行動と意識から探る外国人材育成のヒント」, 109–126 頁, DOI: 10.15084/00002831.
- ・董芸
「日本語学習者の作文における並列・継起の接続表現の習得: 中国語母語話者の縦断コーパスの分析を通じて」, 127–138 頁, DOI: 10.15084/00002832.
- ・野田尚史, 高澤美由紀
「スペイン語アルファベットによる日本語音声表記」, 139–166 頁, DOI: 10.15084/00002833.
- ・宮内拓也, プロホロワ マリア
「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のロシア語翻訳データの構築とその日露対照研究への活用の可能性」, 167–185 頁, DOI: 10.15084/00002834.
- ・柳原恵津子
「平安初期訓点資料における不読字の再検討: コーパス・電子化テキストを用いた訓点語研究の試みとして」, 187–207 頁, DOI: 10.15084/00002835.

第 20 号 (2021 年 1 月)

- ・松田美香
「九州 4 地点の依頼談話における配慮表現と積極的言語行動: 九州における方言談話の特徴と分布」, 1–20 頁, DOI: 10.15084/00003090.
- ・砂川有里子, 朱桂榮
「中国語を母語とする日本語上級学習者の読解過程: 書き手との対話を促す読解指導に向けて」, 21–40 頁, DOI: 10.15084/00003091.
- ・中川奈津子
「青森県南部野辺地方の音韻」, 41–55 頁, DOI: 10.15084/00003092.
- ・中川奈津子
「日本語の動詞的名詞 (サ変名詞) の文法的位置づけ: 専用型と兼務型」, 57–77 頁, DOI: 10.15084/00003093.
- ・デロワ中村弥生
「「とりたて」の作用から見えてくる品詞・表現間の連続性: フランス語との対照分析を通して」, 79–94 頁, DOI: 10.15084/00003094.
- ・布施悠子, 鈴木靖代
「対話場面における中国人日本語学習者の「と思う」の習得過程の一考察: 『北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)』のデータから」, 95–113 頁, DOI: 10.15084/00003095.
- ・上野善道
「岩手県田野畑村方言のアクセント調査報告: 北奥方言アクセント祖体系との関連で」, 115–147 頁, DOI: 10.15084/00003096.
- ・白田泰如
「態度をほのめかす例示: 日本語引用表現「みたいな」の分析」, 149–169 頁, DOI: 10.15084/00003097.
- ・柳原恵津子
「『金光明最勝王経』平安初期点における助辞の訓法の再検討」, 171–198 頁, DOI: 10.15084/00003098.
- ・王慧雋
「テレビドラマのシナリオに見られる話し言葉の (サ) セル表現: サセ手・シ手の立場と意志の観点から」, 199–221 頁, DOI: 10.15084/00003099.

国立国語研究所では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは、専門家向けのものをあげる。

(1) 国際シンポジウム

国立国語研究所が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をおこなっている。

NINAJL 国際シンポジウム

第11回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11) [2020.12.19–20, オンライン]

2020年12月19日

- ・シンポジウム「さまざまな角度から見た日本語のコミュニケーション」
 - ▶ 野田尚史 (国立国語研究所)
 - 「趣旨説明」
 - ▶ ポリー・ザトラウスキー (ミネソタ大学)
 - 「食べ物に対する態度はどのように作り上げられるか—食の会話を例にして—」
 - ▶ 曹大峰 (北京外国語大学)
 - 「コミュニケーションを重視した日本語教科書の開発—内容と活動の設計—」
 - ▶ 坊農真弓 (国立情報学研究所)
 - 「手話相互行為における日本語と日本手話の関係—『日本手話話し言葉コーパス』からみた言語使用—」
 - ▶ 森篤嗣 (京都外国語大学)
 - 「国語教育はコミュニケーションの教育なのか—日本語教育との比較から—」
 - ▶ マルチェッラ・マリオッティ (ヴェネツィア・カフォスカリ大学)
 - 「相互民主的なアイデンティティ・エコシステムと外国語教育—ポスト・コミュニケーション言語教育—」

2020年12月20日

- ・口頭発表1 (会場 a)
 - ▶ CHEN Yiting (Tokyo University of Agriculture and Technology)
 - “A corpus-based approach to the difference between Japanese compound verbs and verbal compound nouns: Revisiting the coextensiveness condition”
 - ▶ CAO Yuning (Stanford University)
 - “Reexamining Japanese youth language”
- ・口頭発表1 (会場 b)
 - ▶ 矢吹 ソウ 典子 (ヨーク大学), 奥野由紀子 (東京都立大学)
 - 「日本語学習者による事態把握の主観性—I-JAS のストーリー描写における情意・評価表現の分析—」
 - ▶ 砂川有里子 (筑波大学名誉教授)
 - 「ストーリー展開部での接続表現: 日本語学習者コーパスを用いた中国語母語話者と韓国語母語話者の比較研究」
 - ▶ 島田友絵 (華東師範大学)
 - 「非漢字圏 JLL 児童の漢字表記抽象語の理解力—音声言語と漢字表記との関わりからの考察—」
- ・口頭発表1 (会場 c)
 - ▶ 相川孝子 (マサチューセッツ工科大学)
 - 「リモート時代の日本語教授法作りに向けて: テクノロジーと教師の役割」
 - ▶ 小玉安恵 (San Jose State University)
 - 「体験談における接続助詞カラとノデの内在的評価装置としての機能—現れ方と構造的特徴から生成

されるニュアンスという観点からの検証—」

- ・高雅妃 (神戸学院大学)

「日本語「やばい」と韓国語“daebak”の対照研究」

- ・ポスターセッション (前半)

- ・韋恩琦 (神戸大学)

「三者会話場面における JSL 中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジー使用に関する一考察」

- ・李康元 (名古屋大学), 堀江薫 (名古屋大学)

「距離中立的用法に関する日韓語の指示詞コと i (이) の対照分析: 共同注意の観点から」

- ・中野てい子 (尚美学園大学), 原田照子 (EF International Language Schools), 三上京子 (元国際交流基金派遣日本語上級専門家), 山形美保子 (元朝日カルチャーセンター), 酒井眞智子 (元日本語教師), 宮崎妙子 (千駄ヶ谷日本語教育研究所), 草野宗子 (早稲田大学), 今井美登里 (東京学芸大学)

「多読のための語彙レベルテスト: 教室内外の学習者支援の一助として」

- ・宮原温子 (早稲田大学), 藤森景子 (早稲田大学)

「非漢字圏初級学習者が漢字学習に求めるもの—タイピングを中心に—」

- ・中俣尚己 (京都教育大学), 太田陽子 (一橋大学), 加藤恵梨 (大手前大学), 澤田浩子 (筑波大学), 清水由貴子 (聖心女子大学), 森篤嗣 (京都外国語大学)

「日本語話題別会話コーパス: J-TOCC」の構築」

- ・大場美和子 (昭和女子大学), 松橋由佳 (テンプル大学), 山本晶子 (昭和女子大学), 山口麻子 (テンプル大学), 丹下暖子 (昭和女子大学)

「接触場面を創り出すプロセスにおける問題の調整の分類—昭和女子大学とテンプル大学ジャパンキャンパスの学科における交流を対象に—」

- ・庵功雄 (一橋大学), 玉田雅己 (バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター), 増原裕之 (バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター), 大塚優 (バイリンガル・バイカルチュラルろう教育センター), 岡典栄 (明晴学園), 森田明 (明晴学園), 安東明珠花 (東京大学)

「ろう児のための日本手話引き日本語基本動詞辞典の開発」

- ・立見洸貴 (名古屋大学)

「相談場面における「独話的発話」を契機とする発話の連鎖—発話と視線の関係をめぐって—」

- ・ポスターセッション (後半)

- ・YAMAMOTO Kazuaki (International University of Health and Welfare), ASAKAWA Shoko (Keio University), KATO Rintaro (International University of Health and Welfare)

“How broad should be the vocabulary knowledge to write effectively practice nursing records?”

- ・井上直美 (埼玉大学)

「「～てしかるべき」の意味・機能について」

- ・東泉裕子 (明治大学), 高橋圭子 (東洋大学)

「現代日本語における反応表現としての漢語「無理」」

- ・高橋亜里沙 (千葉大学)

「職場の雑談にみられる「からかい」の相互行為—コンテキスト化の合図に着目して—」

- ・志村ゆかり (一橋大学), 豊田哲也 (東邦大学), ビアルケ千咲 (東京経済大学), 永田晶子 (イーストウェスト日本語学校), 武一美 (認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワークかながわ), 志賀玲子 (東京経済大学), 庵功雄 (一橋大学)

「外国につながりのある生徒のための日本語 e-learning 環境の構築」

- ・孫守乾 (東京都立大学)

「投書における反対意見を表すストラテジー—日本・中国語母語話者の比較—」

- ・謝カン月 (名古屋大学)

「意見交換場面における中国人日本語学習者の「譲歩」はどのような特徴があるか—日本語母語話者

- との比較を中心に―」
- ・張未未 (早稲田大学)
 - 「会話物語の導入箇所における談話標識の使用傾向」
- ・口頭発表 2 (会場 a)
 - ・蒙韞 (新潟大学)
 - 「中国人社員と日本人上司の「面談」と「雑談」における相互理解の分析―外国人材へのキャリア教育のために―」
 - ・馮佳譽 (関西学院大学)
 - 「なぜ不同意行為として理解可能なのか―話し合い場面における「確認要求」に着目して―」
 - ・山本綾 (昭和女子大学)
 - 「応答としての「わかる」―相互行為と会話の展開に焦点を当てて―」
- ・口頭発表 2 (会場 b)
 - ・張正 (東京外国語大学), 福田翔 (富山大学), 望月圭子 (東京外国語大学)
 - 「中国語母語話者による日本語数量詞の産出と母語の影響: 日本語・中国語双方向学習者コーパスからの知見」
 - ・黄若白 (東京大学)
 - 「日本語と中国語における「可能」と「達成」の境界―日本語の可能形式と中国語の方向補語の対応関係を中心に―」
 - ・岩崎拓也 (国立国語研究所)
 - 「中国人日本語学習者の接続詞直後の読点使用の分析」
- ・口頭発表 2 (会場 c)
 - ・楊虹 (鹿児島県立短期大学), 倉田芳弥 (聖学院大学)
 - 「日中・日韓接触場面の SNS チャット会話の比較―送信の頻度と量, メッセージの構成に注目して―」
 - ・百瀬みのり (三重大学 / 神戸学院大学)
 - 「日本語テキストにおけるフィラー的用法の形式の見直し」
 - ・中俣尚己 (京都教育大学)
 - 「自然会話コーパスを元にした話題別語彙表の作成」
- ・口頭発表 3 (会場 a)
 - ・市村葉子 (福井工業高等専門学校), 宇都木昭 (名古屋大学)
 - 「母語話者評価に基づくノダ形式の指導に関する提案」
 - ・ホドシチェク・ボル (大阪大学), 阿辺川武 (国立情報学研究所), 仁科喜久子 (東京工業大学名誉教授), 八木豊 (株式会社ピコラボ), ベケシュ・アンドレイ (リュブリャナ大学名誉教授)
 - 「アカデミックライティング指導のための学術論文コーパスと学習者コーパスの接続表現に見られる特徴分析」
 - ・華迪聖 (東京都立大学)
 - 「日中両言語における痛を含む二字漢語の分類及び比較―辞書を調査資料として―」
- ・口頭発表 3 (会場 b)
 - ・鈴木綾乃 (横浜市立大学), 大神智春 (九州大学), 森田淳子 (東京工業大学), 林富美子 (明治大学), 麻生廼子 (四天王寺大学)
 - 「日本語学習者横断コーパス (I-JAS) に見られる多義語コロケーションの産出―動詞「する」「ある」に焦点を当てて―」
 - ・佐々木藍子 (東京学芸大学)
 - 「JFL 環境における日本語学習者の接続助詞「〜から」の発達過程―多言語母語の日本語学習者横断コーパス「I-JAS」の分析から―」
 - ・岩崎典子 (南山大学), 吉岡慶子 (ライデン大学)
 - 「L2 日本語話者の発話とジェスチャーによる様態表現―移動表現類型の異なる L1 英語話者の場合―」

- 口頭発表3 (会場c)
 - 山本裕子 (愛知淑徳大学)

「コーパス分析システムを用いたアニメの分析—助詞の脱落に注目して—」
 - 西澤萌希 (名古屋大学)

「どう話せば上品か—NWJC『梵天』を利用した言説分析—」
 - 加藤さやか (サラマンカ大学)

「アクティブ・ラーニングを指向するオンライン日本語集中講座における演劇的手法の活用とその効果」
- 閉会のあいさつ: 田窪行則 (国立国語研究所所長)

国際シンポジウム

JSPS 科研費 19H00627 「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」 キックオフ国際シンポジウム [2021.3.27, オンライン]

- ご挨拶
 - 野山広 (国立国語研究所 / 基礎教育保障学会)

「科研の獲得経緯・概要とシンポジウム開催の趣旨」
- 発表 (報告) 「日本人の読み書き能力 1948 年調査の結論を読み直す」
 - 高田智和 (国立国語研究所)

「目的, 方法, 結果, 結論」
 - 前田忠彦 (統計数理研究所)

「ゼロ点の人という基準について」
 - 横山詔一 (国立国語研究所)

「90 点満点の人という基準について」
- 講演
 - 上杉孝實 (京都大学名誉教授 / 基礎教育保障学会前会長)

「識字調査の意義と留意点—社会教育, 人権教育の観点から—」
- 講演 (英語, 同時通訳付き)
 - Jonas Nicolas (ユネスコ生涯学習研究所)

“Sharpening our tools for the assessment of adult skills. What a national-scale survey offers that a large-scale cannot?”
- パネルディスカッション: テーマ「今後の日本におけるリテラシー調査の開発, 実施に向けた課題と展望」
 - パネリスト

横山詔一 (国立国語研究所), 前田忠彦 (統計数理研究所), 高田智和 (国立国語研究所), Jonas Nicolas (ユネスコ生涯学習研究所)
 - ディスカッサント

大安喜一 (ユネスコ・アジア文化センター), 佐藤郡衛 (異文化間教育学会理事長)
 - コメンテーター

上杉孝實 (京都大学名誉教授 / 基礎教育保障学会前会長)
 - コーディネーター (司会)

野山広 (国立国語研究所 / 基礎教育保障学会)
- 意見交換会
 - 科研の研究分担者, 協力者
 - 政策, 施策関連

葦澤弘志 (元国立国語研究所理事), 前川喜平 (基礎教育保障学会) ほか

- ・閉会のご挨拶
 - ・野山広 (科研費 19H00627 代表)
 - 「科研の今後の展開に向けて」

国際ワークショップ・講演会

国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」[2020.10.30, オンライン]

- ・Artemii Kuznetsov (Institute for Linguistic Studies, Russian Academy of Science, Russia)
 - “Grammaticalization of deictic motion verbs in Japanese: corpus and experimental data”
- ・ABE Sayaka (Middlebury College, USA)
 - “From verb semantics to subjectivity: A diachronic analysis of V-V complex-predicate formation and grammaticalization”

シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」[2020.12.19–20, オンライン]

2020 年 12 月 19 日: 諸方言の音声・音韻と系統論

- ・趣旨説明
- ・セッション 1: 日琉アクセント史と系統論
 - ・ウェイン・ローレンス (オークランド大学)
 - 「アクセント変化から見た琉球方言の系統樹と日本祖語音調から見た琉球祖語音調」
 - ・松倉昂平 (金沢大学 / 日本学術振興会)
 - 「福井県方言の三型アクセントの成立過程」
 - ・中澤光平 (国立国語研究所)
 - 「日琉諸語の下位分類とアクセント研究」
- ・セッション 2: 諸方言の分節音における非中央語的特徴
 - ・五十嵐陽介 (国立国語研究所)
 - 「琉球語と九州語が共有する分節音における非中央語的特徴」
 - ・平子達也 (南山大学)
 - 「伝統方言の記述と比較方法」
 - ・トマ・ペラル (CNRS-INALCO-EHESS, CRLAO)
 - 「琉球諸語の母音体系の形成過程」
- ・ディスカッション
 - ・コメンテータ: 新田哲夫 (金沢大学), 上野善道 (東京大学)

2020 年 12 月 20 日: 日琉諸方言の系統論における統計学的アプローチ

- ・趣旨説明
- ・発表
 - ・斎藤成也 (国立遺伝学研究所)
 - 「言語距離の系統解析からヤポネシア人の由来を考察する」
 - ・木村亮介 (琉球大学)
 - 「集団遺伝学的手法による琉球諸語の解析」
 - ・村脇有吾 (京都大学)
 - 「方言群の分析のための分岐と伝播の統合的モデル化」
- ・ディスカッション
 - ・コメンテータ: 濱田武志 (三重大大学)

Prosody & Grammar Festa 5 [2021.2.20–21, オンライン]

2021 年 2 月 20 日

- ・開会のことば

- 基調講演
 - Larry HYMAN (University of California, Berkeley)
“Grammatical Functions of Tone”
- 一般発表
 - 馬塚れい子 (理化学研究所/Duke University), 近藤綾子 (理化学研究所), 高橋秀俊 (高知大学), 神尾陽子 (お茶の水女子大学)
「自閉症児の発話プロソディ」
 - 米田信子 (大阪大学)
「スワヒリ語の「限定」のとりたて表現」
 - 窪田悠介 (国立国語研究所), 阿久澤弘陽 (京都大学)
「定形コントロールと相対テンス—日本語からの視点—」
 - 夏海燕 (神奈川大学)
「日本語と中国語の直示動詞からみる話者領域と意味拡張の関連性」
 - 山本恭裕 (東京外国語大学)
「イロカノ語の移動事象描写における構文選択と事象のパッケージング」

2021年2月21日

- 基調講演
 - 柴谷方良 (Rice University)
“What modifies a noun?”
- 一般発表
 - 大崎紀子 (京都大学)
「キルギス語の名詞修飾表現—分詞節と動名詞句の使い分けと属格主語分詞節—」
 - 新田志穂
「現代ウイグル語の名詞修飾節について—特に「外の関係」に着目して—」
 - 菅原真理子 (同志社大学)
「日本語母語話者と韓国語ソウル方言母語話者による英語ストレス付与」
 - 原真由子 (大阪大学)
「インドネシア語のとりたて表現」
- ポスター発表
 - 趙蓉俊子 (新潟大学)
「日中語の再帰構文の相違点」
 - 吉田樹生 (東京大学), 島健太 (東京大学), 鈴木唯 (東京大学), 谷川みずき (東京大学), 林真衣 (東京外国語大学), 細羽洸希 (東京外国語大学), 諸隈夕子 (東京大学), 長屋尚典 (東京大学)
「日本語と世界の言語における単複と頻度の関係: 言語類型論的コーパス研究」
 - Kwon GyongBae (神戸大学)
「韓国語における短縮語形成—日本語との対照—」
 - デシルバ K. G. K., 宮岸哲也 (安田女子大学)
「シンハラ語複合動詞のヴォイス的対立と日本語との対照」
 - 永富央章 (神戸大学)
「日本語における混成語のアクセントと右側主要部規則」
 - Tekonnang Timee (Kiribati Teacher's College), Seunghun J. LEE (International Christian University/University of Venda)
“Two types of rising intonation in Kiribati interrogatives”
 - 久川瑠奈, 佐藤正直, 北川蓉華, 竹安大 (福岡大学)
「日本語母語話者の英語語末子音連続における促音知覚—子音の順序と調音法の影響—」

- ・ Nikolai KONOVALENKO and TANAKA Shin'ichi (Kobe University)
“Text-setting in Russian football chants”
- ・ 基調講演
 - ・ 岩田祐子 (国際基督教大学)
「日・英語談話スタイルの対照研究」
- ・ 閉会のことば

第16回音韻論フェスタ特別セッション「日本語・韓国語の音韻論」 [2021.3.8, オンライン]

- ・ KUBOZONO Haruo (NINJAL)
“On the distinctive phonetic feature of word prosody in Kagoshima Japanese”
- ・ Mira Oh (Chonnam National University) and Hijo Kang (Chosun University)
“A cross-linguistic study of long-distance effects on the VOT variation of stops: Korean and English”
- ・ Seunghun J. Lee (International Christian University / University of Venda) and Woonho CHOI (Mokpo National University)
“A quantitative study of the syntax-prosody interface in two varieties of Korean”
- ・ Jongho Jun, Hanyoung Byun, Seon Park, and Yoona Yee (Seoul National University)
“How tight is the link between alternations and phonotactics in Korean?”

(2) 合同シンポジウム・研究発表会

複数のプロジェクトが共同でおこなうシンポジウムや研究発表会。

研究発表会「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」 [2020.8.8, オンライン]

- ・ 小木曾智信 (国立国語研究所)
「「昭和・平成書き言葉コーパス」の構築と活用に向けて」
- ・ 高橋雄太 (明治大学)
「近現代における副詞の仮名表記化」
- ・ 小椋秀樹 (立命館大学)
「近代における字音否定接頭辞「非・不・未・無」の使用実態」
- ・ 永澤済 (名古屋大学)
「昭和・平成書き言葉コーパスにみる「ために(為)」行為者受身文の残存」
- ・ 間淵洋子 (国立国語研究所)
「近現代日本語通史のための新聞コーパスの設計と構築」
- ・ 相田太一 (東京都立大学), 小町守 (東京都立大学), 小木曾智信 (国立国語研究所), 持橋大地 (統計数理研究所)
「単語分散表現を用いた近現代日本語の意味変化の抽出」

「通時コーパス」シンポジウム 2020 オンライン [2020.9.13, オンライン]

- ・ 口頭発表
 - ・ 小木曾智信 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス』 ver.2020.3 通時コーパス構築進捗報告」
 - ・ 北崎勇帆 (高知大学)
「近世における従属句の階層性」
 - ・ 銭谷真人 (鎌倉女子大学)
「近世近代における「あて字」と熟字訓—人情本の漢字表記を中心に—」
 - ・ 野村剛史 (東京大学名誉教授)
「中世アスペクト体系の変遷」

- ポスター発表
 - ・ 浅野萌花 (明治大学)
 - 「近代小学校国語教科書の語彙における「教育的配慮」」
 - ・ 大西拓一郎 (国立国語研究所)
 - 「同音衝突と類音牽引—庄川流域における「桑の実」と「燕」の方言分布と変化—」
 - ・ 小木曾智信 (国立国語研究所)
 - 『日本語歴史コーパス奈良時代編 I 万葉集』から『オックスフォード・NINJAL 上代日本語コーパス』『万葉集校本データベース』へのリンクについて」
 - ・ 小木曾智信 (国立国語研究所), 河内昭浩 (群馬大学)
 - 「国語教育用 UI「ことねり」の開発と活用」
 - ・ 片山久留美 (国立国語研究所)
 - 『日本語歴史コーパス江戸時代編 III 近松浄瑠璃』の特徴と活用」
 - ・ 呉寧真 (国立国語研究所), 池田幸恵 (中央大学), 須永哲矢 (昭和女子大学)
 - 『日本語歴史コーパス奈良時代編 II 宣命』の公開と活用」
 - ・ 田中牧郎 (明治大学), 高橋雄太 (明治大学), 仲村怜 (国立国語研究所/明治大学)
 - 「明治初期理科教科書『物理階梯』『小学化学書』『初学人身窮理』のコーパス作成について」
 - ・ 萩原義雄 (駒澤大学)
 - 「古辞書コーパス 広本『節用集』所載『文選』文句, 語について」
 - ・ 服部紀子 (国立国語研究所)
 - 「国定教科書における口語文—明治・大正期の口語文典と比較して—」
 - ・ フェデリコ・マングラビーテ (オックスフォード大学)
 - 「中古日本語における助動詞の『き』—テンス・アスペクトの類型論の観点からみた日本語歴史コーパスからの用例—」
 - ・ 松崎安子 (国立国語研究所)
 - 『万葉集』と「八代集」に見られる地名の分布とその傾向」
 - ・ 間淵洋子 (国立国語研究所)
 - 「近代の新聞・雑誌に見られるルビの実態：形態論情報アノテーションとの関わり」
 - ・ 劉冠偉 (北海道大学/日本学術振興会)
 - 「日本古辞書研究資料の利用について—和名類聚抄と日本語歴史コーパスとの連携を例に—」
- テーマセッション『統計と日本語史研究』(コーディネーター：持橋大地 (統計数理研究所))
 - ・ 土山玄 (お茶の水女子大学文理融合 AI・データサイエンスセンター)
 - 「平安時代の文学作品における『源氏物語』の特徴語の抽出—『日本語歴史コーパス平安時代編』を用いて—」
 - ・ 相田太一 (東京都立大学), 小町守 (東京都立大学), 小木曾智信 (国立国語研究所), 高村大也 (産業技術総合研究所/東京工業大学), 坂田綾香 (統計数理研究所), 小山慎介 (統計数理研究所), 持橋大地 (統計数理研究所)
 - 「単語分散表現の結合学習による単語の意味の通時的変化の分析」
 - ・ 山崎誠 (国立国語研究所)
 - 「短単位の頻度列から見た古典文学作品の特徴」
 - ・ 近藤泰弘 (青山学院大学)
 - 「歴史的に見た日本語の文節長について」

NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」[2020.10.3, オンライン]

- ワークショップ 1「配慮の表現・行動から見るコミュニケーションの諸相」
 - ・ 木部暢子 (国立国語研究所 言語変異研究領域)
 - 「配慮表現の地域差—日本語諸方言コーパス (COJADS) から」

- ・高山善行 (福井大学)
「対人配慮の歴史をどう捉えるか—「断り表現」を中心」
- ・小磯花絵 (国立国語研究所 音声言語研究領域)
「日常会話コーパスに見る配慮の表現・行動の多様性」
- ・朝日祥之 (国立国語研究所 言語変異研究領域)
「ハワイ・アメリカに渡った日本人女性たちの日本語にみるポライトネス」
- ・野田尚史 (国立国語研究所 日本語教育研究領域)
「日本語学習者の配慮の表現・行動から出発するコミュニケーションの対照研究」
- ・基調講演
 - ・中島秀之 (札幌市立大学学長, 元公立ほくでて未来大学学長)
「AI と対話」
- ・ワークショップ2「コミュニケーションの諸相」
 - ・石黒圭 (国立国語研究所 日本語教育研究領域)
「日本語学習者のフィラーが母語話者に与える印象」
 - ・市田泰弘 (国立障害者リハビリテーションセンター学院)
「自然言語としての日本手話」
 - ・高田智和 (国立国語研究所 言語変化研究領域)
「文字コミュニケーションの不通」
 - ・藤野博 (東京学芸大学)
「自閉スペクトラム症の認知特性とコミュニケーションの問題」
 - ・プラシャント・パルデシ (国立国語研究所 理論・対照研究領域)
「世界諸語から見た日本語のコミュニケーション」

シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」

[2021.3.6, 21, オンライン]

2021年3月6日

- ・開会の挨拶, 趣旨説明: 野田尚史 (国立国語研究所)
- ・佐々木冠 (立命館大学)
「拡張コピュラ文述部の形態論」
- ・平塚雄亮 (中京大学)
「日本語諸方言コーパスを用いた複数接尾辞の対照方言研究」
- ・松田美香 (別府大学)
「可能の意味区分の全国分布から何がわかるか」
- ・久保蘭愛 (愛知県立大学)
「鹿児島方言における主格・属格標示とその地域差」
- ・原田走一郎 (長崎大学)
「長崎県の2つの方言における排他的「が」」
- ・仲原穰 (琉球大学)
「八重山語・鳩間島方言の副詞—石垣島四箇方言, 竹富島方言との対照研究のために—」
- ・有田節子 (立命館大学)
「条件文のモダリティ制約に関する対照研究—条件付けられた命令・依頼表現を中心に—」
- ・竹田晃子 (フェリス学院大学 / 岩手大学)
「東北方言における条件表現の形式—近代の方言変化を読み解く—」
- ・船木礼子 (神戸女子大学)
「意志・推量表現の方言間対照・史的対照—西日本のラム由来形式使用地域を中心に—」
- ・閉会の挨拶: 木部暢子 (国立国語研究所)

2021年3月21日

- ・開会の挨拶，趣旨説明：野田尚史（国立国語研究所）
- ・江口正（福岡大学）
「方言動詞の活用システムと同音衝突—否定のンと終止形の撥音化—」
- ・下地賀代子（沖縄国際大学）
「宮古諸方言の形容詞「語根」の用法」
- ・岩田美穂（就実大学）
「形式名詞キリ・ギリの変化—地理的バリエーションから見る変化の多様性—」
- ・中本謙（琉球大学）
「北琉球方言格助詞の対照研究」
- ・高木千恵（大阪大学）
「大阪方言における条件表現のバリエーション」
- ・齊藤美穂（神戸大学）
「奄美大島瀬戸内方言の条件形式の体系と派生的用法」
- ・野間純平（島根大学）
「日本語諸方言コーパス」を用いた「ノダ文」の方言間対照」
- ・酒井雅史（甲南女子大学）
「日本語諸方言の敬語運用類型とその地理的分布」
- ・日高水穂（関西大学）
「昔話の叙述型の全国概観」
- ・小西いずみ（東京大学）
「方言の終助詞の対照研究—平叙文専用の形式を中心に—」
- ・閉会の挨拶：日高水穂（関西大学）

(3) プロジェクトのシンポジウム・ワークショップ・研究発表会

プロジェクト等の主催で公開研究発表会や学術シンポジウム等を，例年は日本各地を会場として開催しているが，2020年度はオンラインで開催した。

第一回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期）[2020.5.25，オンライン]

- ・定延利之（京都大学）
「接ぎ穂発話の音調はいかに文発話の音調らしくないか」

第二回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期）[2020.5.29，オンライン]

- ・川原繁人（慶應義塾大学）
「最大エントロピーモデルと音象徴：ポケモンの名付けパターンから」

第三回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期）[2020.6.5，オンライン]

- ・窪蘭晴夫（国立国語研究所）
「鹿児島方言のモーラ性について」

第四回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期）[2020.6.12，オンライン]

- ・白田理人（志学館大学），重野裕美（広島大学等非常勤）
「北琉球奄美諸島池地方言の動詞における母音交替について」

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」オンライン研究発表会 [2020.6.14，オンライン]

- ・あいさつ

- 研究発表
 - ▶ 三樹陽介 (駒沢大学)
 - 「八丈語の格・情報構造：形容詞構文における与格交替」
 - ▶ 佐々木冠 (立命館大学)
 - 「千葉県南房総市三芳方言の格」
 - ▶ 小西いずみ (東京大学), 三樹陽介 (駒沢大学), 吉田雅子 (実践女子大学)
 - 「山梨県奈良田方言の格・情報構造：属格ノ・ガの用法を中心に」
 - ▶ 松倉昂平 (日本学術振興会特別研究員 / 金沢大学)
 - 「福井県嶺北方言における目的語標示」
 - ▶ 平子達也 (南山大学)
 - 「出雲方言の格と情報構造」

• ディスカッション

「I-JAS」完成記念シンポジウム / 第 5 回コーパスワークショップ [2020.6.20-21, オンライン]

2020 年 6 月 20 日 (第 5 回学習者コーパスワークショップ)

- ワークショップ
 - ▶ 初心者コース
 - 担当：細井陽子, 須賀和香子
 - ▶ 既習者コース
 - 担当：佐々木藍子

2020 年 6 月 20 日 (「I-JAS」完成記念シンポジウム)

- 開会挨拶
- I-JAS 完成報告
- パネルディスカッション 「I-JAS のコーパス特性—データ分析から見た I-JAS の可能性—」
 - ▶ パネリスト：
 - 李在鎬 (早稲田大学), 石川慎一郎 (神戸大学), 迫田久美子 (国立国語研究所 / 広島大学)

2020 年 6 月 21 日 (「I-JAS」完成記念シンポジウム口頭発表)

- 第 1 セッション A 会場 (司会者：石川慎一郎)
 - ▶ 玉岡賀津雄, 趙倩楠
 - 「外国人日本語学習者 850 名の説明力を支える日本語能力—構造方程式モデリングによる J-CAT から I-JAS の産出頻度への因果関係の検証—」
 - ▶ 南雅彦
 - 「異なる言語を母語とする日本語学習者の語りから見えてくるもの—ハイポイント分析—」
 - ▶ 田中望, 白井恭弘
 - 「第二言語習得における日本語インプット・アウトプット内の手掛りの推定—競合モデルの観点から—」
- 第 1 セッション B 会場 (司会者：李在鎬)
 - ▶ 小口悠紀子, 陳真
 - 「中国語を母語とする上級日本語学習者の語りに表れる評価方略—出現位置と共起表現に着目して—」
 - ▶ 望月圭子, 小柳昇, ファムティタインタオ
 - 「複文におけるアスペクト・接続表現の習得と母語の影響：日本語学習者コーパス I-JAS の「語り」における日本語・中国語・ベトナム語・英語母語話者の比較」
 - ▶ 陳熾如
 - 「中国語を母語とする日本語学習者による数量表現の使用実態について—学習環境と学習者の日本語能力を分析して—」

- 第2セッション A 会場 (司会者: 佐々木藍子)
 - ▶ 堀内仁
「英語を母語とする学習者の日本語の文法的複雑さ—名詞修飾表現の場合—」
 - ▶ 徐乃馨
「日本留学で名詞修飾の習得が進むのか—ストーリー描写における使用に基づく分析—」
 - ▶ 大関浩美
「中級日本語学習者の名詞修飾節使用における母語の影響」
- 第2セッション B 会場 (司会者: 須賀和香子)
 - ▶ 蘇鷹, 川崎千枝見, 迫田久美子
「I-JAS における引用標識「(っ)て」「と」の使用実態」
 - ▶ 奥野由紀子
「「話す」課題と「書く」課題にみられる中間言語変異性—I-JAS におけるストーリー描写課題の分析より—」
 - ▶ 張佩霞, 黄炯
「中国語を母語とする日本語学習者のナラティブにおける人称詞の使用実態に関して」
- 第3セッション A 会場 (司会者: 迫田久美子)
 - ▶ 小西円
「日本語学習者の習熟度別にみたフィラーの分析」
 - ▶ 鈴木英子
「談話管理に関わる副詞「もちろん」の使用実態—I-JAS 発話データの調査から—」
 - ▶ 佐々木藍子, 砂川有里子
「日本語学習者の非流ちょう性に関する一考察—I-JAS の韓国語母語話者を対象に—」
 - ▶ 細井陽子, 迫田久美子
「中国語母語話者の日本語による依頼の補助ストラテジー—学習環境やレベル差に着目して—」
- 第3セッション B 会場 (司会者: 野山広)
 - ▶ 奥野由紀子, 呉佳穎, 村田裕美子
「日本語学習者の能動態と受動態の使用傾向にみられる母語による違い—中国語とドイツ語による語りの比較から—」
 - ▶ ダンタイクインチャー
「ストーリー描写における中級日本語学習者の視点表現の使用—「ストーリーテリング」課題と「ストーリーライティング」課題の比較—」
 - ▶ 須賀和香子
「依頼の事情説明部分に見られる日本語学習者の配慮表現—非意図化の表現を中心に—」
 - ▶ 東伴子
「フランス語母語学習者の依頼交渉場面におけるストラテジーの考察—語用論的能力の指導に向けて—」

オンライン・シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 8」 [2020.6.27, オンライン]

- 開会挨拶
- 講演 1
 - ▶ 大野剛 (アルバータ大学)
“Reference in conversation”
- 招待講演 1
 - ▶ 吉川正人 (慶應義塾大学)
「傀儡の文法論: ヒトの創造性に寄生する社会的ウイルス」

- ・招待講演 2
 - ・高田明 (京都大学)

「日本における言語社会化と「責任」の文化的形成」
- ・講演 2
 - ・横森大輔 (九州大学)

「反応表現の相互行為上の機能と韻律的バリエーション：英語 really を例に」
- ・総合討論

第五回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期） [2020.6.29, オンライン]

- ・ケナン・セリック (国立国語研究所), 青井隼人 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 / 国立国語研究所)

「南琉球語宮古多良間方言の複合名詞アクセントの記述：ピッチパタンの決定には何が関与するか」

第六回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期） [2020.7.3, オンライン]

- ・松倉昂平 (金沢大学 / 日本学術振興会), 新田哲夫 (金沢大学)

「福井県三国町安島方言における hadderu 《外れる》等の重子音の生起条件について」

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」オンライン研究発表会 [2020.7.7, オンライン]

- ・大久保弥 (東京外国語大学 / 国立国語研究所)

「統語・意味解析コーパス NPCMJ における照応解析の現状と諸問題」

第七回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期） [2020.7.10, オンライン]

- ・佐野真一郎 (慶應義塾大学), ギュモ・セレスト (国際基督教大学)

「日本語ピッチレンジの社会音声学的分析」

第八回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（前期） [2020.7.17, オンライン]

- ・白田理人 (志學館大学)

「疑問文のプロソディーと動詞活用語尾の縮約に伴うアクセント単位の拡張—喜界島小野津方言・上嘉鉄方言の真偽疑問文を例に—」

シンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」 [2020.9.19–20, オンライン]

2020 年 9 月 19 日

- ・係り結び
 - ・全体の趣旨説明, 開催方法の説明
 - ・林由華 (国立国語研究所 / 日本学術振興会)

「概説：琉球諸方言における係り結び研究の展開」
 - ・林由華 (国立国語研究所 / 日本学術振興会)

「琉球諸方言における係り結びに関連する述語動詞形式の交替現象」
 - ・衣畑智秀 (福岡大学 / ワシントン大学)

「文タイプとの呼応からみた係り結びの衰退」
 - ・近藤泰弘 (青山学院大学)

「古典語の係り結びと情報構造」
 - ・勝又隆 (福岡教育大学)

「古代日本語におけるソ (ゾ) による係り結びの焦点範囲について」
 - ・ディスカッション

司会：竹内史郎 (成城大学)

コメンテータ：小田勝 (國學院大學), ジョン・ホイットマン (コーネル大学)

2020 年 9 月 20 日

・格

- ・ 2 日目の説明, 開催方法の説明
- ・ 下地理則 (国立国語研究所 / 九州大学)
「有標主格性と情報構造」
- ・ 小西いずみ (東京大学)
「富山県朝日町笹川方言の人称代名詞: 総合的な形態の主格に着目して」
- ・ 白岩広行 (立正大学)
「福島県北部方言における文の情報構造とイントネーション」
- ・ 竹内史郎 (成城大学)
「中世末期中央語の主語標示とガの機能の歴史的変化」
- ・ 坂井美日 (鹿児島大学)
「近世近代における上方語の格標示について」
- ・ 中川奈津子 (国立国語研究所)
「関西方言の格配列: 有標性と頻度の観点から」
- ・ ディスカッション
司会: 木部暢子 (国立国語研究所)
コメンテータ: 金水敏 (大阪大学), 佐々木冠 (立命館大学)

移動動詞公開研究会 [2020.9.27, オンライン]

- ・ 鈴木唯 (東京大学)
「トルコ語における移動表現」
- ・ 諸隈夕子 (国立国語研究所 / 東京大学)
「ケチュア語アヤクーチョ方言における移動表現」
- ・ 谷川みずき (東京大学) 高橋亮介 (上智大学) 松本曜 (国立国語研究所)
“Motion event descriptions in Germanic languages: A comparative experimental study”

第一回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (後期) [2020.10.9, オンライン]

- ・ Clemens POPPE (早稲田大学)
“Morphology and Accent in Japanese and Korean”

第二回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (後期) [2020.10.16, オンライン]

- ・ 広瀬友紀 (東京大学)
「韻律情報は 2 度解釈されない: 子どもが捉える韻律情報の曖昧性」

第三回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (後期) [2020.10.23, オンライン]

- ・ 米田信子 (大阪大学)
「ヘレロ語 (Bantu R31) における名詞の声調体系」

第四回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (後期) [2020.10.30, オンライン]

- ・ 松浦年男 (北星学園大学)
「九州諸方言の与格助詞に見られる音韻交替」

第五回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (後期) [2020.11.6, オンライン]

- ・ 佐藤久美子 (国立国語研究所)
「茨城県高萩市方言における不定語を含む文の音調特徴」

第六回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（後期） [2020.11.13, オンライン]

- ・山田高明 (一橋大学)
「熊本県八代市坂本町方言のアクセント単位拡張現象について」

フレーム意味論プロジェクト研究発表会 [2020.11.15, オンライン]

- ・「フレームに基づく類義語・多義語の分析」
 - ・舩山洋介 (南山大学)
 - 「フレームに基づく類義語・多義語の分析 I」
 - 「フレームに基づく類義語・多義語の分析 II」
- ・質疑応答

(オンライン) シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！ —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方— [2020.11.21, オンライン]

- ・趣旨説明：宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)
- ・第一部：自然会話とプロフィシェンシーを考える
 - ・特別講演
鎌田修 (元南山大学 教授)
「自然発話とプロフィシェンシー：「文脈の文型化」と「文型の文脈化」に絡めて」
 - ・宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)
「『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』の特徴と活用方法 —「フォルダの意味」と「会話データ情報一覧シート」を中心に—」
- ・第二部：『BTSJ 日本語自然会話コーパス』を用いた研究と日本語教育
 - ・講演 1
甲田直美 (東北大学 教授)
「談話標識の出現傾向からみた会話の特性 —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』から—」
 - ・講演 2
西郷英樹 (関西外国語大学 准教授)
「「しかもさー、おれ今、金、徴収してんじゃん」 —親しい友人同士の雑談での共通基盤構築に関して—」
 - ・鈴木英子 (一橋大学 大学院学生), 石黒圭 (国立国語研究所 教授)
「雑談に出現する「やはり」の使用実態 —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の調査から—」
 - ・井伊菜穂子 (一橋大学 大学院学生), 石黒圭 (国立国語研究所 教授)
「上級日本語学習者の接続詞「でも」の使用実態と困難点」
 - ・宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授), 張未未 (早稲田大学 大学院学生)
「雑談における「なんか」の使用実態 —日本語母語話者と学習者による使用の違いを中心に—」
- ・全体ディスカッション
 - ・司会：宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)
 - ・登壇者：鎌田修, 甲田直美, 西郷英樹, 石黒圭, 鈴木英子, 井伊菜穂子, 張未未
- ・閉会の辞：石黒圭 (国立国語研究所 教授)

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」研究発表会 [2020.11.22, オンライン]

- ・ワークショップ：危機方言のプロソディー (企画・司会：窪蘭晴夫)
 - ・発表 1
松浦年男 (北星学園大学)
「天草市本渡方言における呼びかけのイントネーション」
 - ・発表 2
白田理人 (志學館大学)
「喜界島方言における動詞のアクセント単位の拡張と真偽疑問文末のプロソディー」

・発表3

五十嵐陽介 (国立国語研究所)

「南琉球宮古語伊良部佐和田方言のアクセント体系の初期報告」

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」オンライン研究発表会 [2020.11.27, オンライン]

・発表1

・世良時子 (成蹊大学 国際教育センター)

「関係節の主名詞のタイプ—NPCMJ による量的調査—」

・発表2

・Vance Gwidt (弘前大学大学院 人文社会科学研究科)

“Creating a Parsed Corpus of the Tsugaru Dialect”

第七回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (後期) [2020.11.27, オンライン]

・田中真一 (神戸大学)

「日本語におけるテキストセッティングと音韻構造」

第八回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (後期) [2020.12.4, オンライン]

・那須昭夫 (筑波大学)

「式保存型の接尾辞と音調中和」

フィールド言語学ウェビナー [2020.12.5-6, オンライン]

2020 年 12 月 5 日

・開会の挨拶: 木部暢子 (国立国語研究所 教授)

・1 限目「言語学的調査とラポール」

講師: 安達真弓 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助教)

・ラポールとは

・講師の調査経験談

・グループディスカッション

・2 限目「フィールド言語調査における面接型調査の設計・実践・評価」

講師: 下地理則 (九州大学 准教授 / 国立国語研究所 客員研究員)

・活用とは

・分析の手続き

・構造体の洗い出し

・形態素境界と語境界

・屈折パラダイム

・全体質疑

2020 年 12 月 6 日

・3 限目「アクセントの現地調査とその後の分析」

講師: 五十嵐陽介 (国立国語研究所 教授)

・調査票

・発話の誘発法

・調査フレーム

・音響分析の方法

・4 限目「フィールドワークで集めたデータをアーカイブする」

講師: 倉部慶太 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助教)

・アーカイビングとは

- ・アーカイビングと言語ドキュメンテーション
- ・アーカイビングとデジタルアーカイブ
- ・これからのアーカイビング
- ・全体質疑
- ・閉会の挨拶：塩原朝子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授）

第九回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（後期） [2020.12.11, オンライン]

- ・ホワン ヒョンギョン（筑波大学），平山真奈美（成蹊大学），加藤孝臣（上智大学）
“Production and Perception of Japanese Downstep”

第十回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（後期） [2020.12.17, オンライン]

- ・田嶋圭一（法政大学），北原真冬（上智大学），米山聖子（大東文化大学）
「日本人英語学習者の弱化母音の実現について：予備的コーパス調査」

「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班近世グループオンライン研究発表会
[2020.12.27, オンライン]

- ・研究発表
 - ・村山実和子（福岡女子短期大学）
「歴史コーパスに見る形容詞の接続」
 - ・市村太郎（常葉大学）
「Himawari 版古今集遠鏡コーパスの構築—版本に基づく再構造化の試み—」

第十一回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（後期） [2021.1.8, オンライン]

- ・松井理直（大阪保健医療大学）
「日本語拗音の時間的性質に関する予備的調査」

第十二回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（後期） [2021.1.15, オンライン]

- ・菅原真理子（同志社大学）
「英語完全母音のプロミネンスレベルと音響特性：予備的結果報告」

「発達障害児の聞き取りの困難さの要因を探る実証研究」研究発表会 [2021.1.23, オンライン]

- ・藤野博（東京学芸大学 教職大学院）
「自閉スペクトラム症の児童の認知特性と言語の選好性」
- ・松井智子，内田真理子（東京学芸大学 国際教育センター）
「音韻カテゴリ知覚が文構造理解に及ぼす影響について」
- ・三浦優生（愛媛大学 教育・学生支援機構）
「児童における不確定性を表す発話の特徴」
- ・池田一成（東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター）
「自閉症スペクトラム傾向者の感覚傾向とミスマッチ陰性電位」

九大下地ゼミ × 青井隼人 学術スキル WS [2021.2.11-12, オンライン]

2021 年 2 月 11 日

- ・下地理則
「戦略的な研究計画の立て方」
- ・青井隼人
「研究の位置づけを俯瞰する」
- ・青井隼人
「問いの立て方①思考からリサーチクエスションへ」

- ・下地理則
「問いの立て方②意味のある先行研究レビューの仕方」

2021年2月12日

- ・下地理則, 青井隼人, 倉部慶太 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
「良い研究発表は、どこが良いのか？」
- ・受講生の5分トークのレビュー (WS)
- ・トークの改善点のディスカッション (WS)
- ・青井隼人
「研究発表における「質疑」を考える」

第5回「通時コーパス」国語教育活用ワークショップ (オンライン) [2021.2.23, オンライン]

- ・小木曾智信, 服部紀子 (国立国語研究所)
「通時コーパス概要説明」
- ・杉山俊一郎 (信州大学)
「CHJ・「中納言」ワークショップ」
- ・河内昭浩 (群馬大学)
「CHJ 簡易検索システム「ことねり」について」

「北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」研究発表会 [2021.2.24, オンライン]

- ・宮崎早季 (国立国語研究所 / 一橋大学大学院)
「1989～1998年『追憶の日』イベントに見るハワイ日系社会の戦時記憶の想起と忘却」

「北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築—」研究発表会 [2021.3.3, オンライン]

- ・朝日祥之 (国立国語研究所)
「引用形式「ト」ゼロマーク化とハワイ日本語方言形成：日系一世による自然談話資料を用いて」

シンポジウム「日常会話コーパス」VI [2021.3.4, オンライン]

- ・小磯花絵 (国立国語研究所)
「プロジェクトの進捗報告」
- ・柏野和佳子 (国立国語研究所)
「『日本語日常会話コーパス』で見直す言葉の用法—『岩波国語辞典』第八版でこう改訂した—」
- ・伝康晴 (千葉大学)
「『日本語日常会話コーパス』だからできること：独り言とスマホいじりの分析」
- ・河野礼実 (山梨学院大学)
「『日本語日常会話コーパス』における自称使用」
- ・居關友里子 (国立国語研究所)
「『日本語日常会話コーパス』における談話行為タグの利用可能性」
- ・丸山岳彦 (専修大学)
「『昭和話し言葉コーパス』の構築(4)：メタデータの設計とデータの公開」
- ・田嶋明日香 (お茶の水女子大学), 星野祐子 (十文字学園女子大学), 高崎みどり (文教大学)
「『日本語日常会話コーパス』を利用した指示語の用法の識別」
- ・高田三枝子 (愛知学院大学)
「『昭和話し言葉コーパス』における用言のアクセント」

オンライン・シンポジウム「ことば・認知・インタラクション9」[2021.3.6, オンライン]

- 開会挨拶
- 講演 1
 - ▶ 森本郁代 (関西学院大学)
「接客場面における店員間のチームワーク：リクルートメントの観点から」
- 招待講演 1
 - ▶ 田中博子 (元エセックス大学)
「物語りににおける「が」の働き：会話分析からの考察」
- 講演 2
 - ▶ 名塩征史 (広島大学)
「長唄三味線の稽古中に師匠が用いる「ね」発話の様相」
- 招待講演 2
 - ▶ 木村大治 (京都大学 名誉教授)
「数学と身体性」
- 総合討論

第16回音韻論フェスタ [2021.3.8-9, オンライン]

2021 年 3 月 8 日

- Session 1
Chair: 本間猛 (東京都立大学) [Takeru Honma (Tokyo Metropolitan University)]
 - ▶ Conan Chi and Shohei Yoshida (Yokohama National University)
“Pre-antepenultimate stress in Cairene Arabic: The tunnel vision of phonologists for six decades”
 - ▶ 渡部直也 (東京大学) [Naoya Watabe (University of Tokyo)]
「専門家アクセントの一考察：語の使用頻度と忠実性」 “Accent in Professional Speech: Word Frequency and Faithfulness”
- Session 2
Chair: 桑本裕二 (公立鳥取環境大学) [Yuji Kuwamoto (Tottori University of Environmental Studies)]
 - ▶ Clemens Poppe (Waseda University)
“Pitch accent and suffix shape in Kyengsang Korean”
 - ▶ Shen Hong (Kobe City University of Foreign Studies) and Seunghun J. Lee (International Christian University, IIT Guwahati)
“The internal structure of prosodic words and tone sandhi Nuosu Yi”
- Session 3 (Special Session on ‘Japanese and Korean Phonology’)
Chair: 窪蘭晴夫 (国立国語研究所) [Haruo Kubozono (NINJAL)]
 - ▶ Haruo Kubozono (NINJAL)
“On the distinctive phonetic feature of word prosody in Kagoshima Japanese”
 - ▶ Mira Oh (Chonnam National University) and Hijo Kang (Chosun University)
“A cross-linguistic study of long-distance effects on the VOT variation of stops: Korean and English”
 - ▶ Seunghun J. Lee (International Christian University, University of Venda) and Woonho Choi (Mokpo National University)
“A quantitative study of the syntax-prosody interface in two varieties of Korean”
 - ▶ Jongho Jun, Hanyoung Byun, Seon Park, and Yoona Yee (Seoul National University)
“How tight is the link between alternations and phonotactics in Korean?”

2021 年 3 月 9 日

- Session 4

Chair: 岡崎正男 (茨城大学) [Masao Okazaki (Ibaraki University)]

- ・マルコ フォンセカ (イリノイ大学) [Marco Fonseca (University of Illinois at Urbana-Champaign)]
「日本語における音変異: ニューラルネットワークのモデル化」 “Modeling Japanese sound variation through neural networks”
- ・王可心, 林良子 (神戸大学) [Wang Kexin and Ryoko Hayashi (Kobe University)]
「丁寧な発話様式と発話意図に関する音声的特徴: 日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較」 “Vocal characteristics of Japanese polite speech: A comparison between Japanese native speakers and Chinese learners”
- ・Seiji Watanabe (Akita International University)
“How to Tame Technology for Teaching Pronunciation”

• Session 5

Chair: 田中伸一 (東京大学) [Shin-ichi Tanaka (University of Tokyo)]

- ・白田理人 (志學館大学) [Rihito Shirata (Shigakukan University)]
「喜界島小野津方言の活用語のアクセント体系: 長い動詞/形容詞の語幹と名詞との類似性」 “Accentual system of inflected words in the Onotsu dialect of Kikai Ryukyuan: The similarity between long verbal/adjectival stems and nouns”
- ・那須昭夫, 今田水穂, 文昶允, 田川拓海 (筑波大学) [Akio Nasu, Mizuho Imada, Changyun Moon, and Takumi Tagawa (University of Tsukuba)]
「接尾辞「-方」の音調変異にみる語長と母方言の影響」 “Influence of word length and dialectal accent rules on the tonal variation of the suffix “-kata””

• Session 6

Chair: 植田尚樹 (京都大学) [Naoki Ueta (Kyoto University)]

- ・深谷倫子 (同志社大学) [Noriko Fukaya (Doshisha University)]
「英語他動詞の前核ピッチアクセント分布: 産出実験とコーパス研究」 “The distribution of prenuclear pitch accent on transitive verbs in English: Production and corpus studies”
- ・Michelle van Bokhorst (University of Tokyo)
“Learning Japanese pitch accent: A comparative study of the interlanguages of learners from different language backgrounds”

**「北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」
研究発表会 [2021.3.10, オンライン]**

- ・松平けあき (国立国語研究所 / 上智大学)
「二世兵士と沖縄をめぐる記憶の再考」

「通時コーパス」シンポジウム 2021 (オンライン) [2021.3.13, オンライン]

• 口頭発表 I

- ・小木曾智信 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス』 ver.2021.3 通時コーパス構築進捗報告」
 - ・呉寧真 (国立国語研究所)
「中古語複合動詞の客体敬語の形」
 - ・小池俊希 (東京大学)
「「X モ Y ニ」における助詞モの機能」
- ポスター発表
- ・間淵洋子 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス 奈良時代編 III 祝詞』の形態論情報・原文情報整備」

- ・片山久留美, 吳寧真 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編 III 軍記』の進捗と展望」
- ・萩原義雄 (駒澤大学)
「室町時代古辞書広本『節用集』語および語注記内容の周圏—あざる【回島・求食】—」
- ・竹内綾乃 (国立国語研究所)
「源氏物語の自由間接話法にみる言語的ユニバーサリティ」
- ・大西拓一郎 (国立国語研究所)
「「コンタミネーション」をめぐって」
- ・星川陸 (明治大学)
「語種と意味分野から見る近現代日本語形容詞の変遷」
- ・松崎安子 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 IV 随筆・紀行』 Ver.0.4 (芭蕉の紀行文) の公開と活用に向けて」
- ・近藤明日子 (国立国語研究所)
「明治・大正期の文語文の文体分析」
- ・吉田あいり (早稲田大学)
「古文疑似データの生成による古文現代語機械翻訳の改良」
- ・黄秀智 (明治大学)
「日本語と韓国語における外来語の受容による語彙の変化—「カード」の意味・用法の分析を通して—」
- ・高橋雄太 (国立国語研究所)
「『日本語歴史コーパス 明治・大正編 IV 近代小説』の構築と公開」
- ・口頭発表 II
 - ・永澤済 (名古屋大学)
「利用者からみる通時コーパス資料—離縁・離婚の他動詞用法を例に」
 - ・鈴木理紗 (東京大学), 川上玲 (東京工業大学/デンソーアイティラボラトリ), カラーヌワット タリン (ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所), 北本朝展 (ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センター/国立情報学研究所), 中澤敏明 (東京大学), 苗村健 (東京大学)
「Bi-LSTM を用いた中古日本語の文境界推定」
 - ・新野直哉 (国立国語研究所)
「昭和 20 年代前期『文藝春秋』の言語記事から—「雑誌記事データベース」活用の一例として」

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」オンライン研究発表会

[2021.3.14, オンライン]

- ・あいさつ
- ・研究発表
 - ・横山晶子 (日本学術振興会特別研究員/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
「北琉球沖永良部国頭方言の焦点標識」
 - ・ハイス・ファン＝デル＝ルベ (日本学術振興会外国人特別研究員/沖縄国際大学)
「北琉球硫黄島方言の埋め込み疑問文」
 - ・仲原穰 (琉球大学)
「久米島具志川方言の格ととりたて〈素描〉」
 - ・セリック・ケナン・チボ (国立国語研究所)
「多良間方言の韻律構造：韻律語の再定義の試み」
- ・ディスカッション

シンポジウム「字体資料共有の現在と未来」(オンライン) [2021.3.20, オンライン]

- ・第1部: 研究集会「字体資料共有の現在と未来」
 - ・開会挨拶
 - ・報告1
守岡知彦(京都大学)
「漢字字体規範史データセットにおける版管理」
 - ・報告2
永崎研宣(人文情報学研究所)
「IIIF 対応画像と文字資料の切り出し」
 - ・報告3
高田智和(国立国語研究所)
「普濟寺版の漢字字体」
 - ・報告4
畑野吉則(奈良文化財研究所)
「史的文字データベース連携検索システム—相互運用可能な文字画像データのポータルサイトの構築—」
 - ・報告5
間淵洋子(国立国語研究所)
「「国語研変体仮名字形データベース」の機能拡張と応用」
 - ・報告6
李媛(北海道大学)
「GlyphWiki と観智院本類聚名義抄の字形記述」
 - ・特別講演
上地宏一(大東文化大学)
「グリフウィキを総覧する」
- ・第2部: 漢字字体規範史データセット保存会総会

「多文化共生社会における日本語の言語的障壁の低減に関する研究」公開シンポジウム [2021.3.24, オンライン]

- ・プロジェクトの趣旨説明: 庵功雄(一橋大学)
- ・三枝令子(専修大学)
「外国人介護者にとっての日本語の問題点」
- ・庵功雄(一橋大学)
「介護のことばに対する「やさしい日本語」からのアプローチ」
- ・中島明則(フリー)
「介護記録作成支援エディター(仮称)のデモンストレーション」
- ・質疑応答

第4回会話・談話研究シンポジウム『「BTSJ 日本語自然会話コーパス」と『自然会話を素材とする共同構築型WEB教材NCRB』の展開」 [2021.3.27, オンライン]

- ・趣旨説明: 宇佐美まゆみ(国立国語研究所 教授)
- ・第1部: 『BTSJ 日本語自然会話コーパス(2021年3月版)』の紹介
 - ・宇佐美まゆみ(国立国語研究所 教授)
「『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の開発の趣旨と特徴—NCRB との連携—」
 - ・張未未, 高山春花(国立国語研究所 共同研究員)
「『BTSJ 日本語自然会話コーパス(2021年3月版)』の特徴と活用方法」

- 第2部:「自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)」の紹介
 - ▶ 宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)
 - 「自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)」構築の趣旨」
 - ▶ 小川都 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
 - デモンストレーション
 - 「自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB)」の使い方」
- 第3部: 講演
 - ▶ 王伸子 (専修大学 教授)
 - 「自然会話を素材とする教材 (NCRB) の意義—音声教育の観点から」
 - ▶ 西郷英樹 (関西外国語大学 准教授)
 - 「自然会話を素材とする教材 (NCRB) の意義—談話教育の観点から」
- 全体ディスカッションと質疑応答
 - ▶ コーディネーター
 - 宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)
 - ▶ 発表者
 - 王伸子 (専修大学 教授)
 - 西郷英樹 (関西外国語大学 准教授)
 - 小川都 (国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員)
 - 張未未, 高山春花 (国立国語研究所 共同研究員)
- 閉会の辞: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)

AA 地理言語 2020 年度第2回研究会 [2021.3.28-29, オンライン]

2021 年 3 月 28 日

- 1st Session (Chair: FUKUSHIMA Chitsuko (ILCAA Joint Researcher / University of Niigata Prefecture))
 - ▶ SHIRAI Satoko (ILCAA Fellow)
 - “Theoretical Frameworks for Grammatical Relations in Asia and Africa”
 - ▶ KIBE Nobuko (NINJAL), NAKAZAWA Kohei (NINJAL), and YOKOYAMA Akiko (JSPS / ILCAA / Tokyo University of Foreign Studies)
 - “Grammatical Relations in Japonic”
 - ▶ FUKUI Rei (The University of Tokyo)
 - “Grammatical Relations in Korean”
 - ▶ Discussion: All participants
- 2nd Session (Chair: NAKAZAWA Kohei (NINJAL))
 - ▶ MATSUMOTO Ryo (ILCAA Joint Researcher / Kansai University of International Studies)
 - “Grammatical Relations in Tungusic and Uralic”
 - ▶ SAITO Yoshio (Takushoku University)
 - “Grammatical Relations in Mongolic and Turkic”
 - ▶ SHIRAI Satoko (ILCAA Fellow), EBIHARA Shiho (ILCAA Fellow), IWASA Kazue (ILCAA Joint Researcher / Nagoya University of Foreign Studies), KURABE Keita (ILCAA), and SUZUKI Hiroyuki (ILCAA Joint Researcher / Fudan University)
 - “Grammatical Relations in Tibeto-Burman”
 - ▶ Discussion: All participants
- 3rd Session (Chair: EBIHARA Shiho (ILCAA Fellow))
 - ▶ YAGI Kenji (Kokushikan University) and SUZUKI Fumiki (ILCAA Joint Researcher / Nanzan University)
 - “Grammatical Relations in Sinitic”

- ENDO Mitsuaki (ILCAA Joint Researcher / Aoyama Gakuin University)
“Grammatical Relations in Kra-Dai”
- TAGUCHI Yoshihisa (Chiba University)
“Grammatical Relations in Hmong-Mien”
- UTSUMI Atsuko (Meisei University)
“Grammatical Relations in Austronesian”
- Discussion: All participants

2021 年 3 月 29 日

- 4th Session (Chair: YOSHIOKA Noboru (ILCAA Joint Researcher / National Museum of Ethnology))
 - MINEGISHI Makoto (ILCAA) and SHIMIZU Masaaki (ILCAA Joint Researcher / Osaka University)
“Grammatical Relations in Austroasiatic”
 - ONO Chikako (ILCAA Joint Researcher / Hokkai-Gakuen University)
“Grammatical Relations in Chukotko-Kamchatkan”
 - FUKAZAWA Mika (ILCAA Joint Researcher / National Ainu Museum)
“Grammatical Relations in Ainu”
 - Discussion: All participants
- 5th Session (Chair: ONO Chikako (ILCAA Joint Researcher / Hokkai-Gakuen University))
 - YOSHIOKA Noboru (ILCAA Joint Researcher / National Museum of Ethnology)
“Grammatical Relations in South Asia”
 - KODAMA Nozomi (ILCAA Joint Researcher / Kumamoto University)
“Grammatical Relations in Dravidian”
 - IWASAKI Takamasa (ILCAA Joint Researcher / JSPS / Kyoto University)
“Grammatical Relations in Iranian”
 - Discussion: All participants
- 6th Session (Chair: KIMURA Kimihiko (ILCAA Joint Researcher / Tokyo University of Foreign Studies))
 - NAGATO Youichi (ILCAA Joint Researcher / Tokyo University of Foreign Studies)
“Grammatical Relations in Semitic”
 - NAKAO Shuichiro (ILCAA Joint Researcher / Osaka University)
“Grammatical Relations in Nilo-Saharan”
 - Discussion: All participants
- 7th Session (Chair: NAKAO Shuichiro (ILCAA Joint Researcher / Osaka University))
 - SHINAGAWA Daisuke (ILCAA) and KOMORI Junko (ILCAA Joint Researcher / Osaka University)
“Grammatical Relations in Niger-Congo”
 - KIMURA Kimihiko (ILCAA Joint Researcher / Tokyo University of Foreign Studies) and NAKAGAWA Hiroshi (ILCAA Joint Researcher / Tokyo University of Foreign Studies)
“Grammatical Relations in the Kalahari Basin Area”
 - Discussion: All participants
- 8th Session (Chair: ENDO Mitsuaki (ILCAA Joint Researcher / Aoyama Gakuin University))
 - SUZUKI Hiroyuki (ILCAA Joint Researcher / Fudan University)
“Stop Series in Asian and African Languages”
 - KOGANEBUCHI Kae (The University of Tokyo)
“Population Genomic Insights into the Ryukyu Islanders”
 - Mahjoub ZIRAK (Research Center for Cultural Heritage and Tourism, Iran)
“A Geographical Distribution of Initial Consonant Clusters in Kurdish Dialects of Iran”
 - Discussion: All participants

(4) NINJAL コロキウム

日本語学・言語学・日本語教育の様々な分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会をNINJAL コロキウムとしておこなっている。原則として月1回、国立国語研究所にて開催し、研究者・大学院学生のみならず、一般にも公開している。2020年度は、感染症拡大の影響から、すべてオンラインで3回開催した。

- ・第113回(2020年10月13日)
 - ・中川裕(東京外国語大学 教授) ほか
 - 「言語音の外延のより良い理解のために：カラハリ言語帯音韻類型論」
- ・第114回(2021年3月2日)
 - ・投野由紀夫(東京外国語大学 教授)
 - 「コーパスとCEFRを融合した外国語教育用言語資源の構築」
- ・第115回(2021年3月23日)
 - ・Ian WILSON(会津大学 教授)
 - “Articulatory Settings: An Overview and Some Japanese Data”

(5) NINJAL サロン

国立国語研究所の研究者(共同研究員を含む)を中心として、おのおのの研究内容を紹介することによって、情報交換をおこなう場である。外部からの聴講も歓迎している。2020年度は、第204回から第221回まで、すべてオンラインで18回開催した。

- ・第204回(2020年4月7日)
 - ・増田恭子(外来研究員/ジョージア工科大学 Associate Professor)
 - “Characterizing Difficult Aspect Items through a Usage-based Approach in Japanese-as-second-language”
 - (発表は日本語でおこなう。)
- ・第205回(2020年4月14日)
 - ・白田泰如(音声言語研究領域 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「評価をほのめかす引用：日本語会話における引用標識「みたいな」の分析」
- ・第206回(2020年4月21日)
 - ・中澤光平(言語変異研究領域 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「与那国方言の音韻変化と形態変化」
- ・第207回(2020年4月28日)
 - ・セリック・ケナン・チボ(言語変異研究領域 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「南琉球多良間仲筋方言と水納島方言の形容詞のアクセント体系」
- ・第208回(2020年5月12日)
 - ・柳原恵津子(言語変化研究領域 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「『金光明最勝王経』平安初期点に見る中古訓点語の一側面—通時的・共時的視野から—」
- ・第209回(2020年5月19日)
 - ・青井隼人(言語変異研究領域 特任助教)
 - 「オンライン研究会の発表とファシリテーション」
- ・第210回(2020年5月26日)
 - ・宇佐美まゆみ(日本語教育研究領域 教授), 張未未(国立国語研究所 共同研究員/早稲田大学大学院学生)
 - 「雑談における日本語学習者による不自然な終助詞「ね」、「よ」、「よね」—『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018年版』を用いて—」

- 第 211 回 (2020 年 7 月 7 日)
 - ・ 前川喜久雄 (音声言語研究領域 教授)
 - 「アクセント句頭における Fo 上昇の変異: 言語的要因とパラ言語的要因の交互作用としての音韻的制約」
- 第 212 回 (2020 年 7 月 21 日)
 - ・ 中川奈津子 (言語変異研究領域 特任助教), 籠宮隆之 (言語変異研究領域 特任助教), 山田真寛 (言語変異研究領域 准教授)
 - 「危機言語・方言フィールドデータのアーカイブ化に向けたメタデータの整理」
- 第 213 回 (2020 年 7 月 28 日)
 - ・ 守本真帆 (理論・対照研究領域 プロジェクト PD フェロー)
 - 「日本語ラ行音の調音動作: 多様性と類似性」
- 第 214 回 (2020 年 9 月 29 日)
 - ・ 横山詔一 (言語変化研究領域 教授), 前田忠彦 (統計数理研究所 准教授), 野山広 (日本語教育研究領域 准教授), 福永由佳 (日本語教育研究領域 研究員), 高田智和 (言語変化研究領域 准教授)
 - 「国語研と統数研の連携起点「日本人の読み書き能力 1948 年調査」の現代的意義」
- 第 215 回 (2020 年 10 月 27 日)
 - ・ 宮川創 (関西大学東西学術研究所 アジア・オープン・リサーチセンター ポスト・ドクトラル・フェロー)
 - 「文献資料および音声資料のデジタルアーカイブの構築」
- 第 216 回 (2020 年 11 月 10 日)
 - ・ 中澤光平 (言語変異研究領域 プロジェクト非常勤研究員), セリック・ケナン・チボ (言語変異研究領域 プロジェクト非常勤研究員), 麻生玲子 (言語変異研究領域 特任助教)
 - 「南琉球諸語における漢語の借用時期と音変化の相対年代」
- 第 217 回 (2021 年 1 月 12 日)
 - ・ セリック・ケナン・チボ (言語変異研究領域 プロジェクト非常勤研究員)
 - 「琉球宮古語多良間方言のアクセント体系は四型であって、三型ではない」
- 第 218 回 (2021 年 1 月 19 日)
 - ・ 横山詔一 (言語変化研究領域 教授), 前田忠彦 (統計数理研究所 准教授), 高田智和 (言語変化研究領域 准教授), 相澤正夫 (国立国語研究所 名誉教授), 野山広 (日本語教育研究領域 准教授), 福永由佳 (日本語教育研究領域 研究員), 朝日祥之 (言語変異研究領域 准教授)
 - 「日本人の読み書き能力 1948 年調査の非識字者率における生年の効果」
- 第 219 回 (2021 年 1 月 26 日)
 - ・ 野山広 (日本語教育研究領域 准教授), 本多由美子 (日本語教育研究領域 プロジェクト非常勤研究員), 横山詔一 (言語変化研究領域 教授), 前田忠彦 (統計数理研究所 准教授), 高田智和 (言語変化研究領域 准教授)
 - 「リテラシーの定義に関する考察と展望: 日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究に向けて」
- 第 220 回 (2021 年 2 月 2 日)
 - ・ 浅原正幸 (コーパス開発センター 教授)
 - 「クラウドソーシングによる大規模読み時間データ収集」
- 第 221 回 (2021 年 2 月 9 日)
 - ・ 朝日祥之 (言語変異研究領域 准教授)
 - 「自治体による多言語情報提供の実態と課題」

(6) 講習会・セミナー

国立国語研究所 日本語学講習会 [2020.10.17, 18, 11.28, 29, オンライン]

2020 年 10 月 17 日

- ・ 野田尚史 (国立国語研究所 (日本語教育研究領域) 教授)
 - 「読解における日本語の難しさ」

2020 年 10 月 18 日

- ・窪園晴夫 (国立国語研究所 (理論・対照研究領域) 教授)
「日本語の音声」

2020 年 11 月 28 日

- ・石黒圭 (国立国語研究所 (日本語教育研究領域) 教授)
「日本語の接続詞」

2020 年 11 月 29 日

- ・Prashant PARDESHI (国立国語研究所 (理論・対照研究領域) 教授)
「日本語の動詞と格助詞：インドの言語との対照の観点から」

2020 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外) [2020.11.15, オンライン]

- ・「日本語学習者は日本語の何が難しいのか？ —日本語学習者と日本語教師に対する調査から—」
 - ・講師：野田尚史 (国立国語研究所 (日本語教育研究領域) 教授)
 - 開会のあいさつ、事務連絡
 - 「日本語学習者は聴解で何が難しいのか？」
 - 「日本語学習者は配慮表現の何が難しいのか？」
 - 閉会のあいさつ、事務連絡

第 15 回 BTSJ 活用方法講習会 [2021.2.6, オンライン]

- ・第 15 回 BTSJ 活用方法講習会 (初心者向け)

第 16 回 BTSJ 活用方法講習会 [2021.2.6, オンライン]

- ・第 16 回 BTSJ 活用方法講習会 (既習者向け)

令和 2 年度国立国語研究所日本語教師セミナー (国内) [2021.2.27, オンライン]

- ・「対話システム研究と日本語教育」
 - ・宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)
「対話システムと日本語教育の関係とは？」 (趣旨説明に代えて)
 - ・東中竜一郎 (名古屋大学大学院情報学研究科 教授)
「対話システム研究の現状と日本語教育研究者・実践者に期待すること」
 - ・飯尾尊優 (筑波大学システム情報系 助教)
「日本語教育における対話ロボット活用の可能性について」
 - ・白井宏美 (FCL (次世代コミュニケーション研究所) 代表 / 慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員)
「日本語教育と対話システム構築の接点」
 - ・西川寛之 (明海大学外国語学部 准教授)
「AI の対話システムが日本語教育に応用できること, 日本語教育が貢献できること」
- ・休憩, 質問記入
- ・ディスカッション
- ・閉会のあいさつ: 宇佐美まゆみ (国立国語研究所 教授)

第 10 回コーパス利用講習会 [2021.3.4, オンライン]

- ・オンライン検索システム「中納言」講習会
 - ・講師：浅原正幸 (コーパス開発センター), 大村舞 (コーパス開発センター), 山崎誠 (言語変化研究領域), 柏野和佳 (音声言語研究領域)
 - ・内容
 - まとめて検索 KOTONOHA
『まとめて検索 KOTONOHA』を対象に, 『中納言』の操作方法, 検索結果の見方などを学ぶ。

- 『日本語日常会話コーパス』

『日本語日常会話コーパス』を対象に、『中納言』の操作方法、検索結果を使って、表やグラフを作成する方法などを学ぶ。

第11回コーパス利用講習会 [2021.3.5, オンライン]

- ・全文検索システム『ひまわり』講習会「既存のテキストを『ひまわり』で検索してみよう」
 - ・講師：山口昌也 (国立国語研究所)
 - ・概要：全文検索システム『ひまわり』は、言語研究用に開発された全文検索システムです。本講習会では、既存のテキストデータを『ひまわり』にインポートする方法を学びます。今回は、次のことを実習形式で行う予定です。
 - テキストデータを『ひまわり』にインポートする (青空文庫を予定)
 - インポートするテキストデータにアノテーションする (人手, および, 形態素解析システム MeCab による)
 - CSV 形式のテキストデータをインポートする (『日本語諸方言コーパス』 COJADAS を予定)

統語・意味解析コーパス (NPCMJ) チュートリアル [2021.3.13, オンライン]

- ・プラシャント・パルデシ, 鈴木彩香
 - 「NPCMJ コーパスの理念とデータの概要, および初心者向けインターフェース」
- ・吉本啓
 - 「タグおよびアノテーションの概要」
- ・Alastair BUTLER, 長崎郁
 - 「検索インターフェース (New NPCMJ-Search)」
- ・金城由美子
 - 「Tregex 検索式 1 (tag の記述)」
- ・長崎郁
 - 「Tregex 検索式 2 (tree の記述)」
- ・閉会の辞：プラシャント・パルデシ

7 センター・研究図書室の活動

(1) 研究情報発信センター

情報発信に関わる研究開発や、研究資料の収集・管理をおこなっている。各プロジェクトやコーパス開発センターと連携し、ウェブページや研究資料室を通して研究情報の公開を推進している。

- ・所蔵資料の配信システムや公開コンテンツについて研究発表を2件おこなった。また、所蔵する音声・映像資料をめぐり、所内の複数のプロジェクトと連携し、共同利用体制を強化した。
- ・「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、データ整備、登録、DOI 付与を継続して実施するとともに、Web 公開されている PDF のリポジトリ登録・DOI 付与を促し、アクセシビリティを高めた。また、オープンアクセス方針の下、IR 推進室と連携して情報を収集し、個人著作物の登録を推進した。追加470件、総件数2492件、ダウンロード回数は19.5万と昨年度比1.12倍であった。
- ・「日本語研究・日本語教育文献データベース」に新規データを2,767件追加した (全約273,500件)。大学学術機関リポジトリ及び学会誌掲載論文の本文 PDF へのリンクを新規に2,912件設置した (全31,583件)。また、韓国および台湾の現地学会・大学等の協力を得て、韓国及び台湾出版の文献情報の追加収録をおこなった。なお、直近5年間のアクセス数は、2016年度3.3万、2017年度4.0万、2018年度4.9万、2019年度8.1万、2020年度14万と増加傾向であった。
- ・「鶴岡調査データベース ver.4.0」において、語彙・文法項目の回答データの追加をおこない、公開した (2020年9月)。また、「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」の回答データを公開した (2020年12月)。

- ・資料群3件を新規に公開し、「研究資料室収蔵資料データベース」を更新し、新たに「研究課題一覧」(2021年3月)を追加し、検索性向上を図った。また、地図資料の専用保存箱を制作し、資料保全の劣化対策をおこなった。
- ・研究資料室収蔵の音源・映像資料について、1,344点の媒体変換(デジタル化)を進めた(カセットテープ691点、オープンリール録音585点、VHS等映像メディア68点)。また、所内専用試視聴システム「音声・映像データベース」にデジタル音源・映像を2,561点増補収録した(音声2,516点、映像45点)。さらに、研究資料室収蔵の調査票について、デジタル撮影をおこなった(29,082枚)。
- ・研究資料の共同利用体制を整備し、2020年度共同利用型研究(公募型)の採択課題(全13件中8件が研究資料室収蔵資料の活用研究)に対して研究資料を提供した。
- ・公開データベース23件のオープンデータ化を進め、ライセンス付与の基本方針を定め、原則CC BY 4.0での公開を実施した。
- ・『国立国語研究所論集』第19号(2020年7月)と第20号(2021年1月)をオンラインと冊子体の両形態で発行した。また、論文の関連データを投稿できるよう規程を改正した。
- ・2019年度に引き続き、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとして、オープンアクセスで4点追加公開した。

(2) コーパス開発センター

研究系と連携して言語資源の開発整備および基礎研究を進め、言語資源に関する共同利用の利便性を高めることを目的としている。具体的には、言語コーパスにくわえ、形態素解析用電子化辞書、コーパス検索ツールなどの研究開発を進めている。

- ・共同利用・共同研究について、以下を実施した。
 - ①コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文4本、国際会議発表9件。
 - ②「言語資源活用ワークショップ2020」を9月に開催(オンライン)。
 - ③形態素解析用辞書(UniDic)、係り受けツリーバンク(Universal Dependencies)、シソーラス(分類語彙表)を中心にした研究を共同研究者と推進。
 - ④所内のコーパス開発プロジェクトの支援を実施。
- ・コーパスの整備について、以下を実施した。
 - ①「少納言」「中納言」「梵天」および包括的検索系「KOTONoha」の開発維持管理を実施。
 - ②「中納言」上の『日本語日常会話コーパス(CEJC)』『日本語諸方言コーパス(COJADS)』『昭和話し言葉コーパス(SSC)』『日本語歴史コーパス(CHJ)』にそれぞれコンテンツを追加。
- ・コーパスの利用促進について、以下を実施した。
 - ①検索系の講習会を3回実施した。また、2020年「NDLデジタルライブラリーカフェ」に登壇した。
 - ②『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』の頒布を継続。
 - ③日本語語彙の分散表現データNWJC2vec・自然言語処理の事前学習モデルNWJC-BERTを2020年9月に言語資源協会より公開。
- ・他機関等との連携について、以下を実施した。
 - ①ワークスアプリケーションズ社、リクルート社、レトリバ社と共同研究を実施。
 - ②国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies に参画。
 - ③高エネルギー加速器研究機構の機構間連携プロジェクトに参画。
 - ④生理学研究所共同研究プロジェクトに参画。

(3) 研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

閲覧室には、新着コーナーを設け、新着雑誌・図書を利用しやすい環境を整えている。

カードキーによる入退室の管理および照明の人感センサーを整備し、所内教職員は夜間・休日にも利用可能である。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9時30分～17時(土曜日・日曜日・祝日・夏季休業・年末年始・毎月最終金曜日は休室)

- 主なコレクション：
 - 東条操文庫（方言）
 - 大田栄太郎文庫（方言）
 - 保科孝一文庫（言語問題）
 - 見坊豪紀文庫（辞書）
 - カナモジカイ文庫（文字・表記）
 - 藤村靖文庫（音声科学）
 - 林大文庫（国語学）
 - 興水実文庫（国語教育）
 - 中村通夫文庫（国語学）
- 「国立国語研究所蔵書目録データベース」をウェブ検索できる。
- 図書館間相互協力サービス（NACSIS-ILL）により，所属機関の図書館を通して複写物の取り寄せや図書の貸出を受けることができる。
- 所蔵資料数（2021年4月1日現在）

	図 書	雑 誌
日 本 語	126,446 冊	5,399 種
外 国 語	32,294 冊	528 種
計	158,740 冊	5,927 種

※ 視聴覚資料など 7,646 点を含む。



國際的研究協力

国立国語研究所全体の研究テーマである「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

1 世界の大学・研究機関との提携

世界各地の大学や研究機関等と、共同研究の促進や研究者の交流等を目的とした学術交流協定を締結している。協定先は、海外で日本語や日本語教育を研究している機関に加え、言語学や情報科学の研究機関にも及び、これらの協定により、日本語研究から世界の言語研究へ、世界の言語研究から日本語研究へ、という両方向の交流を強化し、世界規模で研究を促進することをめざしている。

協定締結先 (2021 年 3 月 31 日時点)

- ・中央研究院 (台湾) : 2014.3-
- ・北京外国語大学北京日本学研究所 (中国) : 2014.6-
- ・オックスフォード大学人文科学部 (イギリス) : 2015.7-
- ・ミシガン大学日本研究センター (アメリカ) : 2017.8-
- ・東呉大学日本語文学系 (台湾) : 2018.1-
- ・ハワイ大学マノア校 (アメリカ) : 2018.2-
- ・ティラク・マハラシュトラ大学日本語学科 (インド) : 2018.5-
- ・インド工科大学マドラス校人文社会科学部 (インド) : 2018.6-
- ・韓国日語教育学会 (韓国) : 2018.7-
- ・韓国日本語学会 (韓国) : 2018.7-
- ・ダッカ大学現代語研究所 (バングラデシュ) : 2018.9-
- ・ソウル大学人文学部 (韓国) : 2018.10-
- ・ケラニア大学日本学研究所 (スリランカ) : 2019.5-
- ・オーストラリア科学アカデミー・デジタル人文学センター (オーストラリア) : 2020.3-
- ・ヨーク大学言語学科 (イギリス) : 2020.6-

2 国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している (2020 年度開催のものは 44-50 ページに掲載)。

3 日本語研究英文ハンドブック

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton (ドゥ・グロイター・ムートン社: ベルリン/ボストン) からの申し出により、国立国語研究所の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を 2012 年 7 月に締結した。この協定に基づき、2014 年から、日本語および日本語言語学に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ (全 12 巻) を順次刊行している。

このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者 (専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員) だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集をおこなう大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによ

て言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良 (ライス大学教授) Masayoshi Shibatani (Professor, Rice University)

影山太郎 (国立国語研究所前所長・名誉教授) Taro Kageyama (Former Director-General and Professor Emeritus, NINJAL)

シリーズの構成 (全巻英文, 各巻 600–700 ページ)

Vol. 1: *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman

Vol. 2: *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (既刊, ISBN: 978-1-61451-198-4)

Edited by Haruo Kubozono

Vol. 3: *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (既刊, ISBN: 978-1-61451-209-7)

Edited by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto

Vol. 4: *Handbook of Japanese Syntax* (既刊, ISBN: 978-1-61451-661-3)

Edited by Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda

Vol. 5: *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-288-2)

Edited by Wesley Jacobsen and Yukinori Takubo

Vol. 6: *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-407-7)

Edited by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama

Vol. 7: *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 8: *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue, Mayumi Usami, and Yoshiyuki Asahi

Vol. 9: *Handbook of Japanese Psycholinguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-121-2)

Edited by Mineharu Nakayama

Vol. 10: *Handbook of Japanese Applied Linguistics* (既刊, ISBN: 978-1-61451-183-0)

Edited by Masahiko Minami

Vol. 11: *Handbook of the Ryukyuan Languages* (既刊, ISBN: 978-1-61451-115-1)

Edited by Nobuko Kibe and Tetsuo Nitta

Vol. 12: *Handbook of the Ainu Languages*

Edited by Anna Bugaeva

4

海外の研究者の招聘・受入

海外の研究者を専任や客員教員として招聘すると同時に、研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また、海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究をおこなう、外来研究員 (2020 年度海外機関からの受入 1 名) や特別共同利用研究員 (2020 年度海外機関からの受入 3 名) として受け入れている。

IV

社会連携と広報

1

地方自治体との連携

- 地方自治体と締結している交流協定
 - 宮崎県東臼杵郡椎葉村：2017.5–
 - 鹿児島県大島郡和泊町：2019.1–
 - 鹿児島県大島郡知名町：2019.1–
 - 鹿児島県薩摩川内市：2019.5–
- 地方自治体と共催・連携した催し物
 - 甕島方言講演会
2021年1月22日（オンライン開催）
対象：薩摩川内市立海星中学校・海陽中学校・里中学校
講師：窪蘭晴夫（理論・対照研究領域教授）
 - おきえらぶ文化ホール あしびの郷・ちな開館20周年記念事業町民創作方言劇「ヒーヌムの生まれた海」
2021年2月23日（おきえらぶ文化ホール あしびの郷・ちな）
主催：知名町教育委員会
共催：町民創作方言劇「ヒーヌムの生まれた海」実行委員会，
国立国語研究所「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクト，
人間文化研究機構「方言の記録と継承による地域文化の再構築」国語研ユニット

2

見学・研修・視察等

視察対応：1件（文科省学術機関課学術機関課長）

3

学会等の後援・共催

- 日本学術会議言語・文学委員会「人文学の国際化と日本語」分科会シンポジウム 人文学の国際化と日本語（2020.7.19）
主催者：日本学術会議言語・文学委員会「人文学の国際化と日本語」分科会
後援者：国立国語研究所，国文学研究資料館
開催地：オンライン
- 日本語教育能力検定試験（2020.10.25）
主催者：日本国際教育支援協会
後援者：文化庁，日本語教育学会，国立国語研究所，国際交流基金，日本語教育振興協会，国際日本語普及協会
開催地：各試験会場
- 第12回産業日本語研究会・シンポジウム（2021.3.5）
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），一般財団法人日本特許情報機構（Japio）
後援者：総務省，文部科学省，経済産業省，特許庁，国立国語研究所，情報通信研究機構，工業所有権情報・研修館，情報処理学会，人工知能学会，言語処理学会，日本経済団体連合会，日本知的財産協会，アジア太平洋機械翻訳協会，大学技術移転協議会，フジサンケイビジネスアイ
開催地：オンライン

(1) 刊行物

『国語研 ことばの波止場』(NINJAL Research Digest)

国立国語研究所の研究活動及び研究成果に関する情報を研究者コミュニティだけでなく、大学生から一般市民の方までが読んで楽しめる研究情報誌。2020年度は第8号、第9号を発行した。

・Vol. 8 (2020.9)

- ・特集：統語コーパスと学習者のコミュニケーション(「コーパスを使って日本語の文法的な振る舞いを知る「統語コーパス」プロジェクト」「学習者コーパスから見えてくる日本語学習者のコミュニケーションの姿」)
- ・コラム「住みはどこ？ 推しは誰？ ～自立する言葉たち～」
- ・クラウドファンディング報告「琉球諸語の絵本出版プロジェクト」
- ・研究者紹介、著書紹介

・Vol. 9 (2021.3)

- ・特集：研究者コミュニティに開かれた国語研(「日本語の不思議を科学する 日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」「新しい古典・言語文化の授業 古文教育に資する、コーパスを用いた教材の開発と学習指導法の研究」「学習者の「打つ」をサポートする「具体的な状況設定」から出発する日本語ライティング教材の開発」「広がる関西弁～国語研の調査データを使ってみよう～」「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」のデータ公開」)
- ・コラム「「ブレーキ踏んでた！」はなぜ運転手しか言えないのか～発話の権利～」
- ・研究者紹介、著書紹介

『国立国語研究所要覧 2020/2021』

発行：2020年5月

(2) Web 発信等

国立国語研究所ウェブサイト (<https://www.ninjal.ac.jp/>)

各種催し物、データベース等、国立国語研究所の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広いコンテンツを紹介。

国語研ポータルサイト『ことば研究館』(<https://kotobaken.jp/>)

ことばに関する一問一答式の記事『ことばの疑問』や、各種催し物、メディア掲載情報など、一般の方を対象に、ことば・日本語に関する様々なコンテンツをわかりやすく紹介。

国語研からのご案内(メールマガジン)

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、職員公募など国語研からお知らせしたい事項について登録者に発信。月1～2回発行。

国語研公式 Twitter (<https://twitter.com/kokugoken>)

各種催し物、各種データベース、公式サイトへの更新情報など、最新の情報を紹介。

国語研公式 Youtube チャンネル (<https://www.youtube.com/c/NINJAL-kokugoken>)

国語研の活動紹介や催し物、教材などの動画を配信。2020年度は以下の動画を新規公開した。

・言語学レクチャーシリーズ(試験版)

- ・Vol.1「音韻構造と文法・意味構造」(窪園晴夫)
- ・Vol.2「音声学入門」(前川喜久雄)
- ・Vol.3「日本語の接続詞—その用法の広がり—」(石黒圭)
- ・Vol.4「日本語の語順」(野田尚史)
- ・Vol.5「方言学概説—方言アクセントの多様性—」(木部暢子)
- ・Vol.6「ことばを数える—計量語彙論の世界—」(山崎誠)
- ・Vol.7「語の意味論」(松本曜)

- ・ Vol.8 「言語変化の統計理論入門」(横山詔一)
- ・ ニホンゴ探検 2020 (オンライン開催) ことばのミニ講義など全 9 本
- ・ オープンハウス (オンライン開催) 研究紹介など全 56 本
- ・ 『岩波国語辞典』 オノマトペカルタであそぼう！
- ・ 『日本語日常会話コーパス』 — 『中納言』 の操作
- ・ くとうばどう宝 ～消滅危機言語を守る人～

(3) 一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点から開催。

第 15 回「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま、何をしなければならないか—」[2021.2.27, オンライン開催]

- ・ 講演
 - ・ 木部暢子 (国立国語研究所)
 - 「日本各地の方言を守るために」
 - ・ 山田真寛 (国立国語研究所)
 - 「琉球のことばの継承保存」
 - ・ 倉部慶太 (東京外国語大学)
 - 「ミャンマーで失われつつある口承文芸を記録する」
 - ・ 呉人徳司 (東京外国語大学)
 - 「ロシアのシベリア地域で話されているチュクチ語の保存と継承」
- ・ ディスカッション [司会：青井隼人 (国立国語研究所 / 東京外国語大学)]

国立国語研究所オープンハウス 2020 [2020.9.10, オンライン公開]

所員がどのような研究をしているのかを専門外の方や学部・大学院の学生にわかりやすく伝えることを目的として開催。2020 年度は事前に用意したコンテンツをオンライン公開する方式で実施した。

プログラム

- ・ 国語研究所の紹介—生きた日本語と格闘する 日本語研究 70 年
- ・ 基幹プロジェクトの紹介
- ・ 研究の紹介

その他

- ・ 大学共同利用機関シンポジウム 2020 (出展) [2020.10.17, 18, オンライン開催]
オンライン展示およびライブ解説

(4) 児童・生徒向けイベント

NINJAL 職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問のたのしさや素晴らしさを知ってもらうためのプログラム。

- ・ 2020 年度受入校 (オンライン対応)
 - ・ 神奈川県立座間総合高等学校 (2021.1.29)

ニホンゴ探検 2020 [2020.8.19–21, オンライン公開]

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるイベント。2020 年度は事前に用意したコンテンツをオンライン公開する方式で実施した。

プログラム

- ことばのミニ講義 「「いまごろ」はもうひとつの「いま」をあらわす」(田窪行則)
- ことばのミニ講義 「方言のアクセントの違いはどうやって生まれた？」(木部暢子)
- 「めざせ！ 辞書引きの達人」(柏野和佳子)
- 「動画で楽しむ琉球のことばの絵本」(山田真寛)



大学院教育と若手研究者育成

1

連携大学院

一橋大学大学院言語社会研究科・東京外国語大学大学院総合国際学研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。また、2016年度から東京外国語大学大学院総合国際学研究科との連携大学院を開始した。これらの連携大学院において、国立国語研究所は日本語学やコーパス言語学等の分野を担当している。

2

特別共同利用研究員制度

国立国語研究所では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国立国語研究所の設備、文献等の利用や、国立国語研究所の研究者から研究指導を受けることができる制度である。

- ・2020年度受入：3名
 - ・ハワイ大学マノア校（アメリカ）
 - ・サンクトペテルスブルク大学（ロシア）
 - ・ボストンカレッジ（アメリカ）

3

NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国立国語研究所の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年数回、各地で実施している。2020年度はオンラインで5回開催した。

受講対象：原則として、大学院学生レベル

- ・大学院学生（修士課程または博士課程に在籍する者）
- ・修士課程または博士課程を修了後、原則として6年未満の者
- ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- ・大学院進学を目指す学部学生等
- ・第36回 [2020.9.5, 12, 19, 26]
 - 「カテゴリ文法入門」
 - 講師：窪田悠介（理論・対照研究領域・准教授）
- ・第37回 [2020.10.10-11（共催：韓国日語教育学会，韓国日本語学会）]
 - 「日本語学習者の作文の研究/コーパスを活用した日常会話の研究」
 - 講師：石黒圭（日本語教育研究領域・教授），小磯花絵（音声言語研究領域・教授）
- ・第38回 [2021.3.1]
 - 「『日本語歴史コーパス』活用入門―「中納言」の使い方―」
 - 講師：小木曾智信（言語変化研究領域・教授）
- ・第39回 [2021.2.20]
 - 「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」
 - 講師：宇佐美まゆみ（日本語教育研究領域・教授）

・第40回 [2021.3.7]

「コーパスを使った方言研究」

講師：木部暢子（言語変異研究領域・教授）

4

優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが、各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自らおこなうことで、研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクト PD フェロー）制度を設け、公募により積極的に採用している（2020年度在籍者は11ページを参照）。

VI

教員の研究活動と成果

田窪 行則 (たくぼ ゆきのり) 所長**【学位】** 博士 (文学) (京都大学, 2006)**【学歴】** 京都大学文学部言語学専攻卒業 (1975), 同修士課程修了 (1977)**【職歴】** 大韓民国東国大学校慶州分校日語日文科 招聘専任講師 (国際交流基金教員拡充プログラムによる) (1980), 神戸大学教養部専任講師 (日本語日本事情担当) (1982), 同 助教授 (1984), 九州大学文学部助教授 (言語学講座) (1991), 同 教授 (1996), 九州大学大学院人文科学研究院 教授 (大学院重点化に伴う措置) (2000), 京都大学大学院文学研究科 教授 (2000), 京都大学 名誉教授 (2016), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 所長 (2017)**【専門領域】** 理論言語学, 韓国語, 琉球諸語, 言語ドキュメンテーション, 危機言語**【所属学会】** 日本言語学会, 日本語学会, 日本語文法学会, 日本音声学会, 東アジア日本学会 (韓国), アメリカ言語学会**【学会等の役員・委員】** 言語学会 会長, 言語学会 評議員, 日本国際教育支援協会 理事, 東アジア日本学会 編集委員 日本語学会 評議員, 言語資源協会 理事, Associate Editor of Asian Languages and Linguistics**【受賞歴】**

1991: 認知科学会論文賞 (談話管理理論からみた日本語の指示詞)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学からみた日本語の音声と文法」：アドバイザーボードメンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「条件文と位相空間の相関—条件文が非単調推論になるメカニズムの解明」, 17K02699: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「可能世界を用いない様相表現の意味論的枠組みの構築—日本語様相表現を中心に」, 20K00586: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「終助詞に関する類型論的研究—日本語と韓国語を中心に—」, 19K00618: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」, 17H02332: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「言語使用と非言語的認知操作における空間指示枠の相関についての実験的研究」, 17H02333: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

Wesley M. Jacobsen and Yukinori Takubo (eds.)

Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics, De Gruyter Mouton, 2020.10.12.

《論文・ブックチャプター》

田窪行則

「方言を仮名で書く—琉球宮古語池間方言を例に」, 『ことばと文字』, 13 号, 102–110 頁, 2020.4.13.
 Masahiro Yamada, Yukinori Takubo, Shoichi Iwasaki, Celik Kenan, Soichiro Harada, Nobuko Kibe, Tyler Lau, Natsuko Nakagawa, Yuto Niinaga, Tomoyo Otsuki, Manami Sato, Rihito Shirata, Gijs van der Lubbe, and Akiko Yokoyama

“Experimental Study of Inter-language and Inter-generational Intelligibility: Methodology and Case Studies of Ryukyuan Languages.”, *Japanese/Korean Linguistics*, 26, pp. 249–260, 2020.7.

Yukinori Takubo

“Conditionals in Japanese”, Wesley M. Jacobsen and Yukinori Takubo (eds.) *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*, De Gruyter Mouton, pp. 451–493, 2020.10.12, DOI: 10.1515/9781614512073-009.

Yukinori Takubo

“Nominal deixis in Japanese”, Wesley M. Jacobsen and Yukinori Takubo (eds.) *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*, De Gruyter Mouton, pp. 687–732, 2020.10.12, DOI: 10.1515/9781614512073-015.

田窪行則

「日本語時間名詞の構造」, 嶋田珠巳, 鍛冶広真 (編) 『時間と言語』, くろしお出版, 40–58 頁, 2021.1.18.

【講演・口頭発表】

Yukinori Takubo

“Questioning epistemic necessity in Korean and Japanese”, 招待講演, the 2021 International Roundtable Forum of Asian Languages, Zhuhai (中国) and Online, 2021.3.20.

【研究調査】

- ・池間方言辞書オンライン調査 96 回.

【一般向けの講演・セミナーなど】

田窪行則

「「いまごろ」はもうひとつの「いま」をあらわす」, NINJAL ニホンゴ探検, 国立国語研究所 (オンライン), 2020.8.19.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NHK 放送研修センター 理事
- ・インタビュー記事: 「国語教育と日本語教育のこれから」, 『初等教育資料』 10 月号, 2020.10.15.
- ・The second editorial board meeting of Asian Languages and Linguistics and the 2021 International Roundtable Forum of Asian Languages (Zhuhai, China) Asian Languages and Linguistics (Online), 2021.3.20.

窪 蘭 晴 夫 (くぼぞの はるお) 研究系(理論・対照研究領域)教授, 領域代表, 副所長

【学位】 Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学, 1988)

【学歴】 大阪外国語大学外国語学部卒業 (1979), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了 (1981), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退 (1982), 英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了 (1986)

【職歴】 南山大学外国語学部 助手 (1982), 同 講師 (1984), 同 助教授 (1990), 大阪外国語大学外国語学部 助教授 (1992), カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員 (フルブライト若手研究員) (1994-1995), マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員 (1995), 神戸大学文学部 助教授 (1996), 同 教授 (2002), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授, 研究系長 (2010-2016), 同 研究系(理論・対照研究領域)教授, 領域代表, 副所長, 国際連携室長, IR 推進室長 (2016-), 東京大学 客員教授 (2017-2018), 人間文化研究機構評議員 (教育研究評議会委員) (2020-)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学学会, 日本音韻論学会, 日本語学会, 関西言語学会, 日本音響学会, Association for Laboratory Phonology

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 顧問・評議員, 日本音声学学会 理事・評議員, 日本学術会議 連携会員, 理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員, 東京言語研究所 運営委員長, Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series (OUP) Advisory Editor, International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS) Permanent Council Member, Association for Laboratory Phonology Editorial Board Member

【受賞歴】

2018: 2017 年度早稲田大学ティーチングアワード総長賞

2017: 国立国語研究所第 15 回特別所長賞

2015: 国立国語研究所第 10 回所長賞

2013: 国立国語研究所第 6 回所長賞

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

1997: 第 25 回金田一京助博士記念賞 (金田一賞)

1995: 市河三喜賞

1988: 名古屋大学英文学会 IVY Award

1985: イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「発達障害児の聞き取りの困難さの要因を探る実証研究」: コーディネーター

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A)「消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」, 19H00530: 研究代表者
- ・特別推進研究「アジアと欧米: コミュニケーションの文化差から言語の獲得過程を探る」, 20H05617: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

窪蘭晴夫, 野田尚史, プラシャント パルデシ, 松本曜 (編)

『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 2021.2.21.

窪蘭晴夫

『一般言語学から見た日本語のプロソディー 鹿児島方言を中心に』, くろしお出版, 2021.3.25.

《論文・ブックチャプター》

Haruo Kubozono

“Default word prosody and its effects on morphology”, Shoichi Iwasaki, Susan Strauss, Shin Fukuda, Sun-Ah Jun, Sung-Ock Sohn, and Kie Zuraw (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 26, CSLI Publications, pp. 19–31, 2020.8.

窪園晴夫

「年号の音韻構造」, 『日本語学』, 39 巻 4 号, 42–51 頁, 2020.12.10.

窪園晴夫

「日本語のアクセントと言語類型論」, 窪園晴夫, 野田尚史, プラシヤント パルデシ, 松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 2–21 頁, 2021.2.21.

Sun-Ah Jun and Haruo Kubozono

“Asian Pacific Rim”, Carlos Gussenhoven and Aojun Chen (eds.) *The Oxford Handbook of Language Prosody*, Oxford University Press, pp. 355–369, 2021.2.24.

《総説・解説など》

窪園晴夫

「一般言語学から見た『日本語学大辞典』」, 『日本語の研究』, 16 巻 1 号, 23–27 頁, 2020.4.1.

【講演・口頭発表】

窪園晴夫

「鹿児島方言のモーラ性」, 国語研対照言語学プロジェクト研究発表会, オンライン, 2020.6.5.

Haruo Kubozono

“From ‘Mora’ to ‘Syllable’: Diachronic Changes in Prosodic Organization in Japanese”, 招待講演, JK28 Satellite Workshop: Experimental Phonetics & Phonology, オンライン (韓国), 2020.12.28.

Haruo Kubozono

“On the distinctive phonetic feature of word prosody in Kagoshima Japanese”, 招待講演, Phonology Festa 2021, オンライン, 2021.3.8.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・対照言語学プロジェクト研究発表会 (主催: 対照言語学プロジェクト), オンライン, 2020.5.25–2021.1.15.
- ・日本言語学会第 161 回大会ワークショップ「危機方言のプロソディー」 (主催: 対照言語学プロジェクト), オンライン, 2020.11.22.
- ・Prosody and Grammar Festa 5 (主催: 対照言語学プロジェクト, 共催: 神戸大学人文学研究科), オンライン, 2021.2.20–21.
- ・Special Session ‘Japanese/Korean Phonology’ (主催: 対照言語学プロジェクト, 共催: ソウル大学人文学部), オンライン, 2021.3.8.
- ・Phonology Festa 2021 (主催: 関西音韻論研究会, 東京音韻論研究会, 共催: 対照言語学プロジェクト), オンライン, 2021.3.8.

【一般向けの講演・セミナーなど】

窪園晴夫

「日本語研究の国際化—国立国語研究所の取り組み—」, 国立国語研究所オープンハウス, オンライン, 2020.7.19.

窪園晴夫

「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」, 国立国語研究所オープンハウス, オンライン, 2020.7.19.

窪園晴夫

「日本語研究の国際化—国立国語研究所の取り組み—」, 日本学術会議分科会「人文学の国際化と日本語」公開シンポジウム, オンライン, 2020.7.19.

窪菌晴夫

「日本語と方言：甌島方言の大切さ」, 海星中学校海陽中学校合同方言講演会, オンライン, 2021.1.22.

窪菌晴夫

「日本語と方言：甌島方言の大切さ」, 里中学校方言講演会, オンライン, 2021.1.22.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「方言の大切さ 中学生が学ぶ」, 南日本新聞, 2021.2.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

窪菌晴夫

「日本語の音声」, NINJAL 日本語学講習会, オンライン, 2020.10.18.

《大学院非常勤講師（集中講義）》

- ・南山大学大学院人間文化研究科「音韻論概論」
- ・福岡大学大学院人文科学研究科「英語学特別講義 I」
- ・神戸大学大学院人文学研究科「日本語研究」

《博士論文審査委員》

- ・オランダ Utrecht 大学: 副査 (2020.9–2021.1)

《若手研究者の受入》

- ・特別共同利用研究員: 1 人 (ハワイ大学)
- ・特国立国語研究所 PD フェロー: 1 人

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

研究系(理論・対照研究領域)教授

【学位】博士(学術)(神戸大学, 2000)

【学歴】ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了(1993), 神戸大学大学院文化学研究科修了(2000)

【職歴】神戸大学文学部 講師(2005), 同 人文学研究科 講師(2007), 人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授(2009), 同 教授(2011), 同 研究系長(2014–2016), 同 研究系(理論・対照研究領域)教授, 研究情報発信センター長(2016.4–2018.3)

【専門領域】言語学, 言語類型論, 対照言語学

【所属学会】日本言語学会, 日本語文法学会, 関西言語学会

【学会等の役員・委員】日本言語学会 評議員(2016.4–2018.3)

【受賞歴】

2020: 国立国語研究所第21回所長賞

2020: 国立国語研究所第20回所長賞

2019: 国立国語研究所第19回所長賞

2018: 国立国語研究所第16回特別所長賞

2016: 国立国語研究所第12回特別所長賞

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

2007: 第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞(パルデシ・プラシャント, 桐生和幸, 石田英明, 小磯千尋(編)『日本語—マラーティー語基本動詞用法事典』, 2007. 財団法人博報児童教育振興会 2005年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書)

2000: The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to “*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*”, Sage Publications, New Delhi, Thousand Oaks, and London. (Paper title: “The Passive and Related Constructions in Marathi.”)

【2020年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: サブリーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: サブリーダー

【2020年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(C)「マルチメディアが外国語学習者のイメージ・スキーマ形成に及ぼす影響とメカニズム」, 18K02900: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

プラシャント・パルデシ, 堀江薫(編)

『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』, ひつじ書房, 2020.5.13.

窪園晴夫, 野田尚史, プラシャント パルデシ, 松本曜(編)

『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 2021.2.22.

Kageyama Taro, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.)

Verb-verb complexes in Asian Languages, Oxford University Press, 2021.2.

《論文・ブックチャプター》

Prashant Pardeshi

“A contrastive study of the vector verb “PUT/KEEP” in Marathi and Japanese”, Hiroyuki Miyashita, Yasuhiro Fujinawa, and Shin Tanaka (eds.) *Form, Struktur und Bedeutung: Festschrift für Akio*

Ogawa, pp. 31–44, Stauffenburg Verlag, 2020.5.1.

プラシャント・パルデシ, 柴谷方良

「マラーティー語の名詞修飾表現—体言化理論の観点から—」, プラシャント・パルデシ, 堀江薫 (編) 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』, ひつじ書房, 431–445 頁, 2020.5.13.

プラシャント・パルデシ

「日本語の有対動詞と言語類型論」, 窪蘭晴夫, 野田尚史, プラシャント・パルデシ, 松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 151–177 頁, 2021.2.

Prashant Pardeshi

“Classification of complex verbs and the evolution of the compound verb in Marathi”, Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-verb complexes in Asian Languages*, pp. 223–248, Oxford University Press, 2021.2.

《その他の出版物・記事》

プラシャント・パルデシ, 長崎郁

「コーパスを使って日本語の文法的な振る舞いを知る: 「統語コーパス」プロジェクト」, 『国語研 ことばの波止場』 第 8 号, 2020.9.

【講演・口頭発表】

プラシャント・パルデシ, 長崎郁

「世界諸語から見た日本語のコミュニケーション」, NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」ワークショップ「コミュニケーションの諸相」, オンライン, 2020.10.3.

吉本啓, アラスデア・バトラー, プラシャント・パルデシ

「日本語ツリーバンクからの動詞格フレームの抽出」, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.16.

竹内孔一, アラスデア・バトラー, 長崎郁, プラシャント・パルデシ

「NPCMJ への PropBank 形式の意味役割と概念フレームの付与の進捗報告」, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.18.

【研究調査】

- ・津軽方言における自他動詞対 (ネット会議ツールを利用した遠隔型調査).

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・日本語学講習会 (主催: 国立国語研究所, 共催: Centre for Japanese Studies (CJS), Jawaharlal Nehru University, Department of East Asian Studies, University of Delhi, Indo-Japanese Association, Department of Foreign Languages, Savitribai Phule Pune University, Department of Japanese Language, Tilak Maharashtra Vidyapeeth, Symbiosis Institute of Foreign and Indian Languages (SIFIL), Department of Asian Languages, The English and Foreign Languages University, 後援: The Japan Foundation), オンライン (インド), 2020.10.17, 10.18, 11.28, 11.29.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

プラシャント・パルデシ

「日本語の動詞と格助詞: インドの言語との対照の観点から」, 日本語学講習会, オンライン (インド), 2020.11.29.

Prashant Pardeshi, Meena Ashizawa, Jayashree Bhopatkar, Hari Damle, Manasi Shirgurkar, Bakul Vaidya, and Satomi Chida

「こうして私たちは『みんなの日本語初級 I・II 翻訳・文法解説マラーティー語版』を作った」, JLESA 特別フォーラム, オンライン, 2021.3.14.

松本 曜 (まつもと よう) 研究系(理論・対照研究領域) 教授

【学位】 Ph D (言語学) (米国スタンフォード大学, 1992)

【学歴】 上智大学外国語学部英語学科卒業 (1983), 上智大学外国語学研究科博士課程前期課程修了 (1985), スタンフォード大学言語学科博士課程修了 (1992)

【職歴】 東京基督教大学神学部 専任講師 (1992), 明治学院大学文学部 専任講師 (1995), 明治学院大学文学部 助教授 (1996), 明治学院大学文学部 教授 (2002), 神戸大学文学部 教授 (2004), 神戸大学人文学研究科 教授 (2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・対照研究領域 教授 (2017)

【専門領域】 意味論, 認知言語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本認知言語学会, 関西言語学会, アメリカ言語学会, 国際認知言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 評議員, 国際認知言語学会 理事

【受賞歴】

2020: 令和二年度後期所長特別賞 (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」動詞意味構造班 班長

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B)「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」, 19H01264: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi

Broader Perspectives on Motion Event Descriptions, John Benjamins, 2020.8.

窪園晴夫, 野田尚史, プラシヤント パルデシ, 松本曜

『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 2021.2.22.

吉成祐子, 眞野美穂, 江口清子, 松本曜

『移動表現の類型論と第二言語習得: 日本語、英語、ハンガリー語学習の多元的比較』, くろしお出版, 2021.2.25.

《論文・ブックチャプター》

Yo Matsumoto

“Motion Verbs in Japanese,” Mark Aronoff (ed.) *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*, Oxford University Press, 2020.5.

Yo Matsumoto

“Motion event descriptions in broader perspective,” Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, pp. 1–22, John Benjamins, 2020.8.

Kimi Akita and Yo Matsumoto

“A fine-grained analysis of manner salience: Experimental evidence from Japanese and English,” Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, pp. 143–179, John Benjamins, 2020.8.

Yo Matsumoto

“Neutral and specialized path coding: Toward a new typology of path-coding devices and languages,” Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, pp. 281–316, John Benjamins, 2020.8.

Yo Matsumoto

“The semantics of Japanese verbs,” Wesley M. Jacobsen and Yukinori Takubo (eds.) *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*, pp. 19–50, De Gruyter Mouton, 2020.10.12.

松本曜, 鈴木唯, 高橋舜, 谷川みづき, 長屋尚典, 吉成祐子

「複数局面を含む移動事象表現と言語類型論: 日本語と他言語の比較」, 窪園晴夫, 野田尚史, プラシヤント パルデン, 松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 178–205 頁, 2021.2.22.

Yo Matsumoto

“The semantic differentiation of V-te V complexes and V-V compounds in Japanese,” Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-verb complexes in Asian Languages*, pp. 139–164, Oxford University Press, 2021.2.25.

松本曜

「意味派生の方向性と基本義の認定に関する実験的考察」, 児玉一宏, 小山哲春 (編) 『認知言語学の最前線: 山梨正明教授古希記念論文集』, ひつじ書房, 287–309 頁, 2021.3.31.

《その他の出版物・記事》

松本曜

「「Go To トラベル」という英語では使われない表現が日本で使われるのはなぜですか」, ことばの疑問 (ことば研究館), <https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-91/>, 2021.2.10.

【講演・口頭発表】

松本曜

「諸言語における移動経路の表現: 共通性と差異」, 招待講演, 対照日本語研究会, オンライン (東京外国語大学), 2021.3.6–21.

【その他の学術的・社会的活動】

- *Language and Cognition, Cognitive Linguistics, Journal of Pragmatics* 査読委員
- 東京言語研究所 理論言語学講座講師
- 新日本聖書刊行会 日本語主任

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

松本曜

「日本学特別講義 意味論入門」, 常州工学院外国語学院 日本学講義シリーズ, オンライン (常州工学院・常州市, 中国), 2020.9.29.

松本曜

「講義「語の意味論」」, 言語学レクチャーシリーズ (国立国語研究所), オンライン (<https://www.youtube.com/watch?v=v2f21U7UFHY>), 2021.3.15–31.

《大学院非常勤講師》

- 一橋大学大学院

《若手研究者の受入》

- 特別共同利用研究員: 1 人 (ロシア科学アカデミー)

窪田 悠介 (くぼた ゆうすけ) 研究系(理論・対照研究領域) 准教授

【学位】 Ph.D. (Linguistics) (オハイオ州立大学, 2010)

【学歴】 東京大学教養学部超域文化科学科言語情報科学分科卒業 (2002), 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程修了 (2004)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2010), 日本学術振興会特別研究員 (海外特別研究員) (2013), 筑波大学人文社会系 助教 (2014), 人間文化研究機構国立国語研究所 (理論・対照領域) 准教授 (2019)

【専門領域】 理論言語学 (統語論, 意味論)

【所属学会】 日本言語学会, 日本英語学会, 日本語文法学会, 言語処理学会, Linguistic Society of America

【学会等の役員・委員】 言語処理学会大会プログラム委員, 『自然言語処理』編集委員

【受賞歴】

2016: 日本言語学会第 151 回大会発表賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」名詞修飾班: 班長
- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: メンバー
- ・フィージビリティスタディ「構成的意味論情報を付与した多言語資源の構築」: リーダー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「汎用的な範疇文法ツリーバンクの構築」, 18K00523: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

Yusuke Kubota, Robert Levine

Type-Logical Syntax, MIT Press, 2020.9.

岡部玲子, 八島純, 窪田悠介, 磯野達也 (編)

『言語研究の楽しさと楽しみ: 伊藤たかね先生退職記念論文集』, 開拓社, 2021.3.

《論文・ブックチャプター》

Koyo Akuzawa and Yusuke Kubota

“A semantic analysis of finite control in Japanese”, *Online Proceedings of Japanese and Korean Linguistics*, 26, 2020.7.

Yusuke Kubota, Koji Mineshima, Noritsugu Hayashi, and Shinya Okano

“Development of a General-Purpose Categorical Grammar Treebank”, *Proceedings of LREC2020*, pp. 5195–5201, 2020.8.

窪田悠介, 峯島宏次, 林則序, 岡野伸哉

「ABC ツリーバンク: 学際的な言語研究のための基盤資源」, 『言語処理学会第 27 回年次大会予稿集』, 2021.3.

Yusuke Kubota

“A non-ellipsis-containing analysis of ‘ellipsis-containing’ antecedents”, 岡部玲子, 八島純, 窪田悠介, 磯野達也 (編) 『言語研究の楽しさと楽しみ: 伊藤たかね先生退職記念論文集』, 開拓社, 264–274 頁, 2021.3.

窪田悠介

「計算言語学と言語類型論」, 窪園晴夫, 野田尚史, プラシヤント・パルデン, 松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 261–284 頁, 2021.3.

《コーパス・データベース類》

窪田悠介, 峯島宏次, 林則序, 岡野伸哉

「ABC Treebank」, <https://github.com/ABCTreebank/ABCTreebank>, 2021.3.18.

【講演・口頭発表】

窪田悠介

「形式意味論研究における理論構築について」, ワークショップパネル, ワークショップ「理論言語学を科学哲学する: 生成文法、形式意味論、認知言語学の未来」日本言語学会第 161 回大会, オンライン, 2020.11.22.

窪田悠介, 阿久澤弘陽

「定形コントロールと相対テンス—日本語からの視点—」ワークショップパネル, Prosody and Grammar Festa 5, オンライン, 2021.2.20.

窪田悠介, 峯島宏次, 林則序, 岡野 伸哉

「ABC ツリーバンク: 学際的な言語研究のための基盤資源」, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.16.

【その他の学術的・社会的活動】

• *Linguistic Research*: Editorial board member

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

窪田悠介

「カテゴリ文法入門」, 第 36 回 NINJAL チュートリアル, オンライン, 2020.9.

木部 暢子 (きべ のぶこ) 研究系 (言語変異研究領域) 教授, 領域代表, 副所長

【学位】 博士 (文学) (九州大学, 1998)

【学歴】 九州大学文学部文学科卒業 (1978), 九州大学大学院文学研究科修士課程修了 (1980)

【職歴】 純真女子短期大学 助手 (1980), 同 講師 (1981), 福岡女学院短期大学 講師 (1985), 鹿児島大学法文学部 助教授 (1988), 同 教授 (1999), 同 副学部長 (2004), 同 学部長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授, 副所長 (2010), 同 研究系長 (2010– 2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 教授, 領域代表 (2016)

【専門領域】 日本語学, 方言学, 音声学, 危機言語

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本方言研究会, 西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】 日本学術会議 会員/連携会員, 日本語学会 評議員, 日本音声学会 会計監査, 文化庁国語課 令和2年度危機的な状況にある言語・方言に関する研究協議会委員, 国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター日本語歴史的典籍ネットワーク委員会委員

【受賞歴】

2013: 国立国語研究所第8回所長賞

1990: 新村出財団研究助成

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: 分担者
- ・共同利用型共同研究プロジェクト「東北方言の地理的・世代的動態についての研究」: コーディネーター
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国語研ユニット「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: リーダー
- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通じた最先端研究の可視化・高度化」: リーダー
- ・文理融合研究プロジェクト調査研究 (FS) 「日本列島人の進化とその言語文化の起源」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究代表者
- ・基盤研究 (S) 「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」, 17H06115: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」, 17H02332: 研究分担者
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」総括班, 18H05505: 研究分担者
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」言語班, 18H05510: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

中川奈津子, 木部暢子 (編)

『青森県八戸市方言調査報告書』, 国立国語研究所, 2021.3.30.

《論文・ブックチャプター》

Nobuko Kibe, Kumiko Sato, Taro Nakanishi, and Kohei Nakazawa

“Corpus-based study of Japanese dialects: Regional differences in accusative case marking system”, Yoshiyuki Asahi (ed.) *Proceedings of Methods XVI*, pp. 197–207, Peter Lang, 2020.4.

Teruaki Oka, Yuichi Ishimoto, Yutaka Yagi, Takenori Nakamura, Masayuki Asahara, Kikuo Maekawa,

Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, Kumiko Sakoda, and Nobuko Kibe

“KOTONOHA: A Corpus Concordance System for Skewer-Searching NINJAL Corpora”, *Proceedings of the 12th Edition of its Language Resources and Evaluation Conference (ed.) Proceedings of the 12th Edition of its Language Resources and Evaluation Conference (LREC2020)*, pp. 7077–7083, LREC, 2020.5.

《総説・解説など》

木部暢子

「方言と地域文化—沖縄県八重山と東北各地の方言」, 『図録 特別展「復興を支える地域の文化—3・11から10年」』, 122–124 頁, 2021.3.2.

《コーパス・データベース類》

木部暢子, セリック・ケナン他

「危機言語 DB」(甑島基礎語彙, 八丈動画等追加), <http://kikigengo.ninjal.ac.jp/tango.html>, 2020.6.3.

木部暢子他

「日本語諸方言コーパスモニター版」(25 時間分追加), <https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html>, 2021.2.

《展示など》

- ・「モバイル型展示ユニット「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」, 静岡英和学院大学, 2020.9.25–12.17.
- ・「方言と地域文化—八重山と東北各地の方言—」(モバイル展示ユニット「危機に瀕した言語・方言」「地震・津波・方言」「大規模災害と方言」), 国立民族学博物館特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」, 2021.3.4–5.18.

【講演・口頭発表】

木部暢子

「日本語学と国際化」, シンポジウムパネル, 日本学会会議, オンライン, 2020.7.19.

木部暢子

「配慮表現の地域差 日本語諸方言コーパス (COJADS) から」, シンポジウムパネル, NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」, オンライン, 2020.10.3.

木部暢子

「音声コミュニケーションのダイバーシティー—日本の方言音声について—」, 招待講演, 日本音響学会, オンライン, 2021.3.11.

木部暢子, 中澤光平, 横山晶子

“Grammatical Relations in Japonic”, AA 地理言語学第2回研究会, オンライン, 2021.3.28.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・消滅危機言語・方言 2020 年度第1回オンライン研究発表会「格・情報構造(本土諸方言)」(主催: 危機言語・方言プロジェクト), オンライン, 2020.6.14.
- ・シンポジウム「係り結びと格の通方言的研究と通時的的研究」(主催: ヤポネシヤ・ゲノム科研, 共催: 危機言語・方言プロジェクト), オンライン, 2020.9.19–20.
- ・フィールド言語学ウェビナー(主催: 危機言語・方言プロジェクト), オンライン, 2020.12.5–6.
- ・シンポジウム「琉語語系統論研究の展望」(主催: ヤポネシヤ・ゲノム科研, 共催: 危機言語・方言プロジェクト), オンライン, 2020.12.19–20.
- ・第15回 INJAL フォーラム「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま、何をしなければならないか—」(主催: 危機言語・方言プロジェクト, 共催: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」プロジェクト), オンライン, 2021.2.27.
- ・第40回 NINJAL チュートリアル「コーパスを使った方言研究」(主催: 危機言語・方言プロジェクト),

オンライン, 2021.3.6.

- ・消滅危機言語・方言プロジェクト 2020 年度第 2 回オンライン研究発表会 (主催: 危機言語・方言プロジェクト), オンライン, 2021.3.14.
- ・日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に— (主催: 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法 文法研究班「とりたて表現」, 共催: 危機言語・方言プロジェクト), オンライン, 2021.3.21.
- ・AA 地理言語学 2020 年度第 2 回研究会: Classification and symbols for a geolinguistic study of grammatical relations (主催: AA 研共同利用・共同研究課題「アジア・アフリカ地理言語学研究」, 共催: 危機言語・方言プロジェクト), オンライン, 2021.3.28–29.

【一般向けの講演・セミナーなど】

木部暢子

「方言のアクセントの違いはどうやって生まれた?」, ニホンゴ探検 2020, オンライン, 2020.8.19–21.

木部暢子

「日本の消滅危機言語・危機方言」, 国語研オープンハウス 2020, オンライン, 2020.9.10.

木部暢子

「方言からみた日本語のルーツ」, NHK 文化センター名古屋教室の講座「日本列島人の起源と歴史」シリーズ, オンライン, 2020.11.22.

木部暢子

「日本各地の方言を守るために」, 第 15 回 NINJAL フォーラム「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま、何をしなければならないか—」, オンライン, 2021.2.27.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ムートン社 HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series, *Handbook of Japanese* 編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

木部暢子

「方言学概説—方言アクセントの多様性—」, 国語研レクチャーシリーズ, オンライン, 2020.10.14.

木部暢子他

「コーパスを使った方言研究」, 第 40 回 NINJAL チュートリアル, オンライン, 2021.3.7.

《若手研究者の受入》

- ・日本学術振興会特別研究員: 2 人

五十嵐 陽介 (いがらし ようすけ) 研究系 (言語変異研究領域) 教授

【学位】 博士 (言語学) (東京外国語大学, 2005)

【学歴】 東京外国語大学外国語学部ロシア東欧課程ロシア科卒業 (2001), 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程修了 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了 (2005)

【職歴】 国立国語研究所研究開発部門言語資源グループ 非常勤研究員 (2005–2006), 理化学研究所脳科学総合研究センター テクニカルスタッフ (2005–2006), 日本学術振興会特別研究員 PD (2006–2009), 広島大学大学院文学研究科 准教授 (2009–2015), 一橋大学大学院社会学研究科 准教授 (2015–2019), 一橋大学大学院社会学研究科 教授 (2019–2020), 一橋大学大学院社会学研究科 特任教授 (2020–2021), 国立国語研究所研究系 (言語変異研究領域) 教授 (2020–)

【専門領域】 言語学, 音声学

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学, 西日本言語学会

【学会等の役員・委員】 日本音声学 編集委員会, 日本音声学 会計監査

【受賞歴】

- 2017: 日本音声学優秀発表賞 (日本音声学第 30 回全国大会, 受賞発表: 「肩・種・汗・雨」と「息・舟・桶・鍋」がアクセント型で区別される日本語本地方言—佐賀県杵島方言と琉球語の比較—)
- 2017: 日本音声学優秀論文賞 (日本音声学, 受賞論文: 「名詞の意味が関わるアクセントの合流—南琉球宮古語池間方言の事例—」)
- 2013: 日本音声学優秀論文賞 (日本音声学, 受賞論文: 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」)
- 2005: 日本ロシア文学会賞 (日本ロシア文学会: Фонетика и фонология интонации в волпросительных предложениях в русском языке)
- 2001: 日本ロシア文学会学会報告奨励賞 (日本ロシア文学会第 51 回研究発表会, 受賞発表: 「ロシア語イントネーションの中和」)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」, 19H00530: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」, 17H02332: 研究代表者
- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者
- ・基盤研究 (B) 「コーパス言語学的手法に基づく会話音声の韻律特徴の体系化」, 16H03421: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

五十嵐陽介

「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」, 窪園晴夫, 野田尚史, プラシャントパルデシ, 松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 22–48 頁, 2021.2.22.

【講演・口頭発表】

五十嵐陽介

「南琉球宮古語伊良部佐和田方言のアクセント体系の初期報告」, シンポジウムパネル, 日本言語学会,

オンライン, 2020.11.21.

五十嵐陽介

「琉球語と九州語が共有する分節音における非中央語的特徴」, シンポジウムパネル (指名), シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」, オンライン, 2020.12.19.

【その他の学術的・社会的活動】

- 論文査読: 『音声研究』 (日本音声学会), 2020.5, 2020.12.
- 論文査読: 『言語研究』 (日本言語学会), 2020.5, 2021.1.
- 論文査読: *Journal of Japanese Linguistics*, 2020.6, 2020.8.
- 論文査読: 『言語社会』 (一橋大学), 2020.8.
- 論文査読: 『Nidaba』 (西日本言語学会), 2020.12.
- 論文査読: 『国立国語研究所論集』 (国立国語研究所), 2021.1.

朝日 祥之 (あさひ よしゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 博士 (文学) (大阪大学, 2004)

【学歴】 関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業 (1997), エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了 (1998), 大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了 (2004)

【職歴】 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員 (2004), 同 研究開発部門言語生活グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 社会言語学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 International Congress for Dialectologists and Geolinguists, METHODS, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会, 日本言語政策学会, 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, マイグレーション研究会

【学会等の役員・委員】 変異理論研究会 世話人, NWAV-AP Steering committee member, Asia-Pacific Language Variation Editorial board member, International Association of Urban Studies Scientific committee member, 北海道方言研究会 副会長

【受賞歴】

2013: 国立国語研究所第 6 回所長賞

2010: 第 9 回徳川宗賢優秀賞 (社会言語科学会)

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・ ネットワーク型日本関連在外資料調査研究・活用事業「北米における日本関連在外資料調査研究・活用一言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: 共同研究代表者

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (C)「北海道北見市常呂町岐阜方言の尊敬語に見られる言語変容の研究」, 19K00639: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

Asahi Yoshiyuki (ed.)

Proceedings of the sixteenth international conference on Methods in Dialectology XVI, Peter Lang., 2020.4.30.

朝日祥之, 那須昭夫, 北森葵, 入江祐希奈, 西村大佑

『筑波大学キャンパスことば集』(調査報告書), 2021.2.1.

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「「そだねー」考」, 『北海道方言研究会会報』, 97 号, 1-8 頁, 2021.2.20.

朝日祥之

「北海道北見市常呂町岐阜方言」, 『全国方言文法辞典資料集』, 7 巻, 1-10 頁, 2021.3.20.

朝日祥之

「人の移動の社会言語学: 日本語の事例を中心として」, 『東京外国語大学国際日本学研究 報告 XI』, 9 巻, 1-14 頁, 2021.3.25, DOI: 10.15026/100054.

朝日祥之

「戦中期のアメリカにおける日本語教育」, 『東京外国語大学国際日本学研究 報告 XI』, 9 巻, 15-28 頁, 2021.3.25, DOI: 10.15026/100055.

朝日祥之

「ハワイの日系移民史における日本語の役割」, 『東京外国語大学国際日本学研究 報告 XI』, 9 巻, 29-41 頁,

2021.3.25, DOI: 10.15026/100056.

《展示など》

- ・企画展示「周防大島とハワイ：移民たちの足跡」, 周防大島町文化交流センター, 2021.3.15–2021.5.9.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

“Japanese in the age of post-standardization: Language trends in the 21st century”, 招待講演, Japan lectures, University of Vienna, オンライン (オーストリア), 2021.1.14.

朝日祥之, 尾崎喜光

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その7」, 第230回北海道方言研究会, オンライン, 2021.1.24.

朝日祥之

「自治体による多言語情報提供の実態と課題」, 第221回 NINJAL サロン, オンライン, 2021.2.9.

Yoshiyuki Asahi

“Our mayor delivers his speech in his Nagoya dialect: Stylistic variation and the identity construction of a Japanese politician”, NWAV-AP6, オンライン, 2021.2.18.

朝日祥之

「引用形式「ト」ゼロマーク化とハワイ日本語方言形成：日系一世による自然談話資料を用いて」, ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連資料の調査研究・活用」共同研究発表会, オンライン, 2021.3.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『社会言語科学』査読委員

井上 文子 (いのうえ ふみこ) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 修士 (文学) (大阪大学, 1992)

【学歴】 高知女子大学文学部国文学科卒業 (1984), 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了 (1992), 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退 (1994)

【職歴】 大阪大学文学部 助手 (1994), 国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員 (1995), 同 主任研究官 (1997), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員 (2001), 同 情報資料部門資料整備グループ グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 社会言語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, 社会言語科学会, 日本語文法学会

【受賞歴】

1993: 第11回新村出記念財団 研究助成

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・共同利用型研究「感謝表現研究における「各地方言収集緊急調査」資料の活用」: コーディネーター
- ・共同利用型研究「音声談話資料を利用した大分方言 60 年間の変化の研究」: 共同研究者・コーディネーター

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

小林隆 (編), 小林隆, 篠崎晃一, 井上文子, 松田美香, 竹田晃子, 熊谷智子, 椎名渉子, 津田智史, 佐藤亜実, 櫛引祐希子, 尾崎喜光, 中西太郎 (著)

『全国調査による言語行動の方言学』, ひつじ書房, 2021.3.16.

《コーパス・データベース類》

井上文子

「方言ロールプレイ会話データベース」 (更新), <http://hougen-db.sakuraweb.com/>.

《その他の出版物・記事》

井上文子

「談話資料を利用した方言研究」, 日本方言研究会 方言研究支援プロジェクト, <http://dialectology-jp.org/wiki.cgi?page=%CA%FD%B8%C0%B8%A6%B5%E6%BB%D9%B1%E7%A5%D7%A5%ED%A5%B8%A5%A7%A5%AF%A5%C8>, 2020.9.5.

熊谷 康雄 (くまがい やすお) 研究系(言語変異研究領域) 准教授

【学位】 修士(文学)(埼玉大学, 1984)

【学歴】 埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業(1976), 埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程言語文化論専攻修了(1984)

【職歴】 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員(1988), 同 情報資料研究部第二研究室 研究員(1989), 同 主任研究官(1993), 同 室長(1998), 同 情報資料部門 部門長(2001), 国立国語研究所時空間変異研究系 准教授(2009), 同 研究系(言語変異研究領域) 准教授(2016)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 日本行動計量学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 電子情報通信学会, American Dialect Society, International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」：サブリーダー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「日本諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」, 16H01933: 研究分担者

【研究業績】

《コーパス・データベース類》

熊谷康雄

『『日本言語地図』データベース』(追加 25 項目), <https://www.lajdb.org>, 2021.3.15.

山田 真寛 (やまだ まさひろ) 研究系 (言語変異研究領域) 准教授

【学位】 Ph.D. (言語学) (デラウェア大学, 2010)

【学歴】 国際基督教大学教養学部語学科卒業 (2005), 米国デラウェア大学大学院言語学・認知科学研究科博士課程修了 (2010)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (PD)/ 京都大学 (2010), 広島大学教育学研究科言語と認知の脳科学プロジェクトセンター ポスドク研究員 (2013), 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット 特定助教 (2014), 立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所 IR 推進室 特任助教 (2016), 同 研究系 (言語変異研究領域) 准教授 (2018)

【専門領域】 言語学, 形式意味論, 言語復興

【受賞歴】

2019: 日本音声学会学術研究奨励賞 (共同研究の受賞: 小川晋史, 山田真寛, 林由華)

2014: 京都大学学際研究着想コンテスト奨励賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・フィージビリティスタディ「フィールドデータのオープンサイエンス化」: 研究代表者

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究 (B)「琉球諸語の記述と復興研究のためのプラットフォーム基盤構築研究」, 16K16824: 研究代表者
- ・基盤研究 (B)「琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究」, 20H01266: 研究代表者

【研究業績】

《著書・編書》

山田真寛, 森澤ケン

『与那国の人とことば 2020 年』, 言語復興の港, 2021.3.

《その他の出版物・記事》

山田真寛

「沖永良部語の短いお話 字幕付き動画集」, 言語復興の港, <https://plrminato.wixsite.com/webminato/erabumovies01>, 2020.4.22.

山田真寛

「どうなんむぬいラジオ体操第一 与那国語と三線で」, 言語復興の港, <https://plrminato.wixsite.com/webminato/yonaguniradiotaisoo>, 2020.4.22.

山田真寛

「リンク動画で見られる! 聴ける! 聞いて楽しむ沖永良部島 しまのことば編」, 一般社団法人沖永良部島観光協会 (発行)『おきのえらぶ島観光情報誌 しまらっきょ』, 2020.5.1.

山田真寛

「だまとうぬ ちまがら とうんでいする あぬんにぬ むぬ あたんていん (ヤマトから出てきた僕みたいな人でもさ)」, 言語復興の港, <https://plrminato.wixsite.com/webminato/yonaguniminoru>, 2020.11.24.

【研究調査】

- ・与那国語フィールドワーク (沖縄県八重山郡与那国町), 2020.11.9-14.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・知名町中央公民館講座「しまむに教室」(主催: 知名町生涯学習課, 共催: 国立国語研究所), オンライン, 2020.6.
- ・町民創作方言劇「ヒーヌムンの生まれた海」(主催: 知名町教育委員会, 共催: 国立国語研究所), 知名

町文化ホールあしびの郷ちな, 2021.2.23.

【一般向けの講演・セミナーなど】

山田真寛

「子どもたちが大人になるときにもしまのことが聞こえる世界を残すために 地域言語コンテンツの制作・利用を軸にした消滅危機言語の再活性化」, 大学共同利用機関法人 シンポジウム 2020 「宇宙・物質・エネルギー・生命・情報・人間文化: オンラインで研究者と話そう」, オンライン, 2020.10.17-18.

山田真寛

「子どもたちが大人になるときにもしまのことが聞こえる世界を残すために 地域言語コンテンツの制作・利用を軸にした消滅危機言語の再活性化」, ICU Asian Forum, 国際基督教大学, 2020.10.27.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「しまむに教室」開講, 奄美新聞, 2020.6.6.
- ・取材記事: 「しまむに伝承へ教室開講 会話例文集など作成 知名町」, 南海日日新聞, 2020.6.7.
- ・共同制作番組の受賞: 第 26 回プロGRESS賞 (危機言語プロジェクト・地域文化プロジェクトが琉球朝日放送 (QAB) と共同で制作した番組「くとうばどう宝 消滅危機言語を守る人」), 2020.10.23.
- ・共同制作番組の放送: 「琉球朝日放送特別番組「くとうばどう宝 消滅危機言語を守る人」」, テレビ朝日で放送, 2021.1.24 (2019.12.26: 琉球朝日放送で放送, 2020.3.29: 拡大版放送, 2020.12.1: 国語研公式 YouTube チャンネルで公開).
- ・取材記事: 「36 人が方言で演技 知名町・町民創作方言劇「ヒーヌムンの生まれた海」」, 奄美新聞, 2021.2.25.
- ・取材記事: 「創作方言劇「ヒーヌムンの生まれた海」上演 知名町」, 南海日日新聞, 2021.2.25.
- ・知名町中央公民館講座「しまむに教室」2020 年度 (毎月 1 回開催)

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山田真寛

「子どもたちが大人になるときにもしまのことが聞こえる世界を残すために 地域言語コンテンツの制作・利用を軸にした消滅危機言語の再活性化」, 多文化共修科目 B (ゲストレクチャー), 東京学芸大学, 2020.11.26.

青井 隼人 (あおい はやと) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】 博士 (学術) (東京外国語大学, 2016)

【学歴】 東京外国語大学外国語学部日本課程卒業 (2009), 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程修了 (2011), 東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2014)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員 (DC) (2011), 日本学術振興会特別研究員 (PD) (2014), 東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所 特任研究員 (2017), 人間文化研究機構国立国語研究所言語変異研究領域 特任助教 (2017)

【専門領域】 言語音声学, 音韻論, 琉球語学

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 方言研究会

【受賞歴】

2019: 国立国語研究所第 19 回所長賞 (若手研究者奨励賞)

2019: 日本言語学会第 157 回大会 (2018 年度秋季) 大会発表賞 (受賞発表: 「北琉球沖縄語伊江方言の破裂音」)

2018: 国立国語研究所第 17 回所長賞 (若手研究者奨励賞)

2018: 2018 年度仲宗根政善記念研究奨励賞 (沖縄言語研究センター)

2014: 日本言語学会 2014 年度論文賞 (受賞論文: 「宮古多良間方言における『中舌母音』の音声的解釈」)

2012: 日本音声学会第 26 回全国大会優秀発表賞 (受賞発表: 「宮古多良間方言の三型アクセント体系」)

2012: 日本言語学会第 144 回大会 (2012 年度春季) 大会発表賞 (受賞発表: 「宮古における『中舌母音』の音韻解釈」)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「琉球諸語における声門化子音の類型的・歴史的研究」, 20K13001: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「南琉球宮古諸方言のアクセントに関する調査研究」, 20H01259: 研究分担者

【研究業績】

《その他の出版物・記事》

青井隼人

「企画コンセプト「オノマトペキャラ図鑑」」, 2020.11.23.

【講演・口頭発表】

青井隼人

「オンライン研究会の発表とファシリテーション」, 第 209 回 NINJAL サロン, オンライン, 2020.5.19.

セリック・ケナン, 青井隼人

「南琉球語宮古多良間方言の複合名詞アクセントの記述: ピッチパタンの決定には何かが関与するか」, 第 5 回「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会 (前期), オンライン, 2020.6.29.

青井隼人

「声門化子音とはどのような子音か: 声門化阻害音の音響特徴と音韻論的パターン」, 招待講演, 第 14 回琉球諸語記述研究会, オンライン, 2020.8.1.

青井隼人

「南琉球宮古語多良間方言における不規則なピッチパターン」, 音韻文法研究会 (2020 年度第 4 回), オンライン, 2020.11.4.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ「オンライン研究会のすすめ方」（主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy3 プロジェクト），オンライン，2020.5.8.
- ・フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ「プレゼンテーションのためのスライドデザイン」（主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy3 プロジェクト），オンライン，2020.10.30.
- ・フィールド言語学ウェビナー（主催：国立国語研究所「危機言語」プロジェクト，共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy3 プロジェクト），オンライン，2020.12.5.
- ・学術スキル WS2021（主催：九州大学下地理則研究室，共催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy3 プロジェクト，国立国語研究所「危機言語」プロジェクト），オンライン，2021.2.11.

【一般向けの講演・セミナーなど】

UTaTané, 青井隼人

「オノマトペキャラ図鑑」，第 71 回駒場祭，オンライン，2020.11.21–23.

加藤昂英, 青井隼人

「うたたねしながら聴くラジオ～展示制作秘話ライブ配信～「オノマトペキャラ図鑑」，第 71 回駒場祭，オンライン，2020.11.22.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『アジア・アフリカの言語と言語学』Vol.15 編集担当

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

青井隼人

「問いのつくり方」，岡山大学又吉ゼミプレゼンテーションセミナー（2020 年度第 1 回），オンライン，2020.6.22.

青井隼人

「プレゼンテーション」，沖縄国際大学「リテラシー入門Ⅱ」特別講義，オンライン，2020.10.28.

青井隼人

「論文テーマの設定」，岡山大学又吉ゼミプレゼンテーションセミナー（2020 年度第 2 回），オンライン，2020.12.23.

青井隼人

「卒業論文からプレゼンへ」，南山大学プレゼンテーションセミナー，オンライン，2021.1.15.

青井隼人

「伝わるスライドのデザイン」，南山大学プレゼンテーションセミナー，オンライン，2021.2.9.

麻生 玲子 (あそう れいこ) 研究系(言語変異研究領域) 特任助教

【学位】 博士(学術)(東京外国語大学大学院, 2020)

【学歴】 東京外国語大学外国語学部学部東アジア課程モンゴル語専攻卒業(2004), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了(2010), 東京外国語大学大学院国際学研究科博士後期課程 単位取得退学(2017)

【職歴】 日本学術振興会特別研究員(DC1)(2010), 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター 研究員(特任助教)・国立国語研究所 研究系(言語変異研究領域) 特任助教(2017)

【専門領域】 言語学, 記述言語学, 琉球諸語, 八重山語, 波照間方言

【所属学会】 日本言語学会

【受賞歴】

2019: 第16回ドゥナンズンカニ大会・作詞の部 最優秀賞

2018: 国立国語研究所第16回所長賞

2017: 日本言語学会論文賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」: コーディネーター, メンバー
- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト(国語研ユニット)「方言の記録と継承による地域文化の再構築」: コーディネーター, メンバー, 「椎葉村方言辞書編纂プロジェクト」: プロジェクトマネージャー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「アルタイ型言語に関する類型的研究(2)」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究」18K12390: 研究代表者
- ・新学術領域研究(研究領域提案型) 公募研究「南琉球八重山諸語における伝播過程の解明と言語系統樹の構築」, 19H05353: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

セリックケナン, 麻生玲子, 中澤光平, 中川奈津子

「川平方言語彙集」川平村の歴史編纂委員会(編)『新版川平村の歴史』川平港民会, 410-436 頁, 2021.2.12.

《その他の出版物・記事》

麻生玲子

「しまめぐり: 波照間島」, 『Yaponesian』 2020.5.26.

麻生玲子

「研究者紹介: 麻生玲子「消滅危機言語の資料をどういう方法ならたくさん集められるか」」, 『ことばの波止場』 Vol. 8, 2020.9.30.

麻生玲子

「ことばめぐり: 渡来図知れる〜子ども時代はみんな超一流のフィールド言語学者〜」, 『Yaponesian』 2020.11.20.

【講演・口頭発表】

麻生玲子, 中澤光平

「南琉球八重山語波照間方言における母音長の音韻論的解釈」, 日本言語学会, オンライン, 2020.11.21.

中澤光平, セリックケナン, 麻生玲子

「南琉球諸語における漢語の借用時期と音変化の相対年代」, 日本言語学会, オンライン, 2020.11.21.

【研究調査】

- ・黒島方言の資料収集（東京都），2020.7.
- ・波照間方言の資料収集（遠隔調査），2020.8.
- ・石垣宮良方言の資料収集（遠隔調査），2020.12–2021.3.

【一般向けの講演・セミナーなど】

麻生玲子

「琉球諸語の特徴～2種類の「私たち」の謎～」，第二回くにうみミーティング一般講演会，オンライン，2021.3.3.

籠宮 隆之 (かごみや たかゆき) 研究系 (言語変異研究領域) 特任助教

【学位】 博士 (学術) (神戸大学, 2008)

【学歴】 東京都立大学人文学部卒業 (1995), 東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (1999), 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了 (2008)

【職歴】 国立国語研究所 非常勤職員 (1999), 国立国語研究所 特別奨励研究員 (2002), 独立行政法人産業技術総合研究所 特別研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所研究情報資料センター 特任助教 (2013), 千葉大学フロンティア医工学センター 特任助教 (2016), 人間文化研究機構国立国語研究所言語変異研究領域 特任助教 (2017)

【専門領域】 音声科学

【所属学会】 日本音声学会, 日本音響学会, 社会言語科学会, International Speech Communication Association, 聴覚医学会

【学会等の役員・委員】 日本音声学会 評議員・庶務委員・企画委員・100周年記念事業委員, 社会言語科学会 広報委員, 日本音響学会 編集委員

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通じた最先端研究の可視化・高度化」：メンバー
- ・基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」：メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B) 「リアルタイム MRI および WAVE データによる調音音声学の精緻化」, 17H02339: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「発達障害における音声プロソディの解析的研究」, 18K00552: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「韻律ラベルを付与した補聴システム装用者の発話データベースの構築」, 20K00593: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Michiko Mochizuki Sudo, Takayuki Kagomiya, and Tomoko Hori

“Present state analysis and measurement of pronunciation training effectiveness in English acquisition: Relationships between production patterns and English proficiencies”, *Proceedings of 10th International Conference on Speech Prosody 2020*, pp. 872–875, 2020.5, DOI: 10.21437/SpeechProsody.12020-178.

佐藤友貴, 小淵千絵, 籠宮隆之, 大金さや香, 城間将江, 野口佳裕, 加我君孝

「人工内耳装用児の話者の男女識別に関する検討」, 『AUDIOLOGY JAPAN』, 63 巻 3 号, 181–188 頁, 2020.6.30, DOI: 10.4295/audiology.63.181.

【研究調査】

- ・聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達に関する聴取実験 (国立国語研究所), 2020.4–2021.3.
- ・リアルタイム調音運動計測 (国立国語研究所), 2020.4–2021.3.
- ・人工内耳装用者による非言語・パラ言語情報伝達に関する聴取実験 (国際医療福祉大学), 2020.4–2021.3.

【一般向けの講演・セミナーなど】

木部暢子, 籠宮隆之, 新永悠人, 大槻知世

「モバイルミュージアム「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」」, モバイルミュージアム「方言の世界」展示, 静岡英和学院大学, 2020.9.25–2021.3.31.

木部暢子, 籠宮隆之

「方言と地域文化—沖縄県八重山と東北各地の方言」, 国立民族学博物館特別展「復興を支える地域の文化—3.11 から 10 年」, 国立民族学博物館, 2021.3.3–3.31.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『日本音響学会誌』：編集委員
- ・ *Acoustical Science and Technology*：Editorial board member
- ・ *Speech Prosody 2020*：Scientific committee member
- ・ 第 34 回日本音声学会全国大会実行委員
- ・ 第 342 回日本音声学会研究例会世話人

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師（集中講義）》

- ・ 名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科
 - ▶ 国際コミュニケーション総合研究 XI (統計学入門), 2020.7.29–8.1.
 - ▶ 国際コミュニケーション総合研究 X (統計学), 2021.1.25–28.

中川 奈津子 (なかがわ なつこ) 研究系(言語変異研究領域) 特任助教

【学位】 博士(人間・環境学)

【学歴】 同志社大学文学部文化学科国文学専攻学部卒業(2005), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座修士課程修了(2007), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座博士課程単位認定退学(2013), ニューヨーク州立大学バッファロー校言語学科博士課程修了(2013)

【職歴】 State University of New York at Buffalo Part-time lecturer (2010), 京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語情報科学講座研修員(2013), 同志社大学文学部英文学科 嘱託講師(2014), 同志社大学全学共通教養教育センター 嘱託講師(2014), 同志社大学グローバル・コミュニケーション学部 嘱託講師(2014), 京都大学国際高等教育院 非常勤講師(2014), 日本学術振興会・千葉大学融合科学研究科特別研究員(PD)(2015), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員(2015), 国立国語研究所 共同研究員(2016), 青森公立大学 非常勤講師(2017), 千葉大学人文科学研究院 特任研究員(2018), 国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員(2019), 国立国語研究所 特任助教(2019-)

【専門領域】 コーパス言語学, 方言学

【所属学会】 日本言語学会, 日本語学会, 琉球諸語記述研究会

【学会等の役員・委員】 琉球諸語記述研究会 編集委員

【受賞歴】

2019: 日本語学会春季大会発表賞(発表題目:「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない」)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」: メンバー
- ・「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」国語研ユニット「消滅危機言語・方言の展示を通じた最先端研究の可視化・高度化」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「日本語・琉球語における情報構造と述語類型」, 18K12360: 研究代表者
- ・基盤研究(B)「琉球沖永良部語を中心とした地域言語コミュニティ参加型の消滅危機言語復興研究」, 20H01266: 研究分担者
- ・挑戦的研究(萌芽)「日琉諸語における格という文法カテゴリーの検討」, 20K20704: 研究分担者
- ・基盤研究(B)「文学理論の生態学的転回にむけた学際的共同研究」, 15H03202: 連携研究者

【研究業績】

《著書・編書》

中川奈津子

Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation, Language Science Press, 2020.12.

中川奈津子, 木部暢子

『青森県八戸方言調査報告書』, 国立国語研究所言語変異研究領域, 2021.3.20.

《論文・ブックチャプター》

中川奈津子

「青森県南部野辺地方の音韻」, 『国立国語研究所論集』, 20 巻, 41-55 頁, 2021.1.31, DOI: 10.15084/00003092.

《コーパス・データベース類》

加治工真市, 中川奈津子

「鳩間方言 音声語彙データベース」, 国語研リポジトリにて公開, 2021.3.20.

宮良信詳, 中川奈津子

「うちなーぐち活用辞典データベース」, 国語研リポジトリにて公開, 2021.3.20.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 白保方言のかるた, 日めくりカレンダーづくりにおける音声記号の記入協力

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 研究系(言語変化研究領域) 教授, 領域代表

【学位】 博士(工学)(奈良先端科学技術大学院大学, 2014)

【学歴】 東京大学文学部第3類(語学文学)卒業(1995), 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程日本文学文化研究専攻修了(1997), 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学(2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了(2014)

【職歴】 明海大学外国語学部 講師(2001), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員(2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授(2009), 同 研究系(言語変化研究領域) 准教授, 領域代表(2016), 同 教授, 領域代表(2017), 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授(クロスアポイントメント)(2016), 同 教授(2017)

【専門領域】 日本語学, 自然言語処理

【所属学会】 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 日本語文法学会, 近代語学会, 東京大学国語国文学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員

【受賞歴】

2011: 国立国語研究所第2回所長賞

2011: 情報処理学会山下記念研究賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: リーダー
- ・フィージビリティスタディ「ニューラル機械翻訳による古文の現代語訳の研究」: リーダー
- ・新領域創出型共同研究プロジェクト「現代語の意味の変化に対する計算的・統計力学的アプローチ」: メンバー・コーディネーター
- ・人間文化研究機構連携研究「異分野融合による総合書物学の構築」サブプロジェクト「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 共同研究員
- ・Oxford Corpus of Old Japanese Project: Editorial Board Member
- ・人文学オープンデータ共同利用センター n2i プロジェクト: 共同研究員

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, 19H00531: 研究代表者
- ・挑戦的研究(開拓)「日本語コーパスに対する情報付与を核としたオープンサイエンス推進環境の構築」, 19H05477: 研究代表者
- ・基盤研究(B)「訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新」, 18H00674: 研究分担者
- ・挑戦的研究(開拓)「古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開」, 20K20501: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

呉寧真, 池田幸恵, 須永哲也, 小木曾智信

「多重の読みを持つ宣命コーパスの構築」, 『じんもんこん 2020 論文集』, 2020 巻, 253-260 頁, 2020.12.5.

《コーパス・データベース類》

Bjarke Frellesvig *et al.*

「オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス(更新版)」, <https://oncoj.ninjal.ac.jp/>, 2021.3.5.

堤智昭, 小木曾智信

「Web 茶まめ(更新版)」, <https://chamame.ninjal.ac.jp/>, 2021.3.

高橋雄太, 服部紀子

「日本語歴史コーパス 明治・大正編 IV 近代小説」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#shosetsu, 2021.3.

松崎安子, 服部紀子

「日本語歴史コーパス 江戸時代編 IV 随筆・紀行 Ver.0.4」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/edo.html#zuihitsu, 2021.3.

近藤明日子, 常磐智子

「日本語歴史コーパス 明治・大正編 III 明治初期口語資料『春秋雑誌会話篇』」, https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/meiji_taisho.html#shokikogo, 2021.3.

【講演・口頭発表】

呉寧真, 池田幸恵, 須永哲也, 小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 奈良時代編 II 宣命』の公開」, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度春季大会, 東京外国語大学 (予稿集), 2020.4.30.

片山久留美, 小木曾智信, 上野左絵

「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 III 近松浄瑠璃』の公開」, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度春季大会, 東京外国語大学 (予稿集), 2020.4.30.

OGISO Toshinobu, GO Neisin, IKEDA Yukie, and SUNAGA Tetsuya

“Construction of the corpus of senmyō: one of the oldest materials of Japanese language”, ポスター発表, Digital Humanities 2020, オンライン, 2020.7.24.

小木曾智信

「『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築と活用に向けて」, 研究発表会「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, オンライン, 2020.8.8.

相田太一, 小町守, 小木曾智信, 持橋大地

「単語分散表現を用いた近現代日本語の意味変化の抽出」, 研究発表会「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, オンライン, 2020.8.8.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス』 ver.2020.3 通時コーパス構築進捗報告」, 「通時コーパスシンポジウム」2020 オンライン, オンライン, 2020.9.13.

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス奈良時代編 I 万葉集』から『オックスフォード・NINJAL 上代日本語コーパス』『万葉集校本データベース』へのリンクについて」, ポスター発表, 「通時コーパスシンポジウム」2020 オンライン, オンライン, 2020.9.13.

小木曾智信, 河内昭浩

「国語教育用 UI「ことねり」の開発と活用」, ポスター発表, 「通時コーパスシンポジウム」2020 オンライン, オンライン, 2020.9.13.

相田太一, 小町守, 小木曾智信, 高村大也, 坂田綾香, 小山慎介, 持橋大地

「単語分散表現の結合学習による単語の意味の通時的変化の分析」, 「通時コーパスシンポジウム」2020 オンライン, オンライン, 2020.9.13.

近藤明日子, 小木曾智信, 高橋雄太, 田中牧郎, 間淵洋子

「『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計」, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020.10.24.

小木曾智信, 服部紀子, 松崎安子

「『日本語歴史コーパス』活用入門」, ワークショップパネル, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020.10.25.

呉寧真, 池田幸恵, 須永哲矢, 小木曾智信

「多重の読みを持つ宣命コーパスの構築」, ポスター発表, 情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2020」, オンライン, 2020.12.12.

小木曾智信

『日本語歴史コーパス』ver.2021.3 通時コーパス構築進捗報告, 「通時コーパス」シンポジウム 2021, オンライン, 2021.3.13.

喜友名朝視顕, 平澤寅庄, 小町守, 小木曾智信

「事前学習モデルを用いた近代文語文の現代語機械翻訳」, ポスター発表, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.16.

間淵洋子, 小木曾智信

「近現代日本語の意味変化分析のための単語データセット構築の試み」, ポスター発表, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.17.

相田太一, 小町守, 小木曾智信, 高村大也, 持橋大地

「通時的な単語の意味変化を捉える単語分散表現の同時学習」, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.17.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- 研究発表会「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」(主催: 科研費基盤研究(A) 19H00531 「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, 共催: 通時コーパスプロジェクト, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「現代語の意味の変化に対する計量的・統計力学的アプローチ」), オンライン, 2020.8.8.
- 通時コーパスシンポジウム 2020 オンライン(主催: 通時コーパスプロジェクト, 共催: 国立国語研究所共同研究プロジェクト「現代語の意味の変化に対する計量的・統計力学的アプローチ」, 科研費基盤研究(A) 19H00531 「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」), オンライン, 2020.9.13.
- 歴史的日本語資料の小型コーパス構築のための研究会, オンライン, 2020.9.30.
- 『日本語歴史コーパス』活用入門(日本語学会秋季大会ワークショップ), オンライン, 2020.10.24.
- 通時コーパスシンポジウム 2021(主催: 通時コーパスプロジェクト, 共催: 科研費基盤研究(A) 19H00531 「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」), オンライン, 2021.3.13.

【その他の学術的・社会的活動】

- 取材記事: 「ことばサブリ: 「一定評価したい」「基本, 」と同様, どんどん副詞化」, 朝日新聞, 2020.5.9.
- 取材記事: 「重用、他人事、世論… 最新の正しい読み方わかりますか?」, NEWS ポストセブン, 2020.11.21.
- 取材記事: 「いつの間にか“正解”が変わっていた「難読漢字」の新しい読み方」, 週間ポスト, 2020.11.27.
- 情報処理学会人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこん 2020): プログラム委員長
- Digital Humanities 2020 (Ottawa): Reviewer

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小木曾智信, 松崎安子

『日本語歴史コーパス』の紹介, 国立国語研究所オープンハウス 2020, オンライン, 2020.9.10.

小木曾智信

『日本語歴史コーパス』活用入門 — 「中納言」の使い方 —, 『日本語歴史コーパス』「中納言」オンライン講習会, オンライン, 2020.11.14.

小木曾智信, 服部紀子

「通時コーパス概要説明」, 第 5 回「通時コーパス」国語教育活用ワークショップ, オンライン, 2021.2.23.

小木曾智信

『日本語歴史コーパス』活用入門 — 「中納言」の使い方 —, NINJAL チュートリアル, オンライン, 2021.3.1.

《大学院非常勤講師》

- 名古屋大学大学院人文学研究科(日本語学特殊研究 III)

大西 拓一郎 (おおにし たくいちろう) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】 修士 (文学) (東北大学, 1987)

【学歴】 東北大学文学部卒業 (1985), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了 (1987), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学 (1989)

【職歴】 東北大学文学部 助手 (1991), 国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員 (1993), 同 主任研究官 (1996), 同 室長 (1999), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授 (2009), 同研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 方言学, 言語地理学, 日本語学

【所属学会】 日本方言研究会, 日本語学会, International Society for Dialectology and Geolinguistics (SIDG), 日本地理言語学会, 変異理論研究会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語文法学会, 中日理論言語学研究会, 九州方言研究会, 日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】 日本方言研究会 世話人, 日本語学会 評議員, SIDG committee of accountants

【受賞歴】

2016: 国立国語研究所第 13 回所長賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・共同利用型研究「国研図書室所蔵の海外言語地図」: コーディネーター

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究 (開拓)「古辞書・古典籍データへの地理情報付与による人文学の横断的展開」, 20K20501: 研究代表者
- ・基盤研究 (A)「『方言文法辞典』データベース拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」, 20H00015: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「日本語敬語形成モデルの構築—生成・運用・伝播に注目して—」, 19H01266: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「『瀬戸内海言語図巻』の追跡調査による音声言語地図の作成と言語変容の研究」, 17H02340: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「言語地図を読み直す」, 『日本方言研究会 方言研究支援プロジェクト』, 2020.9.

【講演・口頭発表】

大西拓一郎

「言語地図を読み直し、変化を検証・抽出する」, Covid-19 の影響下における方言研究のありかたを模索するワークショップ, オンライン, 2020.5.1.

大西拓一郎

「方言分布の基本則と分布形成」, 招待講演, 東京外国語大学大学院着任教員による研究会 2020, オンライン, 2020.7.31.

大西拓一郎

「同音衝突と類音牽引—庄川流域における「桑の実」と「燕」の方言分布と変化—」, ポスター発表, 通時コーパスシンポジウム 2020, オンライン, 2020.9.13.

大西拓一郎

「言語地理学における語彙変化の再検討—混交・民間語源・類音牽引—」, 招待講演, 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 NINJAL ユニットオンライン講演会, オンライン, 2021.2.18.

大西拓一郎

「「コンタミネーション」をめぐって」, ポスター発表, 通時コーパスシンポジウム 2021, オンライン, 2021.3.13.

【一般向けの講演・セミナーなど】

大西拓一郎

「方言学入門—にほんごの地理と歴史—」, 早稲田大学オープンカレッジ, オンライン, 2021.1.9–23.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本方言研究会 編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

大西拓一郎

「言語地図データベースの紹介」, 国立国語研究所オープンハウス 2020, オンライン, 2020.9.10.

山崎 誠 (やまざき まこと) 研究系 (言語変化研究領域) 教授

【学位】 博士 (学術) (東京学芸大学, 2015)

【学歴】 埼玉大学教養学部教養学科卒業 (1980), 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第 5 学年中退 (1984), 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了 (2015)

【職歴】 国立国語研究所言語計量研究部 研究員 (1984), 同 言語体系研究部第一研究室 研究員 (1988), 同 主任研究官 (1993), 同 室長 (1995), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員 (2001), 同 第一領域長 (2003), 同 グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2015), 同 研究系 (言語変化研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

【所属学会】 日本語学会, 計量国語学会, 言語処理学会, 語彙研究会, 日本語教育学会, 社会言語科学会, 情報知識学会, 日本語文法学会, 日本行動計量学会, 情報処理学会, 表現学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事, 言語処理学会 代議員

【受賞歴】

2007: 言語処理学会第 12 回年次大会優秀発表賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: 班長 (語誌データベース班)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: 班長 (レジスター班)
- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: メンバー
- ・基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: メンバー
- ・共同利用型研究「難解用語の言語問題に対応する言い換え提案の検証とその応用」: コーディネーター

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C)「シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用」, 19K00655: 研究代表者
- ・基盤研究 (A)「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 18H03581: 研究分担者
- ・基盤研究 (A)「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究分担者
- ・基盤研究 (B)「語形成および意味的情報を付加した実践医療用語辞書の構築」, 18H03499: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「データサイエンスに基づいた日本文体変化分析とその構造のモデリング」, 18K00627: 研究分担者
- ・挑戦的研究 (萌芽)「コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—」, 18K18685: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

山崎誠

「語誌情報ポータルについて」, 『日本語学』, 39 巻 2 号, 124–129 頁, 2020.6.10.

山崎誠

「辞書における自動詞・他動詞とコーパスにおける実態」, 江田すみれ, 堀恵子 (編)『自動詞と他動詞の教え方を考える』, くろしお出版, 57–72 頁, 2020.6.30.

《コーパス・データベース類》

山崎誠, 柏野和佳子, 宮崎由美

「BCCWJ の小説会話文に対する話者情報アノテーションデータ」 (関係者限定公開), 2021.3.30.

相良かおる, 小野正子, 高崎智子, 東条佳奈, 麻子軒, 山崎誠, 内山清子, 岡照晃

「実践医療用語_語構成要素語彙試案表 Ver.1.0」, <https://www.gsk.or.jp/catalog/gsk2020-g>, 2021.3.30.

【講演・口頭発表】

相良かおる, 小野正子, 東条佳奈, 麻子軒, 山崎誠

「実践医療用語の語構成解析」, ポスター発表, 第24回日本医療情報学会春季大会, オンライン, 2020.6.6.

相良かおる, 小野正子, 東条佳奈, 麻子軒, 山崎誠

「病名を表す合成語の語末調査」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ2020, オンライン, 2020.9.8.

山崎誠

「実践医療用語を構成する語の意味分布」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ2020, オンライン, 2020.9.8.

山崎誠

「『分類語彙表』の質的拡張の試み」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ2020, オンライン, 2020.9.9.

東条佳奈, 相良かおる, 高崎智子, 麻子軒, 山崎誠

「病名における「-性」の分析——一般書籍との比較から——」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ2020, オンライン, 2020.9.9.

山崎誠

「短単位の頻度列から見た古典文学作品の特徴」, 基調講演, 通時コーパスシンポジウム2020 オンライン, オンライン, 2020.9.13.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・『三省堂国語辞典』: 編集委員
- ・日本語教育学会: 審査・運営協力員
- ・言語資源協会: 運営委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山崎誠

「ことばを数える——計量語彙論の世界——」, 言語学レクチャーシリーズ, オンライン <https://www.youtube.com/watch?v=xK8S74TlZkU>.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授

《博士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 副査, 2020.5.
- ・筑波大学大学院: 副査, 2021.2.

《若手研究者の受入》

- ・外来研究員: 1人

横山 詔一 (よこやま しょういち) 研究系(言語変化研究領域) 教授

【学位】 博士(心理学)(筑波大学, 1991)

【学歴】 横浜国立大学教育学部卒業(1981), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得(1983), 筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学(1985)

【職歴】 上越教育大学学校教育学部 助手(1985), 国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員(1991), 同 情報資料研究部 主任研究官(1995), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長(2001), 同 研究開発部門 グループ長(2006), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授(2009), 同 研究情報資料センター長(2009-2013), 同 研究系(言語変化研究領域) 教授(2016)

【専門領域】 認知科学, 心理統計, 日本語学

【所属学会】 日本心理学会, 社会言語科学会, 計量国語学会, 日本語学会, 日本教育工学会, 行動計量学会

【学会等の役員・委員】 計量国語学会 理事

【受賞歴】

2019: 国立国語研究所第18回所長賞

2010: 社会言語科学会第9回徳川宗賢賞(優秀賞)

2010: 国立国語研究所第1回所長賞

1997: 日本教育工学会第11回日本教育工学会論文賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・共同利用型研究「音声の個人内変化を推定するためのコーホート分析の有効性に関する実証研究」: コーディネーター

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」, 19H00627: 研究分担者
- ・基盤研究(B)「海外日本語教育指導者との協働による学術論文執筆支援プログラムの開発とその評価」, 17H01994: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一

「言語変化と社会環境」, 金澤裕之, 川端元子, 森篤嗣(編)『日本語の乱れか変化か』, ひつじ書房, 237-253頁, 2021.2.26.

【講演・口頭発表】

横山詔一, 前田忠彦, 野山広, 福永由佳, 高田智和

「1948 年に実施された日本人の読み書き能力調査の得点分布をどう解釈するか」, 計量国語学会第 64 回大会, オンライン, 2020.9.19.

横山詔一, 前田忠彦, 野山広, 福永由佳, 高田智和

「日本人の読み書き能力 1948 年調査の非識字者率に対する新解釈」, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020.10.24.

横山詔一

「日本人の読み書き能力 1948 年調査の結論を読み直す: 90 点満点の人という基準について」, シンポジウムパネル, 「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」キックオフ国際シンポジウム, オンライン, 2021.3.27.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・大学共同利用機関法人情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設: 運営会議委員

- ・筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語・日本事情遠隔教育拠点事業：運営委員
- ・博報堂財団「児童教育実践についての研究助成」：審査委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

横山詔一

「日本語に関する調査研究の変遷と日本語教育への応用 (2450 年の研究者が見る史料)」, 東洋大学 FD 研修会・国際教育センター日本語教育講演会, 2021.3.11.

横山詔一

「言語変化の統計理論入門」, 国立国語研究所 言語学レクチャーシリーズ (第 8 回), <https://youtu.be/qKm0S7RhS6c>.

高田 智和 (たかだ ともかず) 研究系(言語変化研究領域) 准教授

【学位】 博士(文学)(北海道大学, 2004)

【学歴】 北海道大学文学部卒業(1999), 北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了(2001), 北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了(2004)

【職歴】 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員(2005), 同 言語資源グループ 研究員(2006), 同 言語生活グループ 研究員(2007), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授(2009), 同 研究系(言語変化研究領域) 准教授(2016)

【専門領域】 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

【所属学会】 日本語学会, 訓点語学会, 計量国語学会, 情報処理学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 事務局長, 計量国語学会 理事, 訓点語学会 委員, 日本漢字学会評議員, 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員, 情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員

【受賞歴】

- 2019: 2019 年度山下記念研究賞
- 2016: 2016 年度日本語学会春季大会発表賞
- 2013: 北海道大学文学部同窓会楡文賞
- 2010: 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞
- 2010: 国立国語研究所第1回所長賞
- 2007: 日本規格協会標準化貢献賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: 代表者
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査・研究活用—言語生活史研究に基づいた近現代の在外資料論の構築」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「訓点資料訓読文コーパスの構築と古代日本語史研究の革新」, 18H00674: 研究代表者
- ・挑戦的研究(萌芽)「時代差・地域差・分野差を集積した漢字字形情報通覧基盤の開発研究」, 20K20711: 研究代表者
- ・基盤研究(S)「木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開」, 18H05221: 研究分担者
- ・基盤研究(A)「統合史資料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出」, 18H03576: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「字体記述の精密化手法の確立による歴史的漢字字体情報アーカイブズ構築」, 18K00611: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「資料横断的な漢字音・漢語音データベース構築・公開に向けた基礎的研究」, 19K00650: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「書き下し文生成を目的とする訓点資料の高精度電子化」, 20K00654: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

高田智和

「漢字」, 森山卓郎, 渋谷勝己(編)『明解日本語学辞典』, 三省堂, 38-39 頁, 2020.5.30.

高田智和

「訓点資料」, 森山卓郎, 渋谷勝己(編)『明解日本語学辞典』, 三省堂, 47 頁, 2020.5.30.

高田智和

「訓読」, 森山卓郎, 渋谷勝己(編)『明解日本語学辞典』, 三省堂, 48 頁, 2020.5.30.

高田智和

「重箱読み・湯桶読み」, 森山卓郎, 渋谷勝己(編)『明解日本語学辞典』, 三省堂, 89 頁, 2020.5.30.

高田智和

「米国陸海軍日本語学校の漢字教材“Kanji book”」, 加藤重広, 岡崎裕剛(編)『日本語文字論の挑戦—表記・文字・文献を考えるための 17 章』, 三省堂, 89 頁, 2020.5.30.

《コーパス・データベース類》

高田智和, 鎌水兼貴

「鶴岡調査データベース ver.4.0」, <https://www2.ninjal.ac.jp/longitudinal/tsuruoka.html>, 2020.9.9.

【講演・口頭発表】

堤智昭, 田島孝治, 高田智和, 小助川貞次

「ヲコト点図共有・比較システムの開発」, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度春季大会, 要旨集掲載により発表成立, 2020.5.17.

横山詔一, 前田忠彦, 野山広, 福永由佳, 高田智和

「1948 年に実施された日本人の読み書き能力調査の得点分布をどう解釈するか」, 計量国語学会第 64 回大会, オンライン, 2020.9.19.

高田智和

「文字コミュニケーションの不通」, NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」, オンライン, 2020.10.3.

柳原恵津子, 高田智和

「訓点資料コーパスの設計と意義—西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点を用いた実践例—」, 第 123 回訓点語学会研究発表会, オンライン, 2020.10.18.

柳原恵津子, 高田智和

「訓点資料に使用されたヲコト点・仮名点の計量研究—西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点を用いて—」, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020.10.24.

横山詔一, 前田忠彦, 野山広, 福永由佳, 高田智和

「日本人の読み書き能力 1948 年調査の非識字者率に対する新解釈」, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020.10.24.

堤智昭, 田島孝治, 高田智和, 小助川貞次

「訓点研究支援のための基盤システムの設計・実装」, ポスター発表, 人文科学とコンピュータシンポジウム 2020, オンライン, 2020.12.12.

八木下孝雄, 石黒圭, 高田智和

「台湾学術雑誌データ追加による「日本語研究・日本語教育文献データベース」の拡張」, 招待講演, 2020 年台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウム「日本語文学研究の境界線」, 東呉大学(台北), オンデマンド参加, 2020.12.12.

高田智和

「普濟寺版の漢字字体」, シンポジウム「字体資料共有の現在と未来」, オンライン, 2021.3.20.

高田智和, 前田忠彦, 横山詔一

「日本人の読み書き能力 1948 年調査の結論を読み直す」, JSPS 科研費 19H00627「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」キックオフ国際シンポジウム, オンライン, 2021.3.27.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・字体資料共有の現在と未来(主催: 科研費基盤研究(C)「字体記述の精密化手法の確立による歴史的漢字字体情報アーカイブズ構築」(18K00611), 科研費挑戦的研究(萌芽)「時代差・地域差・分野差を

集積した漢字字形情報通覧基盤の開発研究」(20K20711), 表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化, 一般財団法人 人文情報学研究所), オンライン, 2021.3.20.

【一般向けの講演・セミナーなど】

高田智和

「天草版(キリシタン資料)の画像コンテンツ」, 国立国語研究所オープンハウス 2020, オンデマンド参加, 2020.9.10.

高田智和

「表記辞書の改訂とコーパス」, 文字情報技術促進協議会年次特別講演会, オンライン, 2021.3.12.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・総合研究大学院大学

新野 直哉 (にいの なおや) 研究系(言語変化研究領域) 准教授

【学位】 博士(文学)(東北大学, 2010)

【学歴】 東北大学文学部文学科卒業(1984), 東北大学大学院文学研究科博士課程前期2年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了(1986), 東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退(1988)

【職歴】 宮崎大学教育学部 助手(1988), 同 講師(1989), 同 助教授(1992), 国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官(1996), 独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員(2001), 同 文献情報グループ 主任研究員(2006), 人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教(2009), 同 准教授(2011), 同 研究系(言語変化研究領域) 准教授(2016)

【専門領域】 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本近代語研究会, 表現学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 日本近代語研究会 運営委員, 日本語学会 大会企画運営委員

【受賞歴】

2020: 国立国語研究所第20回所長賞

2011: 国立国語研究所第2回所長賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「大正10年『読売新聞』の日本語関連記事について—「新聞記事データベース」活用の一例として」, 『筑紫語学論叢』, 3号, 209–235頁, 2021.3.15.

新野直哉

「辞書に載らない意味—“煮詰まる”の場合」, 『言語文化研究』, 20号, 1–9頁, 2021.3.24.

新野直哉

「“煮詰まる”の「誤用」について—その発生時期と拡散の背景を中心に」, 『近代語研究』, 22号, 105–128頁, 2021.3.30.

《その他の出版物・記事》

新野直哉

「ことばの移り変わり」, 森山卓郎(監修)『旺文社標準国語辞典 第八版』, 旺文社, 2020.12.7.

【講演・口頭発表】

新野直哉

「昭和前期『文藝春秋』の日本語関連記事」, 第281回筑紫日本語研究会, オンライン, 2020.8.1.

新野直哉

「“煮詰まる”の「誤用」について—その発生時期と拡散の背景を中心に—」, 第216回青葉ことばの会, オンライン, 2020.9.5.

新野直哉

「“煮詰まる”の使用実態と意味変化の過程—現代日本語の「誤用」研究の一例として—」, 第377回日本近代語研究会, オンライン, 2020.11.28.

新野直哉

「昭和20年代前期『文藝春秋』の言語記事から—「雑誌記事データベース」活用の一例として」, 「通時コーパス」シンポジウム2021, オンライン, 2021.3.13.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・NINJAL 職業発見プログラム: 講師(神奈川県立座間総合高校), 2021.1.

- ・取材協力：「グッド！モーニング」，テレビ朝日

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・目白大学大学院

間淵 洋子 (まぶち ようこ) 研究系(言語変化研究領域) 特任助教

【学位】 博士(国際日本学)(明治大学, 2018)

【学歴】 東京学芸大学教育学部中等教育教員養成課程国語科卒業(1995), 東京都立大学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻修士課程修了(1997), 東京都立大学大学院人文科学研究科日本語・日本文学専攻博士課程単位取得退学(2005), 明治大学大学院国際日本学研究科国際日本学専攻博士後期課程修了(2018)

【職歴】 国立国語研究所研究開発部門第二領域 非常勤研究員(2000), 東京学芸大学教育学部 講師(2002), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 非常勤研究員(2005), 人間文化研究機構国立国語研究所国立国語研究所コーパス開発センター 非常勤研究員(2013), 日本学術振興会特別研究員 DC2(2016), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系(言語変化研究領域) 特任助教(2018)

【専門領域】 日本語学, 日本語史, 計量言語学, コーパス言語学

【所属学会】 日本語学会, 計量国語学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 日本デジタル・ヒューマニティーズ学会

【学会等の役員・委員】 日本語学会 事務局委員

【受賞歴】

2017: 国立国語研究所コーパス開発センター優秀発表賞(「近代漢語の品詞性に見る多様性の画一化—形容詞用法を中心に—」)

2016: 第12回国立国語研究所所長賞(若手研究者奨励賞)

2015: 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2015」ベストポスター賞(間淵洋子, 小木曾智信「異なる文体の混在するテキストに対する複数辞書切り替えによる解析手法の提案」)

2006: 言語処理学会第12回年次大会優秀賞(山崎誠, 前川喜久雄, 田中牧郎, 小椋秀樹, 柏野和佳子, 小磯花絵, 間淵洋子, 丸山岳彦, 山口昌也, 秋元祐哉, 稲益佐知子, 吉田谷幸宏「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」国語研ユニット「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」, 19H00531: 研究分担者
- ・若手研究「新語定着期の言語変化—コーパスに基づく通時的語彙研究の実践」, 20K13060: 研究代表者

【研究業績】

《コーパス・データベース類》

間淵洋子, 福井尚子

「国語研変体仮名字形データベース」, <https://cid.ninjal.ac.jp/hentaiganaDB/>, 2020.6.30.

間淵洋子

「日本語歴史コーパス 奈良時代編 III 祝詞」, <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html#norito>, 2021.3.31.

《その他の出版物・記事》

間淵洋子

「気象・気性」, 『日本語学』, 明治書院, 2020 年夏号, 64–67 頁, 2020.6.10.

【講演・口頭発表】

近藤明日子, 小木曾智信, 高橋雄太, 田中牧郎, 間淵洋子

「昭和・平成書き言葉コーパス」の設計, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン,

2020.10.24.

間淵洋子

『『日本語歴史コーパス 奈良時代編 III 祝詞』の形態論情報・原文情報整備』, ポスター発表, 通時コーパスシンポジウム 2021, オンライン, 2021.3.13.

間淵洋子, 小木曾智信

「近現代日本語の意味変化分析のための単語データセット構築の試み」, ポスター発表, 言語処理学会 第 27 回年次大会 (NLP2021), オンライン, 2021.3.17.

間淵洋子

「『国語研変体仮名字形データベース』の機能拡張と応用」, シンポジウム 「字体資料共有の現在と未来」, オンライン, 2021.3.20.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本デジタル・ヒューマニティーズ学会 年次大会プログラム委員
- ・杉並区教育委員会嘱託杉並区立東田中学校運営協議会委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院授業担当講師》

- ・総合研究大学院大学 (共通科目「総合書物論」)

小磯 花絵 (こいそ はなえ) 研究系(音声言語研究領域) 教授, 領域代表

【学位】 博士(理学)(奈良先端科学技術大学院大学, 1998)

【学歴】 千葉大学文学部卒業(1994), 千葉大学大学院文学研究科修士課程修了(1996), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程修了(1998)

【職歴】 ATR 知能映像通信研究所 研修研究員(1996), 国立国語研究所言語行動研究部 研究員(1998), 同 主任研究員(2009), 人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授(2009), 同 研究系(音声言語研究領域) 准教授, 領域代表(2016), 同 研究系(音声言語研究領域) 教授, 領域代表(2018)

【専門領域】 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

【所属学会】 社会言語科学会, 日本認知科学会, 人工知能学会, 言語処理学会, 日本言語学会, 日本音声学会, 日本語学会, 日本語教育学会

【学会等の役員・委員】 社会言語科学会 監事, 言語処理学会 大会賞選考審査員・代議員, 日本言語学会 大会委員

【受賞歴】

2002: 情報処理学会山下記念研究賞

1996: 人工知能学会大会論文賞

1996: 人工知能学会研究奨励賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: リーダー
- ・フィージビリティスタディ「子供の言語コミュニケーション研究に向けた基盤整備」: リーダー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「多様な場面の日常会話データに基づく子どものコミュニケーション行動の解明」20H01264: 研究代表者
- ・基盤研究(B)「地域社会の共在的記録に基づくコミュニケーションと記憶の活性化」, 18KT0035: 研究代表者
- ・基盤研究(A)「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」, 17H00914: 研究分担者
- ・基盤研究(A)「手話翻訳システム構築を目指した手話対話における文単位の認定」, 18H03580: 研究分担者
- ・基盤研究(B)「日常会話の韻律モデル構築に向けた話者混在音声の分析基盤」, 19H01252: 研究分担者
- ・挑戦的研究(萌芽)「幼児の話合い活動の過程と交渉技術の発達についての包括的研究」, 20K20695: 研究分担者
- ・特別推進研究「アジアと欧米: コミュニケーションの文化差から言語の獲得過程を探る」, 20H05617: 研究分担者
- ・機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の情報神経物理学」: 研究分担者

【研究業績】

《コーパス・データベース類》

小磯花絵

「ビデオチュートリアル: モニター版の概要」, 2020.10.27.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香

『『日本語日常会話コーパス』2020 年度モニター公開中納言版』, 2021.2.17.

丸山岳彦, 西川賢哉, 田嶋明日香, 小磯花絵

『『昭和話し言葉コーパス』中納言本公開版』, 2021.3.20.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川

賢哉, 渡邊友香

『日本語日常会話コーパス』内部公開版 202103 (研究者限定公開), 2021.3.29.

【講演・口頭発表】

小磯花絵, 居關友里子, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 田中弥生, 宮城信

「子どもの会話コーパスの構築に向けて」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.8.

居關友里子, 小磯花絵

「子ども-保護者間会話における[要求-拒否]のやり取り」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.9.

田中弥生, 小磯花絵

「脱文脈化の観点からみる職場における取引先との談話の特徴」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.9.

小磯花絵

「日常会話コーパスに見る配慮の表現・行動の多様性」, NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」, 国立国語研究所, 2020.10.3.

小磯花絵

「日常会話に見られる言葉の性差—『日本語日常会話コーパス』に基づく分析を通して—」, シンポジウムパネル, 日本語学会 2020 年度秋季大会シンポジウム「データから見る日本語と「性差」」, オンライン, 2020.10.25.

田中弥生, 小磯花絵

「取引先との打ち合わせ談話における脱文脈化観点からの特徴」, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 91 回研究会, オンライン, 2021.3.2.

小磯花絵

「対話データを用いた研究における文理連携の可能性を探る」, 特別セッションパネル, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD) 第 91 回研究会, オンライン, 2021.3.2.

小磯花絵

「プロジェクトの進捗報告」, シンポジウム「日常会話コーパス」VI, オンライン, 2021.3.4.

田中弥生, 藤越, 小磯花絵

「作業遂行時における幼児と母親の会話のスタイルシフトと脱文脈化」, 社会言語科学会第 45 回大会, オンライン, 2021.3.14.

田中弥生, 小磯花絵, 大武美保子

「共想法談話の脱文脈化観点からの検討」, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.16.

丸山岳彦, 西川賢哉, 田嶋明日香, 小磯花絵

「『昭和話し言葉コーパス』の設計・構築と分析 (2): コーパスの構成とメタデータの設計」, ポスター発表, 言語処理学会第 27 回年次大会, オンライン, 2021.3.16.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・シンポジウム「ことば・認知・インタラクション」8 (主催: 科研費「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」(17H00914), 日常会話コーパスプロジェクト), オンライン, 2020.6.27.
- ・シンポジウム「日常会話コーパス」VI (主催: 日常会話コーパスプロジェクト), オンライン, 2021.3.4.
- ・『中納言』講習会 (主催: 日常会話コーパスプロジェクト), オンライン, 2021.3.4.
- ・シンポジウム「ことば・認知・インタラクション」9 (主催: 科研費「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」(17H00914), 日常会話コーパスプロジェクト), オンライン, 2021.3.6.

【一般向けの講演・セミナーなど】

小磯花絵

「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究：コーパスに見る日常のことばの特徴」, 国立国語研究所オープンハウス 2020, オンライン, 2020.9.10.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

小磯花絵

「コーパスを活用した日常会話の研究」, 第 37 回 NINJAL チュートリアル, オンライン, 2020.10.11.

柏野和佳子, 小磯花絵

「『中納言』講習会」, 第 10 回コーパス利用講習会, オンライン, 2021.3.4.

《連携大学院》

・一橋大学大学院言語社会研究科: 連携教授

《大学院非常勤講師(集中講義)》

・筑波大学大学院文芸言語研究科

《博士論文審査委員》

・一橋大学大学院: 副査 (2 件), 2021.2.

前川 喜久雄 (まえかわ きくお)

研究系 (音声言語研究領域) 教授, コーパス開発センター長

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2011)

【学歴】 上智大学外国語学部フランス語学科卒業 (1980), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了 (1982), 上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退 (1984)

【職歴】 鳥取大学教育学部 助手 (1984), 同 講師 (1987), 国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員 (1989), 同 主任研究官 (1992), 同 室長 (1994), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長 (2001), 同 言語資源グループ長 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授 コーパス開発センター長 (2009), 同 研究系長 (2009–2016), 同 副所長 (2013–2016), 同 研究系 (音声言語研究領域) 教授 (2016), 一橋大学 連携教授 (2005–2014)

【専門領域】 音声学, 言語資源

【所属学会】 ISCA, IPA, 日本音声学会, 日本言語学会, 日本音響学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 日本音声学会 会長, International Phonetic Association (IPA): council member

【受賞歴】

2012: 日本音声学会優秀論文賞 (「PNLP の音声的形状と言語的機能」, 『音声研究』, 15 (1))

2012: 国立国語研究所第 4 回所長賞

2010: 日本音声学会優秀論文賞 (「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」, 『音声研究』, 14 (2))

2010: 国立国語研究所第 1 回所長賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー
- ・ 基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 挑戦的研究 (萌芽)「定量的分析による条件異音存立基盤の再検討: 音韻論スリム化の試み」, 19K21641: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (B)「リアルタイム MRI 動画による日本語調音運動データベースの構築と公開」, 20H01265: 研究代表者
- ・ 基盤研究 (B)「日常会話の韻律モデル構築に向けた話者混在音声の分析基盤」, 19H01252: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

前川喜久雄

『東京外国語大学国際日本学研究報告 X』, 東京外国語大学大学院国際日本学研究院, 2020.9.30.

《論文・ブックチャプター》

前川喜久雄, 西川賢哉, 浅井拓也, 能田由紀子, 正木信夫, 島田育廣, 竹本浩典, 北村達也, 斎藤純男, 籠宮隆之, 石本祐一, 菊池英明, 藤本雅子, 八木豊

「リアルタイム MRI 動画日本語調音運動データベースの設計」, 『言語資源活用ワークショップ 2020 発表論文集』, pp. 209–230, 2020.9.

能田由紀子, 北村達也, 浅井拓也, 竹本浩典, 前川喜久雄

「EMA による調音運動観測のための咬合面と口蓋の計測法」, 『日本音響学会 2021 年春季研究発表会』, 2021.3.

【講演・口頭発表】

前川喜久雄, 西川賢哉, 浅井拓也, 能田由紀子, 正木信夫, 島田育廣, 竹本浩典, 北村達也, 斎藤純男, 籠宮隆之, 石本祐一, 菊池英明, 藤本雅子, 八木豊

「リアルタイム MRI 動画日本語調音運動データベースの設計」, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.7.

前川喜久雄, 森大毅

「アクセント句頭の Fo 上昇量は tone 間距離で決まる」, 日本音声学会第 341 回研究例会, オンライン, 2020.12.5.

前川喜久雄

「データサイエンスが使えるようになるまで」, シンポジウムパネル, 日本語文法学会第 21 回大会, オンライン, 2020.12.13.

能田由紀子, 北村達也, 浅井拓也, 竹本浩典, 前川喜久雄

「EMA による調音運動観測のための咬合面と口蓋の計測法」, 日本音響学会 2021 年春季研究発表会, オンライン, 2021.3.10.

天野沢海, 並木崇宏, 宮川翔多, 後藤翼, 竹本浩典, 北村達也, 能田由紀子, 前川喜久雄

「日本語話者 20 名の rtMRI 動画における発話器官の輪郭抽出」, 日本音響学会 2021 年春季研究発表会, オンライン, 2021.3.10.

【研究調査】

- ・リアルタイム MRI 動画による日本語調音運動データの収集, 2020.7.22, 8.21, 9.10, 10.1, 11.20, 12.28.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ Editorial board member of *Speech Communication* (Elsevier), 2005–.
- ・ Editorial board member of *Language & Linguistics* (John Benjamins), 2016–.
- ・ Editorial board member of *Journal of the International Phonetics Association* (Cambridge Univ. Press), 2017–.
- ・ 中央研究院語言学研究所 (台湾) Advisory committee member, 2017–.
- ・ 情報システム研究機構統計数理研究所 運営委員, 2018–.
- ・ 上智大学 非常勤講師

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】 博士 (学術) (東京工業大学, 2016)

【学歴】 東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991), 東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程単位取得満期退学 (2015)

【職歴】 富士通株式会社システムエンジニア (1991), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター 研究員 (1991), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 主任研究員 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2017)

【専門領域】 日本語学

【所属学会】 計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会, 日本言語学会

【学会等の役員・委員】 情報処理学会情報規格調査会 学会試行標準 WG3 小委員会主査・学会試行標準専門委員会委員長・学会試行標準 WG9 小委員会委員, 日本特許情報機構 産業日本語研究世話人, 言語処理学会編集委員, 計量国語学会 理事, 日本言語学会 倫理委員

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「コーパス分析による書き言葉的「硬・軟」度と話し言葉的「硬・軟」度の語への付与」, 20K00655: 研究代表者
- ・基盤研究 (B) 「ソーシャルメディアにおける市民意見を活用した都市サービスの評価の自動生成」, 19H04420: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

小椋秀樹, 富士池優美, 宮内佐夜香, 金愛蘭, 柏野和佳子

『日本語の語彙・表記』, 朝倉書店, 2020.5.7.

《論文・ブックチャプター》

柏野和佳子

「コーパスによる現代の語誌研究—『日本語日常会話コーパス』を活用した国語辞典の改訂—」, 宮地裕, 甲斐睦朗 (監修) 『日本語学』 2020 年夏号, 明治書院, 78–82 頁, 2020.6.10.

《コーパス・データベース類》

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香

「『日本語日常会話コーパス』 2020 年度モニター公開中納言版」, 2021.2.17.

小磯花絵, 天谷晴香, 石本祐一, 居關友里子, 白田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴, 西川賢哉, 渡邊友香

「『日本語日常会話コーパス』 内部公開版 202103」 (関係者限定公開), 2021.3.29.

山崎誠, 柏野和佳子, 宮崎由美

「BCCWJ の小説会話文に対する話者情報アノテーションデータ ver.1.1」 (研究者限定公開), 2021.3.30.

《その他の出版物・記事》

柏野和佳子

「ことばの辞典「ヒヤリ・ハット」」, 月刊誌「安全衛生のひろば HIROBA」, 2021.1.1.

柏野和佳子

「ことばの辞典「普通」」, 月刊誌「安全衛生のひろば HIROBA」, 2021.2.1.

柏野和佳子

「ことばの辞典「オタク」」, 月刊誌「安全衛生のひろば HIROBA」, 2021.3.1.

【講演・口頭発表】

柏野和佳子

「『日本語日常会話コーパス』モニター公開版に見られる感動詞以外の応答表現」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.9.

柏野和佳子

「コーパスによる語彙教育の精緻化」, 招待講演, 専門日本語教育学シンポジウム, オンライン, 2021.3.6.

柏野和佳子, 平本智弥, 関洋平

「市民意見収集のための「保育園」に関するツイート投稿者の属性表現の抽出と属性の推定」, ポスター発表, 言語処理学会第 27 回年次大会 (NLP2021), オンライン, 2021.3.15.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・ニホンゴ探検 2020 (主催: 国立国語研究所), オンライン, 2020.8.19–22.
- ・国立国語研究所オープンハウス 2020 (主催: 国立国語研究所), オンライン, 2020.9.10.
- ・シンポジウム「日常会話コーパス」VI (主催: 日常会話コーパスプロジェクト), オンライン, 2021.3.4.

【一般向けの講演・セミナーなど】

柏野和佳子

「国語辞典は楽しい!」, 毎日文化センター オンライン講座, オンライン, 2021.3.19.

柏野和佳子

「めざせ! 辞書引きの達人」, ニホンゴ探検 2020, オンライン, 2020.8.22.

柏野和佳子

「『分類語彙表』とは一意味の世界の分類」, 国立国語研究所 オープンハウス 2020, オンライン (YouTube で公開), 2020.9.10.

柏野和佳子

「『岩波国語辞典』オノマトペカルタであそぼう!」, 大学共同利用機関シンポジウム 2020, オンライン (YouTube で公開), 2020.10.18.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「「本の仕事場」辞書編纂者・柏野和佳子さん」, 読売新聞 (夕刊), 2020.4.20.
- ・取材記事: 「(ことばサプリ) せわしない「ない」だけど否定じゃない」, 朝日新聞 (朝刊), 2020.11.21.
- ・取材記事: 「新明解 VS 岩国 辞書のつくり手対談」, 毎日新聞 (朝刊), 2021.3.29.
- ・国立国語研究所研究情報誌『ことばの波止場』研究情報誌編集委員会: 編集委員長

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

柏野和佳子, 小磯花絵

「『中納言』講習会」, 第 10 回コーパス利用講習会, オンライン, 2021.3.4.

山口 昌也 (やまぐち まさや) 研究系 (音声言語研究領域) 准教授

【学位】 博士 (工学) (東京農工大学, 1998)

【学歴】 東京農工大学工学部数情報工学科卒業 (1992), 東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了 (1994), 東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了 (1998)

【職歴】 東京農工大学工学部 助手 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同 言語資源グループ 研究員 (2006), 同 主任研究員 (2008), 人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教 (2009), 同 准教授 (2011), 同 研究系 (音声言語研究領域) 准教授 (2016)

【専門領域】 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

【所属学会】 日本教育工学会, 日本語学会, 言語処理学会, 情報処理学会

【受賞歴】

2007: 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (C) 「多段階の振り返りに対応した協同型教育活動支援システムに関する研究」, 20K03116: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) (延長) 「ビデオアノテーションを利用した協同型実習活動支援システムに関する研究」, 17K01105: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

森篤嗣, 山口昌也

「挙手行動に代わる意見表明方法の提案: 小学校におけるプレゼンテーション相互評価を例に」, 『社会言語科学』, 23 巻 1 号, 147-161 頁, 2020.9, DOI: 10.19024/jajls.23.1_147.

山口昌也, 大塚裕子

「観察支援システム FishWatchr を用いた「自律型対話プログラム」の実践方法の改善と評価」, 情報処理学会論文誌『教育とコンピュータ』, 7 巻 1 号, 1-13 頁, 2021.2.22.

《コーパス・データベース類》

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr (ver.0.9.16)」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fw>, 2020.7.25.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ」(2 回更新), <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?aozora>, 2020.10.2.

山口昌也

「観察支援ツール FishWatchr Mini (ver.1.12)」, <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?fwm>, 2020.10.13.

山口昌也

「『日本語日常会話コーパス』内部公開版 202103」(検索システム『ひまわり』部分を担当), 関係者限定公開, 2021.3.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』」(ver.1.6.7-1.6.9, ver.1.7.a20200625, ver.1.7b01, 02) (6 回更新), <https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?himawari>, 2021.3.17.

【講演・口頭発表】

山口昌也, 柳田直美

「フィッシュボウル方式のディスカッション練習に向けたモバイル型観察支援システムの拡張と観察

活動の検証」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.9.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』講習会」, 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究 第11回コーパス利用講習会, オンライン, 2021.3.5.

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』チュートリアルビデオ」(22本公開), https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?vt_himawari.

《クロスアポイント制度》

- ・東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授

石黒 圭 (いしぐろ けい) 研究系(日本語教育研究領域) 教授, 領域代表

【学位】 博士(文学)(早稲田大学, 2008)

【学歴】 一橋大学社会学部卒業(1993), 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了(1995), 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導修了(1999)

【職歴】 一橋大学留学生センター 講師(1999), 同 助教授(2004), 一橋大学国際教育センター 准教授(2010), 同 教授(2013), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 准教授(2015), 同 教授(2015), 同 研究系(日本語教育研究領域) 教授, 領域代表(2016), 同 研究情報発信センター長(2018)

【専門領域】 日本語学, 日本語教育学

【所属学会】 専門日本語教育学会, 日本語学会, 日本語教育学会 日本語文法学会, 日本文体論学会, 表現学会, 早稲田日本語学会

【学会等の役員・委員】 表現学会 理事, 日本語学会 評議員, 日本語文法学会 評議員, 専門日本語教育学会 編集幹事

【受賞歴】

- 2020: 第20回国立国語研究所所長賞
- 2019: 2018年度秋学期早稲田大学ティーチングアワード
- 2018: 第15回日本語教育学会学会活動貢献賞
- 2018: 第16回国立国語研究所所長賞
- 2009: 第7回日本語教育学会奨励賞

【2020年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: リーダー

【2020年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(B)「人と物語が会合う次元の開拓—短編物語データベース構築を通じた分野横断的研究—」, 20H01764: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「文章の執筆過程の分析に基づく大学初年次生の文章産出能力の実証的研究」, 20K02974: 研究分担者
- ・基盤研究(A)「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」, 19H00627: 研究分担者
- ・基盤研究(B)「本語読解・ライティングの方法に影響する母語・母文化の教育的背景要因に関する研究」, 19H01269: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「中国人日本語学習者のビジネス・コミュニケーションの困難点の解明」, 18K00704: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供研究」, 18K00731: 研究分担者
- ・挑戦的研究(萌芽)「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 17K18503: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

石黒圭

『リモートワークの日本語—最新オンライン仕事術—』, 小学館新書, 2020.7.30.

石黒圭, 熊野健志

『ビジネス文書の基礎技術—実例でわかる「伝わる文章」のしくみ—』, ひつじ書房, 2021.3.31.

《論文・ブックチャプター》

浅井達哉, 横野光, 柳瀬隆史, 岩崎拓也, 井上雄太, 田中啓行, 石黒圭

「クラウドソーシングの言語表現—ビジネス日本語研究におけるAI技術の活用—」, 『専門日本語教

育研究』, 22 号, 9–16 頁, 2020.12.31.

石黒圭

「論日語学习者如何习得接续词—通过与中文连词“然后”的比较」, 『日本学研究』, 31 卷, 59–75 頁, 2020.12.

《総説・解説など》

石黒圭

「李婷著『日本語教育におけるメタ言語表現の研究』, 『語文』, 168 卷, 68–69 頁, 2020.12.25.

《コーパス・データベース類》

石黒圭

「日本語学習者の文章理解過程データベース」(データ追加), <https://12-communication.ninjal.ac.jp/文章理解研究/>, 2020.12.

《その他の出版物・記事》

石黒圭

「学習者コーパスから見えてくる日本語学習者のコミュニケーションの姿」, 『ことばの波止場』, 2020.9.30.

石黒圭

「会議出席者の積極的参加を促す「しかけ」の作り方」, 中央労働災害防止協会(編)『安全衛生のひろば HIROBA』, 2021.1.1.

石黒圭

「バーチャルな空間での「3 密」の作り方」, 中央労働災害防止協会(編)『安全衛生のひろば HIROBA』, 2021.2.1.

【講演・口頭発表】

石黒圭

「日本語学習者のフィラーが母語話者に与える印象」, シンポジウムパネル(招待・指名), NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」, オンライン, 2020.10.3.

井伊菜穂子, 石黒圭

「上級日本語学習者の接続詞「でも」の使用実態と困難点」, シンポジウムパネル(招待・指名), シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！ —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の日本語教育への生かし方—」, オンライン, 2020.11.21.

鈴木英子, 石黒圭

「雑談に出現する「やはり」の使用実態—『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の調査から—」, シンポジウムパネル(招待・指名), シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！ —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の日本語教育への生かし方—」, オンライン, 2020.11.21.

石黒圭

「オノマトペの多ジャンル性—日常会話から文学作品まで—」, 招待講演, 台湾日本語文学会・東呉大学日本語文学科 2020 年台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウム東呉大学日本語学科修士課程創立 40 周年記念—日本語文学研究の境界線—, オンライン(台湾), 2020.12.12.

八木下孝雄, 高田智和, 石黒圭

「台湾学術雑誌データ追加による「日本語研究・日本語教育文献データベース」の拡張」, 招待講演(八木下孝雄), 台湾日本語文学会・東呉大学日本語文学科 2020 年台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウム東呉大学日本語学科修士課程創立 40 周年記念—日本語文学研究の境界線—, オンライン(台湾), 2020.12.12.

【研究調査】

- ・作文データ収集(20 名)(北京語言大学(中国)), 2020.4, 5, 6, 11, 2021.3.
- ・作文データ収集(20 名)(国立政治大学(中国)), 2020.4, 6, 11, 2021.3.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・NINJAL 国際シンポジウム「第 11 回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11)」(主催: 日本語教育研究領域), オンライン, 2020.12.19-20.

【一般向けの講演・セミナーなど】

石黒圭, 岩崎拓也

「国語研の日本語教育研究が目指すもの」, 国立国語研究所オープンハウス 2020, オンライン, 2020.9.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「「等」の正体」, 朝日新聞, 2020.6.17.
- ・取材記事: 「そのチャットでは、本音が交わされていますか? 「非対面コミュニケーション」の時代に人事が取り組むべきこととは」, 日本の人事部, 2020.6.24.
- ・取材記事: 「日本語研究の第一人者が考える絶対失敗しない「オンライン会議」の運営」, 日刊工業新聞, 2020.8.14.
- ・取材記事: 「ビデオ通話を常時接続で「コミュ不足」解消する企業も監視ではなく「声かけ」しやすさに重点」, AERAdot, 2020.9.6.
- ・取材記事: 「文化講演会「大人のための言い換え力」」, NHK ラジオ, 2020.11.15.
- ・文化庁文化審議会国語分科会国語課題小委員会委員
- ・東京都教育庁「学びの基盤」プロジェクトチーム委員
- ・光村図書出版『小学校国語』教科書編集委員

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

石黒圭

「日本語の接続詞—その用法の広がり—」, 国立国語研究所言語学レクチャーシリーズ, オンライン (YouTube), 2020.4.7.

石黒圭

「日本語の接続詞」, 国立国語研究所日本語学講習会, オンライン (韓国), 2020.10.10.

石黒圭

「日本語学習者の作文を分析する」, 第 37 回 NINJAL チュートリアル, オンライン (インド), 2020.11.28.

《連携大学院》

- ・一橋大学大学院言語社会研究科 連携教授 (主指導: 博士課程 5 名, 修士課程 6 名)

《博士論文審査委員》

- ・一橋大学大学院: 主査 2 件 (2020.11, 2021.3), 副査 1 件 (2021.3)

宇佐美 まゆみ (うさみ まゆみ) 研究系 (日本語教育研究領域) 教授

【学位】 博士 (教育学 (Ed.D)) (ハーバード大学, 1999)

【学歴】 千葉大学教育学部教育心理学科 (1, 2 年次在籍), 立教大学文学部心理学科に 3 年次編入後卒業 (1981), 慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程修了 (1984), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科修士課程修了 (1991), ハーバード大学教育学部大学院人間発達・心理学科博士課程単位取得修了 (1992)

【職歴】 財団法人交流協会台北事務所 日本語教育専門家 (1984), コルビー大学現代外国語学部 客員講師 (1987), シカゴ大学東アジア言語・文化学部 専任講師 (1988), 昭和女子大学文学部 専任講師 (1993), 東京外国語大学外国語学部 助教授 (1997), 同 教授 (2002), 東京外国語大学大学院地域文化研究科言語教育学講座 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2005), 東京外国語大学総合国際学研究院 教授 (大学院改組に伴う配置換え) (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所研究系 (日本語教育研究領域) 教授 (2016)

【専門領域】 言語社会心理学, 談話研究, 語用論, 日本語教育学

【所属学会】 社会言語科学会, 日本語教育学会, 日本語用論学会, 日本語学会, 日本心理学会, 日本社会心理学会, ヨーロッパ日本語教師会, 言語処理学会, 人工知能学会, 大学英語教育学会, 日本語プロフィシエンス研究学会, 計量国語学会, 大学日本語教員養成課程研究協議会, International Association of Applied Linguistics (IAAL/AILA), International Pragmatics Association (IPrA)

【学会等の役員・委員】 日本語用論学会 理事, 日本語ジェンダー学会 評議員, 言語社会心理学研究会 (SPLaD) 代表

【受賞歴】

2021: HAI シンポジウム 2021 Impressive Short-paper Award (優秀論文賞 (ショート): 「対話型擬人化エージェントの言語的配慮に対する受容性の異文化比較に関する研究—クラウドソーシングによる大規模印象調査—」)

2019: IEEE Computational Intelligence Society Young Researcher Award (“Design of linguistic behaviors according to driver attributes support agent based on politeness theory”)

2018: ファジィシステムシンポジウム 2018 ポスター・デモセッション最優秀発表賞 (「ポライトネス理論に基づく運転支援エージェントの運転者属性と運転状況に応じた言語的振る舞いの設計」)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: リーダー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 18H03581: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—」, 18K18685: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「観光接触場面のツーリスト・トーク: ツーリズムのためのやさしい日本語の開発と実践」, 18K00718: 研究分担者
- ・ROIS 機構間連携・文理融合プロジェクト (FS: feasibility study) 「ポライトネスにより円滑なコミュニケーションを実現する社会的エージェントの開発」: 研究参加
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「人間機械共生社会を目指した対話知能システム学」公募研究「ポライトネス理論に基づく親和性の高い対話システムの開発—自然会話コーパスから—」, 20H05572: 研究協力者

【研究業績】

《著書・編書》

宇佐美まゆみ

『日本語の自然会話分析 BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明』, くろしお出版, 2020.10.16.

《論文・ブックチャプター》

東中竜一郎, 船越孝太郎, 稲葉通将, 角森唯子, 高橋哲朗, 赤間怜奈, 宇佐美まゆみ, 川端良子, 水上雅博
「対話システムライブコンペティションから何が得られたか」, 『人工知能学会誌』, 35 巻 3 号, 333–343 頁,
2020.5, DOI: 10.11517/jjsai.35.3_333.

宇佐美まゆみ

「教材作成支援機能を持つ共同構築型 WEB 教材—NCRB (Natural Conversation Resource Bank) の展開—」, 『Japanese Language Education in South Asia: Issues & Challenges (予稿集)』, 255–276 頁, 2020.8.

宇佐美まゆみ, 張未未

「日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者による「バランスをとるための笑い」の分析—『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』を用いて—」, 『言語資源活用ワークショップ発表論文集』, 5 号, 301–304 頁, 2020.9, DOI: 10.15084/00003170.

宇佐美まゆみ

「第 1 章 語用論的分析に適した『BTSJ 日本語自然会話コーパス』構築の趣旨と特徴」, 宇佐美まゆみ (編) 『日本語の自然会話分析 BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明』, くろしお出版, 1–19 頁, 2020.10.16.

宇佐美まゆみ

「教材作成支援機能を持つ共同構築型 WEB 教材—NCRB (Natural Conversation Resource Bank) の展開—」, Arun Shyam (ed.) *Japanese Language Education in South Asia—Issues and Challenges—*, pp. 252–272, The English and Foreign Languages University Press, 2021.1.

宇佐美まゆみ

「相手とのちょうどいい距離感を掴む—ディスコース・ポライテネス理論 (特集: アサーションをはじめよう—コミュニケーションの多元的世界へ)—」, 『臨床心理学』, 21 巻 2 号, 196–202 頁, 2021.3.10.

《コーパス・データベース類》

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2021 年 3 月版」 (データ追加), 2021.3.31.

【講演・口頭発表】

宇佐美まゆみ, 張未未

「雑談における母語話者と非母語話者の笑いの使用傾向の分析: 『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』を用いて」, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度春季大会, オンライン, 2020.4.30.

宇佐美まゆみ, 張未未

「雑談における日本語学習者による不自然な終助詞「ね」, 「よ」, 「よね」—『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018 年版』を用いて—」, 国立国語研究所第 210 回 NINJAL サロン, オンライン, 2020.5.26.

宇佐美まゆみ, 伊東祐郎, 山本忠行, 林さと子

「21 世紀の日本語教育学を考える—視点としての「学」という観点から—」, パネルセッション (パネル), 日本語教育学会 2020 年度春季大会, 予稿集収録による発表成立 (感染症拡大のため), 2021.5.30–31.

宇佐美まゆみ

「視点としての「(日本語教育) 学」という捉え方の必然性」, シンポジウムパネル, 2020 年度日本語教育学会春季大会 パネルセッション① (企画: 宇佐美まゆみ) 「21 世紀の日本語教育学を考える—視点としての「学」という観点から—」, オンライン, 2020.5.30.

宇佐美まゆみ, 張未未

「日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者による「バランスをとるための笑い」の分析—『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』を用いて—」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.9.

Mayumi Usami

“The concepts of ‘time’ and ‘face credit’ in discourse politeness theory: New perspectives on politeness behavior between acquaintances”, 9th International Symposium on Intercultural, Cognitive and Social Pragmatics (EPICS), オンライン (スペイン), 2020.11.4-6.

宇佐美まゆみ

「人間同士の自然会話分析への多角的アプローチ—総合的会話分析と対話データの自動処理—」, 招待講演, 第 91 回言語・音声理解と対話処理研究会, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会 (SLUD), オンライン, 2021.3.1.

宇佐美まゆみ, 張未未

「観光接触場面における日本語インタラクション—ロシア人留学生の宿泊場面を例に—」, 言語管理研究会 多言語社会と言語問題シンポジウム 2020, オンライン, 2021.3.7.

宇佐美まゆみ

「ウィズコロナ時代のコミュニケーションを考える—SDGs の達成に向けて社会言語科学に何ができるか—」 (人間-AI 共生社会における円滑なコミュニケーションのために談話研究が貢献できること—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—, ワorkshop 2), ワorkshop パネル, 第 45 回社会言語科学会研究大会, オンライン, 2021.3.13.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- 日本語教育学会 2020 年度春季大会パネルセッション①「21 世紀の日本語教育学を考える—視点としての「学」という観点から—」 (主催: 日本語教育学会), オンライン, 2020.5.30.
- シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる! —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方—」 (主催: 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明, 共催: 日本語学習者の日本語理解の解明, 科研費基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 言語社会心理学研究会 (SPLaD)), オンライン, 2020.11.21.
- 第 45 回社会言語科学会研究大会 ワorkshop 2 「ウィズコロナ時代のコミュニケーションを考える—SDGs の達成に向けて社会言語科学に何ができるか—」, オンライン, 2021.3.13.
- 第 4 回会話・談話研究シンポジウム「『BTSJ 日本語自然会話コーパス』と『自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材 NCRB』の展開」 (主催: 日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明 (サブプロジェクト『日本語学習者の日本語使用の解明』), 共催: 基盤研究 (A) 「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」, 挑戦的研究 (萌芽) 「コミュニケーション能力を高める自然会話教材の高度共有化—共同体の構築に向けて—」), オンライン, 2021.3.27.

【一般向けの講演・セミナーなど】

宇佐美まゆみ

「BTSJ 日本語自然会話コーパスと自然会話を素材とする WEB 教材 NCRB (Natural Conversation Resource Bank)—その活用法—」, 早稲田大学日本語教育研究科小林ミナ研究室主催 (ゲストセッション), オンライン, 2020.7.30.

宇佐美まゆみ

「自然会話リソースバンク (NCRB) と自然会話を素材とする教材の活用法—デモンストレーションを交えて—」, オーストリア日本語教師会第 51 回定例勉強会, オンライン, 2020.10.17.

宇佐美まゆみ

「自然会話データを使った日本語教育—BTSJ 日本語自然会話コーパスを例に—」, オーストリア日本語教師会第 51 回定例勉強会, オンライン, 2020.10.17.

宇佐美まゆみ

『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』の特徴と活用方法—「フォルダの意味」と「会話データ情報一覧シート」を中心に—, シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！ —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方—, オンライン, 2020.11.21.

張未未, 宇佐美まゆみ

「雑談における「なんか」の使用実態—日本語母語話者と学習者による使用の違いを中心に—, シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！ —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方—, オンライン, 2020.11.21.

宇佐美まゆみ

「対話システムと日本語教育の関係とは?」, 国立国語研究所令和 2 年度国立国語研究所日本語教師セミナー, オンライン, 2021.2.27.

宇佐美まゆみ

『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の開発の趣旨と特徴—NCRB との連携, 国立国語研究所第 4 回会話・談話研究シンポジウム『BTSJ 日本語自然会話コーパス』と『自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材 NCRB』の展開, オンライン, 2021.3.27.

宇佐美まゆみ

「自然会話リソースバンク (Natural Conversation Resource Bank: NCRB) 構築の趣旨」, 国立国語研究所第 4 回会話・談話研究シンポジウム『BTSJ 日本語自然会話コーパス』と『自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材 NCRB』の展開, オンライン, 2021.3.27.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・出演:「ことばの中に探す SDGs~ことばの力でみんなに優しい暮らし~」, サステナ*デイズ(TOKYO FM), 2021.1.28.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

宇佐美まゆみ

「総合的会話分析」による人間の相互作用の分析, 第 15 回, 第 16 回 BTSJ 活用方法講習会, オンライン, 2021.2.6.

宇佐美まゆみ

「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」, 国立国語研究所第 39 回 NINJAL チュートリアル, オンライン, 2021.2.20.

《大学院非常勤講師》

- ・國學院大學大学院
- ・城西国際大学大学院

《若手研究者の受入》

- ・国立国語研究所補佐・共同研究員: 9 人

野田 尚史 (のだ ひさし) 研究系(日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹

【学位】 博士(言語学)(筑波大学, 1999)

【学歴】 大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業(1979), 大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了(1981), 大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退(1981)

【職歴】 大阪外国語大学国語学部 助手(1981), 筑波大学文芸・言語学系 講師(1985), 大阪府立大学総合科学部 講師(1991), 同 助教授(1993), 同 教授(1999), 大阪府立大学人間社会学部 教授(2005), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授(2012), 同 センター長(2015-2016), 同 研究系(日本語教育研究領域) 教授, 研究主幹(2016)

【専門領域】 日本語学, 日本語教育学

【所属学会】 日本語学会, 日本語教育学会, 日本言語学会, 日本語文法学会, 社会言語科学会, 言語処理学会, 計量国語学会, 日本語用論学会, 関西言語学会, 専門日本語教育学会, 韓国日本語學會, ヨーロッパ日本語教師会, American Association of Teachers of Japanese

【学会等の役員・委員】 日本語学会 評議員, 日本語教育学会 審査・運営協力員, 日本言語学会 常任委員・評議員, 日本語文法学会 評議員, 社会言語科学会 研究大会発表賞選考委員, 韓国日本語學會 一般理事, 言語系学会連合 運営委員会副委員長

【受賞歴】

2006: 第4回日本語教育学会奨励賞(日本語教育学会)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「とりたて表現」: リーダー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・挑戦的研究(萌芽)「日本語聴解用辞書の開発を目的とした日本語学習者の聴解実態の実証的研究」, 17K18503: 研究代表者
- ・基盤研究(B)「自閉症を中心とした発達障害児の音韻体系の言語学・音声学的研究」, 18H00666: 研究分担者

【研究業績】

《著書・編書》

窪菌晴夫, 野田尚史, プラシャント・パルデン, 松本曜

『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 2021.2.22.

《論文・ブックチャプター》

野田尚史, 村田裕美子, 中島晶子, 白石実

「ヨーロッパの日本語学習者の読解における辞書使用の問題点とその指導」, 『ヨーロッパ日本語教育』, 24号, 185-202頁, 2020.7.6.

野田尚史, 高澤美由紀

「スペイン語アルファベットによる日本語音声表記」, 『国立国語研究所論集』, 19号, 139-166頁, 2020.7.31, DOI: 10.15084/00002833.

野田尚史

「日本語学習者の読解能力」, 『日本語学』, 39巻3号, 16-27頁, 2020.9.1.

野田尚史

「「は」と「が」」, 井島正博(編)『日本語ライブラリー 現代語文法概説』, 朝倉書店, 55-65頁, 2020.11.1.

野田尚史

「日本語の文の主題と言語類型論」, 窪蘭晴夫, 野田尚史, プラシヤント・パルデシ, 松本曜 (編) 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 開拓社, 74-97 頁, 2021.2.22.

《コーパス・データベース類》

野田尚史, 任ジェヒ, 賈黎黎, 桑原陽子, 近藤めぐみ, 邵艶紅, 白石実, 中島晶子, 花田敦子, 福田晶子, 藤原未雪, 向井裕樹, 村田裕美子, 守時なぎさ, チョウ・ミンヨン, 王雪竹

「日本語非母語話者の読解コーパス」 (データ追加), <https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/dokkai/index.html>, 2021.3.31.

野田尚史, 阪上彩子, 島津浩美, 中尾有岐

「日本語非母語話者の聴解コーパス」 (データ追加), <https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/choukai/index.html>, 2021.3.31.

野田尚史, 桑原陽子, 北浦百代, 任ジェヒ, 加藤陽子, 松岡洋子, 吉本由美, 小西門, 山口美佳, 王麗莉, 塩田寿美子, 橋本佳子, 藤井明子, 丹羽順子, 蘇钰甯, 山本晃彦, 花田敦子

「日本語学習者用読解教材「日本語を読みたい!」」 (教材追加), <http://www.nihongo-tai.com/japanese/yomu/>, 2021.3.31.

野田尚史, 松崎寛, 太原ゆか, 阪上彩子, 萩原章子, 島津浩美, 中山英治, 奥野由紀子, 吉川景子, 中尾有岐, 小池悠加, 日比伊奈穂, 高山弘子, 村田裕美子, 久保輝幸, 首藤美香, 笠井恵子, 韓蘭靈, 鋤野亜弓, 梅澤薫, 松本妙子, 横山咲子

「日本語学習者用聴解教材「日本語を聞きたい!」」 (教材追加), <http://www.nihongo-tai.com/japanese/kiku/>, 2021.3.31.

【講演・口頭発表】

神村初美, 野田尚史

「介護福祉士国家試験で誤答を誘発する問題文とその読み誤り—インドネシア人 EPA 候補者に対する調査から—」, 2020 年度日本語教育学会春季大会, 予稿集収録による発表成立 (感染症拡大のため), 2020.5.31.

任ジェヒ, 野田尚史

「韓国語を母語とする日本語学習者の読解における推測ストラテジー」, 韓国日本語学会第 41・42 回統合学術大会, オンライン (漢陽 Cyber 大・韓国), 2020.9.19.

野田尚史

「日本語学習者の配慮の表現・行動から出発するコミュニケーションの対照研究」, シンポジウムパネル, NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」, 国立国語研究所, 2020.10.3.

野田尚史

「言語系学会連合 10 年の活動と今後の展望」, シンポジウムパネル (招待), 言語系学会連合 2020 年度公開特別シンポジウム「緊急時の遠隔教育・遠隔学習における言語学と言語教育」, オンライン, 2021.3.7.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・第 11 回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11) (主催: 国立国語研究所, 共催: 日本語実用言語学国際会議者), オンライン, 2020.12.19.
- ・シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」 (第 1 回) (主催: 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」とりたて表現班, 共催: 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」, 方言文法研究会), オンライン, 2021.3.6.
- ・シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」 (第 2 回) (主催: 「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」とりたて表現班, 共催: 「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」, 方言文法研究会), オンライン, 2021.3.21.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野田尚史

「コミュニケーションの観点から見た日本語学習者の日本語」, 福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座, オンライン, 2021.1.10-11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・文化審議会 委員, 文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 副主査
- ・文化庁「日本語教育人材養成・研修カリキュラム等開発及び日本語教育人材の研修プログラム普及促進事業」企画・評価会議 委員
- ・日本語教師の資格に関する調査研究協力者会議 (文化庁) 委員
- ・日本語教育能力検定試験 実施委員会委員
- ・日本放送協会放送文化研究所 放送用語委員会委員
- ・記事:「[研究者紹介: 野田尚史] 目的に合わせたさまざまな文法を求めて」, 『国語研 ことばの波止場』9, 2021.3.

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

野田尚史

「読解における日本語の難しさ」, 国立国語研究所日本語学講習会, オンライン (インド), 2020.10.17.

野田尚史

「日本語学習者は日本語の何が難しいのか? —日本語学習者と日本語教師に対する調査から—」, 2020年度国立国語研究所日本語教師セミナー (海外), オンライン (ブラジル), 2020.11.15.

野田尚史

「これからの日本語教育—技能別・目的別の教育—」, 日本語学校初任日本語教員のためのスキルアップ研修, オンライン, 2020.12.7.

《大学院非常勤講師 (集中講義)》

- ・大阪府立大学大学院

《大学院非常勤講師》

- ・拓殖大学大学院

《博士論文審査委員》

- ・拓殖大学大学院: 副査 (2021.1).

野山 広 (のやま ひろし) 研究系(日本語教育研究領域) 准教授

【学位】 修士(文学)(早稲田大学, 1988), 修士(日本語応用言語学)(モナシュ大学, 1995), 修士(教育学)(早稲田大学, 1996)

【学歴】 早稲田大学卒業(1985), 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了(1988), 豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了(1995), 早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了(1996), 早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学(2001)

【職歴】 文化庁文化語課 専門職員(日本語教育調査官)(1997), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員(2004), 同 領域長(2005), 同 整備普及グループ長(2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員(2009), 同 准教授(2010), 同 研究系(日本語教育研究領域) 准教授(2016)

【専門領域】 応用言語学, 日本語教育学, 基礎教育保障学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究

【所属学会】 日本語教育学会, 基礎教育保障学会, 異文化間教育学会, 移民政策学会, 社会言語科学会, ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】 基礎教育保障学会 常任理事・副会長, 日本語教育学会編集委員会 副委員長, 異文化間教育学会 理事(企画・交流委員会副委員長), 多文化社会専門職機構 代表理事, 日本語プロフィシエンシー研究学会 監事, 港区国際化推進アドバイザー会議 委員長(座長), 立川市第4次多文化共生推進プラン検討会議 会長

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究(A)「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」, 19H00627: 研究代表者
- ・基盤研究(C)「中国人日本語学習者の言語習得過程の実証的研究と教育的資源の提供」, 18K00731: 研究分担者
- ・基盤研究(C)「夜間中学における多様な生徒集団がもたらす教育効果の普遍化に向けた学際的研究」, 20K02821: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

馬淵仁, 工藤和宏, 野山広

「異文化間教育研究における政策と研究者の役割—研究の総括—」, 『異文化間教育』, 51号, 1-21頁, 2020.6.20.

【講演・口頭発表】

野山広, 村田晶子

「秋田県に定住した外国人の言語生活と日本語会話力に関する縦断研究—調査結果と調査方法を振り返りつつ」, 国際教養大学, オンライン, 2020.6.20.

野山広

「日本語リテラシー(読み書き)調査の開発に向けた学際的研究—基礎教育を保障する社会の構築を目指して—」, 基礎教育保障学会, オンライン, 2020.9.5.

【研究調査】

- ・OPI(Oral Proficiency Interview)の枠組みを活用した, 日本語学習者の会話力, 言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査(秋田県能代市(主に電話インタビュー)), 2020.9, 2021.3.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・「I-JAS」完成記念シンポジウム/第5回コーパスワークショップ(主催:I-JASグループ), オンライン, 2020.6.20.
- ・JSPS 科研費 19H00627「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」キックオフ国際シンポジウム(オンライン)(主催:科研費(19H00627), 共催:基礎教育保障学会), オンライン, 2021.3.27.

【一般向けの講演・セミナーなど】

野山広

「多様な背景を持った地域住民の言語生活と将来設計再考～日本語の習得、摩滅、喪失の過程を視野に入れつつ～」, 一般社団法人多文化社会専門職機構 2020 年度オンライン講座(全6回) 多文化社会へのまなざし, オンライン, 2020.9.30.

野山広

「「多文化」を考える～地域の現場からみえてくること」, 港区国際交流協会日本語交流講座, オンライン, 2020.10.10.

野山広

「母語と日本語の狭間で～言語習得と喪失」, 2020 年度文化庁事業「難民のための日本語教育初任教师養成オンライン研修講座」, オンライン, 2020.12.9.

野山広

「基礎教育保障の重要性について改めて考える～約70年前の識字調査や国内外の関連事例を踏まえながら～」, 町田市生涯学習センター市民提案型事業「だれにでも「まなびの場」を! ～自主夜間中学ってなに?」, 町田市生涯学習センター, 2021.1.16.

前川喜平(講演者), 野山広(対談者・ファシリテーター)

「日本の義務教育は誰のため? ―夜間中学の現状から考える―」, 多文化共生社会における日本語教育研究会第17回(2020年度)研究会, オンライン, 2021.3.21.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・東京都立大学大学院
- ・東海大学大学院

岩崎 拓也 (いわさき たくや) 研究系 (日本語教育研究領域) 特任助教

【学位】 博士 (学術) (一橋大学, 2020)

【学歴】 京都外国語大学外国語学部日本語学科卒業 (2010), 一橋大学大学院言語社会研究科言語社会専攻修士課程修了 (2017), 一橋大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了 (2020)

【職歴】 吉林華橋外国語学院 外籍講師 (2011) 東北師範大学 中国赴日本国留学生予備学校 外籍講師 (2014–2015) 国立国語研究所日本語教育研究領域 プロジェクト非常勤研究員 (2017), 同 理論・対照研究領域 プロジェクト非常勤研究員 (2017), 同 研究系 (日本語教育研究領域) 特任助教 (2020)

【専門領域】 句読法, 表記論, 日本語教育

【所属学会】 日本語教育学会, 計量国語学会, 社会言語科学会

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: メンバー

【研究業績】

《著書・編書》

青木優子, 浅井達哉, 井伊菜穂子, 石黒圭, 井上雄太, 岩崎拓也, 熊野健志, 佐野彩子, 鈴木英子, 田中啓, 布施悠子, アンドレイ・ベケシュ, 蒙榘, 柳瀬隆史, 横野光

『ビジネス文書の基礎技術 実例でわかる「伝わる文章」のしくみ』, ひつじ書房, 2021.3.30.

《論文・ブックチャプター》

浅井達哉, 横野光, 柳瀬隆史, 岩崎拓也, 井上雄太, 田中啓行, 石黒圭

「クラウドソーシングの言語表現—ビジネス日本語研究における AI 技術の活用—」, 『専門日本語教育研究』, 22 号, 9–16 頁, 2020.12.31.

【講演・口頭発表】

岩崎拓也

「習熟度別に見た中国人日本語学習者の読点使用の分析」, 第 31 回第二言語習得研究会 (JASLA) オンライン大会, オンライン, 2020.12.12–13.

岩崎拓也

「中国人日本語学習者の接続詞直後の読点使用の分析」, NINJAL 国際シンポジウム・第 11 回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11), オンライン, 2020.12.19–20.

【研究調査】

- ・日本語の習得に関する調査 (東呉大学 (台北・台湾, オンライン)), 2021.3.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・取材記事: 「公用文の横書きのコンマ、時代遅れ? 68 年後の見直し案」, 朝日新聞デジタル, 2020.12.27.
- ・取材記事: 「横書きの公用文、「,」が「、」に? 70 年ぶり検討、国文化審議会」, 朝日新聞, 2021.3.21.

【大学院教育・若手研究者育成】

《大学院非常勤講師》

- ・東京学芸大学

福永 由佳 (ふくなが ゆか) 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員

【学位】 博士 (日本語教育) (早稲田大学, 2019)

【学歴】 金沢女子大学文学部英米文学科卒業 (1991), ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了 (1993), 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程研究指導終了により退学 (2018)

【職歴】 国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員 (2001), 同 日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員 (2006), 人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員 (2009), 研究系 (日本語教育研究領域) 研究員 (2016)

【専門領域】 日本語教育学, 社会言語学, 多言語使用, 識字, 移民に対する言語教育政策

【所属学会】 日本語教育学会, 社会言語科学会, 日本言語政策学会, 言語管理研究会

【学会等の役員・委員】 日本語教育学会 審査・運営協力委員

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」: メンバー
- ・ 基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・ 基盤研究 (A)「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」, 19H00627: 研究協力者
- ・ 基盤研究 (C)「言語レパートリーの構造と形成に関する研究」, 20K00623: 研究代表者
- ・ 研究成果公開促進費 (学術図書)「顕在化する多言語社会日本」, 20HP5062: 代表者

【研究業績】

《著書・編書》

福永由佳

『成人教育 (adult education) としての日本語教育: 在日パキスタン人コミュニティの言語使用・言語学習のリアリティから考える』, ココ出版, 2020.10.31.

福永由佳 (編)

『顕在化する多言語社会日本: 多言語状況の的確な把握と理解のために』, 三元社, 2020.12.20.

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「多言語化する日本人に関する一考察: 在日パキスタン人コミュニティの日本人家族成員のデータ分析をもとに」, 福永由佳 (編)『顕在化する多言語社会日本: 多言語状況の的確な把握と理解のために』, 三元社, 135-155 頁, 2020.12.20.

【講演・口頭発表】

福永由佳

「日本語能力は社会参加の資格なのか—在日パキスタン人言語調査の分析から—」, 2020 年度日本語教育学会春季大会, 予稿集掲載による発表成立 (感染症拡大のため), 2020.5.31.

横山詔一, 前田忠彦, 野山広, 福永由佳, 高田智和

「1948 年に実施された日本人の読み書き能力調査の得点分布をどう解釈するか」, 計量国語学会第 63 回大会, オンライン, 2020.9.19.

横山詔一, 前田忠彦, 野山広, 福永由佳, 高田智和

「国語研と統数研の連携起点「日本人の読み書き能力 1948 年調査」の現代的意義」, 第 214 回 NINJAL サロン, オンライン, 2020.9.29.

横山詔一, 前田忠彦, 野山広, 福永由佳, 高田智和

「日本人の読み書き能力 1948 年調査の非識字者率に対する新解釈」, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020.10.25.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・NINJAL 国際シンポジウム「第 11 回日本語実用言語学国際会議」(主催：国立国語研究所), オンライン, 2020.12.19–20.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・学術誌『言語政策』(日本言語政策学会)：査読協力
- ・学術誌『日本語教育』(日本語教育学会)：査読協力

浅原 正幸 (あさはら まさゆき) コーパス開発センター 教授

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2003)

【学歴】 京都大学総合人間学部基礎科学科卒業 (1998), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了 (2003)

【職歴】 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教 (2004), 国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授 (2012), 同 言語資源研究系 准教授 (2014), 同 コーパス開発センター 准教授 (2016), 同 コーパス開発センター 教授 (2019)

【専門領域】 自然言語処理

【所属学会】 言語処理学会, 言語学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】 言語処理学会 論文誌副編集長・第 26 回年次大会プログラム委員

【受賞歴】

- 2021: 言語処理学会第 27 回年次大会委員特別賞 (栗林樹生, 大関洋平, 伊藤拓海, 吉田遼, 浅原正幸, 乾健太郎「予測の正確な言語モデルがヒトらしいとは限らない」, 言語処理学会)
- 2021: 電気情報通信学会言語理解とコミュニケーション研究会 2020 年優秀発表賞 (久本空海, 山村崇, 勝田哲弘, 竹林佑斗, 高岡一馬, 内田佳孝, 岡照晃, 浅原正幸「chiVe: 製品利用可能な日本語単語ベクトル資源の実現へ向けて～形態素解析器 Sudachi と超大規模ウェブコーパス NWJC による分散表現の獲得と改良～」, 電気情報通信学会)
- 2020: 言語処理学会第 26 回年次大会言語資源賞 (浅原正幸, 加藤祥「BERTed-BCCWJ: 多層文脈化単語埋め込み情報を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』データ」, 言語資源協会・言語処理学会)
- 2019: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2018 年度論文賞 (浅原正幸「名詞句の情報の状態と読み時間について」)
- 2019: 言語処理学会第 25 回年次大会言語資源賞 (浅原正幸「クラウドソーシングによる単語親密度の推定」, 言語資源協会・言語処理学会)
- 2014: 言語処理学会論文誌『自然言語処理』2013 年度論文賞 (吉川克正, 浅原正幸, 松本裕治「Markov Logic による日本語述語項構造解析」)
- 2011: Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering (Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”)
- 2010: The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine) (Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, Yuji Matsumoto “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”)
- 2008: 言語処理学会第 14 回年次大会優秀発表賞 (岩立将和, 浅原正幸, 松本裕治「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」)
- 2003: 平成 15 年度情報処理学会山下記念研究賞 (浅原正幸「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」)

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」: メンバー
- ・共同利用型 (公募型) 共同研究プロジェクト「大規模コーパスを利用した言語処理の計算心理言語学的研究」: コーディネーター
- ・基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: リーダー
- ・高エネルギー加速器研究機構 平成 31 年度機構間連携・異分野連携研究プロジェクト「知性と認識の

情報神経物理学」：共同研究員

- ・生理学研究所生体機能イメージング共同利用「機械学習とfMRIを用いた抒情の生じるメカニズムの解明」
- ・共同研究(株式会社ワークスアプリケーションズ)「国語研ウェブコーパスを用いた分散表現データ構築」
- ・共同研究(株式会社リクルート)「日本語版 Universal Dependencies に基づく日本語依存構造解析モデルの研究開発」
- ・共同研究(株式会社レトリバ)「話し言葉に特化した分散表現データ構築」

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (A) 「日本語歴史コーパスに対する統語・意味情報アノテーション」, 17H00917: 研究代表者
- ・挑戦的研究 (萌芽) 「コーパスからの比喩表現収集とその分析」, 18K18519: 研究代表者
- ・基盤研究 (C) 「文体分析を目的としたコーパスの文書情報拡張及びその利用」, 18K00634: 研究分担者
- ・新学術領域研究 (研究領域提案型) 「言語による時間生成」, 18H05521: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「修辞機能と脱文脈化の観点からの日常談話テキスト分析」, 19K00588: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「多義語に対するプロトタイプ義の量的分析—クラウドソーシングによる大規模調査—」, 19K00591: 研究分担者
- ・基盤研究 (C) 「シソーラスの整備・拡張のための分類基準の作成と活用」, 19K00655: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Yohei Oseki and Masayuki Asahara

“Design of BCCWJ-EEG: Balanced Corpus with Human Electroencephalograph”, *JProceedings of the 12th Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2020)*, pp. 189–194, 2020.5.

Teruaki Oka, Yuichi Ishimoto, Yutaka Yagi, Takenori Nakamura, Masayuki Asahara, Kikuo Maekawa, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, Kumiko Sakoda, and Nobuko Kibe

“KOTONOA: A Corpus Concordance System for Skewer-Searching NINJAL Corpora”, *JProceedings of the 12th Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2020)*, pp. 7077–7083, 2020.5.

Teruo Hirabayashi, Kanako Komiya, Masayuki Asahara, and Hiroyuki Shinnou

“Automatic Creation of Correspondence Table of Meaning Tags from Two Dictionaries in One Language Using Bilingual Embedding”, *Proceedings of the 13th Workshop on Building and Using Comparable Corpora*, pp. 22–28, 2020.5.

宮内拓也, 浅原正幸

「日本語における名詞句の情報構造と語順の相関についての統計的検討」, 『自然言語処理』, 27 巻 2 号, 361–381 頁, 2020.6, DOI: 10.5715/jnlp.27.361.

Lis Pereira, Xiaodong Liu, Fei Cheng, Masayuki Asahara, and Ichiro Kobayashi

“Adversarial Training for Commonsense Inference”, *Proceedings of the 5th Workshop on Representation Learning for NLP*, pp. 55–60, 2020.7, DOI: 10.18653/v1/2020.repl4nlp-1.8.

Kanako Komiya, Daiki Yaginuma, Masayuki Asahara, and Hiroyuki Shinnou

“Generation and Evaluation of Concept Embeddings Via Fine-Tuning Using Automatically Tagged Corpus”, *Proceedings of the 34th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 34)*, 2020.10.

Teruo Hirabayashi, Kanako Komiya, Masayuki Asahara, and Hiroyuki Shinnou

“Composing Word Vectors for Japanese Compound Words Using Bilingual Word Embeddings”, *Proceedings of the 34th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation (PACLIC 34)*, 2020.10.

Fei Cheng, Masayuki Asahara, Ichiro Kobayashi, and Sadao Kurohashi

“Dynamically Updating Event Representations for Temporal Relation Classification with Multi-Category Learning”, *Findings of the Association for Computational Linguistics: EMNLP 2020*, pp. 1352–1357, 2020.11, DOI: 10.18653/v1/2020.findings-emnlp.121.

加藤祥, 菊地礼, 浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく指標比喩データベース」, 『自然言語処理』, 27 巻 4 号, 853–888 頁, 2020.12, DOI: 10.5715/jnlp.27.853.

加藤祥, 浅原正幸, 森山奈々美, 荻原亜彩美, 山崎誠

「『分類語彙表』に対する反対語情報付与」, 『自然言語処理』, 28 巻 1 号, 60–81 頁, 2021.3, DOI: 10.5715/jnlp.28.60.

《コーパス・データベース類》

浅原正幸, 加藤祥, 山下華代, 呉佩珣, 近藤森音, 森山奈々美, 荻原亜彩美

「WLS2P2iwanami」, <https://github.com/masayu-a/WLS2P2iwanami>, 2020.5.1.

Universal Dependencies Contributors

「Universal Dependencies version 2.6」, <http://hdl.handle.net/11234/1-3226>, 2020.5.15.

Universal Dependencies Contributors

「Universal Dependencies version 2.7」, <http://hdl.handle.net/11234/1-3424>, 2020.11.15.

【講演・口頭発表】

浅原正幸, 加藤祥

「『日本語歴史コーパス』に対する文脈化単語埋め込み情報付与」, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度春季大会, 予稿集収録による発表成立 (感染症拡大のため), 2020.5.16–17.

耿晨セイ, 程飛, Lis Kanashiro Pereira, 浅原正幸, 小林一郎

「依存関係と文脈表現を用いた日本語時間関係識別」, 2020 年度人工知能学会全国大会 (第 34 回), オンライン, 2020.6.9–12.

Sae Nishiuchi, Sachi Kato, and Masayuki Asahara

“Polysemy and De-contextualisation: A Quantitative Investigation Based on Similarity for the Identification of Prototypical Meaning”, ポスター発表, UK COGNITIVE LINGUISTICS CONFERENCE 2020, オンライン (英国), 2020.7.27–29.

Sachi Kato, Sae Nishiuchi, and Masayuki Asahara

“A quantitative evaluation of Japanese figurative expressions with multiple metaphor indicators”, UK COGNITIVE LINGUISTICS CONFERENCE 2020, オンライン (英国), 2020.7.27–29.

久本空海, 山村崇, 勝田哲弘, 竹林祐斗, 高岡一馬, 内田佳孝, 岡照晃, 浅原正幸

「chiVe: 製品利用可能な日本語単語ベクトル資源の実現へ向けて ～形態素解析器 Sudachi と超大規模ウェブコーパス NWJC による分散表現の獲得と改良～」, 第 16 回テキストアナリティクスシンポジウム, オンライン, 2020.9.10.

加藤祥, 浅原正幸

「受容主体の比喩性把握における指標と要素結合の影響」, ポスター発表, 2020 年度日本認知科学会第 37 回大会, オンライン, 2020.9.17–19.

浅原正幸, 加藤祥

「『日本語歴史コーパス』に対する文脈化単語埋め込みに基づく意味空間」, ポスター発表, 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2020」, オンライン, 2020.12.12–13.

加藤祥, 森山奈々美, 浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞サブコーパスに対する新聞記事情報の付与」, ポスター発表, 日本語学会 2020 年度秋季大会, オンライン, 2020.12.24–25.

加藤祥, 浅原正幸

「多義語語義調査を目指した IPAL 形容詞例文への印象評定情報付与」, ポスター発表, 言語処理学会第 27 回年次大会 (NLP2021), オンライン, 2021.3.15-19.

浅原正幸

「クラウドソーシングによる大規模読み時間データ収集」, ポスター発表, 言語処理学会第 27 回年次大会 (NLP2021), オンライン, 2021.3.15-19.

栗林樹生, 大関洋平, 伊藤拓海, 吉田遼, 浅原正幸, 乾健太郎

「日本語の読みやすさに対する情報量に基づいた統一的な解釈」, ポスター発表, 言語処理学会第 27 回年次大会 (NLP2021), オンライン, 2021.3.15-19.

栗林樹生, 大関洋平, 伊藤拓海, 吉田遼, 浅原正幸, 乾健太郎

「予測の正確な言語モデルがヒトらしいとは限らない」, 言語処理学会第 27 回年次大会 (NLP2021), オンライン, 2021.3.15-19.

【研究発表会・講演会・シンポジウムなどの企画・運営】

- ・言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.8-9.

【一般向けの講演・セミナーなど】

浅原正幸

「テキストの読みやすさに関する研究」, Yahoo! Japan 研究所講演会, オンライン, 2020.12.1.

浅原正幸

「ウェブアーカイブを用いた学術研究—『国語研日本語ウェブコーパス』の開発とその利用」, 国立国会図書館デジタルライブラリーカフェ, 会場名 (国外の場合は国名), 2020.12.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・言語処理学会第 26 回年次大会プログラム委員
- ・The 12th International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC-2020): Scientific Committee Member
- ・The 58th annual meeting of the Association for Computational Linguistics (ACL-2020): Program Committee Member
- ・The 2020 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (EMNLP-2020): Program Committee Member
- ・The 16th Conference of the European Chapter of the Association for Computational Linguistics (EACL 2021): Program Committee

【大学院教育・若手研究者育成】

《講習・チュートリアル》

コーパス開発センター

「まとめて検索『KOTONOHA』講習会」, まとめて検索『KOTONOHA』講習会, オンライン, 2020.8.11.

浅原正幸, 大村舞

「まとめて検索 KOTONOHA 講習会」, 第 10 回コーパス利用講習会, オンライン, 2021.3.4.

石本 祐一 (いしもと ゆういち) コーパス開発センター 特任助教

【学位】 博士 (情報科学) (北陸先端科学技術大学院大学, 2004)

【学歴】 宇都宮大学工学部卒業 (1997), 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了 (2000), 北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期課程修了 (2004)

【職歴】 東京工科大学メディア学部 助手 (2007), 同 助教 (2009), 人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員 (2010), 情報システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員 (2010), 人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員 (2013), 同 研究情報資料センター 特任助教 (2013), 同 コーパス開発センター 特任助教 (2017)

【専門領域】 音声工学, 音響音声学

【所属学会】 日本音響学会, 電子情報通信学会

【受賞歴】

2016: Oriental COCOSDA 2016 ITN Best Paper Award

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・基礎研究「コーパスアノテーションの拡張・統合・自動化に関する基礎研究」: メンバー
- ・基幹型共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」: メンバー

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・基盤研究 (B)「リアルタイム MRI 動画による日本語調音運動データベースの構築と公開」, 20H01265: 研究分担者
- ・基盤研究 (C)「自発会話コーパスを用いた「会話の間合い」に関わる音声・言語特徴の解明」, 18K11514: 研究分担者
- ・基盤研究 (A)「日常場面と特定場面の日本語会話コーパスの構築と言語・相互行為研究の新展開」, 17H00914: 研究分担者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Mika Enomoto, Yasuharu Den, and Yuichi Ishimoto

“A Conversation-Analytic Annotation of Turn-Taking Behavior in Japanese Multi-Party Conversation and its Preliminary Analysis”, *Proceedings of The 12th Language Resources and Evaluation Conference*, pp. 644–652, 2020.5.

Teruaki Oka, Yuichi Ishimoto, Yutaka Yagi, Takenori Nakamura, Masayuki Asahara, Kikuo Mekawa, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, Kumiko Sakoda, and Nobuko Kibe

“KOTONOHA: A Corpus Concordance System for Skewer-Searching NINJAL Corpora”, *Proceedings of The 12th Language Resources and Evaluation Conference*, pp. 7077–7083, 2020.5.

【講演・口頭発表】

石本祐一

「日本語日常会話コーパスから見える会話場面と声の高さの関係性」, ポスター発表, 言語資源活用ワークショップ 2020, オンライン, 2020.9.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本音響学会音声研究会 幹事

岡 照晃 (おか てるあき) コーパス開発センター 特任助教

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2015)

【学歴】 豊橋技術科学大学工学部卒業 (2010), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了 (2012), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了 (2015)

【職歴】 京都大学大学院情報学研究科 特定研究員 (2015), 人間文化研究機構国立国語研究所言語変化研究領域プロジェクト非常勤研究員 (2016), 同 コーパス開発センター 特任助教 (2016)

【専門領域】 計算言語学, 自然言語処理

【受賞歴】

2011: 情報処理学会第 201 回自然言語処理研究会学生奨励賞

2009: 豊橋技術科学大学平成 21 年度後期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2009: 豊橋技術科学大学平成 21 年度前期「卓越した技術科学者養成プログラム」

2008: 舞鶴工業高等専門学校学業成績優秀賞

【2020 年度に参画した共同研究】

- ・ワークスアプリケーションズとの共同研究: 実作者

【2020 年度に実施した科研費・外部資金による研究課題】

- ・若手研究「アクセント情報付き大規模単語データベースの構築」, 19K1317: 研究代表者

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Teruaki Oka, Yuichi Ishimoto, Yutaka Yagi, Takenori Nakamura, Masayuki Asahara, Kikuo Mekawa, Toshinobu Ogiso, Hanae Koiso, Kumiko Sakoda, and Nobuko Kibe

“KOTONOA: A Corpus Concordance System for Skewer-Searching NINJAL Corpora”,
Proceedings of The 12th Language Resources and Evaluation Conference, pp. 7077–7083, 2020.5.

【講演・口頭発表】

久本空海, 山村崇, 勝田哲弘, 竹林佑斗, 高岡一馬, 内田佳孝, 岡照晃, 浅原正幸

「chiVe: 製品利用可能な日本語単語ベクトル資源の実現へ向けて ~ 形態素解析器 Sudachi と超大規模ウェブコーパス NWJC による分散表現の獲得と改良 ~」, 第 16 回テキストアナリティクス・シンポジウム, オンライン, 2020.9.10.



資 料

1

運営会議

運営会議規程

- ・委員は20名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- ・所内委員は、副所長、研究系長、センター長、その他所長の氏名する教授又は客員教授若干名。
- ・会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
- ・議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2020年度の開催状況

- ・第1回〔2020年6月22日13:30-15:30（Web会議）〕
 - 議事概要確認
 1. 前回議事概要（案）について
 - 審議事項
 1. 人事委員会委員の選出について
 2. 所長候補者選考委員会の設置について
 3. その他
 - 報告事項
 1. 人間文化研究機構国立国語研究所長の任期の特例の制定案について
 2. 国立国語研究所長推薦候補者について（中間報告）
 3. 平成31事業年度に係る業務の実績及び第3期中期目標期間（平成28～31事業年度）に係る業務の実績に関する報告書（案）について
 4. 令和2年度計画について
 5. 令和3年度概算要求（案）について
 6. 「大学共同利用機関の検証に係る自己検証結果報告書」について
 7. 国立国語研究所の活動について
 8. その他
 - 国立国語研究所における新型コロナウイルス感染症の対応について
 - 商標登録について
- ・第2回〔2020年10月19日13:30-16:30（Web会議）〕
 - 議事概要確認
 1. 前回議事概要（案）について
 - 審議事項
 1. 所長候補者の選考について
 2. 教授（言語変化研究領域）の内部選考（昇任）について
 3. 研究系（日本語教育研究領域）にかかる研究教育職員への職種変更について
 4. 国立国語研究所テニュアトラック実施要項（案）について
 5. テニュアトラック助教（言語資源構築・アーカイビング）の公募について
 6. 特任教授の採用について
 7. その他
 - 報告事項
 1. 令和元年度外部評価報告書について

2. 平成 31 事業年度に係る業務の実績及び第 3 期中期目標期間（平成 28～31 事業年度）に係る業務の実績に関する報告書について
 3. 4 年目終了時評価における実績報告書について
 4. 大学共同利用機関の検証に係る自己検証結果報告書について
 5. 令和 3 年度「共同利用型共同研究」及び令和 2 年度及び令和 3 年度「共同利用型共同研究（登録型）」について
 6. 国立国語研究所の活動について
 7. その他
 - 国立国語研究所における新型コロナウイルス感染症の対応について
- 第 3 回 [2021 年 1 月 14 日（書面審議）]
 - 審議事項
 1. 前回議事概要（案）について
 2. 令和 3 年度「共同利用型研究」の決定について
 - 報告事項
 1. 国立国語研究所運営会議におけるオンライン投票に係る手順について
 - 第 4 回 [2021 年 2 月 24 日 13:30–16:00（Web 会議）]
 - 議事概要確認
 1. 前回議事概要（案）について
 - 審議事項
 1. テニュアトラック助教（言語資源構築・アーカイビング）の選考について
 2. 教授（言語変化研究領域）の内部選考（昇任）について
 3. 研究系（日本語教育研究領域）にかかる研究教育職員への職種変更について
 4. 教授又は准教授（研究系）の公募について
 5. 客員教員の採用について
 6. 名誉教授称号授与者の選考について
 7. その他
 - 報告事項
 1. 令和 2 年度事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について
 2. 令和 3 年度計画（案）について
 3. 大学共同利用機関の検証に係る自己検証結果報告書について
 4. 令和 3 年度運営費交付金等について
 5. 令和 3 年度「共同利用型共同研究」及び令和 3 年度「共同利用型共同研究（登録型）」について
 6. 第 4 期中期目標期間における共同研究プロジェクトについて
 7. 国立国語研究所の活動状況について
 8. その他
 - 総合研究大学院大学のコース設置準備について
 - 国立国語研究所における新型コロナウイルス感染症の対応について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

- 所長候補者選考委員会規程
 - 委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
 - 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。
 - 委員の任期は 1 年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - 委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
 - 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・所長候補者選考委員会審議状況
 - ・2020年 6月22日 所長候補者選考委員会設置, 所長候補者選考委員会(第1回)開催
 - ・2020年 7月 6日 所長候補者選考委員会(第2回)開催
 - ・2020年 8月 6日 所長候補者選考委員会(第3回)開催(メール審議)
 - ・2020年 8月25日 適任者名簿を提出
(2020年10月19日 運営会議(第2回)にて田窪行則氏を所長候補者に決定)
(2020年10月23日 人間文化研究機構長に推薦)

(2) 人事委員会

- ・人事委員会規程
 - ・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
 - ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者及び研究所内の者若干名で組織する。
 - ・委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
 - ・委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
 - ・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
 - ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・人事委員会審議状況
 - ・2020年6月22日(第1回), 2020年10月19日(第2回), 2021年1月14日(第3回)
 - 言語変化研究領域教授として高田智和准教授を運営会議に推薦
 - 日本語教育研究領域准教授として福永由佳研究員を運営会議に推薦
 - テニュアトラック助教(言語資源構築・アーカイビング)として候補者1名を運営会議に推薦
 - ・2021年2月14日(第4回)
 - 研究系(日本語又は琉球諸語の記述文法)研究教育職員及び研究系(日本語教育及び関連分野)研究教育職員の公募を決定

2 評価体制

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、2020年度の「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証をおこなった。

(1) 自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関すること、外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2020年度は8回開催した。

(2) 外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること、共同研究プロジェクト等の評価に関すること、その他評価に関することについて審議する。
- ・委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- ・委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

- ・外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

令和2年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構令和元年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価をおこない、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査でおこなう。研究所が作成した、令和2年度の計画及びその実施状況が記入された「2年度業務の実績報告書」（「機関拠点型基幹研究プロジェクト・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証。

外部評価委員会【令和2年度実績評価】

- ・2020年8月5日 10:00-12:00（オンライン）

・議事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
3. 令和2年度共同研究プロジェクト評価について
4. 令和2年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
5. 令和2年度「管理業務」の評価について
6. その他
 - 第3期中期目標期間（4年目終了時）に係る業務の実績に関する評価の結果について
 - 大学共同利用機関の検証結果について

(3) 基幹研究プロジェクトの評価

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて、外部評価委員会委員による書面審査をおこなった。

3

所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰をおこない、研究所の活性化に資することを目的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象とし、原則として年2回おこなう。

第21回所長賞：2020年度後期（2020年4月1日-2020年9月30日）

・特別所長賞

- ・松本曜（研究系（理論・対照研究領域）教授）
 - 業績：Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi. *Broader Perspectives on Motion Event Descriptions*, John Benjamins, 2020.9.
 - 理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版
- ・窪田悠介（研究系（理論・対照研究領域）准教授）
 - 業績：Yusuke Kubota and Robert D. Levine. *Type-Logical Syntax*, MIT Press, 2020.9.
 - 理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版

・所長賞

- ・プラシャント・パルデン（研究系（理論・対照研究領域）教授）
 - 業績：プラシャント・パルデン、堀江薫（編）『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』，ひつじ書房，2020.5.
 - 理由：全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

- ・今村泰也(研究系(日本語教育研究領域)プロジェクト非常勤研究員)
 - 業績: Yasunari Imamura. “Hindi”, Tsunoda, Tasaku (ed.) *Mermaid construction: A compound-predicate construction with biclausal appearance* (Comparative Handbooks of Linguistics 6), De Gruyter Mouton, 2020.8.
 - 理由: 世界を代表すると認められる専門誌に掲載された学術論文

第22回所長賞: 2021年度前期(2020年10月1日-2021年3月31日)

・所長賞

- ・窪菌晴夫(研究系(理論・対照研究領域)教授)
 - 業績: 窪菌晴夫著『一般言語学から見た日本語のプロソディー』, くろしお出版, 2021.3.
 - 理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版
- ・プラシャント・パルデシ(研究系(理論・対照研究領域)教授)
 - 業績: Prashant Pardeshi. “Classification of complex verbs and the evolution of the compound verb in Marathi”, Kageyama, Taro, Peter Hook, and Prashant Pardeshi (eds.), *Verb-verb complexes in Asian Languages*, pp.223–248, Oxford University Press, 2021.2.
 - 理由: 世界を代表すると認められる専門誌に掲載された学術論文
- ・松本曜(研究系(理論・対照研究領域)教授)
 - 業績: Yo Matsumoto. “The semantic differentiation of verb-te verb complexes and verb-verb compounds in Japanese.” Taro Kageyama, Peter E. Hook, and Prashant Pardeshi (eds.), *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*. pp.139–164, Oxford University Press, 2021.2.
 - 理由: 世界を代表すると認められる専門誌に掲載された学術論文
- ・宇佐美まゆみ(研究系(日本語教育研究領域)教授)
 - 業績: 宇佐美まゆみ編著『日本語の自然会話分析』, くろしお出版, 2020.10.
 - 理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版
- ・福永由佳(研究系(日本語教育研究領域)准教授)
 - 業績: (1) 福永由佳著『成人教育(adult education)としての日本語教育: 在日パキスタン人コミュニティの言語使用・言語学習のリアリティから考える』, ココ出版, 2020.10.
(2) 福永由佳編著『顕在化する多言語社会日本: 多言語状況の的確な把握と理解のために』, 三元社, 2021.1.
 - 理由: 全国的に定評のある学術出版社による著書・編書の国内出版

・若手研究者奨励賞

- ・近藤明日子(研究系(言語変化研究領域)特任助教)
 - 業績: 近藤明日子著『コーパスと近代日本語書き言葉の一人称代名詞の研究』, 勉誠出版, 2021.2.
 - 理由: 博士論文(ないしその改訂版)等, 単著の出版, またはそれに準ずるもの
- ・中川奈津子(研究系(言語変異研究領域)特任助教)
 - 業績: Natsuko Nakagawa. *Information Structure in Spoken Japanese: Particles, Word Order, and Intonation*, Berlin: Language Science Press, 2020.12.
 - 理由: 博士論文(ないしその改訂版)等, 単著の出版, またはそれに準ずるもの

2020.7.1	特任助教	岩崎拓也	採用	研究系
2020.10.1	教授	五十嵐陽介	採用	研究系
2021.3.31	教授	木部暢子	定年退職	研究系
2021.3.31	教授	野田尚史	定年退職	研究系
2021.3.31	准教授	熊谷康雄	定年退職	研究系
2021.3.31	特任助教	麻生玲子	辞職	研究系
2021.3.31	特任助教	間淵洋子	任期満了	研究系



外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

令和2年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

令和3年8月5日

はじめに

令和2年度の外部評価書をお届けします。令和3年度は第3期中期計画の最終年度にあたり、外部評価委員の方々には第3期の国語研の研究についての評価だけでなく、第3期の成果を踏まえて、第4期に向けての提言もいただきました。深く感謝いたします。

令和2年度でも、コロナ感染症の発生・拡大に伴って、国語研も大きな影響を受けました。テレワーク、オンラインを最大限に活用し、ワークショップ、シンポジウム等はそれほど支障なく行うことができましたが、危機言語・危機方言のフィールドワークに関しては、その大部分を中断せざるを得ませんでした。現在、一部はオンラインによる調査の方法等を模索していますが、さまざまな問題があり、対面調査と同じようにはいかず、手探りの状態です。外部評価委員の皆様には、コロナ感染症パンデミック終息後の国語研の在り方についてのご質問や貴重なアドバイスなどをいただき、感謝しています。

いよいよ、令和4年度から、第4期が始まります。第4期の計画の策定に際しては外部評価委員の皆様方からいただいた貴重なアドバイスを踏まえて、計画案を練り直し、令和4年4月からの第4期に備えて、準備作業の最終段階に入っています。令和5年4月からは総研大博士課程への参加が始まるため、現在そのためのカリキュラムの策定等の準備も行っています。

第4期においても国語研のより一層の発展のために努力を重ねていきたいと存じます。ますますのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

令和3年8月

国立国語研究所長 田窪 行則

目 次

評価結果報告書	1
1. 令和2年度「機関拠点型基幹研究プロジェクト評価・センターの研究活動」に関する評価結果	3
2. 令和2年度「管理業務」に関する評価結果	86
資料	92
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	93
2. 国立国語研究所令和2年度業務の実績に関する評価の実施について	94
3. 機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧	95
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	96
5. 国立国語研究所外部評価委員会【令和2年度実績評価】（第1回）議事次第	98

1. 評価結果報告書

令和2年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

令和3年8月5日 国立国語研究所外部評価委員会【令和2年度実績評価】（第1回）

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会
委員長 坂原 茂

国立国語研究所令和2年度外部評価にあたって

本報告書は、機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」の令和2年度分実績についての外部評価委員会の評価のまとめである。評価対象は、(1) プロジェクト全体、(2) 6つの共同研究プロジェクト（「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」、「通時コーパス」、「大規模日常会話コーパス」、「学習者コミュニケーション」）、(3) 2つのセンター（コーパス開発センター、研究情報発信センター）、(4) 「管理業務」である。

令和2年度のプロジェクト全体に対する評価は「順調に進捗している」であり、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信のいずれにおいても高い評価に値する。6つの共同研究プロジェクトの評価は、S（計画を大きく上回って実施している）が1、A（計画を上回って実施している）が3、B（計画どおりに実施している）が2であり、全体的に充実した研究が行われている。2つのセンターの評価はいずれもB（計画どおりに実施している）で、センターの多方面の活動とデータベース構築の成果が見られた。管理業務については、A（計画を上回って実施）が3、B（計画通り実施）が1で、全体的にきわめて良好な業務運営が行われている。

以上のように、外部評価委員会は、令和2年度の本プロジェクトの進捗状況は全体的に計画をやや上回り、順調に伸展していると評価した。今年度も、昨年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大のため研究活動に予期せぬ制約が課されたが、さまざまな工夫を凝らして研究活動を進め、電子情報通信学会NLC研究会優秀発表賞を始めとして複数の賞を受賞するなど、高い水準の研究活動を行ったことは賞賛に値する。また、管理業務に関しても、効率化が順調に進行しているのが窺えた。

本プロジェクトは、先進的なケース・スタディ、種々のコーパス開発、人材育成を含む、日本語研究を大きく変える可能性をもった研究プロジェクトで、日本および世界中で現在進行中の日本語研究の中でも、疑いもなく、最重要の研究プロジェクトである。外部評価委員会としては、プロジェクトに携わる各人がそのことを意識しつつ、最終年度も高い研究水準を維持し、プロジェクトの完遂に励むことを強く希望する。

令和3年8月
外部評価委員会
委員長 坂原 茂

機関拠点型基幹研究プロジェクト評価報告書

評価に関する総括

《達成状況の評価》

順調に進捗している

(判断理由等)

コロナ蔓延の困難な状況が続く中、(1) 研究成果・研究水準、(2) 研究体制、(3) 教育・人材育成、(4) 社会連携・社会貢献、(5) 国際連携・国際発信、のいずれにおいても計画通り順調に進んでいるばかりでなく、電子情報通信学会 NLC 研究会優秀発表賞を始めとして複数の賞を受賞するなど高い評価を得ることができた。

【プロジェクト全体の連携活動に関する評価】

(1) 研究成果・研究水準について

令和2年度の研究成果・研究水準は質的・量的にもきわめて高い水準を維持している。

新型コロナ感染拡大のため、予定通りの調査活動はできなかったが、量的に満足できる研究活動を展開し、オンラインでの国際シンポジウム・ワークショップ6件、国内シンポジウム・ワークショップ50件を開催し、6冊の英語による書籍を含む15冊の書籍・報告書を刊行し、各種言語資源・コーパスを整備し、言語資源32点を公開した。

研究水準もきわめて高く、「国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」」のような学会をリードする最先端の研究、「日本学特別講義 意味論入門」のように入門的要素も含むもの、32点のコーパス・データベースを公開など、国立国語研究所の研究に相応しいバランスの良い研究活動になっており、現時点での最先端の研究成果であるとともに、将来的にも大きな期待がもてる。

(2) 研究体制について

研究体制は、研究推進のための合理的でバランスの取れた構成になっており、他大学との組織的な連携、大学機能強化への貢献に関しても高い評価が与えられる。

研究体制は6つの基幹プロジェクト（「対照言語学」、「統語・意味解析コーパス」、「消滅危機言語・方言」「通時コーパス」、「日常会話コーパス」、「学習者のコミュニケーション」）を中核として国内外の626人の研究者を共同研究員として組織されている。

各班の研究の進捗状況を管理するために共同研究プロジェクト推進会議、自己点検・評価委員会を設置し、研究情報の共有化、班同士の連携、合同シンポジウムの企画、プロジェクト全体の自己点検・評価を行っている。

研究の共同利用・共同研究拠点の強化の取り組みとしては、これまでの公募型共同研究に加え、研究所が保有する言語資源等の研究資料や実験機器等を活用する公募型プロジェクト「共同利用型」を新たに導入し、17件のプロジェクトを採択した。また、随時申請可能な「共同利用型共同研究（登録型）」や有償コーパスを無償で活用できる「共同利用型共同研究（言語資源型）」を令和2年度に新たに設け、共同利用拠点としての機能の強化を図った。

プロジェクト間の連携強化に関しては、全基幹プロジェクト参加のNINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」を開催し、令和3年度にはその成果をとりまとめた書籍の刊行を予定している。またコーパス開発センターによる支援体制の元で各班が開発する言語資源の有効な活用を進

めるため定期的に「領域横断コーパス会議」を開催し、同センターが管理する検索アプリケーション「中納言」を通して各班が構築したコーパスの一部を公開し、プロジェクト内外の言語資源に関する成果を発表し交流を深める場として「言語資源活用ワークショップ 2020」を開催した。

大学との連携体制としては、神戸大学大学院人文学研究科や東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との学術交流協定に基づき研究会等を開催したほか、弘前大学人文社会科部との学術交流協定に基づき津軽方言の有対動詞データの収集・分析等に関する共同研究を推進し、成果をデータベース「使役交替言語地図」に格納して公開した。

（３）教育・人材育成について

教育・人材育成については、大学との連携、教材開発、若手研究者の育成や社会人の学び直しなどに多大な貢献をしており、高い評価が与えられる。

大学院教育では、一橋大学で３人が授業を行い、博士学位論文審査の主査２件、副査２件を担当した。東京外国語大学においても２人が授業を担当し、コーパス講習会を開催した。「危機言語」班は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との協定に基づき、特任助教の雇用、若手研究者のフィールドワークに対するスキル向上を支援し、また九州大学言語学講座とは「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキルWS」をオンラインで開催した。

教材及び教育プログラムの開発に関して、「危機言語」班と「統語コーパス」班が顕著な活動を行った。「危機言語」班は、令和元年度に刊行した『地域文化の可能性』をもとに出版準備を進め、また令和元年度に刊行した『フィールドワーク事前研修報告書』をもとに『フィールド言語学の手引き』の出版準備を進め、いずれも 2021 年度に出版予定である。「統語コーパス」班は、『Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective』（ひつじ書房）を刊行し、国語研究所のコーパスを活用して本教材の練習問題を解くためのインターフェースを神戸大学と連携して開発し、ウェブサイトで公開した。

若手研究者の育成も活発に行った。若手研究者のキャリアパスとして特任助教を５人雇用了。若手研究者の育成のために、国内外の博士学位取得者をプロジェクト研究員（PD フェロー）として５人、非常勤研究員として 64 人雇用し、専門的研究指導を行なった。令和２年度に退職した 21 人のうち 19 人が大学や研究機関や民間企業等の常勤・非常勤として就職し、またプロジェクト非常勤研究員 1 名が学会の賞（言語処理学会第 27 回年次大会優秀賞）を受賞した。高度な専門性を有する若手研究者の育成のために、各班の研究テーマに即した若手研究者向けのチュートリアル・講習会を 16 回開催するなど、さまざまな活動を行った。

社会人の学び直しへの貢献では、日本語教師等を対象とする「NINJAL 日本語教師セミナー」を国内外で１回ずつ、日本語教育ボランティアに対するスキルアップ講座を国内で１回開催し、また中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生・院生向けに、『日本語歴史コーパス』活用のための講習会を開催した。

（４）社会連携・社会貢献について

社会連携・社会貢献については、一般向けの多数のシンポジウム・講演会の開催、地方自治体と連帯した方言復興のための講座の開催や創作方言劇の制作・上演、最先端の言語研究成果を社会に還元するためのモバイル型展示ユニットの展示、産学連携研究として、リクルート社 Megagon Labs. との共同研究の推進など、積極的な活動を行った。

一般向けフォーラム・イベントで特記すべきは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オープンハウスやニホンゴ探検をオンラインに切り替えて開催し、45 件の動画コンテンツを公開したとこ

ろ、約2万件の参加（アクセス）があり、従来の対面式に比較して50倍以上の参加数となったことである。

地方自治体との連携では、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との協定に基づき、方言復興のための知名町公民館講座を毎月1回オンラインで開催したほか、創作方言劇『ヒーヌムの生まれた海』を知名町と共同で制作し、おきえらぶ文化ホール・あしびの郷・ちなで上演するなど多方面の活動をした。また琉球朝日放送株式会社と共同で制作した「くとうばどう宝～消滅危機言語を守る人～」が第26回プログレス賞奨励賞（テレビ朝日系列24社の番組審議会委員が選考する賞）を受賞し、当研究所のこの面での活動に社会的認知が与えられた。

展示を通じた研究成果の公開に関しては、令和3年3月からの民博特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」に「災害と方言」のテーマで参加し、3台のモバイル型展示ユニットを展示し、静岡英和学院大学や東京都八丈島でも別の展示を行った。また周防大島町、周防大島町教育委員会主催の「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」に共催として協力した。

産学連携に関しては、リクルート社 Megagon Labs. などのIT企業との共同研究を推進し、Megagon Labs. より日本語版 spaCy Parser version 2.3.0 及び GiNZA Parser 4.0 をリリースした。またワークスアプリケーションズ社との研究成果を商業利用可能なオープンソースとして公開した結果、学界と産業界の連携体制や成果の有用性・公益性が評価され、電子情報通信学会 NLC 研究会優秀発表賞を受賞した。『日本語歴史コーパス』の開発では、(株)小学館出版局との間で新たに連携協定を締結し、産学連携のもとでコーパスの構築・整備を推進した。

（5）国際連携・国際発信について

国際連携・国際発信に関しても、高いレベルで研究活動が行われており、高評価に値する。

海外機関所属の研究者101人を共同研究員として、別に海外の研究者1人を外来研究員として受け入れ、共同研究を推進した。

今年度は1件の国際学術交流協定を更新し、新たに1件の国際学術交流協定を締結した。16件の国際連携協定を活用して「オックスフォード NINJAL 上代日本語コーパス」のアップデートや北京日本学術センターとの日本語習得過程調査の分析など、国際共同研究体制を強化した。

オンラインでの6件の国際シンポジウム等を開催した。特に、ソウル大学と国際ワークショップを開催したほか、日本語実用言語学国際会議を誘致し開催するなど、海外の機関と連携して企画・開催することにより、国際的な拠点性を強化した。

共同研究の成果の国内外への発信のために、Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics など5冊を、Mouton 社や MIT Press など定評のある出版社から国際出版した。ハワイ大学とは、危機言語の叢書の刊行について Brill 社との出版協定の準備を進めた。

日本語研究のさらなる国際化のために、海外の若手日本語研究者を対象とする NINJAL 日本語学講習会を4回、NINJAL チュートリアルを1回2コースをオンラインで開催し、合計442人（昨年度比187%）が受講した。

（6）その他特記事項

特になし。

【今後の活動に向けた意見】

新型コロナ感染拡大の中でも、研究、コーパス・データベース作成・公開、教育・人材育成、社会連携・社会貢献、国際連携・国際発信のいずれに関しても高い水準の活動が行われており、次年度以

降もこのレベルを維持した研究継続が期待できる。効率よく機能している現在の研究体制を維持しつつ、積極的な研究活動が継続されることを強く望みたい。

各プロジェクト・センターの評価

対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法

プロジェクトリーダー：窪田 晴夫

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

日本語の研究は日本国内に長い伝統と優れた成果を有している一方で、他の言語と相対化させる努力が十分ではなく、(i)世界諸言語の中で日本語がどのような言語であるのか、(ii)一般言語学・言語類型論の視点から見ると、日本語の分析にどのような知見が得られるのか、(iii)日本語の研究が世界諸言語の研究や一般言語学・言語類型論にどのように貢献するのか、いまだ十分に明らかにされたとは言えない。現代の日本語研究に求められているのは、日本語の研究が世界諸言語の研究、とりわけ一般言語学や言語類型論研究にどのように貢献できるのかという「内から外を見る」視点と、一般言語学や言語類型論研究が日本語の分析にどのような知見をもたらすかという「外から内を見る」視点である。

本プロジェクトは、この両視点から日本語の言語事実を分析することにより、日本語（諸方言を含む）を世界の諸言語と対照させて日本語の特質を明らかにし、それにより日本語研究の国際化を図ることを主たる目的とする。日本語の音声・音韻、語彙・形態、文法、意味の構造を、言語獲得（第一言語獲得、第二言語習得）はもとより、言語に関係する他の学問分野（心理学、認知科学他）との接点・連携をも視野に入れて、対照言語学・言語類型論の観点から分析することにより、諸言語間に見られる類似性（普遍性）と相違点（個別性・多様性）を明らかにする。このような対照研究を通じて得られた研究成果を国内外に向けて発信する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトは音声・音韻特徴を分析する音声研究班と、形態・文法・意味構造を分析する文法研究班の2つの研究班（サブプロジェクト）を組織する。音声研究班は「語のプロソディーと文のプロソディー」を主テーマに、文法研究班は「名詞修飾表現」「とりたて表現」「動詞の意味構造」の3つをテーマに研究を進める。ともに海外の研究者との国際共同研究と国際シンポジウムの開催・誘致を軸に、論文集（英文、和文）の刊行や、アジアを中心とする諸言語の構造の異同を可視化する言語地図（電子媒体）の刊行を目指す。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

音声研究班と文法研究班は研究成果発表会や研究文献リスト作成などの日常的な活動をそれぞれ独自に行う一方で、「対照言語学の観点から日本語の特質を解明する」という共通の目標に沿って国際シンポジウムを定期的に開催し、その成果を英文論文集などの成果刊行物として公刊する。また、日本語や言語類型論に関する国際会議を合同で誘致し、プロジェクト全体で日本語研究と国語研の国際化を推し進める。

対照言語学	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度	R2 年度	R3 年度
シンポジウム等	オノマトペ 国際シンポジ ウム, NINJAL フォーラム 「オノマト ペ」開催	「プロソ ディー」に関 する国際ワー クショップ開 催	「プロソ ディー」「移動動 詞」「動詞の意味 構造」に関する 国際シンポジ ウム開催	「プロソ ディー」に関 する国際ワー クショップ開 催, 国際認知 言語学会共催	NINJAL チュートリアル 開催	国際会議 JK 2021 の開催
刊行・出版		NINJAL フォーラムの 成果の刊行, 音声関係の啓 蒙書刊行	論文集の編集 作業, 「プロソ ディー」に関 する研究論文集刊 行	「名詞修飾」 「とりたて表 現」に関する 各研究論文集 刊行	英文論文集 の編集作業, 「移動表現」 に関する研究 論文集刊行	「日本語と 言語類型論」 「動詞の意味 構造」「移動動 詞」に関する 各研究論文集 の刊行
データ		言語地図の作成				公開

・研究組織

リーダー:

窪田晴夫

班リーダー:

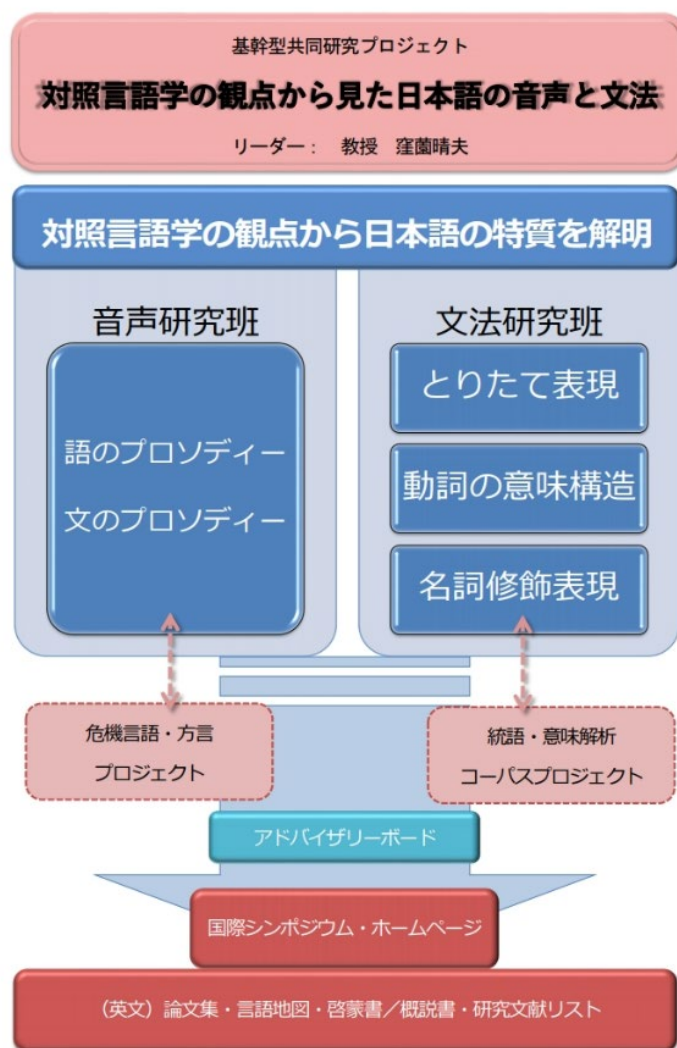
窪田晴夫 (音声)

野田尚史 (とりたて表現)

松本曜 (動詞の意味構造)

プラシャント・パルデシ

および窪田悠介 (名詞修飾表現)



● 年次計画

平成 28 年度（研究プロジェクトの始動）

1. 日英語によるプロジェクト HP を開設し、以後、随時更新する。
2. 若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会外国人特別研究員（PD）2 名に対して研究指導を行う。
3. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
4. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
5. NINJAL 国際シンポジウムとして The 24th Japanese Korean Linguistics Conference（JK 24）（10 月 14～16 日）とオノマトペ国際シンポジウム（12 月 17～18 日）の 2 つを開催する。またその成果の取りまとめ（論文集の編集）に着手する。
6. オノマトペをテーマに一般社会向けの NINJAL フォーラムを開催する（1 月 21 日）。
7. 第二期中期計画期間に着手した『日本語版連濁事典』，Mouton Handbook（Japanese Contrastive Linguistics の巻），The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants, Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
8. 言語地図の立案を開始する（項目・言語の選択，刊行方法等）。
9. 大学院生向けのチュートリアル（国内）を開催する。
10. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。

平成 29 年度（研究プロジェクトの展開）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。また日本学術振興会特別研究員（PD）1 名に対して研究指導を行う。
2. 研究班ごとに研究成果発表会を年数回開催する。
3. 「プロソディー」と「名詞修飾」をテーマにそれぞれ国際シンポジウムを開催する。
4. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
5. Mouton Handbook（Japanese Contrastive Linguistics および Syntax の巻），Tonal Change and Neutralization の編集作業を完了する。
6. 前年度に開催した NINJAL 国際シンポジウム 2 件と NINJAL フォーラム 1 件の成果を取りまとめ、それぞれ論文集、啓蒙書として編集を行う。
7. 『移動表現の類型論 II（仮題）』の編集作業を行う。
8. 音声関係の啓蒙書を執筆する（1 冊目）。
9. 言語地図の作成を開始する。

平成 30 年度（研究成果の中間とりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクト PD フェローとして合計 2 名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 3）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 音声（プロソディー）と文法（移動動詞，動詞の意味構造）に関する国際シンポジウム・ワークショップをそれぞれ開催する。

5. 前年度に開催した「プロソディー」に関する国際ワークショップの論文の編集を行い、出版社に入稿する（公刊は1年後）。また「とりたて表現（和文）」「移動表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各論文集の編集作業を進める（公刊は1年後の予定）。
6. 引き続き言語地図の作成用のデータ収集を行う。
7. 大学院生向けのチュートリアルを国内と海外でそれぞれ開催する。

令和元年度（研究プロジェクトの拡充）

1. 若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに研究成果発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 4）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 「プロソディー」に関する国際シンポジウムを開催する。また、国際認知言語学会を共催する。
5. 前年度に開催した「移動動詞」に関する国際シンポジウムの成果を研究論文集（英文）として取りまとめる（公刊は1～2年後）。また「動詞の意味構造（和文）」に関する論文集の編集に着手する。
6. 「とりたて表現（和文）」「名詞修飾（和文）」に関する各研究論文集を刊行する。
7. 引き続き言語地図の作成を行う。

令和2年度（研究成果のとりまとめ）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 研究班、研究テーマごとに成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 年度末にプロジェクトの合同研究発表会（Prosody and Grammar Festa 5）を開催し、客員教員や共同研究員を含めたプロジェクト全体の成果を共有する。
4. 「名詞修飾（和文）」と「移動表現（和文）」「移動表現（英文）」「日本語と言語類型論（和文）」に関する研究論文集をそれぞれ刊行する。「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」「プロソディー（英文）」に関する各論文集を編集する。
5. 大学院生向けのチュートリアルを開催する。
6. 言語地図の取りまとめを行う。

令和3年度（研究成果の公刊）

1. 引き続き若手研究者をプロジェクトPDフェローとして合計2名雇用し、研究指導を行う。
2. 成果取りまとめのための研究発表会と打合せ会議を年数回開催する。
3. 「移動動詞（英文）」「動詞の意味構造（和文）」「プロソディー（英文）」の各論文集を刊行する。
4. 言語地図を公刊（公開）する。

【3年目までの成果物】〔編者〕

1. Sequential Voicing in Japanese Compounds (John Benjamins) 2016年6月〔バンス〕
2. 『日本語コーパス活用入門：NINJAL-LWP 実践ガイド』（大修館）2016年7月〔パルデン〕
3. The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants (Oxford University Press) 2017年4月〔窪 蘭〕
4. 『日本語を分析するレッスン』（大修館書店）2017年4月〔野田〕。
5. 『オノマトペの謎』（岩波書店）2017年5月〔窪 蘭〕
6. 『通じない日本語』（平凡社新書）2017年12月〔窪 蘭〕
7. Handbook of Japanese Syntax (De Gruyter Mouton) 2017年12月〔野田〕
8. Japanese Korean Linguistics 24 (CSLI) 2018年1月〔船越〕

9. Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (De Gruyter Mouton) 2018 年 2 月 [パルデシ]
10. Tonal Change and Neutralization (De Gruyter Mouton) 2018 年 3 月 [窪田]
11. The Linguistic Review 36 巻 1 号, 特集 Prosody and Prosodic Interfaces in Japanese and Korean, 2019 年 2 月 [窪田]

【5 年目までの成果物】上記に加え次のものを刊行する（9 番以降は 6 年目の刊行予定）。

1. 『よくわかる言語学』（ミネルヴァ書房）2019 年 [窪田]
2. 『日本語と世界の言語のとりたて表現』（くろしお出版）2019 年 [野田]
3. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（ひつじ書房）2020 年 [パルデシ]
4. Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (John Benjamins) 2020 年 [松本]
5. Type-Logical Syntax (MIT Press) 2020 年 [窪田]
6. 『移動表現の類型論と第 2 言語習得』（くろしお出版）2021 年 3 月 [松本]
7. 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）2021 年 [窪田他]
8. 『一般言語学から見た日本語のプロソディー』（くろしお出版）2021 年 [窪田]
9. 『日本語の歴史的対照文法』（和泉書院）2021 年度 [野田]
10. 『動詞の意味と百科事典的知識（仮題）』（開拓社）2021 年 [松本]
11. Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective Vol. 1 (De Gruyter Mouton) 2022 年 [松本]
12. Prosody and Prosodic Interfaces (Oxford University Press) 2021 年度 [窪田]
13. Word and Sentence Prosody: The Endangered Dialect of Koshikijima Japanese (De Gruyter Mouton). 2022 年 [窪田]
14. 『プロソディー研究の最前線（仮題）』（開拓社）2022 年 [窪田]

II. 令和 2 年度活動概要

令和 2 年度予算総額 26,045 千円

令和 2 年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

対照言語学研究を推進するために、国内研究者 5 人を共同研究員として追加し、国内外あわせて 157 人の組織で事業を遂行した。コロナ禍にあって対面形式のイベントは実施できない状況となったが、オンラインを活用して例年以上の活動を行った。具体的には 4 つの研究班ごとの公開研究発表会を計 23 回（国内学会でのワークショップ 1 回を含む）、4 班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 5)を 1 回、国際シンポジウム・ワークショップを 2 件開催した。これら 26 件の企画において計 53 件の研究発表が行われ（うち学生が筆頭発表者のもの 8 件）、計 1676 人（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者 112 人、大学院生を含む学生 381 人）。

共同研究の成果を取りまとめる執筆・編集活動に注力した結果、プロジェクト全体で図書 10 冊、論文 99 編（ブックチャプター 60 編含む）、学術発表・講演 85 件（一般向け除く）を公開・刊行した。このうちプロジェクトの所内メンバー（教員 5 名）が下記 6 冊の図書（研究書 2 冊、研究論文集 4 冊）および論文 23 編を刊行し、さらに 7 冊の研究書・研究論文集の編集・執筆を行った。

- ・『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ プラシヤント、堀江薫 共編、ひつじ書房）2020 年 5 月

- ・ Type-Logical Syntax (Yusuke Kubota and Robert D. Levine 共著, MIT Press) 2020 年 9 月
- ・ Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi, eds. John Benjamins) 2020 年 8 月
- ・『移動表現の類型論と第二言語習得』(吉成祐子, 眞野美穂, 江口清子, 松本曜 共著, くろしお出版) 2021 年 2 月
- ・『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』(窪菌晴夫他 共編, 開拓社) 2021 年 2 月
- ・『一般言語学から見た日本語のプロソディー』(窪菌晴夫著, くろしお出版) 2021 年 3 月

2. 共同利用・共同研究に関する計画

学術交流協定に基づき, 神戸大学大学院人文学研究科と上記の Prosody and Grammar Festa 5 を, ソウル大学と国際ワークショップ (Japanese/Korean Phonology) をそれぞれ共同開催した。また日本語・韓国語の対照研究のためにイギリス・ヨーク大学と学術交流協定を締結し, 共同研究を開始した。

データベース等の構築・公開については, 名詞修飾表現の言語地図 The World Atlas of Noun-Modifying Constructions (WANMC) を完成し, 当初の計画より 1 年早く一般公開した。また諸言語の移動動詞に関する文献目録 (英文) の増補改訂を行い公開した。

この他, 国際シンポジウムの開催や出版企画についてアドバイザリーボードのメンバーに意見を求め, その意見を査読者の選定や第 4 期のプロジェクトテーマの立案に活用した。

3. 教育に関する計画

若手育成として PD フェローを 2 人雇用し, それぞれ研究指導を行った。またプロジェクト全体で 5 人の非常勤研究員を雇用し, 対照言語学の事業を推進した。海外の大学から大学院生 2 名 (アメリカ, ロシア) を特別共同利用研究員として受け入れ, 研究指導を行った。

さらに大学院生 4 人, 学振 PD1 人を共同研究員としてプロジェクトに参画させ, プロジェクト主催の発表会等で研究発表の機会を与えた。また研究発表会や国内／国際シンポジウム・ワークショップ等において延べ 8 人の大学院生 (筆頭発表者) に発表の機会を提供した。

イベントとしては, 主に国内の大学院生を対象に第 36 回 NINJAL チュートリアル「カテゴリ文法入門」(令和 2 年 9 月) を開催し, 海外では中国 (常州工学院) の日本語学講習会および主にインドを対象にした NINJAL 日本語学講習会 (4 日間) において, 学生と教員を対象に日本語学に関する講習会を行った。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

プロジェクト全体で地域社会と連携した講演を計 7 件, それ以外の講演を 6 件行った。このうち所内メンバーは鹿児島県薩摩川内市と交わした連携協定に基づき, 同市・甕島の中学校 (全 3 校) において中学生・教員・地元住民を対象として方言講演会を開催し, 計 100 人 (中学生 60 人, 教員・一般 40 人) の参加者を得た。またアジアの日本語研究者を対象とした日本語学講習会 (4 日間) では延べ 276 名の参加があったが, そのうち約半数が現役の日本語教師であり, 社会人の学び直しの機会となった。

5. グローバル化に関する計画

海外の出版社から 2 冊の研究書／研究論文集を国際出版した (MIT Press および John Benjamins)。イベントについてはコロナ禍において大きな影響を受けたが, オンラインを利用して合計 2 件の国際ワークショップを開催し, 合計 105 人の参加を得た。このうち Japanese/Korean Phonology のワークショップはソウル大学との学術交流協定に基づくものである。また海外 (主にインド) の日本語研究者を対象とした

NINJAL 日本語学講習会をオンラインで4日間開催し、延べ276名の参加者を得た。

人的交流として海外の研究者1人(台湾)を外来研究員として受け入れ共同研究を行い、海外の大学院生2人(アメリカ、ロシア)を特別共同利用研究員として受け入れ研究指導を行った。

プロジェクト全体では19件、国際会議で研究成果を発表した。このうち所内メンバーはJK 28 Satellite Workshop ‘Experimental Phonetics and Phonology’や国際ワークショップ ‘Japanese/Korean Phonology’などにおいて招待講演・研究発表を行った。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を大きく上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 対照言語学研究を推進するために、4つの研究班(下記)ごとの公開研究発表会を計23回(国内学会におけるワークショップ1回を含む)、4班合同の発表会(Prosody and Grammar Festa 5)を1回、国際ワークショップを2回開催した。これら計26件の企画において計53件の研究発表が行われ(うち学生が筆頭発表者のもの8件)、計1676人(延べ)の参加者が得られた(うち海外機関研究者112人、大学院生を含む学生381人)。	
① このうち、班ごとの研究発表会および国内学会シンポジウム・ワークショップ計23回の内訳は音声研究班が21回(令和2年5月25日～7月17日、10月9日～令和3年1月15日)、動詞の意味構造班(以下「意味構造班」)が2回(令和2年9月27日、11月15日)であった。これらの発表会に合計1381人の参加が得られた(うち海外機関研究者94人、大学院生を含む学生334人)。発表数は合計27件であった。(国内学会シンポジウム・ワークショップの詳細については下記2を参照)。	
② プロジェクト全体の統合を図るために、令和3年2月20-21日に、プロジェクト全体の研究発表会(Prosody and Grammar Festa 5)をオンラインで開催し、190人の参加者を得た(うち海外機関研究者18人、大学生を含む学生47人)。この合同発表会では基調講演3件と口頭発表9件および8件のポスター発表により、対照言語学および言語類型論に関する研究成果を報告した。	
③ 国際シンポジウム等(計2件)	
・令和2年10月30日に、国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」をオンラインで開催した。参加者は35人、発表件数は2件(口頭、海外機関研究者による発表2件、学生による発表1件)であった[意味構造班]。	
・ソウル大学人文学部との学術交流協定に基づき、国際ワークショップ(Japanese/Korean Phonology)を音韻論フェスタ(オンライン、令和3年3月8-9日)の特別セッションとして開催した。参加者は70人、発表件数は4件(口頭、海外機関研究者による発表2件)であった[音声研究班]。	
2. 国内学会において下記のワークショップを企画した。	
① 日本言語学会第161回大会(令和2年11月22日、オンライン開催)において「危機方言のプロソディー」と題するワークショップを企画・開催した。参加者は84人であった[音声研究班]。	
3. プロジェクトの所内メンバー(教員5名)が合計6冊の書籍(研究書2冊、研究論文集4冊)を刊行し、さらに7冊の著書・研究論文集の執筆・編集を行った。	

- ① プロジェクト全体の論文集『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）の編集を進め、令和3年2月に刊行した。
 - ② 音声研究班は日本語諸方言のプロソディーを分析した『一般言語学から見た日本語のプロソディー』（窪菌晴夫著、くろしお出版）を令和3年3月に刊行した。また前年度に開始した論文集Prosody and Prosodic Interfaces (H. Kubozono, J. Ito and A. Mester eds. Oxford University Press, 2021 年刊行予定) の編集作業を完了し、さらに Word and Sentence Prosody: The Endangered Dialect of Koshikijima Japanese (H. Kubozono, De Gruyter Mouton) および『プロソディー研究の最前線（仮題）』（窪菌晴夫、守本真帆 共編、開拓社）について出版社と契約を締結し執筆・編集作業を進めた。
 - ③ とりたて班は研究論文集『日本語の歴史的対照文法』（野田尚史、小田勝 共編、和泉書院、令和3年5月刊行予定）の編集を進めた。また、研究論文集『日本の言語・方言の対照文法』（野田尚史、日高水穂 共編、和泉書院、令和4年度刊行予定）の編集を開始した。
 - ④ 意味構造班は、Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi, eds., John Benjamins) を令和2年8月に、『移動表現の類型論と第二言語習得：日本語・英語・ハンガリー語学習の多元的比較』（吉成祐子、眞野美穂、江口清子、松本曜 共著、くろしお出版）を令和3年2月にそれぞれ刊行した。また、Motion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective, Vol. 1 (De Gruyter Mouton 社から出版予定)、および『フレーム意味論の貢献：動詞とその周辺』（開拓社から出版予定）の執筆・編集を進めた。
 - ⑤ 名詞修飾班は論文集『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ・ブラシャント、堀江薫 共編、ひつじ書房）を令和2年5月に、Type-Logical Syntax (Yusuke Kubota and Robert D. Levine 著, MIT Press, open access) を令和2年9月に出版した。
4. プロジェクト全体
- プロジェクト共同研究員の研究成果も含め、プロジェクト全体で図書10冊と論文99編（ブックチャプター含む）を刊行し、発表・講演を85件行った。
5. 言語調査
- コロナ禍のために、予定していた言語・方言調査は実施できなかった。
6. 名詞修飾班が2018年に出版した Mouton Handbook of Contrastive Linguistics の書評が Journal of Japanese Linguistics 2020; 36 (2): 291-303 (De Gruyter Mouton) に掲載され、Yukinori Kimoto 氏から以下の評価を受けた。“First, many of the contributors illuminate an astonishing range of linguistic phenomena in Japanese regarding language typology and linguistic theories... Further, this volume affirms the contribution of the study of Japanese to general Western linguistic theory, other individual language descriptions, and generalization in linguistic typology”, “Given that this book is written in English, a wider readership can access this monumental achievement in Japanese linguistics.”

（2）研究実施体制等に関する計画

1. 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき、Prosody and Grammar Festa 5（令和3年2月20-21日、オンライン）を共催した。（「1. 研究に関する計画」（1）-1-②参照）。
2. 対照言語学研究を実施するために、国内研究者5人を共同研究員として追加し、国内外あわせて157人の組織でプロジェクトの事業を遂行した（うち大学院生4人、海外研究機関に属する研究者19人）。また海外から1人（台湾）を外来研究員として受け入れ、共同研究を行った。

「計画を大きく上回って実施した」と自己評価した理由
<p>これまでの合同発表会 (P&G Festa) の成果を集約した『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』(開拓社)をはじめ、所内メンバーが研究図書計 6 冊 (研究書 2 冊, 研究論文集 4 冊) を刊行した。これは「複数冊の刊行」という計画を大きく上回る成果である。イベントについては、コロナ禍にあって対面式の研究会やワークショップが実施困難となる中で、オンラインにより国内研究会 23 回 (国内学会ワークショップ 1 回を含む) と合同発表会 (P&G Festa 5) 1 回, 国際ワークショップ 2 回を開催した。これは例年より多く、また計 7 回という計画を大幅に上回るものであった。2018 年度に刊行した研究論文集に対して国際誌に好意的な第三者評価 (書評) が与えられたことも計画を上回る成果と言える。</p>

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 言語地図 名詞修飾表現の言語地図 The World Atlas of Noun-Modifying Constructions (WANMC) を計画より 1 年早く一般公開した [名詞修飾班]。 文献目録 諸言語の移動動詞に関する文献目録 (英文) の増補改訂を行い, ver. 3.3 を令和 3 年 1 月 21 日に公開した [意味構造班]。 平成 28 年度に公開した甕島アクセントデータベースに年間 140,654 件のアクセスがあった。移動動詞文献目録については年間 238 件, 言語地図については 45 件のアクセスがあった (2020 年 4 月 1 日～2020 年 12 月 8 日)。 <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ (Japanese/Korean Phonology) を音韻論フェスタの特別セッションとして開催した。(詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照)。 統語論・意味論の分野の日本語・韓国語対照研究のために, 2020 年 7 月にイギリス・ヨーク大学と学術交流協定を締結した。 NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」(令和 2 年 10 月 3 日) においてプロジェクトから 2 件の研究発表を行った。また「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトと共催でシンポジウム「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心に」を 2 回にわたり開催した (令和 3 年 3 月 6 日, 21 日)。 音声研究班は編集集中の研究論文集 (Prosody and Prosodic Interfaces, OUP) の編集過程において, 査読者の選定等についてアドバイザーボードのメンバーに意見を求め, それを活用した。名詞修飾班では第 4 期のプロジェクトテーマについてアドバイザーボードの意見を求め, それを活用した。 神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づき, Prosody and Grammar Festa 5 を共催した (「1. 研究に関する計画」(1)-1-②参照)。 日本音韻論学会が主催した音韻論フォーラム 2020 (令和 2 年 8 月 28 日～30 日, オンライン) に協力し, 海外特別講演 (Jennifer Smith 氏, North Carolina 大学) を企画した。 	

7. 東京音韻論研究会（TCP）および関西音韻論研究会（PAIK）と第16回音韻論フェスタ（令和3年3月8日～9日）を共催した。合計104人の参加が得られた（うち海外機関研究者16人，大学院生を含む学生32人）。発表数は合計12件であった（うち海外機関研究者1人，大学院生を含む学生6人）。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>（1）大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>1. 海外の大学（ハワイ大学，ロシア科学アカデミー）から2名の大学院生を特別共同利用研究員として受け入れ，研究指導を行った。</p> <p>（2）人材育成に関する計画</p> <p>1. 若手研究者を育成するために，PDフェローを2人，非常勤研究員を5人雇用した。</p> <p>2. 大学院生4人，学振PD1人を共同研究員としてプロジェクトに参画させた。</p> <p>3. プロジェクトが企画したイベント（研究発表会，シンポジウム・ワークショップ他）において合計8人の大学院生（筆頭発表者）に発表の機会を提供した。</p> <p>4. 大学院生に対して調査旅費と成果発表の旅費を支援する予定であったが，コロナ禍によりすべてのイベントがオンライン開催となったため今年度の支援はできなかった。</p> <p>5. 第36回NINJALチュートリアル「カテゴリ文法入門」を4回にわたって開催し（令和2年9月5日，9月12日，9月19日，9月26日），大学院生を中心に延べ228名の参加を得た。</p> <p>6. アジアの若手日本語研究者を対象にNINJAL日本語学講習会を開催した。また中国常州工学院日本語学科において，学部生と教員向けに，語の意味に関する講習会を行った〔意味構造班〕（詳しくは「5. その他：グローバル化」(2)-2参照）。</p> <p>7. 国語研オープンハウス（令和2年9月10日，国語研）において大学生・大学院生向けのポスター発表を1件行った。</p>	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>（1）産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <p>1. 鹿児島県薩摩川内市との間に前年度結んだ連携協定に基づき，甕島の全中学校（3校）の中学生・教員・地元住民を対象としてことばと方言に関する啓蒙講演をオンラインで行った（令和3年1月22日午前および午後）。参加者は計100人（中学生60人，教員・一般40人）であった。</p> <p>（2）研究成果の社会への普及に関する計画</p> <p>1. 上記1の社会連携による講演および下記2の現役教師向けの講演とは別に，プロジェクト全体で一般社会人向け講演を7件行った（別添「研究成果一覧」の「一般向け講演・セミナー等」欄参照）。</p> <p>2. 現役教師向け講演会等</p> <p>NINJAL日本語学講習会では，受講者の半数が現役の日本語教師であった（詳細については「5. その他：グローバル化(2)-2-①」参照）〔名詞修飾班〕。</p>	

5. その他の目標を達成するための措置

(1) グローバル化に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <p>1. 海外の研究者1人（台湾）を外来研究員として、大学院生2名（アメリカ、ロシア）を特別共同利用研究員としてそれぞれ受け入れ、共同研究／研究指導を行った。</p> <p>2. ソウル国立大学、オックスフォード大学の研究者と、日本語と韓国語の敬語に関する脳波計測実験に関してオンラインでの研究打合せを行い、今までの研究成果を共有するとともに、今後の研究の進め方について話し合った。</p> <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> <p>1. 下記の2件の国際ワークショップを開催し（オンライン）、合計105人の参加者を得た。 ソウル大学人文学部との共催で国際ワークショップ(Japanese/Korean Phonology)をオンラインで開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。 国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」をオンラインで開催した（詳細については「1. 研究に関する計画」(1)-1-③参照）。</p> <p>2. 下記の2件の海外日本語学講習会をオンラインで開催し、合計341人の参加者を得た。</p> <p>①海外の日本語研究者（日本語教師・日本語学習者を含む）向けのNINJAL日本語学講習会を令和2年10月17日、18日、11月28日、29日の計4日間オンラインで開催し、延べ276名の参加者を得た〔名詞修飾班〕。詳細は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10月17日（土）84名（うち外国機関所属80名）（学部生5名、修士課程9名、日本語教師37名、その他33名） ・10月18日（日）67名（うち外国機関所属62名）（学部生5名、修士課程7名、博士課程1名、日本語教師31名、その他23名） ・11月28日（土）65名（うち外国機関所属52名）（学部生4名、修士課程9名、博士課程4名、日本語教師31名、その他17名） ・11月29日（日）60名（うち外国機関所属51名）（学部生1名、修士課程8名、博士課程2名、日本語教師25名、その他24名） <p>②令和2年9月29日に、中国常州工学院日本語学科において、日本語の語の意味に関する講習会をオンラインで行った。参加65名（全員が外国機関所属、学部生60名、日本語教師5名）〔意味構造班〕。</p> <p>3. 国際出版</p> <p>英文研究論文集Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (John Benjamins)を令和2年8月に、英文研究書Type-Logical Syntax (MIT Press)を令和2年9月に刊行した。またMotion Event Descriptions from a Cross-Linguistic Perspective, Vol 1 (De Gruyter Mouton)とProsody and Prosodic Interfaces (Oxford University Press)の編集を進め、Word and Sentence Prosody: The Endangered Dialect of Koshikijima Japanese (De Gruyter Mouton)の出版契約と執筆を行った（詳しくは「1. 研究に関する計画」(1)-3参照）。</p> <p>また同じく所内メンバー（教員5名）が下記8編の論文を海外のジャーナル・論文集に発表した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H. Kubozono (2020) ‘Default word prosody and its effects on morphology’ Japanese/Korean Linguistics 26, 19-31. CSLI. 	

- S-A, Jun and H. Kubozono (2020) ‘Prosodic systems in Asian Pacific Rim’ The Oxford Handbook of Prosody. Oxford University Press.
- Y Matsumoto (2021) ‘The semantic differentiation of V-te V complexes and V-V compounds in Japanese’ Verb-Verb Complexes in Asian Languages. Oxford University Press.
- Y. Matsumoto. (2020) ‘The semantics of Japanese verbs’ Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics. (Mouton de Gruyter)
- Y. Matsumoto. (2020) ‘Motion Verbs in Japanese’ Oxford Research Encyclopedia of Linguistics.
- K. Akita and Y. Matsumoto. (2020) ‘A fine-grained analysis of manner salience: Experimental evidence from Japanese and English’ Broader perspectives on motion event descriptions (John Benjamins)
- Y. Matsumoto. (2020) ‘Neutral and specialized Path coding: Toward a new typology of Path coding devices and languages’ Broader perspectives on motion event descriptions (John Benjamins)
- Y. Kubota, et al., ‘Development of a General-Purpose Categorical Grammar Treebank’ LREC 2020, 5195-5201

4. 国際発表

コロナ禍により国際会議の多くが中止となったことに伴い例年ほどの発表はなかったが、下記の所内メンバーによる発表を含め、プロジェクト全体で19件、国際会議で成果発表を行った（別添の「研究成果一覧」参照）。

- JK 28 Satellite Workshop ‘Experimental Phonetics and Phonology’ (2020年12月, オンライン) [音声研究班(窪菌)]。
- 国際ワークショップ ‘Japanese/Korean Phonology’ (2021年3月, オンライン) [音声研究班(窪菌)]。

5. 文献目録（英語）の公開

移動動詞に関する文献目録（英文）を増補改訂し公開した（「2. 共同利用・共同研究に関する計画(1)-2」参照）。

6. 音韻論フォーラム2020において海外特別講演を企画した。（詳しくは「2. 共同利用・共同研究に関する計画」(2)-6参照）。

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画を大きく上回って実施している

コロナ禍のもと、対面でのシンポジウムなどは開催できなくなっている。調査等も大きな制約を受けることになっている。しかし、そのような中であるにも関わらず、全体に計画を上回って研究が進められている。

まず、53件の研究発表が行われたこと、プロジェクト全体の論文集『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）の刊行をはじめとする著書、編著書、研究論文等の刊行も多数に及ぶ。グローバルな発信ということでも海外のジャーナル・論文集中に8本の論文が掲載されたことも大きく注目される。

若手研究者の育成や講演会などもほぼ計画通りないしそれを上回る形で行われている。

《評価項目》

1. 研究について

公開研究発表会を計23回（国内学会におけるワークショップ1回を含む）、4班合同の発表会（Prosody and Grammar Festa 5）を1回、国際ワークショップを2回開催、というように、53件の研究発表が行われことは当初の計画を大幅に上回るものである（特に、プロジェクト全体の研究発表会（Prosody and Grammar Festa 5）のオンライン開催において190人の参加があったことは特筆される）。

出版刊行も、所員によるものだけでも6冊（研究書2冊、研究論文集4冊）と、極めて盛んである。その中でプロジェクト全体の論文集『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』（開拓社）の刊行は特筆に値する。

それぞれの班における編著書の刊行も注目に値する。すなわち、『一般言語学から見た日本語のプロソディー』（窪菌晴夫著、くろしお出版）、『日本語の歴史的対照文法』（野田尚史、小田勝 共編、和泉書院、令和3年5月刊行予定）、Broader Perspectives on Motion Event Descriptions (Yō Matsumoto and Kazuhiro Kawachi, eds., John Benjamins) 『移動表現の類型論と第二言語習得：日本語・英語・ハンガリー語学習の多元的比較』（吉成祐子、眞野美穂、江口清子、松本曜 共著、くろしお出版）、『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』（パルデシ・プラシャント、堀江薫 共編、ひつじ書房）などの多数のものがある。

2. 共同利用・共同研究について

神戸大学大学院人文学研究科との学術交流協定に基づく研究活動（Prosody and Grammar Festa 5）、ソウル大学人文学部との共催の国際ワークショップ（Japanese/Korean Phonology）、イギリス・ヨーク大学と学術交流協定の締結、など、内外との研究交流が盛んである。

NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」（令和2年10月3日）における研究発表、「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」プロジェクトと共催でのシンポジウム（「日本語文法研究のフロンティア—日本の言語・方言の対照研究を中心に—」）などは共同研究に相当する。

3. 教育について

研究発表会およびシンポジウム等への参加者のうち、大学院生を含む学生は334人となっており、若手研究者の育成という点で一定の成果を上げているといえる。

そのほか、プロジェクト事業の中で、大学院生4名、学振PD1人が共同研究員になっていること、大学院生筆頭の研究発表も8件あることなども特筆に値する。

公開的な教育の機会としてのNINJAL チュートリアル「カテゴリ文法入門」を4回にわたって開催し（令和2年9月5日、9月12日、9月19日、9月26日）、大学院生を中心に延べ228名の参加を得たことも注目される。

今後も特定の若手研究者の育成ということと、特に限定しない多くの大学院生への教育ということ

との両面での展開が期待される。

4. 社会との連携及び社会貢献について

NINJAL 日本語学講習会で多数の日本語教師が参加したこと、甕島の全中学校を対象にした遠隔の啓蒙的講演、などはコロナ下の状況での制約はあるものの、注目すべき社会貢献と言える。

5. グローバル化について

国際ワークショップ「日本語における移動動詞の文法化」、ソウル大学人文学部との学術交流協定に基づく国際ワークショップ (Japanese/Korean Phonology) など、国内にとどまらない研究活動が行われており、海外研究機関からの参加者も 112 人と一定数ある。

Prosody and Prosodic Interfaces (H. Kubozono, J. Ito and A. Mester eds. Oxford University Press, 2021 年刊行予定) の編集作業を完了するなど、出版も着実に進められている。海外のジャーナル・論文集に 8 本の論文が出されていることも注目される。

6. その他特記事項

名詞修飾表現の言語地図 The World Atlas of Noun-Modifying Constructions (WANMC) を計画より 1 年早く一般公開したことも研究の進展を示すものである。現在のところアクセスできる言語はアジアの一部の言語に限られているようであるが、今後の進展が待たれる。

統語・意味解析コーパスの開発と言語研究

プロジェクトリーダー：プラシャント・パルデシ

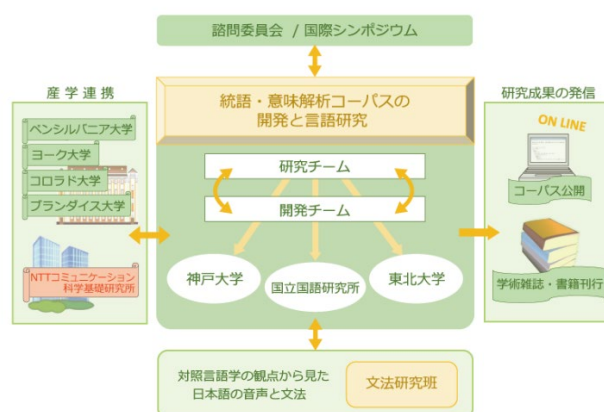
I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

現在世界の主要言語について Penn Treebank 方式の統語解析情報付きコーパス（ツリーバンク）が作られ、言語学および言語処理の研究に目覚ましい成果を挙げている。しかし日本語については十分な規模の公開されたツリーバンクは存在しない。

本プロジェクトでは、上記のような日本語研究の遅れを挽回し、多様な日本語の機能語、句、節および複雑な構文を大量の言語データから検索・抽出して研究することを可能とする統語・意味解析情報付き日本語構造体コーパス NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ)・Keyaki Treebank/Kainoki Treebank/Kusunoki Treebank の構築に加えて、述語項構造解析のために必要となる意味役割情報を付与するコーパスの開発も試みる。さらに、このコーパスを利用して、日本語の研究を行い、その成果を国内外に向けて発信する。コーパスの共同利用の推進の一環として、最終年度までに5～6万文規模のコーパスを完成させる予定であり、言語処理の技術を持たない人でも簡単に利用できるインターフェースとともに、国立国語研究所のホームページから一般公開する。また、日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も用意する。

上記の目的を達成するために、本プロジェクトでは、右図の示すように、日本国内外の研究者から構成される研究班に加えて国立国語研究所、東北大学、神戸大学にコーパス開発班を設け、それらの班が相互に連携しながら開発と研究を進める。また、日本語研究の国際化を目指して、世界のコーパス言語学研究の最前線で活躍している海外の研究者および日本国内の中堅研究者で Advisory Board を構成し、このメンバーのアドバイスを中心に諸企画の方針・方向を決定し、国際的研究ネットワークの構築を図る。また、国際シンポジウムなどを開催し、その成果を海外の定評のある出版社・研究雑誌を通じて発信する。



2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画

- ・コーパス開発：6年間で5～6万文規模の統語・意味解析コーパスを完成させ、一般公開する。
- ・日本語に堪能でない海外の研究者にも本コーパスを利用できるようにローマ字版も提供する。
- ・コーパス使用の利便性を図るために複数の検索ツール（インターフェース）を提供する。
- ・統語・意味解析コーパスに基づく研究を行い、研究成果を国内外に発信する。

● 年次計画

平成 28 年度：研究プロジェクトの始動（1 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回、国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国内外の主要研究者から成るアドバイザリーボードを設置し、プロジェクトの運営や成果発信について随時アドバイスを求める。
7. インターネットを通じてアノテーション作業が円滑に行える環境を海外の研究者と連携しながら構築する。
8. 海外の大学と研究交流協定を結ぶ。
9. 日英版のユーザーフレンドリーなインターフェースを構築し、NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスと合わせて公開する（1 万文）。
10. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
11. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 29 年度：研究プロジェクトの推進（2 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) を企画し、実施する。研究成果の編集を開始する。
7. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 2 万文のデータを公開する。
8. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
9. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

平成 30 年度：研究成果の中間とりまとめ（3 年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。

5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計3万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を2回開催する（内1回はNINJAL チュートリアル）。
8. アノテーションマニュアル試作版作成・ウェブ公開する。
9. インターフェースの開発・改良を続ける。
10. 国際シンポジウム (Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing) の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを経た後に、海外の定評のある研究雑誌 LILT (*LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY*) に提出する。
11. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を執筆し、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みを模索する。
12. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を開始する。
13. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を開始する。
14. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）、科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。
15. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。
16. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を取りまとめ、論文集を編集する。

令和元年度：研究プロジェクトの拡充（4年目）

1. プロジェクト HP（日英版）を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに1万文を追加し、合計4万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催。
8. 日本語の統語論の教育に特化した Exploring Japanese Syntax (仮題) を刊行し、併せて、この教材の練習問題を NPCMJ コーパスを利用して解くための仕組みも公開する。
9. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
10. 幼児の発話データへの統語意味解析情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続し、CHILDES (Child Language Data Exchange System) と連携してデータを公開する。
11. 述語と機能語に対する詳細な形態論情報付与のための研究（宮田 Susanne 教授との共同研究）を継続する。

12. インターフェースの開発・改良を続行する。
13. 岡山大学(竹内研究室)と連携し、述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
14. 2013 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果の編集を完了・出版社 (Oxford Univ. Press) に入稿する。
15. 2016 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果を出版社 (John Benjamins) に入稿する。
16. 2017 年 12 月に開催した NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果をとりまとめ、プロジェクトの内部と外部の査読者によるレビューを完了し、海外の定評のある研究雑誌 LILT (*LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY*) に提出する。
17. 日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ), 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和2年度：研究成果のとりまとめ (5年目)

1. プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。
5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 5 万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会 (チュートリアル) を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. インターフェースの開発・改良を続行する。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開 (宮田 Susanne 教授との共同研究)
11. 述語と機能語に対して詳細な形態論情報の付与されたデータを公開 (宮田 Susanne 教授との共同研究)
12. 岡山大学(竹内研究室)と連携し、述語構造シソーラス (Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)) で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
13. 日本語学習者のコミュニケーション (リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ), 科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究: 複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

令和3年度：研究成果の公開 (6年目)

1. プロジェクト HP (日英版) を開設・公開し、随時更新する。
2. 若手研究者の育成の一環として PD フェローを雇用し、研究指導を行う。
3. 非常勤研究員を数名雇用し、アノテーション作業を行う。
4. 研究班と開発班の合同研究会を年数回国内各地の大学で開催し、若手研究者にも積極的に参加してもらう。

5. 国内外の学会で研究発表を行う。
6. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 6 万文のデータを公開する。
7. 大学院生向けの統語コーパス利用講習会（チュートリアル）を開催する。
8. アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開
9. 岡山大学（竹内研究室）と連携し、述語構造シソーラス（Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT)）で分析された意味役割とフレームの情報を統語・意味コーパス NPCMJ に加える。
10. 統語意味解析情報を付与した幼児の発話データの公開（宮田 Susanne 教授との共同研究）
11. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し、「文型バンク」の開発・公開を進める。

【3 年目までの成果物】

- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3 万文）を初心者から上級者まで様々な利用が可能な各種検索インターフェースと共に公開。
- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（3 万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。

【5 年目までの成果物】

- ・ 海外の定評のある研究雑誌の特集号または論文集：「NINJAL 国際シンポジウム Exploiting Parsed Corpora: Applications in Research, Pedagogy, and Processing の研究成果（論文集）の刊行（LILT (LINGUISTIC ISSUES IN LANGUAGE TECHNOLOGY)）」
- ・ NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパス（5 万文）をユーザーフレンドリーなインターフェースと共に公開。
- ・ 日本語の統語論の教育に特化した入門書 *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective* の刊行
- ・ 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ），科研プロジェクト「統語・意味解析情報タグ付きコーパス開発用アノテーション研究：複文を中心に」および科研プロジェクト「準均衡超大規模日本語コーパスと高速検索ツールの開発」と連携し開発した「文型バンク」（ウェブ版）。
- ・ NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果（論文集）の刊行（Oxford Univ. Press）
- ・ NINJAL 国際シンポジウム Mimetics in Japanese and other language of the world の研究成果（論文集）の刊行（John Benjamins）

6年間のロードマップ

統語コーパス	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度	R2 年度	R3 年度
データ	統語・意味解析コーパス(NPCMJ)を毎年 1 万文(計 6 万文)作成および一般公開					
シンポジウム等	国内外の学会で研究発表	国際シンポジウム開催、国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表	国内外の学会で研究発表
	毎年 2 回公開研究発表会開催					
講習会等	毎年 2 回統語コーパス利用講習会					
刊行・出版			国際シンポジウムの成果を刊行, アノテーションマニュアル試作版作成	アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	啓蒙書・普及書を刊行, アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開	アノテーションマニュアルの改訂・ウェブ公開

II. 令和 2 年度活動概要

令和 2 年度予算総額 29,506 千円

令和 2 年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ① 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会（オンライン版）を 2 回開催し、計 56 名（延べ）の参加者が得られた。
- ② 弘前大学と連携し、津軽方言のコーパス構築を進めた。
- ③ 検索インターフェース NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル（第 1 ～ 25 節；25 節以降は準備中）の日本語版と英語版をプロジェクトのホームページで公開した。
- ④ NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果論をまとめた英文文集 Verb-Verb Complexes in Asian Languages (Taro Kageyama, Peter Edwin Hook, and Prashant Pardeshi (eds.) Oxford University Press, 571 頁＋前書き・索引) の編集・校閲作業を終え、出版社に提出した。
- ⑤ 日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を刊行した。この教材の一部の練習問題を NPCMJ を使って解くためのインターフェースを開発し、刊行と同時に公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ① 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、7 名の非常勤研究員（うち PD フェロー 1 名、大学院生 3 名、フルタイム 1 名、パートタイム 1 名および技術補員 1 名）を雇用し、プロジェクト共同研究員と共にプロジェクトの事業（コーパス開発、チュートリアル開催、データの著作権処理等）を進めた。

- ② 学術交流協定に基づき、弘前大学と津軽方言のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加するための共同研究を行い、データの一部に対して試験的にアノテーションを試みた。また、津軽方言の有対動詞のデータを収集・分析し、「使役交替言語地図」(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP))に格納して、公開した。
- ③ 昨年に続き、本年も宮田 Susanne 教授(愛知淑徳大学)との共同研究を進め、子供の日本語習得のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加し、公開した。
- ④ 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーション付与作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題のインターフェースを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。また、竹内孔一准教授(岡山大学)と連携して NPCMJ のデータの一部に意味役割とフレームの情報を付加し、公開した。

3. 教育に関する計画

- ① 若手研究者を育成するために、PD フェロー1名、非常勤研究員数名5名を雇用し、アノテーション方法の研究およびアノテーション付与作業を推進した。
- ② 7名の大学院生を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、そのうち2名に公開研究会における発表の機会を提供した。
- ③ オンライン方式の講習会を1回開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ① インターネットを通して、検索インターフェース NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル(ユーザーズガイド)の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル(第1~25節)の日本語版と英語版を公開し、NPCMJ コーパスとともに一般に発信した。

5. グローバル化に関する計画

- ① 英語による研究成果として、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を2020年10月にひつじ書房から刊行した。この教材の一部の練習問題を NPCMJ を使いながら解くためのインターフェースを開発し、刊行と同時に公開した。
- ② 英語インターフェースと日本語インターフェース、ローマ字表記のデータと仮名漢字表記のデータが選択できるようにした。
- ③ The International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC) 2020(マルセイユ, フランス, 2020年5月11~16日)(新型コロナウイルス感染拡大によるオンライン開催)で研究成果を発表した。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、研究発表会（オンライン版）を2回開催した。2回の研究発表会において計3件の研究発表が行われ（すべて大学院生が筆頭発表者）、計56人（延べ）の参加者が得られた（うち海外機関研究者1人、大学院生を含む学生13人）。各研究会の詳細は以下の通りである。</p> <p>① 第1回研究発表会 開催日：2020年7月7日、参加者数25人、うち、海外機関研究者0人、大学院生を含む学生6人。</p> <p>② 第2回研究発表会 開催日：2020年11月27日、参加者数31人、うち、海外機関研究者1人、大学院生を含む学生7人。</p> <p>2. 津軽方言のコーパス構築を進めた。シンポジウムに関しては、弘前大学との津軽方言コーパス構築に関する共同研究の成果を発表する場として計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大により開催に至らなかった。来年度の開催を目指す予定である。</p> <p>3. 検索インターフェース NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル（第1～25節）の日本語版と英語版をプロジェクトのホームページで公開した。また、新たに NPCMJ Development Interfaces を、使用説明書の日本語版と英語版とともに公開した。</p> <p>4. 2013年12月に開催した NINJAL 国際シンポジウム MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES の研究成果論をまとめた英文文集 Verb-Verb Complexes in Asian Languages (Taro Kageyama, Peter Edwin Hook, and Prashant Pardeshi (eds.), Oxford University Press, 571頁＋前書き・索引) を刊行した（2021年2月）。</p> <p>5. 日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective を2020年10月にひつじ書房から刊行した。この教材の練習問題の一部を NPCMJ を使いながら解くためのインターフェースを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p> <p>1. 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究を推進するために、7名の非常勤研究員（うちPDフェロー1名、大学院生3名、フルタイム1名、パートタイム1名および技術補員1名）を雇用し、プロジェクト共同研究員と共にプロジェクトの事業（コーパス開発、チュートリアル開催、データの著作権処理等）を進めた。</p> <p>2. 学術交流協定に基づき、弘前大学と津軽方言のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加するための共同研究を行い、データの一部に対して試験的にアノテーションを試み、748ツリー（16,512語を内部公開した（通称：Matsunoki Treebank））をプロジェクトのHPで公開した。また、津軽方言の有対動詞のデータを収集・分析し、「使役交替言語地図」（The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)）に格納して、公開した。</p> <p>3. 昨年に続き、本年も宮田 Susanne 教授との共同研究を進め、子供の日本語習得のデータに NPCMJ 方式のアノテーションを付加し、内部公開した（2021年3月末時点で12,427ツリー；59,218語）。来年度はダブルチェックを行い、前年度で開発した幼児の言語発達の過程を可視化できるインターフェースとともに公開する予定。</p>	

4. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題のインターフェースを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。また、岡山大学竹内研究室と連携して NPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報を付加し、内部公開した（2021 年 3 月末時点で 36,639 ツリー、346,830 語）。10. 業務委託に基づき、東北大学と連携してアノテーションの研究・アノテーション作業およびデータのローマ字化作業を進めた。同じく、業務委託に基づき、神戸大学と連携して、インターフェースの改良に関する研究を行い、パターンブラウザに改良を加え、公開した。さらに、(1)7 の Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective の練習問題を作成し、当該練習問題を NPCMJ コーパスで解くための仕組みを開発した（書籍の出版と合わせて、公開する予定である）。また、岡山大学竹内研究室と連携して NPCMJ コーパスの一部のデータに意味役割とフレームの情報を付加し、内部公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画 <ol style="list-style-type: none"> 1. NINJAL Parsed Corpus for Modern Japanese (NPCMJ) コーパスに 1 万文を追加し、合計 5 万文を 2021 年 3 月に公開した。加えて、今までパーザーの学習用に使用した述語項構造シソーラスの用例に NPCMJ 方式のアノテーションを付与したデータも公開する（2021 年 3 月末時点で 36,639 ツリー、346,830 語）。 2. 新型コロナウイルス感染症拡大で対面式の開催を見合わせた。オンラインで開催の準備を進め、2021 年 3 月 13 日に講習会を開催した（総参加者数：44 名内学生数 11、総発表（口頭）件数：5 件）。 3. NPCMJ コーパスに基づく研究の成果を国際学会で 1 件、国内学会で 9 件発表した。 4. 日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）と連携し、NPCMJ コーパスの情報を利用して「文型バンク」の拡充を進めた。新しい文型 200 件の見出しデータが完成させた（Excel 形式）。 5. 述語とその項・付加詞の情報を可視化するシステムの構築に向けて、日本語学習者のコミュニケーション（リソース開発班基本動詞ハンドブック作成グループ）と連携し、NPCMJ コーパスに付与されている情報を利用して、基礎データを作成した（Excel 形式）。 	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画 <ol style="list-style-type: none"> 1. 国内外の主要研究者から成るアドバイザーボードと相談しながらアノテーションの質的な拡充を行った。変更点をウェブで公開中のマニュアルに反映した。 2. 国語研の他の研究プロジェクトと合同で NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」を開催し、研究成果を発表した。今年度中の論文化し、窪菌晴夫・朝日祥之（編）『言語コミュニケーションの多様性（仮題）』と題した論文集に寄稿予定。 3. コーパスに形態論情報を付与するために、CHILDES（チャイルズ, Child Language Data Exchange System）を援用するための研究を、宮田 Susanne 先生と共同で続行した。 	

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 若手研究者を育成するために、PD フェロー 1 名、非常勤研究員 5 名を雇用し、アノテーションの研究および実施を推進した。 2. 大学院生を 7 名、共同研究員としてプロジェクトに参画させ、公開研究会において、2 名に発表の機会を提供した。 3. 新型コロナウイルス感染拡大ですべての発表会がオンラインとなり、旅費等の支援は不要となった。 4. 当初予定していた対面式の講習会は新型コロナウイルス感染拡大で実現できず、オンライン方式で開催するための準備を進め講習会を 1 回（3 月 13 日）開催した。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インターネットを通して、検索インターフェース NPCMJ Development Interfaces , NPCMJ Explorer, NPCMJ Search, NPCMJ Child Language Development Timeline のマニュアル（ユーザーズガイド）の日本語版と英語版および NPCMJ アノテーションマニュアル（第 1～25 節）とともに NPCMJ コーパスを一般公開した。 	

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 英語による研究成果として、日本語の統語論の教育に特化した Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective が 2020 年 10 月にひつじ書房から刊行された。この教材の一部の練習問題を NPCMJ コーパスを使いながら解くためのウェブサイトを開発し、書籍の出版と合わせて公開した。 2. コーパスのローマ字表記および英語版インターフェースを含む NPCMJ コーパスを公開した。 3. The International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC) 2020（マルセイユ，フランス，2020 年 5 月 11～16 日）（新型コロナウイルス感染拡大によるオンライン開催）で研究成果を発表した。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

このプロジェクトの中心である、日本語の統語・意味コーパス(NPCMJ コーパス)の開発と拡充は、予定通り進展しており、令和2年度も順調に1万文のアノテーション付きデータが追加された。統語情報だけでなく意味情報のタグも付されたコーパス・プロジェクトはユニークな試みであり、発足当初と比べるとインターフェースも充実してきている。令和2年度は、日本語版と英語版のアノテーションマニュアル(25節まで)や、統語論教育のためのテキスト(Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective)の練習問題のためのインターフェースも公開された。NPCMJ コーパスのシステムは機能が多岐にわたっているだけに、使いこなすための技術が必要な側面があり、練習問題付きの教科書は有用であろうと思われる。今後、どのぐらい利用されているか、随時、ページビュー数等も発表してほしい。

本プロジェクトの令和2年度の活動は、十分充実しているが、計画よりも特に上回っているわけではないと判断し、評価はBとした。

《評価項目》

1. 研究について

論文集としては、2013年12月に開催された国際シンポジウムの成果がVerb-Verb Complexes in Asian Languages (Taro Kageyama, Peter Edwin Hook, and Prashant Pardeshi (eds.), Oxford University Press, 571頁+前書き・索引)として刊行された。また、アノテーションマニュアルに加えて、NPCMJ Development Interfacesの使用説明書が公開された点も喜ばしい。

令和元年度には、自己点検報告書にNPCMJ コーパスに基づく研究の成果として「国際学会での発表4件、国内学会での発表16件、論文刊行6編」と報告されていたが、令和2年度は「国際学会で1件、国内学会で9件発表」であった。新型コロナウイルス感染症拡大の影響があったのかもしれない。

また、津軽方言や日本語習得のデータにNPCMJ スタイルのアノテーションを加える試みは興味深い。プロジェクト全体の目的に対して、どのような位置づけがされているのか、もう少しわかりやすい説明があればよりよいと感じた。

2. 共同利用・共同研究について

NPCMJ コーパスには、令和2年度も一万文のデータが追加され、コーパスの拡充が進んでいる。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、例年のようなNPCMJ コーパス講習会/チュートリアルは開かれなかったが、オンラインの講習会が開かれた。

また、外部研究機関との連携としては、国際的に広く利用されている、言語発達のコーパスであるCHILDESと連携し、アノテーションの作業にも着手している。また、岡山大学の竹内研究室とも共同研究を進め、述語構造シソーラス(Predicate-Argument Structure Thesaurus (PT))で分析された意味役割とフレームの情報をNPCMJに加えた。また、国語研内の他グループと連携し、「文型バンク」

の拡充も進め、新たに文型 200 件に意味解説を追加した。このように、共同利用・共同研究について概ね順調に進展していると判断できる。

3. 教育について

これまでと同様、PD フェローや非常勤研究員を雇用するとともに、大学院生を共同研究員としてプロジェクトに加えており、若手研究者の育成を図っている。

ただし、新型コロナウイルス感染拡大ですべての発表会がオンラインとなり、旅費等の支援は不要となった。また、当初予定していた対面式の講習会は新型コロナウイルス感染拡大で実現できず、オンライン方式の講習会を 1 回、開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献について

マニュアルが充実しつつあることは、大変喜ばしいことである。現在公開されているアノテーションマニュアルは 25 節まで、とのことであるが、これが主要な部分をほぼカバーしているのか、まだ続きが相当あるのか、明示されていたほうが望ましいと思う。

5. グローバル化について

NPCMJ コーパスはローマ字でも使用でき、ウェブサイトやマニュアルも英語と日本語の 2 言語で作成されている。グローバル化については、問題ないと判断している。

6. その他特記事項

NPCMJ のデータ量について、「自己点検報告書」の p. 11 では「合計 5 万文を公開した」とあるが、「主要業績概要」の①では、「約 6.7 万文のデータ」とあった。また、web ページ (<http://npcmj.ninjal.ac.jp/>) の News 欄によると 2.6 万文の追加がされたとあった。どうして数字が食い違っているのか不思議に思ったので、機会があれば、説明してほしい。

「自己点検報告書」に 2 ヶ所「英文文集」という表現があったが、「英文論文集」のほうが適切なのではないかと思った。

日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成

プロジェクトリーダー：木部 暢子

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトは、日本の消滅危機言語・方言の記録・分析・継承を目的として、各地の言語・方言の調査を実施し、言語資源の整備・分析を行うとともに、言語・方言の継承活動を支援して地域の活性化に貢献することを目的とする。

近年、世界的な規模でマイナー言語が消滅の危機に瀕している。2009 年、ユネスコは世界の危機言語リストを発表したが、その中には日本で話されている 8 つの言語－アイヌ語、与那国語、八重山語、宮古語、奄美語、沖縄語、国頭語、八丈語－が含まれている。しかし、消滅の危機に瀕しているのはそれだけではない。日本各地の伝統的な方言もまた、消滅の危機にさらされている。これらの言語・方言が消滅する前にその包括的な記録を作成し言語分析を行うこと、また、これらの言語・方言の継承活動を支援することは、言語学上の重要課題であるばかりでなく、日本社会においても重要な課題である。

以上のような状況を踏まえ、本プロジェクトでは、次のことを実施する。(1) 日本の危機言語・方言の語彙集、文法書、談話テキストの作成と言語分析、(2) 音声・映像資料（ドキュメンテーション付き）、「日本語諸方言コーパス」等の言語資源の整備、(3) 地域と連携した講演会・セミナーの開催、(4) 若手育成のためのフィールドワークの手引き書の作成。

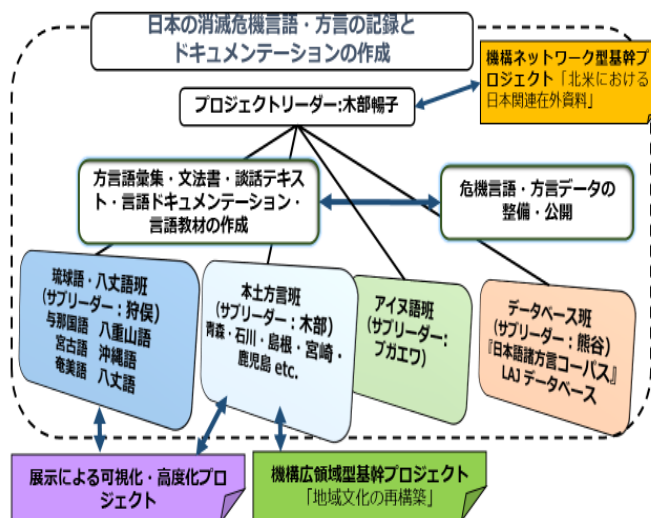
なお、実施にあたっては、機構の広領域型基幹プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、ネットワーク型基幹プロジェクト「北米における日本関連在外資料調査研究・活用」、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」と連携する。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたっては、図のような研究班を組織する。

- 琉球語・八丈語班、本土方言班は 6 年間で、琉球 24 地点、八丈語、本土 16 地点（東北 4 地点、関東 3 地点、中部・関西 3 地点、中国・四国 3 地点、九州 3 地点）の語彙集・文法書・談話テキスト、言語ドキュメンテーション、言語教材を作成する。アイヌ語班はアイヌ語の口承文芸コーパスを作成する。
- データベース班は「日本の危機言語・方言の音声データベース」、「アイヌ語口承文芸コーパス」、「日本語諸方言コーパス」、「『日本言語地図』データベース」の整備・公開を行う。
- 研究成果として、以下のものを目指す。



書籍：ムートン社 Handbook of Japanese Dialects , Handbook of the Ainu Language, 危機言語・方言に関する英文論文集、『日本語の格』（仮題）,『談話のなかの方言』,『沖縄県久米島方言調査報告書』,『島根県隠岐の島方言調査報告書』,『石川県白峰方言調査報告書』,『愛知県木曽川方言調査報告書』,『青森県むつ市方言調査報告書』,『青森県八戸市方言調査報告書』,『宮崎県椎葉村方言語彙集（仮題）』,

コーパス・データベース：『アイヌ語口承文芸コーパス』,『日本語諸方言コーパス』,「日本の危機言語・方言データベース」,「『日本言語地図』データベース」,

その他：フィールドワークの手引き書,各地の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション,言語教材。

●年次計画

平成 28～29 年度（1～2 年目）

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：「格と取り立て」,「指示詞・代名詞」に関する研究会, コーパスに関する合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：「日本語諸方言コーパス」,「危機言語・方言音声データ」,「アイヌ語口承文芸データ」等を拡充・整備し, 公開する。
- ④ 地域との連携：「危機的な状況にある言語・方言サミット」（年 1 回）,「方言セミナー」（年 1 回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。フィールドワークの手引き書の準備を行う。
- ⑥ 成果：『日本語の格表現』（くろしお出版）,『かたりのなかの方言』（勉誠出版）を出版する。『沖縄県久米島方言調査報告書』,『島根県隠岐の島方言調査報告書』,『石川県白峰方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language（30 年 4 月刊行予定）,『椎葉村方言語彙集（仮題）』（31 年出版予定）の出版準備を行う。

平成 30 年度（3 年目）

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言の調査を行う。
- ② 研究会：国際シンポジウム “Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization.” , 「動詞・形容詞」に関する研究発表会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』モニター版を公開する。また,「危機言語・方言」音声データ,『アイヌ語口承文芸コーパス』,「『日本言語地図』データベース」のデータ補充, および首都圏大学生調査の結果分布地図, 属性別集計表の作成。
- ④ 地域との連携：「方言セミナー」,（1 回）を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生, PD 等を調査へ参加させる。『フィールドワークの手引き書』の作成を進める。
- ⑥ 成果：『白峰方言調査報告書』,『隠岐の島方言調査報告書』を刊行する。ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language の出版準備を行う。各地点の語彙集・文法書・談話テキスト・言語ドキュメンテーション・フィールドワークのテキストの刊行準備を進める。

令和元～2 年度（4～5 年目）

- ① 調査：琉球語, 八丈語, 本土方言, アイヌ語の調査を行う。
- ② 研究会：「方言語彙集」,「文法記述」に関する研究会, コーパス合同シンポジウムを開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』のデータを拡充整備する。「危機言語・方言」データ,『アイヌ語口

承文芸コーパス』、『日本言語地図』データベース」等のデータを拡充・公開する。

- ④ 地域との連携：「方言セミナー」，「危機的な状況にある言語・方言サミット」を開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生，PD 等の調査への参加。
- ⑥ 成果：『椎葉村方言語彙集（仮題）』，『むつ市方言調査報告書』，『日本語の格表現』（くろしお出版），『かたりの中の方言』（勉誠出版），『地域文化の可能性』を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。
- ⑦ 展示による言語研究の可視化・高度化を実施する。

令和3年度（6年目）

- ① 調査：次期準備調査を実施する。
- ② 研究会：研究成果報告会を開催する。
- ③ 言語資源：『日本語諸方言コーパス』（9080 時間）を一般公開する。「危機言語・方言音声データ」，「アイヌ語口承文芸コーパス」，『日本言語地図』データベース」等のデータを拡充・公開する。
- ④ 地域との連携：『椎葉村方言語彙集』を刊行する。言語復興のための講演，ワークショップを開催する。
- ⑤ 若手育成：大学院生，PD 等の調査データの整備・公開を支援する。
- ⑥ 成果：ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language , 『フィールドワーク言語学の手引き』を出版する。各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。
- ⑦ 民博特別展に参加し，「災害と方言」の展示を行う。

6年間のロードマップ

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度	R2 年度	R3 年度
調査	琉球語, 八丈語, アイヌ語, 本土方言調査					
データ	『諸方言コーパス』データ整備	モニタ版公開	データ整備		本公開	
			方言コーパスを使った方言研究			
	危機言語・方言音声データ・アイヌ語口承文芸コーパス等整備・公開					
シンポジウム等	毎年, 研究発表会, 危機言語・方言サミット, コーパス合同シンポジウム, 方言セミナー開催					
			国際シンポジウム開催	ハワイ大合同シンポジウム (毎年 1 回開催)		
刊行・出版	『久米島方言調査報告書』 『島根県隠岐の島方言調査報告書』, 『白峰方言調査報告書』等刊行		『椎葉村方言語彙集 (仮題)』, 『愛知県木曾川方言調査報告書』等刊行		『椎葉村方言語彙集 (仮題)』, 『むつ市方言調査報告書』, 『八戸市方言調査報告書』, 『日本語の格表現』, 『かたりの中の方言』, 『地域文化の可能性』	
	Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language 『フィールド言語学の手引き (仮題)』					

3. 令和3年度の実施予定

- ・研究成果報告会を開催する。
- ・『日本語諸方言コーパス』を正式版として公開する。
- ・『椎葉村方言語彙集』を刊行する。言語復興のための講演，ワークショップを開催する。
- ・大学院生，PD 等の調査データの整備・公開を支援する。
- ・ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language , 『フィールド言語学の手引き』を出版する。
- ・各地点の語彙集・文法書・談話テキストをウェブで公開する。

・民博特別展に参加し、「災害と方言」の展示を行う。

Ⅱ. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 40,000 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

【フィールドワーク】全国40地点で調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止とした。【研究発表会等】その代わりに研究発表会を充実させた。実施内容は以下のとおり（すべてオンライン開催）。①2020年6月14日 プロジェクト第1回研究発表会「格・情報構造（本土諸方言）」、②2021年3月14日プロジェクト第2回研究発表会、③2021年3月6日・3月21日「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー」（「対照言語」文法研究班と共催）、④2021年3月28-29日「アジア・アフリカ地理言語 2020 年度第2回研究会 Classification and symbols for a geolinguistic study of grammatical relations」（東外大AA研共同利用・共同研究課題「アジア・アフリカ地理言語学研究」、科研費18H05510と共同開催）。その他、科研費と合同で異分野融合の研究発表会を開催した。⑤2020年8月17-18日「遺伝学・言語学・考古学の成果から見る宮古諸島の人の多様性」、⑥2020年9月19-20日「係り結びと格の通方言的・通時的研究」、⑦2020年12月19-20日「日琉諸方言系統論の展望」。【研究成果】前年度に実施した青森県八戸市方言調査の報告書を3月に刊行した。また、『うちなーぐち活用辞典』『及位の方言』を刊行した。【教材・教育プログラム】東外大AA研LingDy3と共同で『フィールド言語学の手引き』の編集を、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」、鹿児島大学と共同で『地域文化の可能性』の編集を行った。これらは2021年度出版の予定である。【受賞】琉球朝日放送株式会社と共同で制作した「くとうぼどう宝 ～消滅危機言語を守る人～」が第26回プログレス賞 奨励賞を受賞、本プロジェクトが刊行した『鳩間方言辞典』の著者 加治工真市氏が琉球新報活動賞（出版活動部門）を受賞した。【大学との組織的な連携】東外大AA研LingDy3との連携協定に基づき、クロスアポイントメントにより特任助教1人を雇用し、「フィールド言語学ウェビナー」、教材『フィールド言語学の手引き』の編集、若手育成等を実施した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

【データベース等】『日本語諸方言コーパス（COJADS）』モニター版のデータの更新、追加公開を行った。公開データは62地点、60時間となった。COJADSモニター版は2019年5月の公開から1年半で中納言の利用契約数が3,206件となった。また、自然言語処理研究等の有償利用申請が3件あった。『アイヌ語口承文芸コーパス』はアイヌ語千歳方言の民話8話を追加し、公開説話数は38話となった。『日本言語地図データベース』（LAJの原データの電子化）は25項目のデータを追加し、ダウンロード可能なデータは100項目となった。【方言辞典】昨年度刊行した『鳩間方言辞典』の全用例に音声をつけた『鳩間方言 音声語彙データベース』、『多良間島方言辞典』（渡久山春英、セリック・ケナン）を国語研リポジトリで公開した。また、首里・那覇方言の『うちなーぐち活用辞典』（宮良信詳著）、旧山形県及位村方言の『及位方言辞典』（高橋良雄著）を刊行した。【講習会・講演会】NINJAL チュートリアル（オンライン）で「コーパスを使った方言研究」を開催した。【研究成果】NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」、Proceedings of Methods XVI（2020年4月）等においてCOJADSを使った研究を公開した。

3. 教育に関する計画

【プロジェクト非常勤研究員の雇用】若手育成のために、非常勤研究員を9人雇用した。【大学院生、学振PD等の参加】大学院生6人、日本学術振興会特別研究員5人を共同研究員としてプロジェクトに参画さ

せ、学会や研究発表を支援した。今年度の発表件数は大学院生、学振特別研究員合わせて 10 件である。【講義】2020 年 12 月 5-6 日に東外大 AA 研 LingDy3 と共同で、フィールドワークに関する講義「フィールド言語学ウェビナー」を、2021 年 2 月 11-12 日に九州大学 言語学講座 下地理則研究室と共同で、大学院生の研究支援を目的とする「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキル WS」をオンラインで開催した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

【地域社会との連携】宮崎県椎葉村との協定に基づき、機構の広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で、『椎葉村方言語彙集』の刊行準備を進めた。2021 年度に椎葉村と共同出版の予定である。また、鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町との協定に基づき、方言復興のための公民館講座を 6 月から毎月 1 回オンラインで開催するとともに、沖永良部の方言ミュージカル『ヒーヌムンの生まれた海』を制作し、2021 年 2 月 23 日に知名町あしびの郷文化ホールにおいて上演した。【研究成果の社会への普及】NINJAL フォーラム「日本とアジアの消滅危機言語ー私たちはいま、何をしなければならないかー」を 2021 年 2 月 27 日に東外大 AA 研 LingDy3 と共同で開催した（オンライン）。文化庁、気仙沼市等と共同で「危機的な状況にある言語・方言サミット（気仙沼）」を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、次年度に延期となった。【展示】「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で、モバイル型展示ユニットによる展示を以下のとおり実施した。①2020 年 9 月 25 日-12 月 17 日 静岡英和学院大学「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」の展示。②2021 年 3 月 4 日-5 月 18 日 民博特別展「復興を支える地域の文化ー3.11 から 10 年」に「方言と地域文化ー沖縄県八重山と東北各地の方言」のテーマで参加し、「危機に瀕した言語・方言」「地震・津波・方言」「がんばっぺ 東北」を展示。③昨年度に開催した企画展示「ハワイ：日本人移民の 150 年と憧れの島のなりたち」を踏まえ、2021 年 3 月 15 日-5 月 9 日に山口県周防大島町、周防大島町教育委員会が主催する「周防大島とハワイー移民たちの足跡ー」（周防大島文化交流センター）に共催として協力した。【社会人のスキルアップ】知名町において役場職員や市民が参加する公民館講座や方言劇制作を実施し、方言の保存と復興に関する技術訓練を行った。また、和泊町職員と協議を重ね、「島ムニ継承推進協議会」の発足に貢献した。

5. グローバル化に関する計画

【海外の研究者との連携】 海外の研究者 4 名を共同研究員に加え、共同研究を推進した。オンラインのシンポジウムでは、海外の共同研究者 2 名の発表を含め、研究発表とディスカッションを行った。【国際共同研究発表会】毎年実施しているハワイ大学マノア校との共同研究発表会は、新型コロナウイルスのため日程の調整がつかず、今年度は中止とした。【国際出版】ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language, 2018 年の国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集の刊行準備を進めた。また、ハワイ大学との協定に基づき、消滅危機言語を中心とするオープンアクセスの電子書籍シリーズを Brill 社から刊行するための協議を行った。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>(1) フィールドワーク</p> <p>1. 共同研究員が 40 地点において調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、すべて中止とした。</p> <p>(2) 公開研究発表会・講演会</p> <p>現地調査の代わりに、研究発表会を以下のとおり充実させた。</p> <p>2.1 2020 年 6 月 14 日にプロジェクト第 1 回研究発表会「格・情報構造（本土諸方言）」(Zoom&YouTube Live 配信)を開催した。発表件数 5 件、参加者 82 人 (Zoom 参加登録 32 人+YouTube Live 視聴者 50 人、うち学生 3 人)、YouTube 視聴 384 件である。</p> <p>2.2 2021 年 3 月 14 日にプロジェクト第 2 回研究発表会 (Zoom&YouTube Live 配信)を開催した。今年度は現地調査ができなかったため、これまでの調査データをもとに成果を報告した。発表件数 4 件、参加者 68 人 (Zoom 参加登録 51 人、YouTube Live 視聴者 17 人、うち学生 13 人) である。</p> <p>2.3 2021 年 3 月 6 日・3 月 21 日に「対照言語」文法研究班と共同で「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心にー」(オンライン)を開催した。発表件数 19 件 (詳細は「対照言語」文法版の報告書参照)。</p> <p>2.4 2021 年 3 月 28-29 日に東外大 AA 研共同利用・共同研究「アジア・アフリカ地理言語学研究」と共同で「アジア・アフリカ地理言語 2020 年度第 2 回集会」(オンライン)を開催した。テーマは Classification and symbols for a geolinguistic study of grammatical relations で、アジア・アフリカ・日本におけるケースマーキング・システムを一定の基準で記述し、比較した。発表件数 31 件、参加者 68 人 (うち学生 18 人、国外機関所属者数 8 人) である。</p> <p>その他、科研費と合同で異分野融合の研究発表会を開催した。</p> <p>2.5 2020 年 8 月 17-18 日に遺伝学、考古学と合同で、「遺伝学・言語学・考古学の成果から見る宮古諸島の人の多様性」(オンライン)を開催した (科研費 19H05354「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」(新学術領域「ヤポネシア・ゲノム」公募班)、科研費 17H06115「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」と共同)。発表件数 6 件 (遺伝学 3 件、言語学 2 件、考古学 1 件)、参加者 43 人 (うち学生 4 人、国外機関所属者数 3 人) である。</p> <p>2.6 2020 年 9 月 19-20 日にシンポジウム「係り結びと格の通方言的・通時的研究」(オンライン)を開催し、文献、フィールド双方の視点から、係り結びを考察した (科研費 19H05354「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」(新学術領域「ヤポネシア・ゲノム」公募班)、科研費 19H01255「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」、科研費 20K20704「日琉諸語における格という文法カテゴリーの検討」と共同)。発表件数 11 件、参加者 177 人 (うち学生 36 人、国外機関所属者数 3 人) である。</p> <p>2.7 2020 年 12 月 19-20 日に日本語史、フィールド言語学、遺伝学、統計学等の多分野合同のシンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」(オンライン)を開催した (科研費 17H02332「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」、科研費 17H06115「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」、科研費 18H05510「日本語と関連言語の比較解析によるヤポネシア人の歴史の解明」(新学術領域「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」計画研究 B02 班)。科研費 19H05354「日琉諸語の歴史と発展についての総合的研究に向けて」(新学術領域「ヤポネシア・ゲ</p>	

ノム」 公募班と共同)。発表件数9件(言語学7件, 遺伝学2件, 国外機関所属者2件), 参加者156人(うち学生25人, 国外機関所属者数13人)である。

3. 音声言語と手話言語の研究連携のために, 民博と共同で「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ2020/SSLL2020」を開催した。ダイアン・ブレンタリ教授(シカゴ大学)による特別講演1件, 特別企画: 手話言語学基礎講座を行い, 2020年9月25-10月2日にオンデマンド講演配信, 10月4日に質疑応答を実施した。

(3) 研究成果の公表

4. 『日本語の格表現』(くろしお出版), 『かたりの中の方言』(勉誠出版)は編集作業が遅れ, 来年度の刊行となった。
5. 椎葉村との協定に基づき『椎葉村方言語彙集』の編集作業を進めた(詳しくは「4 社会との連携」(1)1を参照のこと)。
6. 前年度に実施した青森県八戸市方言調査の報告書を機構広領域連携研究プロジェクト「地域社会」と共同で2021年3月に刊行した。
7. 共同研究員の研究も含めて, 書籍・報告書4件, ブックチャプター8件, 論文12件, 総説・解説1件, コーパス等4件, 学会発表・学術講演60件, 一般向けの講演・セミナー等6件, 講習・チュートリアル等5件, 研究発表会等企画12件, 新聞等執筆記事17件, 受賞2件, 取材記事7件, 展示2件の研究成果を公開した。(プロジェクトの企画によるもの, プロジェクトに対する謝辞を含むもののみ)。

(4) 教材及び教育プログラムの開発

- 8.1 東外大AA研LingDy3と共同で昨年度刊行した『フィールドワーク事前研修報告書』(これまでに実施したフィールドワーク事前研修の講義内容をまとめたもの)をもとに, 『フィールド言語学の手引き』の出版準備を進めた。2021年度出版予定である。
- 8.2 機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で昨年度に刊行した『地域文化の可能性』(2018年度に実施した鹿児島大学との共同授業の内容をまとめたもの)をもとに出版準備を進めた。2021年度出版予定である。

9. 受賞

- 9.1 琉球朝日放送株式会社と共同で制作した, 奄美・沖縄を巡って「言葉」について考える番組「くとうばどう宝 ～消滅危機言語を守る人～」が第26回プログ्रेस賞(テレビ朝日系列24社の番組審議会委員が選考する賞)奨励賞を受賞した。
- 9.2 国語研の協力のもと作成された沖永良部の刊行情報誌『おきのえらぶ島観光情報誌しまらっきょ vol.5』が日本地域情報コンテンツ大賞2020 自治体PR部門最優秀賞を受賞した(2020年11月19日)。審査員から「誌面からQRコードで動画に連動させ, 島の方言をダイレクトに聞けるなど, その取り組みがとても面白かった」と評された。
- 9.3 昨年度プロジェクトが編集・出版した『鳩間方言辞典』の著者 加治工真市氏が琉球新報活動賞(出版活動部門)を受賞した。そのほか, 本辞典と加治工真市氏が沖縄タイムス2020年7月21日, 琉球新報2020年11月8日等で紹介された。

10. 新聞の報道

- 10.1 山田真寛准教授と共同研究員の横山晶子がオンラインで行った沖永良部知名町公民館講座「しまむに教室」の講義が, 奄美新聞2020年6月6日, 南海日日新聞2020年6月7日で報道された。
- 10.2 琉球のことばを絵本で残す取り組みが, 朝日新聞2020年9月19日で紹介された。

(2) 研究実施体制等に関する計画

(1) 大学との組織的な連携

1. 国内外の研究者 78 人（内大学院生 6 人，日本学術振興会特別研究員 5 人，国外機関所属者 4 人）をプロジェクト共同研究員として組織してプロジェクトを推進した。
2. 東大 AA 研 LingDy3 との連携協定に基づき，クロスアポイントメントにより特任助教 1 人を雇用し，LingDy3 と共同で「フィールド言語学ウェビナー」，テキスト『フィールド言語学の手引き』の編集，若手育成のための「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキルWS」を実施した（「3. 教育」(2) (4) 5 参照）。

(2) 共同研究を通じた大学支援

3. 鹿児島大学との協定に基づき，上記のとおり教科書『地域文化の可能性』の出版準備を進めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画	
(1) データベース等の構築・公開	
1. 2019 年 5 月に公開した『日本語諸方言コーパス (COJADS)』モニター版に 25 時間分の新規データの追加公開を行った（2021 年 2 月）。これにより公開データは 62 地点，60 時間となった。	
2. 「危機言語 DB」の基礎語彙に鹿児島県甕島方言の基礎語彙のデータを追加。2021 年 2 月に『アイヌ語口承文芸コーパス』にアイヌ語千歳方言の民話データ 8 話を追加し，公開説話数は 38 話となった。また，2021 年 3 月に『日本言語地図データベース』（LAJ の原データの電子化）に 25 項目のデータを追加し，ダウンロード可能なデータは 100 項目となった。	
3. 昨年度刊行した『鳩間方言辞典』（加治工真市）の全用例に音声を付けた『鳩間方言 音声語彙データベース』を国語研リポジトリで公開した。また『多良間島方言辞典』（渡久山春英，セリック・ケナン）を国語研リポジトリで公開した。	
4. 未公開の方言集をウェブと印刷製本により公開する事業として，今年度は，首里・那覇方言の『うちなーぐち活用辞典』（宮良信詳著），旧山形県及位村の『及位方言辞典』（高橋良雄著）を 3 月に刊行した。	
(2) データベース等に関する講習会・講演会	
5. COJADS モニター版の利用促進のため，NINJAL チュートリアルで「コーパスを使った方言研究」をオンラインで開催した。（詳しくは「3 教育に関する計画」(4) 4 参照のこと）	
(3) データベース等を使った研究成果	
6. 2020 年 10 月 3 日に開催された NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」において COJADS を使った研究成果「配慮表現の地域差—日本語諸方言コーパス (COJADS) から」を発表した。また，COJADS を使った 格標示形式に関する論文が Proceedings of Methods XVI（2020 年 4 月）に掲載された。	
7. COJADS モニター版は，2019 年 5 月の公開から 1 年半で中納言の利用契約数が 3,206 件となった。また，自然言語処理研究の利用申請が 3 件あり，この分野でも注目されている。	
(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画	
(1) 共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携	
1. 琉球大学との協定に基づき，琉球大学に業務委託を行い，沖縄県国頭村奥方言，名護市幸喜方言，うるま市平安座島方言等のデータ収集を行った。	
(2) プロジェクト合同の研究集会	

2. 「対照言語」文法研究班との合同研究会「日本語文法研究のフロンティアー日本の言語・方言の対照研究を中心に」を開催したほか、科研費と連携して異分野融合のシンポジウムを3回開催した。(詳しくは「1. 研究に関する計画」(2)参照のこと)
- (3) 共同利用・共同研究の評価等
3. 協定を結んでいるハワイ大学から国際出版に関するアドバイスを受けた。(詳しくは「5. グローバル化」(2)(1)4を参照のこと)

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <p>(1) プロジェクト非常勤研究員の雇用</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 若手研究者育成のために、非常勤研究員を9人雇用した。うち1名が国立大学助教に、1名が博物館に、1名が企業に就職した。 <p>(2) 大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加</p> <ol style="list-style-type: none"> 2. 大学院生6人、日本学術振興会特別研究員5人を共同研究員としてプロジェクトに加え、研究発表の機会を提供した。学会や研究発表会・シンポジウム等における発表件数は、大学院生4件、学振特別研究員6件である。 <p>(3) 若手研究者への研究費の支援</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 今年度は新型コロナウイルスのため、若手研究者に対する調査旅費の援助は行わなかった。その代わりに、若手育成のためのオンライン講義を充実させた(以下の(4)チュートリアル参照)。 <p>(4) チュートリアル</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 昨年度、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期になったNINJALチュートリアルを2021年3月7日にオンラインで開催した。講義題目は「コーパスを使った方言研究」で、COJADSの活用のしかたや利用上の注意点、研究の可能性等について講義を行った。参加者は21人である。 5.1 第一線で活躍するフィールド言語学者の知見と技術を若手研究者に共有することを目的として、2020年12月5-6日に東外大AA研LingDy3と共同で「フィールド言語学ウェビナー」を開催した。本講座はこれまで対面で、参加人数を8人程度に制限していたが、今回はオンライン開催のため、参加人数を大幅に拡大し、39人の大学生、大学院生、若手研究者が受講登録した。 5.2 大学院生の研究支援のため、九州大学 言語学講座 下地理則研究室と共同で、2021年2月11-12日に「九大下地ゼミ×青井隼人 学術スキルWS」をオンラインで開催する。参加者は20人(限定)である。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 宮崎県椎葉村との協定に基づき、機構広領域連携型プロジェクト「地域社会」と共同で、『椎葉村方言語彙集』の刊行準備を進め、椎葉村12地点の方言語彙集の編集と原稿の組み版をほぼ終えた。2021年度に椎葉村と共同出版する予定である。 	

- 2.1 鹿児島県沖永良部島和泊町，知名町との協定に基づき，方言復興のための公民館講座を6月から毎月1回，オンラインで行った。昨年度からウェブ会議システムの利用準備を進めており，6月から実施した。その他の講演・ワークショップは新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止とした。
- 2.2 沖永良部の創作方言劇『ヒーヌムの生まれた海』を制作し，2021年2月23日におきえらぶ文化ホール・あしびの郷・ちなにおいて上演した。

（2）研究成果の社会への普及に関する計画

（1）一般向け講義・講演会・フォーラム

1. 2021年2月27日に東外大AA研LingDy3と共同で市民向けNINJALフォーラム「日本とアジアの消滅危機言語—私たちはいま，何をしなければならないか—」をオンラインで開催した。4件の講演（国語研2件，東外大2件）とディスカッションにより，日本とアジアにおける消滅危機言語の現状報告と危機言語復興のための問題提起を行う。参加者は171人である。
2. 文化庁，気仙沼市等と共同で「危機的な状況にある言語・方言サミット（気仙沼）」を開催する予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため，次年度に延期となった。
3. 機構の「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」と共同で，モバイル型展示ユニットによる言語の展示を以下のとおり開催した。
 - 3.1 2020年9月25日-12月17日に静岡英和学院大学で「地図で見る日本の方言」「沖縄のことばと文化」の2台のモバイル型展示ユニットによる展示を行った。
 - 3.2 2021年3月4日-5月18日に国立民族学博物館特別展「復興を支える地域の文化—3.11から10年」に「方言と地域文化—八重山の方言と東北の方言—」のテーマで参加し，モバイル型ユニット「危機に瀕した言語・方言」（既存のユニットの再制作），沖縄県石垣島の明和の津波を題材とする「地震・津波・方言」（新規作成），東日本大震災を題材とする「がんばっぺ 東北」（新規作成）を展示した。
 - 3.3 モバイル型展示ユニットによる言語の展示を紹介した「みんなの力で方言地図を作ってみよう！地図で見る日本の方言『参加型言語地図』の変遷」を広報室と共同で作成し，公開した。「絆創膏」の方言の全国分布図が出来上がるまでの過程が段階を追って紹介されている。
 - 3.4 八丈島の方言と文化を紹介する動画作品「黄八丈」「島寿司」「たなばたさま」をホームページで公開した。また，動画を展示するためのモバイル型展示ユニットを作成した。これらの展示と講演会を3月に八丈島で開催する予定であったが，新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期とした。
 - 3.5 昨年度に開催した企画展示「ハワイ：日本人移民の150年と憧れの島のなりたち」を踏まえ，周防大島町，周防大島町教育委員会主催の「周防大島とハワイ～移民たちの足跡～」(2021年3月15日-5月9日，山口県周防大島文化交流センター)に共催として協力した。
4. 危機言語の復興のために，クラウドファンディングで資金を集め，地元の人と協力して絵本を4冊作成した（「ましゅ いっしゅーぬ くれー」（沖永良部），「カンナマルクールクぬ かゝむ」（多良間），「ふしぬ いんのぬ はなし」（竹富），「ディラブディ」（与那国））。刊行が遅れ，4月となった。

（2）インターネット等を通じた研究成果の社会への発信

5. COJADS モニター版，「危機言語DB」，『アイヌ語口承文芸コーパス』，『日本言語地図データベース』，『鳩間方言辞典』，『鳩間方言 音声語彙データベース』，動画作品『八丈のことばと文化』等の危機言語・方言のデータをオンラインで配信した。（詳しくは「2 共同利用・共同研究」（1）参照のこと）

（3）社会人を対象とするスキルアップの計画等

6. 鹿児島県沖永良部島和泊町、知名町において、役場職員や市民が参加する公民館講座や方言劇制作を実施し、方言の保存と復興に関する技術訓練を行った。また、和泊町職員と協議を重ね、「島ムニ継承推進協議会」の発足に貢献した。
7. 『椎葉村方言語彙集』の編集（本項目 1 参照）、NINJAL フォーラムの開催等を社会人や自治体職員、教員等のスキルアップに繋げた。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>（1）国際的協業に関する計画</p> <p>(1) 海外の研究者 4 名を共同研究員に加え、研究発表会やシンポジウム（オンライン）を通じて共同研究を推進した。シンポジウムでは海外の共同研究者 2 名が研究発表を行い、ディスカッションに参加した。</p> <p>(2) 海外の大学との連携</p> <p>1. ハワイ大学マノア校との連携協定に基づくシンポジウムは、新型コロナウイルス感染拡大防止のため日程の調整がつかず、今年度は中止とした。</p> <p>（2）国際的発信に関する計画</p> <p>(1) 英語による研究成果の発信</p> <p>1. ムートン社 Handbook of Japanese Dialects, Handbook of the Ainu Language の刊行作業を進めた。Dialects に関しては、日本語原稿の英訳を進め、3/4 の原稿の英訳を終えた。</p> <p>2. 2018 年の国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集の刊行準備を進め、要旨・章立てなどをまとめた草稿の協議をムートン社担当者と進めた。</p> <p>3. 危機言語・方言の基礎語彙データや自然談話の英訳を進め、「危機言語 DB」のウェブページで発信した。</p> <p>4. ハワイ大学との協定に基づき、消滅危機言語を中心とするオープンアクセスの電子書籍シリーズを Brill 社から刊行するための協議を行った。</p>	

6. その他

該当する活動なし。

令和 2 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

計画と実施状況を照合すると、ほぼすべての項目で計画はバランスよく達成、もしくは一部計画を上回って達成されていた。新型コロナウイルス感染症拡大（以後コロナ禍）によるフィールドワークと国際会議開催の中止が自己評価に強く反映されたようであるが、いずれも不可抗力であり、かつそれに代わる活動が活発に実施されていたことから、A 評価が妥当であると判断した。

コロナ禍に伴い、全国 40 地点を予定していたフィールドワークが中止された。しかしながらこれに代わり、公開研究発表会、公開講演会は、オンラインによって計画を大きく上回って実施された。また、ハワイ大学マノア校との連携協定に基づく国際シンポジウムの日程調整ができず中止となった

が、これに代わり、オープンアクセスの電子書籍シリーズを刊行するための具体的協議が行われている。

質的には、番組、情報誌、出版に対する4賞の受賞とともに、方言データベース COJADS モニター版に対し自然言語処理研究の関係者から3件の利用申請があったことは特筆される。さらに、地域社会貢献において方言復興を支えるオンラインでの講座実施、絵本作成等が積極的に推進されたこと等には、現地との好ましい協力体制を築いてきた活動の跡が窺える。

《評価項目》

1. 研究について

研究計画にあげられた、①フィールドワーク、②公開研究発表会・講演会、③研究成果の公開、④教材及び教育プログラムの開発に関する実施状況については、①のフィールドワーク 40 地点が中止となった。しかしながら、令和2年度は、世界的にコロナ禍の影響が及んだ年であり、その状況と対策が見通せない中では、中止以外の選択肢はありえなかったものと思われる。ちなみに、フィールドワークに代わる活動として、②、③、④は質量ともに十二分な成果を上げた。まず、②公開研究発表会・講演会については2回開催予定のところ、媒体も工夫しながら7回の開催を見た。海外からの参加者もあり、予定を上回る成果を上げたといえるであろう。次に③研究成果の公開については、番組、情報誌、辞典出版において4賞を授けられた。また、④大学との組織的な連携、⑤共同研究を通じた大学支援は活発で、予定を上回る成果が上がっている。以上、研究については、感染症拡大という不可抗力に対してよく対処し、計画を上回る実施成果を上げたと判断される。

2. 共同利用・共同研究について

①データベース（以後DB）等の構築、②DB等に関する講習会・講演会、③DB等を使った研究成果、の3点において、①②は、計画通り実施されている。③については、COJADSを用いた研究として口頭発表1件、英語論文1件（プロシーディングズ）が発信された。また、自然言語処理研究の関係者からCOJADS モニター版の利用申請が3件あったことは、COJADS がデータベースとして着実に利用可能性を広げていることの証左であり、学術的意義が認められる。次に、④大学との組織的な連携については、琉球大学との協定を活かして、コロナ禍でもデータ収集を行い得た点が注目される。⑤プロジェクト合同の研究集会は、計画を上回った回数が実施された。⑥海外の研究者に研究の推進に関するアドバイスを求める、という点については、協定を結んでいるハワイ大学から国際出版に関する助言を得ており、計画通り実施された。以上、困難な社会的状況の中で、計画通り実施しつつ着実に成果の質を上げている。

3. 教育について

人材育成に関しては、①プロジェクト非常勤研究員の雇用、②大学院生、学振PD等のプロジェクトへの参加、③若手研究者への研究費の支援、④チュートリアルについて、③を除いたすべての項目にわたり、計画通り遺漏なく実施された。③については、コロナ禍のため、調査旅費支援は中止されたが、妥当な判断であったといえる。それに代わる措置として、若手育成のためのオンライン講義を充実させ、当初の計画をこえた大学院生、若手研究者を受け入れた。

4. 社会との連携及び社会貢献について

第1に、社会との連携については、おおむね計画通り実施された。感染症にまつわる社会環境への対処の工夫として、鹿児島県沖永良部島における方言復興のための公民館講座を6月から月1回、オ

ンラインで実施できたことが評価される。第2に、研究成果の社会への普及については、計画を上回る活発な実施活動がみられた。オンラインを用いて、一般向けフォーラムが実施され、171人の参加者があったこと。モバイル展示ユニットが新たに4点作成されたこと。危機言語・方言のデータ拡充とオンライン配信の数。これらは、計画を上回って実施された。社会人を対象とするスキルアップの計画は、展示、講演などが制限される現況のなか、方針を変え、方言集や方言劇制作の活動を通じて行ったことも評価できる点である。コロナ禍により気仙沼市との共同方言サミット、八丈島での展示・講演が中止になったことは、不可抗力である。全般に、計画をやや上回る成果をあげていると判断される。

5. グローバル化について

ハワイ大学との連携協定に基づく国際シンポジウムが中止になった理由は、コロナ禍の影響で日程調整が不調に終わったためとのことである。それに代わり、同大学との協定に基づき、具体的な出版社名も含めて電子書籍シリーズ刊行の協議を行ったことは、計画を上回る成果であったといえる。そのほか、海外研究者の受入、英語による研究書の刊行作業の継続、国際シンポジウムの発表を元にした英語論文集の刊行準備、危機言語・方言の基礎語彙データや自然談話の英訳とウェブでの発信は、当初の計画通り実施された。

6. その他特記事項

言語研究にとって、フィールドワークのもつ意味は大きい。今後は、コロナ禍における対面方言調査実施の工夫について、大学連携も視野に入れつつ、斯界への新たな提言がなされることを期待したい。

通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開

プロジェクトリーダー：小木曾 智信

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

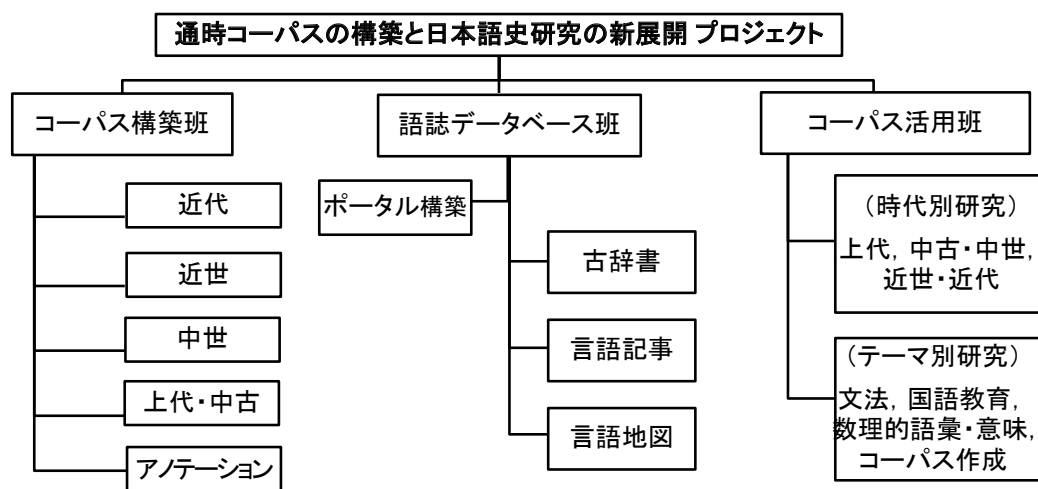
本プロジェクトは、上代（奈良時代）から近代までの日本語資料をコーパス化し、日本語の歴史研究が可能な通時コーパスと語誌のデータベースを構築する。そして、このコーパス・データベースを活用することで新たな観点から日本語史研究を展開する。従来の日本語史研究は、専門知識を必要とするさまざまな文献を取り扱う必要から、研究が特定の資料や形式に偏ったものになりがちであった。通時コーパスを構築し活用することによって個別の資料だけでなく日本語史全体をマクロな視点から見た研究を展開することを可能にする。さらにコーパス言語学で培われてきた新しい研究手法を導入し、従来行えなかった視点からの研究を展開する。

既に国語研究所では『日本語歴史コーパス』の構築に着手しているが、本プロジェクトではこのコーパスを通時コーパスとして利用可能にするために大幅に拡張する。第2期中期計画で構築済みの「平安時代編」（平安仮名文学作品）、「室町時代編」（狂言）等に加え、上代の万葉集・宣命、中古以降の和歌集、中世のキリシタン資料・軍記物・抄物、近世の洒落本・人情本、近代の雑誌・教科書・文学作品等をサブコーパスとして追加する。このほかにも、日本語史研究に資する資料を選定してコーパスに追加し、上代から近代までの日本語を一本に繋ぐ通時コーパスとして完成させる。また、コーパスと関連付けた語誌データベースを構築し、語誌情報のポータルページを公開し、研究者のみならず日本語の歴史に興味を持つ人々に役立つ情報を提供する。コーパスを活用する研究班には、上代、中古・中世、近世・近代の各時代別の研究グループの他、文法・語彙、資料性・アノテーションの検討の研究グループを設け、コーパス構築に携わるメンバーも全員が参加して研究活動を展開する。

なお、プロジェクトの実施にあたっては、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」（代表者・高田智和）と連携して行う。また、実践女子大学との提携に基づきデジタル化された所蔵資料の活用を図る。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織



「コーパス構築班」は6年間で奈良時代から明治・大正時代までをカバーする通時コーパスを構築する。上代・中古，中世，近世，近代の時代ごとにグループを置き，プロジェクト非常勤研究員を配置してコーパス開発にあたる。「語誌データベース班」は，コーパスと連携した語誌データベースを開発するために古辞書，言語記事，言語地図のグループを置き，各々専任教員が中心となってデータベースを開発する。またポータル構築のグループを置き，コーパスと語誌データベースの情報を統合した語誌情報ポータルサイトの設計・構築にあたる。「コーパス活用班」は，時代別に上代，中古・中世，近世・近代の研究グループを置き，コーパス構築班と連携しつつ各時代の日本語の研究にあたる。また分野別に，文法，語彙，数理・言語処理の研究グループを置き各分野の研究にあたるほか，資料性，アノテーションのグループを置き，それぞれコーパスに追加する資料，アノテーションに関する研究を行う。このほか，人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して表記の研究を行う。コーパス活用班にはコーパス構築班のメンバー，PD・大学院生を含む若手研究者を参加させる。

●年次計画

※各年，研究発表会（シンポジウムを含む）・講習会を1回以上開催する。サブコーパスの名称は仮称。

平成28年度（1年目）

- ・「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」，「明治・大正編Ⅰ雑誌」（太陽・女性雑誌非コアデータ）を公開。
- ・日本語学会でワークショップを開催。

平成29年度（2年目）

- ・「奈良時代編Ⅰ万葉集」，「室町時代編Ⅱキリシタン資料」，「江戸時代編Ⅰ洒落本」を公開。
- ・書き言葉コーパス入門書を出版。

平成30年度（3年目）

- ・「江戸時代編Ⅱ人情本」，「明治・大正編Ⅱ教科書」を公開。
- ・古辞書データベースの試作版を公開。

●3年目までの成果物

コーパス構築班は『日本語歴史コーパス』を拡張し下記のサブコーパスを公開する。

「鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行」「室町時代編Ⅱキリシタン資料」「奈良時代編Ⅰ万葉集」「明治・大正編Ⅰ雑誌」「明治・大正編Ⅱ教科書」「江戸時代編Ⅰ洒落本」「江戸時代編Ⅱ人情本」「和歌集編（八代集）」「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」

語誌データベース班は，語誌データベースの一部として古辞書データベースの試行版を公開する。コーパス活用班は，ワークショップ・公開研究会を2回以上，国際シンポジウムを1回開催し，書籍1冊を刊行する。また，プロジェクト全体として一般向けのNINJALフォーラムを1回開催する。

令和元年度（4年目）

- ・「奈良時代編Ⅱ宣命」，「江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃」を公開。

令和2年度（5年目）

- ・「明治・大正編Ⅳ近代小説」を公開。
- ・語誌情報ポータルサイトの公開。
- ・研究論文集の出版。

●5年目までの成果物

コーパス構築班は，奈良時代から明治・大正時代までの通時的な研究ができるコーパスとして『日本語歴史コーパス』を拡張し公開する。語誌データベース班は，各種語誌データベースを構築し，語誌情報のポー

タルサイトを公開する。コーパス活用班は、国際シンポジウムを1回開催し、研究論文集を1冊以上出版する。

令和3年度（6年目）

- ・「鎌倉時代編Ⅲ軍記」を公開。
- ・『日本語歴史コーパス』（奈良時代～明治・大正時代）の（一次）整備完了。
- ・語誌情報ポータルサイトの完成。

3. 令和3年度の実施予定

- ・シンポジウムの開催
「通時コーパス」シンポジウム2022を開催（2022年3月予定、オンラインの見込み）
- ・研究論文集2冊の刊行
田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近代編—』ひつじ書房 2021年5月
岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近世編—』ひつじ書房 2021年刊行予定
- ・『日本語歴史コーパス』の完成版（第1次整備）の公開
「鎌倉時代編Ⅲ軍記」を公開（2022年3月予定）
「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版）を公開（2022年3月予定）
「明治・大正編 新聞」を公開（2022年3月予定）
- ・語誌情報ポータルサイト
「語彙研究文献語別目録」を追加、インターフェースを改修して一般公開

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 30,000 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画
 - ・通時コーパス活用班のグループ研究発表会を3回オンラインで実施した。
 - ・昨年度新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった「通時コーパス」シンポジウム2020（本来は2020年3月13日予定）を9月13日にオンラインで開催した。
 - ・「通時コーパス」シンポジウム2021を3月13日にオンラインで開催した。
 - ・研究成果として、書籍5件、論文・ブックチャプター等38件、発表・講演65件、コーパス・データベース等6件を公開した（原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むもののみ。コーパス・データベース等はアップデート版を含む）。
 - ・新規に『日本語歴史コーパス』『明治・大正編Ⅳ近代小説』と「江戸時代編Ⅳ随筆・紀行」の松尾芭蕉作品を整備し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は2021年4月）。
 - ・共同研究員等によって別のプロジェクトで構築された「春秋雑誌会話篇」を再整備して「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」として、また「延喜式祝詞」を再整備して「奈良時代編Ⅲ祝詞」として『日本語歴史コーパス』に追加し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は2021年4月）。
 - ・令和3年度公開のために「鎌倉時代編Ⅲ軍記」「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版）、「明治・大正編 新聞」のデータ整備を行った。
 - ・語誌情報ポータルサイトへの「語彙研究文献語別目録」データ登載準備を行った。

- ・日本語学会 2020 年度秋季大会でワークショップ『日本語歴史コーパス』活用入門』を開催した（10 月 24 日，オンライン）。

3. 教育に関する計画

- ・『日本語歴史コーパス』中納言の講習会を日本語学会ワークショップの中で 1 回，独自に 1 回，NINJAL チュートリアルで 1 回の 3 回実施した。
- ・『日本語歴史コーパス』の解説ビデオを公開した（国語研オープンハウス動画）。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・国語教育グループで「通時コーパス国語教育活用ワークショップ」を開催し，中高の国語科教員および教職課程履修生に通時コーパスの講習を行った（2 月 23 日）。
- ・通時コーパスでの『新編全集』の利用契約を発展させて，（株）小学館と国語研との間で連携協定を締結した。

5. グローバル化に関する計画

- ・シンポジウム・研究会をオンラインで公開し，海外から多数の参加を得た（「通時コーパス」シンポジウム 2020 オンラインは 12 ヶ国 24 名，「通時コーパス」シンポジウム 2021 は 9 ヶ国 21 名）。
- ・時差に対応するため，シンポジウムの録画をオンライン（YouTube）で公開し国際的に発信した。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 研究成果として，書籍 5 件，論文・ブックチャプター等 38 件，発表・講演 65 件，コーパス・データベース等 6 件を公開した（原則としてプロジェクトに対する謝辞を含むものに限った）	
2. 古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備を行ない，データを用いた研究活動を行った（関連する論文等は 1. に記載の数のうちに含めた）。	
3. 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を共催を含めて 3 回オンラインで実施した。 科研と共催「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」8 月 8 日（当日参加者 62 名） 近世グループ「通時コーパス活用班 近世グループオンライン研究発表会」12 月 27 日（当日参加者 27 名） 国語教育グループ「第 5 回 「通時コーパス」国語教育活用ワークショップ」2 月 23 日（当日参加者 50 名）	
4. 昨年度新型コロナウイルス感染症対策のため中止となった「通時コーパス」シンポジウム 2020（本来は 2020 年 3 月 13 日予定）をあらためて 9 月 13 日にオンラインで開催し，登録者にビデオ配信を行った（参加登録 171 名，当日参加者 136 名）。	

また、「通時コーパス」シンポジウム 2021 を 3 月 13 日にオンラインで開催し、登録者にビデオ配信を行った（参加登録 175 名、当日参加者 131 名）。

（２）研究実施体制等に関する計画

- 『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者 87 人をプロジェクト共同研究員として組織して研究活動を行った（国内 83 人、海外 4 人）。
- 『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員 4 名を雇用した（プロジェクト PD フェロー 1 名とあわせ、合計 5 名）。
- 人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の中の「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」の研究組織と連携して研究を実施し、「延喜式祝詞」を『日本語歴史コーパス』の一部として公開した。

２．共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
（１）共同利用・共同研究に関する計画	
<ol style="list-style-type: none"> 『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅳ近代小説」と「江戸時代編Ⅳ随筆・紀行」の松尾芭蕉作品を整備し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は 2021 年 4 月）。 また、共同研究員等によって別のプロジェクトで構築された「春秋雑誌会話篇」（白百合女子大学・常盤智子氏ほか）を再整備して「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」として、「延喜式祝詞」（人文機構プロジェクト、高田智和・間淵洋子）を再整備して「奈良時代編Ⅲ祝詞」として『日本語歴史コーパス』に追加し、検索アプリケーション「中納言」を通して公開した（一般公開は 2021 年 4 月）。 年度末時点で調査した範囲で、今年度発表された『日本語歴史コーパス』を利用した研究業績の数は 79 編（論文と全国学会予稿集掲載分）となった（昨年度は年度末確認時点で 72 編）。 https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/list.html また『日本語歴史コーパス』の登録ユーザー数は 4460 人増加、2020 年度の検案件数は約 46 万 5 千件となった（昨年度は 31 万件）。〔この項、4 (2) 1 に重出〕 「奈良時代編Ⅱ宣命」および「明治・大正編Ⅲ教科書」に原文の画像を参照できるようリンクを追加した（一般公開は 2020 年 10 月公開）。 「語誌情報ポータル」のウェブサイトを更新して公開した（2021 年 3 月）。また、言語地図・言語記事の追加データ作成、「語彙研究文献語別目録」データ登載準備を行った。 来年度公開のために「鎌倉時代編Ⅲ軍記」「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版）、「明治・大正編 新聞」を整備のデータ整備を行った。 研究成果をまとめた論文集 2 冊の出版準備を行った（1 冊は 12 月に入稿済み）。 <ul style="list-style-type: none"> 田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近代編—』ひつじ書房 2021 年 5 月刊行予定 岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信『コーパスによる日本語史研究—近世編—』ひつじ書房 2021 年刊行予定 通時コーパス活用班のグループ研究発表会を 3 回オンラインで実施した。〔重出〕1 (1) 4 を参照。 英国オックスフォード大学との連携のもとで共同研究を推進し、オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス (ONCOJ) のアップデートを行った。〔重出〕5 (1) 1 を参照。 	

8. NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」(10月3日・オンライン)にプロジェクトとして参加した。
9. 今年度の研究計画については、コロナ禍への対応として、Zoom等を活用したイベントのオンライン開催、VPNを活用した在宅作業によるコーパス構築環境の構築等によって、できるだけ計画通りの内容を実施することに注力した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『日本語歴史コーパス』を活用するための書籍として、活用班メンバーで執筆した『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』(田中牧郎編, 朝倉書店)を刊行した。(5月1日) 2. 非常勤については完全な在宅勤務態勢となったため、非常勤研究員等への例年通りの指導は行えなかったが、オンラインの場を通して研究方法の指導を行った。 3. 大学院生を引き続き共同研究員としてプロジェクトに参画させた(もと大学院生が学籍を離れたことで4名には達しなかった)。 4. 日本語学会2020年度秋季大会でワークショップ『日本語歴史コーパス』活用入門を開催した(10月24日, オンライン開催)。 5. NINJAL チュートリアルで『日本語歴史コーパス』の講習を行った(11月28日予定を弔事により急遽中止, 2021年3月1日に改めて開催)(参加者66名)。 6. 『日本語歴史コーパス』利用の講習会を11月14日に開催し(参加者33名), 日本語学会ワークショップとNINJAL チュートリアルとあわせて計3回開催した。 7. コーパス活用班の研究発表会および「通時コーパス」シンポジウムにおいて、大学院生に発表の機会を提供した(オンラインのため旅費提供は無し)。 8. 若手研究者の国際会議発表の指導・参加費の補助を行った(オンラインで開催された Digital Humanities 2020)。(コロナ禍による国際会議の中止・延期のため1件のみ)。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プロジェクトにおける(株)小学館との連携を深化させ、国語研と小学館出版局とのあいだで連携協定を締結した。「中納言」とジャパンナレッジ「新編日本古典文学全集」本文とのリンクを継続したほか、第4期の研究プロジェクトを視野に、UniDic 拡充を目的として、小学館『日本国語大辞典』の見出し語データの提供を受けた。 2. 情報システム研究機構・人文学オープンデータ共同利用センター(CODH)との共同で、近代文献のOCRに関する研究を継続した。 <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p>	

1. 『日本語歴史コーパス』を拡充し、コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開した。登録ユーザー数は 4460 人増加、2020 年度の検索件数は約 46 万 5 千件となった（昨年度は 31 万件）。
2. 歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備を行い、2021 年度の全面アップデートの準備を行った。また、この辞書を用いて形態素解析を行う Web 上のツール「Web 茶まめ」の更新準備を行った。
3. 中学校・高等学校の国語科教員及び教職課程の学生院生向けに『日本語歴史コーパス』活用の講習会（国語教育活用ワークショップ）を実施した（2 月 23 日・オンライン）。また、中学・高校等の古文の授業での利用を想定したコーパス簡易検索アプリケーション「ことねり」のアップデート用データの作成と更新準備を行った。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
（1）国際的協業に関する計画 <ol style="list-style-type: none"> 1. 英国オックスフォード大学との連携の下、オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス（ONCOJ）のアップデートを行って公開した（2021 年 3 月）。 2. 海外の研究者 4 人を共同研究員に加え、『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進した。 3. 国際学会 EAJIS でのパネルセッションが採択されていたが、コロナ禍による会議の延期のため実施できなかった（2021 年度にオンラインで開催予定）。 4. 『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて、英文 Web ページを作成し情報を発信した（一般公開は 2021 年 4 月）。 5. シンポジウム・研究会をオンラインで公開したことで、海外から多数の参加を得た（「通時コーパス」シンポジウム 2020 オンラインは 12 ヶ国 24 名、「通時コーパス」シンポジウム 2021 は 9 ヶ国 21 名）。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和 2 年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

令和 2 年度は、改めて言うまでもなく、コロナ禍に明け暮れた年度であった。年度初は、緊急事態宣言発出等によって、業務も機能不全におちいり、また、年度が進むにつれて、オンラインによる業務が軌道に乗ってきたとはいえ、登所してのそれと比べれば、種々制約も多かったと思われるが、その不如意のなか、研究の灯を絶やさずに、計画に基づいて、着々と実績を積んできたことは、評価されるべきである。

研究についての、書籍点数、論文、発表・講演数もおおむね満足できる数値になっていると思われるし、『日本語歴史コーパス』のさらなる充実についても、着実に歩を進め、その利用件数も着実に伸びている。また、作成した通時コーパスを運用してもらえる人材、広めてもらえる人材の育成も、

思わぬコロナ禍という障碍のなかでも、まずは順調と言える。また、社会連携、社会発信、グローバル化という側面からの活動も着実である。

コロナ禍がなければ、計画を上回った推進が可能であったとも思われる計画とその実施を見ると、残念な面もありはするが、コロナ禍のなかでも、当初計画を着実に履行したという点で、評価Bとなるのは、決して低い評価なのではない。

《評価項目》

1. 研究について

研究水準及び研究の成果等に関する計画の面から言うと、研究成果として、書籍5件、論文・ブックチャプター等38件、発表・講演65件、コーパス・データベース等6件が公開され、古辞書データベース・言語地図データベース・言語記事データベースの整備、データを用いた研究活動が行われたことは、コロナ禍のなか、よく健闘した結果と言える。また、主として年度後期に、オンラインによる、通時コーパス活用班のグループ研究発表会を3回、「通時コーパス」シンポジウム2020（名称は中止前のもの）、「通時コーパス」シンポジウム2021を各1回開催したことも、コロナ禍の制約のもと、よく楫をきって柔軟に対応したというべきであろう。一般的に、オンライン開催では、対面のとときには参加が難しかった、遠隔や海外の地からの参加が見られることが特長であり、報告書の5にも言及があるように、「通時コーパス」シンポジウム2020オンラインは12ヶ国24名、「通時コーパス」シンポジウム2021は9ヶ国21名の参加があったことは、意義深かった。

また、研究実施体制等に関する計画の面から言うと、『日本語歴史コーパス』を活用した研究を実施するために、国内外の研究者87人をプロジェクト共同研究員として組織して研究活動を行ったこと、『日本語歴史コーパス』の構築を実施するためプロジェクト非常勤研究員を雇用したこと、「延喜式祝詞」を『日本語歴史コーパス』の一部として公開したこと等においても、共同研究員・非常勤研究員数を、予定数以上組織化・採用できていることを含めて、計画どおりに遂行されたと評価できる。

2. 共同利用・共同研究について

共同利用・共同研究に関する計画の面から言うと、当初の、『日本語歴史コーパス』「明治・大正編Ⅳ近代小説」を整備し、公開する」という計画に比して、同コーパスのみならず、「江戸時代編Ⅳ随筆・紀行」の松尾芭蕉作品、「明治・大正編Ⅲ明治初期口語資料」、「奈良時代編Ⅲ祝詞」が加えられたことは、特筆してよい。特に、後二者は、他プロジェクトからの参入であり、同コーパスプロジェクトが目指している、他プロジェクトとの連携の実践例と言え、今後の進展も期待される。また、『日本語歴史コーパス』を利用した研究業績数、『日本語歴史コーパス』の検索性数とともに、昨年度実績を超えたことも、共同利用の実があらがっている証左と言ってよいであろう。特に後者の伸びが飛躍的であるのは、コロナ禍の影響がポジティブに出たと解しうるのではないだろうか。また、「奈良時代編Ⅱ宣命」および「明治・大正編Ⅲ教科書」の原文画像リンク、「語誌情報ポータル」のウェブサイトのアップデート公開、「鎌倉時代編Ⅲ軍記」「明治・大正編 SP 盤落語」（テキスト版）等のデータ整備、研究成果をまとめた論文集2冊の出版準備、オンラインによるグループ研究発表会等も、共同研究・共同利用の趣旨からは、着実な進展と言える。

また、共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画から言うと、オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス（ONCOJ）のアップデート、NINJAL シンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」へのオンライン参加も、共同利用・共同研究実施体制からは意義深く、研究計画の改善の一環としての、Zoom によるオンラインイベントの開催、VPN活用のテレワークも、コロナ禍対策として有益なものと評価できる。

3. 教育について

大学院等への教育協力に関する計画に関する計画については、当初から、特に計画されていなかったようであるが、人材育成に関する計画の面では、『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』（田中牧郎編，朝倉書店）の刊行，日本語学会 2020 年度秋季大会のオンラインワークショップ『『日本語歴史コーパス』活用入門』開催，NINJAL チュートリアルでの『日本語歴史コーパス』講習，『日本語歴史コーパス』利用の講習会等が実行されている。コロナ禍のために，対面による教育活動が困難だったという事情は，理解できる。そのなかにあつて，非常勤研究員に対するオンラインによる研究方法指導，コーパス活用班の研究発表会および「通時コーパス」シンポジウムにおける，大学院生への発表機会提供，オンラインで開催された国際会議 Digital Humanities 2020 参加の若手研究者への国際会議発表の指導・参加費補助等の活動と実績は，評価できるものである。

4. 社会との連携及び社会貢献について

産業界や地域社会との連携に関する計画から言うと，(株)小学館との連携を深化させ，国語研と小学館出版局とのあいだで連携協定を締結し，UniDic 拡充を目的として，小学館『日本国語大辞典』の見出し語データの提供を受けたことは，自治体・産業界との連携という項目に合致するものとして評価できる。

また，研究成果の社会への普及に関する計画から言うと，『日本語歴史コーパス』を拡充し，コーパス検索アプリケーション「中納言」を通してインターネット上で無償にて公開し登録ユーザー数，検索件数，ともに前年度よりも増加したことは，成果として評価できる。2でも触れたが，これもまた，コロナ禍の影響がポジティブに現われた結果と言えよう。さらに，歴史的資料を対象とした形態素解析のための辞書整備を行ない，「Web 茶まめ」の更新準備を行ったことも，社会貢献の点で有益であった。どこに書くべきか迷うことではあるが，近代の振仮名付き漢字列の分析が，最近になって進化してきていると思われ，そのことと，辞書の解析精度の向上は，車の両輪のように，分析結果の向上にも寄与するのではないかと期待される（近代の振仮名付き漢字列の分析は，近世版本の版面分析にも転用可能だと思われる）。また，『日本語歴史コーパス』活用の講習会のオンライン実施，「ことねり」のアップデート用データの作成と更新準備等の活動も，中高の教育現場への貢献として意義深い。

5. グローバル化について

国際的協業に関する計画から言うと，英国オックスフォード大学との連携の下，オックスフォード・NINJAL 上代語コーパス（ONCOJ）のアップデートを行って公開したことは，コロナ禍のもとで，2021 年 3 月という時期の実施になったとはいえ，次期への橋渡しとして重要と思われる。さらに，海外の研究者 4 人を共同研究員に加え，『日本語歴史コーパス』活用に関する共同研究を推進したことも，グローバル化に向けての着実な歩みとすることができる。

また，国際的発信に関する計画から言うと，『日本語歴史コーパス』の新規公開データについて，英文 Web ページを作成し情報を発信したことも，成果として評価できる。国際学会 EAJS でのパネルセッションが採択されていたが，コロナ禍による会議の延期のため実施できなかったことは，残念ではあったが，コロナ禍のもとでは，万やむを得ないと言わざるを得ない。

6. その他特記事項

特になし。

大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究

プロジェクトリーダー：小磯 花絵

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、均衡性を考慮した大規模な日本語日常会話コーパスを構築し、それに基づく分析を通して、日常会話を含む話し言葉の特性を、レジスター・相互行為・経年変化の観点から多角的に解明することである。そのために、(1) 多様な日常場面の会話 200 時間を収めた大規模コーパスの構築を目指す会話コーパス構築班、及び、構築したコーパスを用いて、(2) 語彙・文法・音声などに着目してレジスター的多様性を研究するレジスター班、(3) 会話相互行為の中で文法が果たす役割や構造を研究する相互行為班、(4) 語彙・文法・音声などに着目して話し言葉の経年変化を研究する経年変化班の 4 つの班を組織して研究を進める。

会話コーパス構築班では、日常の会話行動に関する調査に基づき、自宅・職場・店舗・屋外での家族・友人・同僚・店員との会話など、多様な日常場面での会話を網羅するようコーパスを設計するものであり、世界的に見ても新しい試みである。また、従来の多くの会話コーパスのように収録のために人を集めて会話してもらうのではなく、生活の中で生じる会話を会話者自身に収録してもらうことにより、日常の会話を自然な形で記録する点にも特色がある。会話の音声・映像を収録し、文字化した上で、形態論情報や統語情報、談話情報などのアノテーションを施し、一般に公開する。これにより、話し言葉に関する高度なコーパススペースの研究基盤の確立を目指す。こうしたコーパスは、話し言葉や会話行動に関する基礎研究だけでなく、日本語教育や辞書編纂、音声情報処理、ロボット工学などの応用研究にも資するものである。また、後世の人々が 21 世紀初頭の日本人の生活や文化を知るための貴重な記録となる。

コーパスに基づく話し言葉研究では、現代の日常会話に加え、講演などの独話、発話を前提に書き言葉で記されたシナリオ、発話を前提としない小説などの会話文、1950 年代以降の話し言葉など、多様なデータを対象に、高度な統計的分析や緻密な微視的分析を通して、話し言葉の語彙・文法・音声・相互行為上の特性や仕組み、その経年変化の実態を、実証的に解明する。こうした研究を支えるものとして、昔の話し言葉データや BCCWJ の小説などの会話文、国会会議録などを対象にデータを整備し一般に公開する。

このように本プロジェクトでは、日常会話を含む様々なコーパスやデータベースを整備・構築し一般に公開することによって、話し言葉コーパスの共同利用・共同研究の基盤強化をはかる。

2. 年次計画（ロードマップ）

●全体計画・研究組織

本プロジェクトの実施にあたって図に示す 4 つの班を組織して研究を推進する。

【コーパス構築班】

多様な場面の日常会話を収めた『日本語日常会話コーパス』を構築し、次の通り公開する。

平成 30 年度：50 時間の会話の映像・音声・転記・短単位データをモニター公開（令和 2, 3 年度も継続して公開）

令和 3 年度：200 時間分の会話の映像・音声・転記・短単位データに加え、コアデータ 20 時間には人手で各種アノテーション（長単位・文節・発話単位・係り受け・対話行為など）を付与して本公開

【3 つの研究班】

各班の研究に必要となるコーパス・データベース・アノテーションを随時整備し、各班のテーマの研究を推進する。

構築したコーパス・データベースについては以下の通り公開する。

平成 28 年度：『名大会話コーパス』中納言版・ひまわり版を一般公開（レジスター班）

平成 29 年度：『国会会議録』ひまわり版を一般公開（経年変化班）

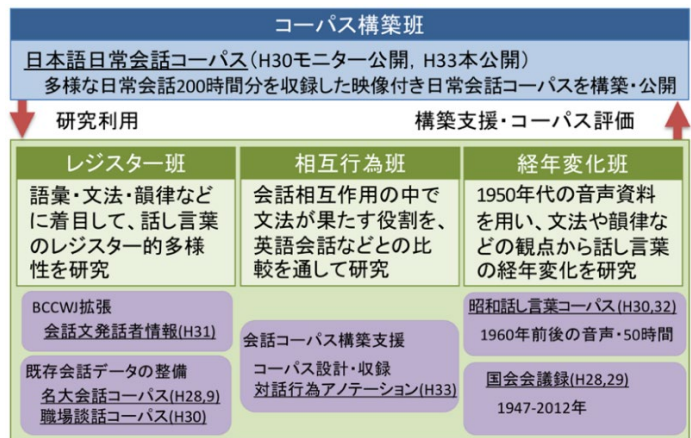
平成 30 年度：『現日研・職場談話コーパス』中納言版を一般公開

平成 30 年度：『昭和話し言葉コーパス』独話をモニター公開（経年変化班）

令和元年度：BCCWJ 中納言版 会話文発話者情報の拡張（レジスター班）

令和 2 年度：『昭和話し言葉コーパス』を本公開（経年変化班）

各班の研究成果をとりまとめて論文集を編纂し、令和 2 年度末までに 1 冊以上刊行する。



● 年次計画

H28 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の開始 アノテーション仕様策定・自動付与システム整備 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成開始 [国会会議録検索システム] 構築・公開 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション仕様策定・付与開始 [名大会話コーパス] 形態論情報付与 班ごとに研究会合を持ち研究を始動 シンポジウム 1 回, 班合同研究発表会 1 回開催 コーパス利用講習会 2 回開催 <u>『名大会話コーパス』一般公開（形態論情報付きテキスト検索版）</u>
H29 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正開始 プロジェクト内部のデータ公開 [昭和話し言葉コーパス] 転記テキスト作成継続 [BCCWJ 発話者情報] アノテーション継続 既存データを中心とする予備研究を推進 シンポジウム 1 回, 班合同公開研究発表会 1 回開催 コーパス講習会 2 回開催
H30 年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション開始, モニター公開準備 [BCCWJ 発話者情報] 検索システム整備開始 既存データにプロジェクト整備データを加えて研究を展開

	成果発表 若手育成 成果物公開	シンポジウム・ワークショップ 3 回開催 フォーラム（日本語の変化を探る）1 回開催 コーパス講習会 2 回開催 <u>『日本語日常会話コーパス』50 時間モニター公開</u> <u>『昭和話し言葉コーパス』25 時間モニター公開（うち許諾が取れたもの）</u> <u>『現日研・職場談話コーパス』一般公開</u>
R 元年度	会話コーパス整備 その他のデータ整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 [昭和話し言葉コーパス] アノテーション継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を開始・コーパス評価 シンポジウム 3 回開催 コーパス講習会 2 回開催 <u>『BCCWJ 発話者情報』一般公開（中納言版）</u> <u>『日本語日常会話コーパス』50 時間モニター公開（継続）</u> <u>『昭和話し言葉コーパス』モニター公開（継続）</u>
R2 年度	会話コーパス整備 研究 成果発表 若手育成 成果物公開	会話収録・データ整備の継続 コアデータ・アノテーション人手修正継続 既存データにモニター公開データを加えて研究を推進・コーパス評価 シンポジウム 2 回開催 コーパス講習会 2 回開催 <u>『昭和話し言葉コーパス』本公開</u> <u>『日本語日常会話コーパス』50 時間モニター公開（継続）</u>
R3 年度	会話コーパス整備 研究 成果発表 成果物公開	公開準備（データ統合・検証、個人情報処理など） 研究成果のとりまとめ シンポジウム 1 回開催 コーパス講習会 1 回開催 <u>『日本語日常会話コーパス』本公開</u> 論文集の刊行 1 冊以上

3. 令和 3 年度の実施予定

シンポジウム 1 回開催
 コーパス講習会 1 回開催
 『日本語日常会話コーパス』本公開
 論文集 1 冊刊行

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 29,886 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

- ・2020年3月に開催予定であったが新型コロナウイルス感染拡大防止のために延期した「ことば・認知・インタラクション 8」をオンラインで2020年6月27日に開催した。口頭発表4件、参加者は246名（うち学生66名、海外機関所属者13名）であった。
- ・プロジェクト全体の研究成果を発信するために、各班合同のシンポジウム「日常会話コーパス VI」を令和3年3月4日にオンラインで開催した。口頭発表7件、参加者は254名（うち学生73名、海外機関所属者21名）であった。
- ・会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同で、シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 9」をオンラインで2021年3月6日に開催した。口頭発表4件、参加者は188名（うち学生35名、海外機関所属者12名）であった。
- ・以上の研究成果は、プロジェクト共同研究員の研究成果も含めて、論文7件、ブックチャプター6件、発表・講演35件、一般向けの講演・セミナー等3件、データベース等4件（うち1件はプロジェクト内限定）として公開した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

- ・1950-1970年代にかけて国語研究所で録音された音声資料を対象とする『昭和話し言葉コーパス』について、2018年度にモニター公開した独話17時間に加え、会話27時間を追加で整備し、計44時間の話し言葉コーパスとして、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年3月15日に本公開した。独話については『日本語話し言葉コーパス』と、会話については『日本語日常会話コーパス』と比較することにより、話し言葉の経年変化を実証的に研究できる基盤が整備された。今年度、4184件に及ぶ新規利用申請があるなど、多くの関心を集めている。
- ・2018年度にモニター公開した会話データ50時間が広く活用されるようになり、利用者から増補の希望が寄せられたことから、当初の計画にはなかったが、追加で会話データ50時間（計100時間）を整備し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年2月17日に一般公開した。中納言の今年度の新規利用契約は5156件、検索件数は昨年度25,751件に対して82,580件（昨年度比320%）となるなど、飛躍的にコーパスの利用が増えた。
- ・これまで共同研究員およびその指導学生に公開してきた『日本語日常会話コーパス』100時間に対し、追加で50時間（計150時間）を公開し、研究・教育に活用した。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対する話者情報（話者名・性別・年代）付与について、NDC情報の増補に伴い新たに対象となった225サンプルに追加で話者情報を付与し、オンライン検索システム「中納言」で2021年3月30日に公開した。
- ・国立障害者リハビリテーションセンター研究所からの協力要請を受け、『日本語日常会話コーパス』に参加した協力者のうち60名を対象に自閉症スペクトラム傾向指数調査を実施した。これは、自閉症スペクトラム傾向指数と言語運用との関係を明らかにし、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出すことを目指すものであり、『日本語日常会話コーパス』の利用可能性を広げる新たな取り組みである。

3. 教育に関する計画

- ・コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を2回開催した。これまでコーパスの利用法を中心に講習会を開催してきたが、受講者からの希望を受け、1回をコーパスの構築法を学ぶための講習会とした。
- ・コーパスの利用者からの要望を受け、オンライン検索システム『中納言』や全文検索システム『ひまわり』の利活用法、『日本語日常会話コーパス』利活用のための仕様等を説明する一連のビデオチュートリアルを新たに作成し、ホームページで公開した。公開後、計4400件以上のアクセスがあるなど、広く活用されている。
- ・若手研究者を育成するため、非常勤研究員5名を雇用した。Rを用いた統計勉強会を開催するなどし、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。また共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで、博士論文1本、修士論文1本、卒業論文7本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

- ・プロジェクトで構築した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話しことばコーパス』、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で17718件の新規利用申請があり、研究教育に広く活用された。

5. グローバル化に関する計画

- ・今年度は新型コロナウイルスの影響で中止となった国際会議等も少なくなかったが、Speech Prosody や O-COCOSDA などオンラインで開催された学会を中心に4件の発表を通じてプロジェクトの成果を発信した。
- ・NINJAL チュートリアル「コーパスを活用した日常会話の研究」を韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催でオンライン開催した。国外機関所属者数66名を含む91名が参加した。

6. その他

該当する活動なし。

Ⅲ. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 2020年3月に開催予定であったが新型コロナウイルス感染拡大防止のために延期した「ことば・認知・インタラクション 8」をオンラインで2020年6月27日に開催した。口頭発表4件、参加者は246名（うち学生66名、海外機関所属者13名）であった。	
2. プロジェクト全体の研究成果を発信するために、各班合同のシンポジウム「日常会話コーパスVI」を令和3年3月4日にオンラインで開催した。口頭発表7件、参加者は254名（うち学生73名、海外機関所属者21名）であった。	

3. 会話コミュニケーションについての議論を深めるため、関連する科研費プロジェクトと合同でシンポジウム「ことば・認知・インタラクション 9」をオンラインで2021年3月6日に開催した。口頭発表4件、参加者は188名（うち学生35名、海外機関所属者12名）であった。
4. 以上の研究成果を、論文7件、ブックチャプター6件、発表・講演35件、一般向けの講演・セミナー等3件、データベース等4件（うち1件はプロジェクト内限定）として公開した。

（2）研究実施体制等に関する計画

1. コーパスに基づく話し言葉研究を推進するために、国内外の研究者63名をプロジェクト共同研究員として組織した。今年度は、『日本語日常会話コーパス』の工学的応用研究の可能性を検討するため、IT企業の研究員などを共同研究員に加えて体制を強化した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<h3>（1）共同利用・共同研究に関する計画</h3> <p>[データベース等の構築・公開]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『日本語日常会話コーパス』については、来年度の本公開に向けて、短単位・長単位・談話行為（ISO24617-2 日本語拡張版）・韻律情報（X-JToBI 簡易版準拠）・係り受けのアノテーションを進めた。述語項構造についてはコーパス開発センターと共同で方針を検討した。 2. 2018年度にモニター公開した会話データ50時間が広く活用されるようになり、利用者から増補の希望が寄せられたことから、当初の計画にはなかったが、追加で会話データ50時間（計100時間）を整備し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年2月17日に公開した。 3. これまで共同研究員およびその指導学生に限定公開してきた『日本語日常会話コーパス』100時間に対し、追加で50時間（計150時間）を限定公開し、研究・教育に活用した。 4. 1950～1970年代にかけて国語研究所で録音された音声資料を対象とする『昭和話し言葉コーパス』について、2018年度にモニター公開した講演等の独話17時間に加え、会話27時間を追加で整備し、オンライン検索システム「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年3月15日に本公開した。独話については『日本語話し言葉コーパス』と、会話については『日本語日常会話コーパス』と比較することにより、話し言葉の経年変化を実証的に研究できる基盤が整備された。今年度、4184件に及ぶ新規利用申請があるなど、多くの関心を集めている。 5. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文に対する話者情報（話者名・性別・年代）付与について、NDC情報の更新に伴い新たに対象となった225サンプルに追加で話者情報を付与し、オンライン検索システム「中納言」で2021年3月30日に公開した。 6. 国立障害者リハビリテーションセンター研究所からの協力要請を受け、『日本語日常会話コーパス』に参加した協力者のうち60名を対象に、自閉症スペクトラム傾向指数調査を実施した。これは、自閉症スペクトラム傾向指数と言語運用との関係を明らかにし、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出すことを目指すものであり、『日本語日常会話コーパス』の利用可能性を広げる新たな取り組みである。 7. 『日本語日常会話コーパス』モニター版を拡張した上で引き続き公開し、中納言の今年度の新規利用契約は5156件、検索性数は昨年度25,751件に対して82,580件（昨年度比320%）となるなど、飛躍的にコーパスの利用が増えた。 	

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. 東京大学（宮尾祐介教授）と連携し、『日本語日常会話コーパス』への係り受け解析を進めたほか、後述の通り IT 企業との共同研究を開始した。（詳細は「4.」を参照）。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 大学院等への教育協力に関する計画	
1. 東京外大と連携し、コーパスの構築法を学ぶための講習会を共同開催した（次項「(2) 人材育成に関する計画」参照）。	
(2) 人材育成に関する計画	
[プロジェクト非常勤研究員の雇用]	
1. 若手研究者を育成するため、非常勤研究員を 5 名雇用した。	
2. 大学院生や非常勤研究員に、会話データを優先的に研究利用できる環境を整え、R を用いた統計勉強会を開催するなどして、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。	
3. コーパス言語学分野の人材を育成するために、若手研究者や大学院生を主対象とする講習会 3 コースを、3 月 4 日と 3 月 5 日に開催した（参加者 192 名）。これまでコーパスの利用法を中心に講習会を開催してきたが、受講者からの希望を受け、1 回をコーパスの構築法（データのインポート・アノテーション）を学ぶための講習会とし、連携大学院である東京外大と共同開催した。また講習会の資料は国語研究所の機関リポジトリに登録した。	
4. コーパスの利用者からの要望を受け、計画にはなかったが、オンライン検索システム『中納言』・全文検索システム『ひまわり』の利活用法や『日本語日常会話コーパス』の仕様等を説明するビデオチュートリアルを新たに作成し、ホームページで公開した。前述の講習会の事前・事後学習や大学の授業などでも活用され、今年度、延べ 4400 件以上のアクセスがあるなど、広く活用された。	
5. 共同研究員が指導する大学生・大学院生に『日本語日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究支援を実施することで、博士論文 1 本（九州大学）、修士論文 1 本（関西学院大学）、卒業論文 7 本の成果に結びついた。また早稲田大学などの大学の授業や社会言語学会の講習会でも活用されるなど、広く研究教育活動に利用されている。	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画	
1. コーパス開発センターとの連携研究として、日常会話の音声認識等の技術開発に関する研究をレトリバ社と開始した。	
(2) 研究成果の社会への普及に関する計画	
1. プロジェクトで整備・公開した『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話し言葉コーパス』、『名	

大会話コーパス』、『現日研・職場談話コーパス』、『国会会議録』を、インターネットを通して一般に発信した。今年度は合計で 17,718 件の新規利用申請があり、研究教育に広く活用された。

2. コーパス利用講習会の資料はこれまでプロジェクトのサイトに登録していたが、今年度からはより広く発信するために、国語研究所の機関リポジトリに登録した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 国際的協業に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 非常勤研究員 1 名を若手研究者海外派遣プログラムによりイギリスの Huddersfield University に派遣する予定であったが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。 2. 海外在住の研究者 1 名をプロジェクト共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションおよびシンポジウムを通して、コーパスについて評価してもらった。 <p>(2) 国際的発信に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 今年度は新型コロナウイルスの影響で中止となった国際会議等も少なくなかったが、Speech Prosody や 0-COCOSDA などオンラインで開催された学会を中心に 4 件の発表を通じてプロジェクトの成果を発信した。 2. NINJAL チュートリアル「コーパスを活用した日常会話の研究」を韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催でオンライン開催した（新型コロナウイルスの影響で韓国での開催をオンラインに切り替えた）。国外機関所属者数 66 名を含む 91 名が参加した。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和 2 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

研究については、コーパスの開発、成果公開、研究交流をバランス良く進めており、研究が予定通り進捗していると認められる。

共同利用については、コーパスの作成と公開を精力的に進めており、多くの研究者等に利用されるとともに、利用者を大幅に増やしている点が高く評価できる。共同研究についても、国立障害者リハビリテーションセンター研究所、東京大学、民間企業との具体的な連携が始まっており、今後の成果が期待される。

教育については、プロジェクトの成果を活用しつつ若手研究や学生の指導・支援を行ない、学位論文等に結実している。

社会との連携と社会貢献に関しては、プロジェクトの成果を一般の利用に供するとともに、上記のように民間企業との共同研究も始まっている。

グローバル化については、韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催によるシンポジウム、海外の研究者を交えたセッションなどを行なっている。特に、海外の機関とのイベントの共催や共同研究をさらに進めてほしい。

以上の通り、本プロジェクトの主たる成果物であるコーパスの開発と公開を中心として、その利用の拡大、学術的な成果発表、人材育成、国内外の研究機関や民間企業との連携を有機的に関連させながら、計画を上回るレベルで展開していると考えられる。

《評価項目》

1. 研究について

前下記の通り、コーパスの開発(後述)、成果公開、研究交流をバランス良く進めており、研究が予定通り進捗していると認められる。

成果発表のため、「ことば・認知・インタラクション 8」(オンライン、2020年6月27日、海外からの参加者を含む246名の参加者)、4班合同のシンポジウム「日常会話コーパス VI」(オンライン、令和3年3月4日、参加者は254名)を開発した。

会話コミュニケーションの研究を推進するため、関連する科研費プロジェクトと合同で、シンポジウム「ことば・認知・インタラクション 9」(オンライン、2021年3月6日、参加者188名)を開催して議論を深めた。

コーパスに基づく話し言葉研究を推進するため、国内外の研究者63名をプロジェクト共同研究員として組織した。特に、『日本語日常会話コーパス』の工学的応用研究の可能性を検討するため企業の研究員などを共同研究員に加えて体制を強化した。

2. 共同利用・共同研究について

共同利用については、下記のようにコーパスの作成と公開を精力的に進めており、多くの研究者等に利用されるとともに、利用者を大幅に増やしている点が高く評価できる。

『昭和話し言葉コーパス』について、先に公開した独話17時間に加えて会話27時間を補充した計44時間のデータを「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年3月15日に公開した。こうして『日本語話し言葉コーパス』および『日本語日常会話コーパス』と比較することで話し言葉の経年変化を実証的に研究できる基盤を整備し、4184件の新規利用申請があった。

『日本語日常会話コーパス』について、先に公開した会話データ50時間分が広く活用されて増補の希望が寄せられたので、会話データ50時間を追加して「中納言」にて音声配信機能を付けて2021年2月17日に一般公開し、検索性数が前年度の3倍以上になった。

共同研究員とその学生に公開してきた『日本語日常会話コーパス』100時間に50時間を追加して公開し、研究・教育に活用した。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の図書館サブコーパスの文学・物語に含まれる会話文について、225サンプルに話者情報を追加し、「中納言」で2021年3月30日に公開した。

『日本語日常会話コーパス』モニター版を拡張し、コーパスの利用を飛躍的に伸ばした。

共同研究については下記のような具体的進展があり、今後の成果が期待される。

『日本語日常会話コーパス』の新たな応用として、国立障害者リハビリテーションセンター研究所からの要請で、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出すため、60名のコーパス作成協力者の自閉症スペクトラム傾向指数を調査した。

東京大学の宮尾祐介教授と連携して『日本語日常会話コーパス』の係り受け解析を進めた。

後述のように企業との共同研究を開始した。

3. 教育について

下記のように、プロジェクトの成果を活用しつつ若手研究や学生の指導・支援を行ない、成果を上げている。

若手研究者や大学院生を主対象とする講習会を2回開催した。受講者からの希望を受けて1回をコーパスの構築法を学ぶための講習会とした。

コーパス利用者からの要望を受け、『中納言』や『ひまわり』の利活用法、『日本語日常会話コーパス』利活用のための仕様等を説明する一連のビデオチュートリアルを作成・公開し、計4400件以上のアクセスがあった。

若手研究者育成のため、非常勤研究員5名を雇用した。Rを用いた統計勉強会を開催するなどし、コーパス言語学の若手研究者の育成につとめた。

共同研究員の学生に『日本語日常会話コーパス』を優先的に提供してコーパス活用の研究を支援し、博士論文1本、修士論文1本、卒業論文7本の成果に結びついた。

4. 社会との連携及び社会貢献について

下記のように、プロジェクトの成果を一般の利用に供するとともに、民間企業との連携も始まっている。

『日本語日常会話コーパス』モニター版、『昭和話しことばコーパス』、『名大会話コーパス』、『現日研究・職場談話コーパス』、『国会会議録』をインターネットで一般に発信し、合計17718件の新規利用申請があった。

コーパス開発センターとの連携研究として、日常会話の音声認識等の技術開発に関するレトリバ社との共同研究を開始した。

5. グローバル化について

下記のような国際的活動を行なった。海外の機関とのイベントの共催や共同研究をさらに進めてほしい。

オンラインの国際学会を中心に4件の発表でプロジェクトの成果を発信した。

NINJAL チュートリアル「コーパスを活用した日常会話の研究」を韓国日語教育学会、韓国日本語学会との共催でオンライン開催し、海外の66名を含む91名が参加した。

海外在住の研究者1名を共同研究員として加え、『日本語日常会話コーパス』を用いたデータセッションおよびシンポジウムを通してコーパスの評価を受けた。

6. その他特記事項

特になし。

日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明

プロジェクトリーダー：石黒 圭

I. プロジェクトの概要

1. 目的及び特色

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることである。具体的には、日本語教育やその関連領域の研究者や教育者、そして日本語学習者に有益なコーパスを構築すること、論文集や教師指導書を刊行すること、シンポジウムや研修会を開催することである。

本プロジェクトでは日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するために、3つのサブプロジェクトを設ける。「日本語学習者の日本語使用の解明」、「日本語学習者の日本語理解の解明」、「日本語学習のためのリソース開発」である。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」では、「学習者の会話能力の解明」と「学習者の日本語習得過程の解明」を行う。「学習者の会話能力の解明」としては、母語話者と学習者の自然会話コーパスを構築し、それをもとにして学習者の会話能力を解明する。この研究は、条件統制された「自発的な自然会話」をデータとした研究であることに特色がある。「学習者の日本語習得過程の解明」としては、さまざまな言語を母語とする学習者の対話や作文のコーパスを構築し、それをもとにして異なる言語を母語とする日本語学習者の日本語の習得過程を解明する。この研究は、日本を含む世界のさまざまな地域において統制された条件で収集したデータを用いることにより、母語による違いを重視することに特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」では、「学習者の読解過程の解明」と「学習者の聴解過程の解明」を行う。これまでの研究は学習者の言語産出活動である発話や作文に焦点を当てたものが中心であったが、この研究は学習者の言語理解活動である読解や聴解に焦点を当てたものである。学習者に理解した内容を母語で語ってもらったデータや教室での学習者の談話を通して、外からは見えない読解や聴解の過程を可視化する研究である点に特色がある。

サブプロジェクト「日本語学習のためのリソース開発」では、「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」と「読解教材・聴解教材の開発」を行う。「オンライン日本語基本動詞辞典の作成」としては、日本語の基本動詞が持つさまざまな意味を図解なども用いてわかりやすく解説する音声付オンライン辞典を作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、大規模コーパスを活用して作成した辞典である点に特色がある。「読解教材・聴解教材の開発」では、日本語学習者用の読解教材・聴解教材を作成するための共同研究を行った上で、ウェブ版教材サンプルを作成し、日本語教師や学習者に提供する。これは、サブプロジェクト「日本語学習者の日本語理解の解明」で得られた調査結果に基づいて教材を作成する点に特色がある。

2. 年次計画（ロードマップ）

● 全体計画・研究組織

学習者のコミュニケーション	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
日本語使用班						
自然会話コーパス (BTSJ)	先行公開 294会話 (588名分)	39会話追加 計333会話 (666名分)	改訂公開 計333会話 (666名分)	35会話追加 計368会話 (736名分)	22会話追加 計390会話 (780名分)	本格公開 10会話追加 全400会話 (800名分)
シンポジウム	1回	1回	1回	1回	1回	1回
講習会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)	先行公開 225名分	225名分追加 計450名分	210名分追加 計660名分	215名分追加 計875名分	本格公開 175名分追加 計1050名分	既存データの 確認・修正 コーパスの 維持・運用
北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS)	データ収集	データ収集	データ収集	データ収集	データ 公開準備	データ 公開準備
ワークショップ	1回	1回	1回	1回	1回	
日本語理解班						
日本語非母語話者の読解コーパス		先行公開 45件	40件追加 計85件	20件追加 計105件	10件追加 計115件	本格公開 全115件
日本語非母語話者の聴解コーパス				先行公開 20件	30件追加 計50件	本格公開 全50件
日本語学習者の文章理解過程データベース		先行公開 3名分	57名分追加 計60名分	60名分追加 計120名分	60名分追加 計180名分	本格公開 全180名分
シンポジウム等		1回	1回	1回	1回	1回
リソース開発班						
基本動詞辞典	先行公開 15見出し	15見出し追加 計30見出し	15見出し追加 計45見出し	15見出し追加 計60見出し	15見出し追加 計75見出し	本格公開 15見出し追加 計90見出し
研究発表会	1回	1回	1回	1回	1回	1回
ウェブ版教材の開発		先行公開 28件	5件追加 計33件	5件追加 計38件	5件追加 計43件	本格公開 全43件
国際シンポジウム等		NINJAL国際 シンポジウム (ICPLU)開催			国際シンポ ジウム開催	
プロジェクト全体						
NINJAL日本語教師セミナー（国内）	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJAL日本語教師セミナー（海外）	1回	1回	1回	1回	1回	1回
NINJALチュートリアル	1回		1回			
刊行・出版		学習者の作文 能力に関する 論文集刊行	学習者の会話 能力に関する 論文集刊行 読解活動に関 する教師指導 書刊行	学習者の読解 過程に関する 論文集刊行 基本動詞辞典 に関する論文 集刊行	学習者の読解 過程に関する 論文集刊行 読解教材開発 に関する研究 書刊行	学習者の習得 過程に関する 論文集刊行 学習者の聴解 過程に関する 論文集刊行

●年次計画

【平成 28 (2016) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築に着手する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築に着手する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築に着手する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成に着手する。
- ・ウェブ版読解教材の開発に着手する。

【平成 29 (2017) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、その一部を試験公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、その一部を試験公開する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続する。ウェブ版聴解教材の開発に着手する。
- ・NINJAL 国際シンポジウム (ICPLJ) を開催する。

【平成 30 (2018) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、サンプルを試験公開する。ウェブ版聴解教材の開発を継続する。
- ・学習者の会話能力に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の読解活動に関する教師指導書を刊行する。

【令和元 (2019) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。ウェブ版聴解教材のサンプルを試験公開する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。

【令和 2 (2020) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典の作成を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材の開発を継続し、試験公開の範囲を拡大する。
- ・学習者の読解過程に関する論文集を刊行する。
- ・読解教材開発に関する研究書を刊行する。
- ・日本語学習者のコミュニケーションに関する国際シンポジウムを開催する。

【令和 3 (2021) 年度】

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパスを本格公開する。

- ・多言語を母語とする日本語学習者コーパスを本格公開する。
- ・日本語学習者の読解コーパスを本格公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞辞典を本格公開する。
- ・ウェブ版読解教材とウェブ版聴解教材を本格公開する。
- ・学習者の日本語習得過程に関する論文集を刊行する。
- ・学習者の聴解過程に関する論文集を刊行する。

3. 令和3年度の実施予定

- ・母語話者と学習者の自然会話コーパス（BTSJ 日本語自然会話コーパス）の構築を継続し、500 会話を本格公開する。また、その活用のための講演会・講習会を行い、完成記念シンポジウムを開催する。
- ・I-JAS 公開後のメンテナンス作業、母語話者調査のデータ公開作業を進める。また、I-JAS を活用した共同利用・共同研究の推進のための学習者コーパス研究会および国際会議を開催する。
- ・日本語学習者の聴解および読解コーパスの構築を継続し、各 20 件のコーパスデータを新たに公開する。
- ・ウェブ版読解教材およびウェブ版聴解教材の開発を継続し、合計 5 件の教材を公開する。また、日本語聴解教材・読解教材作成に関する論文集の編集の準備作業を進める。
- ・日本語学習者の文章理解過程データベースに、新たに文章展開の理解を調査した 2 種のデータを追加、公開する。
- ・オンライン日本語基本動詞ハンドブックの作成を継続し、今まで執筆してきた残りのすべての見出し 30 件を追加する。視聴覚コンテンツ（音声ファイル、アニメ）の補充も併せて行う。
- ・国際交流基金ニューデリー事務所との覚書に基づき、インドの日本語教育史の書籍の刊行準備を進める。
- ・天津外国語大学・西安外国語大学との学術交流協定締結に向けた準備を継続する。
- ・ビジネス専門日本語教育の研究プロジェクトを、富士通研究所との協力のもと継続する。
- ・日本語教師等を対象とする研修会を、国内と海外で 1 回ずつ開催する。

II. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 29,508 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本宇佐美まゆみ（編）『日本語の自然会話分析』くろしお出版を刊行した。日本語聴解教材および読解教材作成に関する論文集の編集作業を行った。国内外の日本語教育研究者 199 名による共同研究体制を組織し、PD フェローを 2 名、プロジェクト非常勤研究員を 14 名、技術補佐員を 7 名雇用し、共同研究を推進した。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

学習者の言語使用では、BTSJ 自然会話コーパスの構築を継続し、69 会話のデータを追加・公開するとともに、NCRB のプラットフォームを構築し、BTSJ 自然会話コーパスを搭載した。また、I-JAS では中納言のユーザーに役立つデータ整備を行うとともに、B-JAS では第一次文字化作業・チェック作業を終了した。学習者の言語理解では、読解・聴解コーパスの構築を継続し、各 20 件のコーパスデータを新たに

公開するとともに、ウェブ版読解教材として3レッスン、ウェブ版聴解教材として8レッスンの教材を公開した。オンライン日本語基本動詞ハンドブックでは、15見出しの追加・公開を行った。プロジェクト内の共同シンポジウムとして「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！」をWeb開催し、263名の参加を得た。

3. 教育に関する計画

第11回 ICPLJ を NIJAL 国際シンポジウムとして Web 開催し、多くの大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。韓国向けの NINJAL チュートリアル「日本語学習者の作文の研究手法」、国内向け NINJAL チュートリアル「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」を Web 開催し、大学院生等に研修を行った。「I-JAS 完成記念シンポジウム」を Web 開催し、若手研究者を中心に 284 名の参加を得た。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

ビジネス専門日本語教育の共同研究を富士通研究所と推進し、論文や書籍を刊行した。ブラジル向けの海外日本語教師セミナー「日本語学習者は日本語の何が難しいのか？」と国内日本語教師セミナー「対話システム研究と日本語教育」を Web 開催し、前者は 66 名、後者は 180 名が参加した。

5. グローバル化に関する計画

天津外国語大学日本語学院および西安外国語大学日本語科と日本語教育関係の共同プロジェクト、学術交流協定の締結に向けて準備を進めた。また、第11回 ICPLJ を NIJAL 国際シンポジウムとして Web 開催し、二日間の参加者の異なりの合計 462 名のうち、海外研究者 108 名の参加を得た。

6. その他

該当する活動なし。

III. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画	
1. 宇佐美まゆみ（編）『日本語の自然会話分析—BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明—』くろしお出版を刊行した。	
2. 日本語聴解教材作成に関する論文集の編集を行った。新型コロナウイルスの感染拡大で海外での調査ができなかったため遅れているが、2021 年度に出版社に入稿する予定である。	
3. 日本語読解教材作成に関する論文集の編集作業を行った。	
(2) 研究実施体制等に関する計画	
1. プロジェクトを推進するために、国内外の日本語教育研究者 199 名で 3 つのサブプロジェクトによる共同研究体制を組織した。	
2. PD フェローを 2 名、プロジェクト非常勤研究員を 14 名、技術補佐員を 7 名雇用し、本プロジェクトの研究を遂行した。	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 母語話者と学習者の自然会話コーパス（BTSJ コーパス）の構築を継続し、予定の3倍にあたる69会話（138人分）のコーパスデータを追加し、合計446会話（892人分）を公開した。また、その活用のための講習会を2021年2月6日にオンラインで開催し、初心者向けには83名、既習者向けには63名が参加した。 2. 日本語学習者の読解コーパスの構築を継続し、20件のコーパスデータを新たに公開した。 3. 日本語学習者の聴解コーパスの構築を継続し、20件のコーパスデータを新たに公開した。 4. ウェブ版読解教材として「鉄道のチケット」シリーズ3レッスン、ウェブ版聴解教材として「会社の会議」シリーズ4レッスンと「ホルモンの仕組みについての講義」シリーズ1レッスン、合計8レッスンの教材を公開した。 5. オンライン日本語基本動詞ハンドブックに15見出しの追加し、計140見出しを公開した。視聴覚コンテンツ（音声ファイル、アニメ）の補充も併せて行った。 6. 自然会話リソースバンク（NCRB）のプラットフォームを構築し、上記のBTSJ コーパスを搭載した。また、NCRBに関する講演会を2021年3月27日にオンラインで開催し、157名が参加した。 7. 2019年度に公開した多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）の確認作業を行った。I-JASに関しては、①音声配信のためのアライメント作業、②表記に揺れがある箇所について表記統一作業、③誤解析の修正作業を進め、I-JAS 中納言のユーザーにとってより使いやすくなるための整備を行った。 8. 北京日本語学習者縦断コーパス（B-JAS）のデータ公開のための第一次文字化作業・チェック作業を終了した。 9. 2019年度に公開した日本語学習者の文章理解過程データベースの確認作業を行い、表記が一貫したものになるように更新した。 10. 本プロジェクトの成果である石黒圭編著（2018）『どうすれば協働学習がうまくいくか—失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』ココ出版の書評が『早稲田日本語教育学』（28号，pp. 107-111，桐澤絵里奈氏執筆）で取り上げられ、「本書はピア・リーディング授業がうまくいかなかった教員や、今後こうした授業に取り組みたいと考えている教員にとって、協働学習を促進しながら、個々の学習者の学びとモチベーション向上に貢献しうる読解授業について考えるための指南書となりうるだろう」と評価された。 11. 本プロジェクトの成果である野田尚史・迫田久美子編著（2019）『学習者コーパスと日本語教育研究』くろしお出版の書評が『早稲田日本語教育学』（28号，pp. 125-129，山田翔太氏執筆）で取り上げられ、「従来の日本語教育研究（言語学的な研究と同様のテーマや方法による研究）のあり方を見直し、母語話者や学習者の言語データを基に日本語教育を研究していく上で、本書の論文はその道標となる研究であり、大きな意義がある」と評価された。 <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「日本語教育国際研究大会 香港・マカオ 2020」で共同発表を準備していたが、新型コロナウイルス流行の影響で2022年11月に延期になった。 2. 「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトと連携し、日本語文型バンクに中・上級の文型を追加した。なお、文型バンクの紹介のために講演・研修会を行う予定であったが、新型コロナウイルス流行の影響で取りやめることになった。 	

- プロジェクト内の複数班による共同シンポジウム「日本語教育は、自然会話コーパスで変わる！ —『BTSJ 日本語自然会話コーパス』の特徴と日本語教育への生かし方—」を2020年11月21日にWeb開催で行った。参加者は263名であった。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 特別共同利用研究員1名の受入を継続した。 	
<p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> プロジェクトPDフェローを2名雇用し、日本語教育研究に関する研究指導を行うことにより、日本語教育分野の人材を育成した。 大学院生14名を共同研究員としてプロジェクトに参画させ、コーパスの構築・分析作業を通して研究の指導を行った。 NIJAL 国際シンポジウム「第11回日本語実用言語学国際会議 (ICPLJ11)」を2020年12月19日 (シンポジウム, 参加者336名, うち学生86名) と12月20日 (口頭発表とポスター発表, 参加者376名, うち学生106名) をWeb開催で行い、多くの大学院生や若手研究者に発表の機会を提供した。なお、若手研究者 (特に大学院生) のうち、特に優れた発表者には国内旅費を提供する予定であったが、Web開催になったため、行わなかった。 韓国向けのNINJAL チュートリアル「日本語学習者の作文の研究手法」(88名参加, 担当: 石黒圭) を2020年10月10日に、国内向けNINJAL チュートリアル「日本語の自然会話とディスコース・ポライトネス理論」(127名参加, 担当: 宇佐美まゆみ) を2021年2月20日にそれぞれWeb開催で行い、大学院生や若手研究者に対し、プロジェクトが構築している自然会話コーパス、データベースを用いた研究方法の講習を行った。 「I-JAS 完成記念シンポジウム」を2020年6月20日と21日にWeb開催で行った。総参加者数は284名 (2日間の異なり人数)、うち海外機関所属者は33名であった。総発表件数は23件 (口頭発表)、うち海外機関所属者発表件数は7件であった。 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> ビジネス専門日本語教育のプロジェクトを、富士通研究所との協力のもと行い、学会誌『専門日本語教育研究』22号に寄稿論文を掲載したほか、一般向けの実用書である石黒圭・熊野健志編『ビジネス文書の基礎技術—実例でわかる「伝わる文章」のしくみ—』をひつじ書房より出版した。 	
<p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 主にブラジルとその近隣諸国向けの海外日本語教師セミナー「日本語学習者は日本語の何が難しいのか?—日本語学習者と日本語教師に対する調査から—」(担当: 野田尚史) を2020年11月15日にWeb開催で行い、15ヶ国から66名が参加した。 	

2. 国内日本語教師セミナー「対話システム研究と日本語教育」（担当：宇佐美まゆみ）を2021年2月27日にWeb開催で行い、127名が参加した。
3. 学習者コーパス I-JAS 研究会を2020年12月12日に日本語教師、大学院生、研究者等向けに、オンラインで開催した。発表は2件で、参加者は30名であった。なお、研究会の登録メンバーは48名（2020年12月22日現在）である。
4. 福岡県国際交流センターとの共催で2021年1月10日・11日に福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座をWeb開催で行い、53名が参加した。

5. グローバル化に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>（1）国際的協業に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 天津外国語大学日本語学院と日本語学習者のコミュニケーションに関わる作文の共同研究には着手したが、新型コロナウイルス流行の影響で調印式が持てず、学術交流協定の締結は延期となっている。 2. 西安外国語大学日本語科と日本語教育関係の共同プロジェクト、学術交流協定の締結に向けて準備を進めた。 <p>（2）国際的発信に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ICPLJ（日本語実用言語学国際会議）の国際シンポジウムを開催した。二日間の参加者の異なりの合計462名のうち、海外研究者108名の参加を得た。開催の概要については、3.「教育に関する計画」の（2）「人材育成に関する計画」を参照。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施している

本プロジェクトの目的は、日本語学習者のコミュニケーションを多角的に解明するとともに、その成果を日本語教育に応用する方法を明らかにすることであり、3つのサブプロジェクトすなわち、①「日本語学習者の日本語使用の解明」、②「日本語学習者の日本語理解の解明」、③「日本語学習のためのリソース開発」で構成されている。2020（R.2）年度は上記プロジェクトの5年目に当たる。

自己評価は、「研究」、「共同利用・共同研究」、「教育」、「社会連携・社会貢献」は「A」、その他については「B」と評価されているが、以下に見るように「計画」と「実施状況」の細部を比較検討してみると、若干の再評価が必要な項目があると考えられる。しかし、いずれの項目においても相応の成果をあげており、総合的に見て「A評価」が妥当であると考えられる。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けての計画実施の遅れ、中止や延期、またWeb開催になったシンポジウムなどが若干数あるが、それらやむを得ない事情を勘案しても相応な成果をあげたと考えられる。

《評価項目》

1. 研究について

(1) 研究水準及び研究の成果に関しては、当初の計画になかった1冊の論文集を刊行し、2冊の論文集の編集作業を進捗させている。ただ、「年次計画（ロードマップ）」における記載内容と「項目ごとの状況」の「計画」欄における記載内容と「実施状況」欄の記載内容（表現）に若干のズレ（論文集を刊行する、刊行準備を進める、編集を行い入稿する、編集作業を行う、等の表現内容の違い）が見られ、当初計画でどこまでの成果を予定していたのかははっきりせず、従って成果が計画どおりか計画を上回っているのかなど判然としない。また「質的側面」に関する記載がないなど、計画に対する実施状況の評価に迷うところがある。「主要業績概要」の①の記載内容によって「質的側面」の評価を補い、またコロナ禍の困難な事情をも勘案し、(2) 実施体制構築に際しての動員人数が計画を上回っていることなども勘案したとしても、計画を上回る十分な成果をあげているとは評価し難く、「B 評価」が妥当であるように思われる。

2. 共同利用・共同研究について

(1) 共同利用・共同研究に関しては、各種コーパスの構築を継続し計画どおりかそれ以上の成果をあげている。またウェブ版の読解教材・聴解教材についても予定を上回る数の教材を公開しており、オンライン日本語基本動詞ハンドブックの見出しの追加、コンテンツの補充も計画どおり実施している。また、当初計画には含まれていなかったと思われる「自然会話リソースバンク（NCRB）のプラットフォームの構築」を行い「NCRB に関するオンライン講演会」も開催している。さらに、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）の確認・整備作業」を行い、「北京日本語学習者横断コーパス（B-JAS）のデータ公開のための第一次文字化作業やチェック作業」を終え、「日本語学習者の文章理解過程データベース」の確認・更新作業も行っており、当初計画を上回る実施状況となっている。質的側面に関しては、2冊の論集が共に書評に取り上げられ評価されている。

(2) 実施体制等に関しては、北京日本学研究中心との連携による共同発表の予定がコロナ禍で学会自体が開催延期になり（発表準備自体はできていたとのこと）、「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」プロジェクトとの連携活動は進捗していたものの予定されていた講演・研修会がコロナ禍で中止となり、計画されていた活動の一部が実施されなかった。一方でプロジェクト内の複数班連携による自然会話コーパス関係の共同シンポジウムはWebによって開催されている。共同利用・共同研究については結果的には上記のように一部において計画どおりの成果が上がっていないが、それらはコロナ禍の影響によるものであることを考慮し、また他の実施状況については計画を上回る成果を出していることに鑑みて、「A 評価」とするのが妥当ではないかと考える。

3. 教育について

(1) 大学院等への教育協力に関しては、計画どおり特別共同利用研究員1名の受け入れを継続している。(2) 人材育成に関しては、プロジェクトPDフェローを2名、また計画を大きく上回る14名の大学院生をプロジェクトに参画させ研究指導を行っている。NINJAL 国際シンポジウム(Web開催)では86名の学生参加者(参加者総数336名)を得ており、口頭発表とポスター発表には学生106名(参加者総数376名)の参加を得ている。また、大学院生や若手研究者に対するNINJALチュートリアルを韓国向け(88名参加)、日本国内向け(127名参加)の2回Web上で開催し、プロジェクトが構築している自然会話コーパス、データベースを用いた研究方法の講習を行っている。また、「I-JAS 完成記念シンポジウム」をWebで開催し、参加者総数284名、うち海外機関所属者は33名、発表総

数は23件（口頭発表），うち海外機関所属者の発表は7件である。教育については，総じて計画を上回る十分な成果をあげており，「A評価」が妥当であるとする。

4. 社会との連携及び社会貢献について

（1）産業界・地域社会との連携に関しては，ビジネス日本語教育に関する研究を（株）富士通研究所と連携して進め，学会誌への寄稿，また実用書1冊をひつじ書房より出版している。（2）研究成果の社会への普及に関しては，日本語教師等を対象とする研修会を国内と海外で1回ずつ開催することが計画されていたが，実際には，主にブラジルとその近隣諸国向けの海外日本語教師セミナー（15ヶ国66名が参加）と国内日本語教師セミナー（127名が参加）をWebで開催し，加えて学習者コーパスI-JAS研究会（参加者30名）をオンラインで開催している。更に，福岡県国際交流センターとの共催で福岡県地域日本語教室ボランティアスキルアップ講座（参加者53名）をWebで開催しており，地域日本語教育の場への研究成果の普及活動を行っている。以上，産業界・地域社会との連携については，総じて計画を上回る十分な成果を挙げており，「A評価」が妥当であるとする。

5. グローバル化について

（1）国際的協業に関しては，天津外国語大学と学術交流協定を締結し共同研究を実施すること，（2）国際的発信に関しては，ICPLJ（日本語実用言語学国際会議）の国際シンポジウムを開催することが計画されていた。（1）については，天津外国語大学に加えて西安外国語大学とも学術交流協定の締結と共同プロジェクトの立ち上げの準備がなされたが，コロナ禍により協定締結が延期となっている。（2）については，参加者総数462名，うち海外研究者は108名であった。以上，グローバル化については，総じて計画を上回る十分な成果を挙げており，「A評価」が妥当であるとする。付言すれば，海外の日本語教育・日本語教師研修・日本語教育研究などについては，国際交流基金が豊富な知見・情報を有しているので，今後の連携のあり方について工夫が欲しい。

6. その他特記事項

1-6の項目それぞれに関連して，日本語教育学会また諸外国の日本語教師会などとの連携の可能性についても今後のさらなる工夫があればとする。

コーパス開発センター
センター長：山崎 誠

I. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 76,707 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

コーパス開発センター専任職員・研究員で、ジャーナル論文 4 本、国際会議発表 9 件。「言語資源活用ワークショップ」を9月に開催。

形態素解析用辞書 UniDic, 係り受けツリーバンク Universal Dependencies, シソーラス分類語彙表を中心にした共同研究を展開。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

「中納言」「梵天」および包括的検索系「KOTONOHA」の開発維持管理を実施。

3. 教育に関する計画

検索系の講習会を3回実施（予定）。国立国会図書館 2020 年「NDL デジタルライブラリーカフェ」に登壇。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語話し言葉コーパス』の頒布を進める。

日本語語彙の分散表現データ NWJC2vec ・自然言語処理の事前学習モデル NWJC-BERT を2020年9月に言語資源協会より公開。

5. グローバル化に関する計画

国際的な係り受けツリーバンク構築プロジェクト Universal Dependencies に参画。

6. その他

ワークスアプリケーションズ社, リクルート社, レトリバ社と共同研究を実施。

高エネ研機構間連携プロジェクトに参画。生理学研究所共同研究プロジェクトに参画。

令和3年度の実施予定

- ・包括的検索系の機能強化
- ・国際会議 QUALICO 2021 の招致
- ・コーパスの有償契約の新体系の導入

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画</p> <p>1. ジャーナル論文 4 件・国際会議発表 9 件。</p> <p>2. 「言語資源活用ワークショップ 2020」を完全オンライン(zoom および slack)で実施。</p> <p>参加申込者数 422 人</p> <p>(内) 海外 71 人</p> <p>(内) 学生 123 人</p> <p>(内) 9/8 参加 356 人</p> <p>(内) 9/9 参加 328 人</p> <p>Zoom 参加者数</p> <p>9/8 参加 274 人 異なり</p> <p>9/9 参加 176 人 異なり</p> <p>Slack 参加者数 340 人 異なり</p> <p>3. 本年度開催予定であった QUALICO 2020 は新型コロナウイルス感染症の影響で 2021 年度開催(QUALICO 2021)に延期された(2020 年 6 月 1 日に正式決定)。国際会議 QUALICO 2021 の開催準備を進め, selected papers 16 本の proceedings を編纂(2021 年度公刊予定)。</p> <p>4. 2020 年 5 月に Universal Dependencies 2.6, 2020 年 11 月に Universal Dependencies 2.7 を公開『分類語彙表』のデータ拡張(親密度情報・位相情報・代表義・反対語情報)を進めるとともに検索系整備を行った。</p> <p>(2) 研究実施体制等に関する計画</p>	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 共同利用・共同研究に関する計画</p> <p>1. 「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の維持管理を行った。</p> <p>「少納言」2020 年度検索数 887,080 件</p> <p>「中納言」2020 年度検索数 1,673,296 件</p> <p>「梵天」2020 年度高機能検索数 351,774 件</p> <p>(文字列検索の公開後累計検索数は 2,002,600 件 2021/04/01 確認)</p> <p>「少納言」についてはセキュリティ上の問題が発覚したために, 2021/2/12 にサービスを停止した。</p> <p>2. 複数のコーパスを横断的に簡便に検索可能な包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」を試験公開中。2020 年 5 月 19 日に累計 30,000 セッション達成。2021 年 4 月 1 日現在累計 94,014 セッション(内 2020 年度実績は 73,055 セッション)。</p> <p>3. 包括的検索系の格納データの増補, 分析指針(ファセット)の拡張を行った。同内容で LREC-2020 に国際会議論文採録。</p> <p>(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画</p>	

1. 大学の授業支援のために、「中納言」の「授業用アカウント」発行の枠組を一般公開。
2021年3月31日現在、101件の2020年度開催授業・セミナーで利用。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 大学院等への教育協力に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 大学の授業支援のために、「中納言」の「授業用アカウント」発行の枠組を一般公開。 101件の2020年度開催授業・セミナーで利用。 <p>(2) 人材育成に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プロジェクト非常勤研究員を4名雇用 2. 講習会を3回実施予定 <ul style="list-style-type: none"> ・8/11に包括的検索系「まとめて検索 KOTONOA」講習会 ・9/10に講習会ビデオ公開（9/8に言語資源活用ワークショップで事前公開および質問会を実施） ・3/4に包括的検索系「まとめて検索 KOTONOA」講習会実施【項番2.（2）関連】 3. 言語資源活用ワークショップ 2020において若手向け優秀発表賞を1名に授与 ワークショップ内イベントにて、まとめて検索のコンテストを実施し、優秀発表者に賞を授与 4. シチズン・サイエンスの取り組みとして 包括的検索系「まとめて検索 KOTONOA」の広報を兼ね、 「KOTONOA 検索コンテスト 2020」を開催。優れた作品5件に優秀賞を授与 	

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 2020年5月に Universal Dependencies 2.6, 2020年11月に Universal Dependencies 2.7 を公開。 『分類語彙表』のデータ拡張（親密度情報・位相情報・代表義・反対語情報）を進めるとともに検索系整備を行った。【項番1.（2）再掲】 2. ワークスアプリケーションズと共同で第16回テキストアナリティクス・シンポジウムにて1件発表。 同内容で2020年優秀研究賞受賞。 3. Megagon Labs. より 日本語版 spaCy Parser version 2.3.0（2020年6月）および GiNZA Parser 4.0 をリリース（2020年8月）。 4. 新規にレトリバ社と共同研究を開始。2021年度内に音声言語に適応した深層学習モデルをレトリバ社より公開。 5. Yahoo! Japan 研究所の研究会に登壇。 <p>(2) 研究成果の社会への普及に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分類語彙表関連データの拡張を実施。 2. 検索ツール Cradle での公開を実施。 3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の有償契約数 30 件・『日本語話し言葉コーパス』の有償契約数 45 件 4. 法律事務所に依頼し、コーパスの契約形態の見直しを実施（2021年度中に新契約体系へ移行）。 	

5. 日本語語彙の分散表現データ NWJC2vec を 2020 年 9 月に言語資源協会より公開。
2020 年度契約数 8 件。
6. 日本語処理の事前学習済みモデル NWJC-BERT を 2020 年 9 月に言語資源協会より公開。
2020 年度契約数 8 件。
同内容で NLP2020 言語資源賞を受賞。
7. 言語処理学会第 27 回年次大会をプラチナスポンサーとして支援。同学会でオンラインブースを設置して言語資源の広報を実施（予算は 2019 年度の新型コロナウイルス感染症による未執行繰越予算 25 万円を充当）
8. 「中納言」の年間契約数
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 5,900 件
『日本語歴史コーパス』 4,660 件
『日本語話し言葉コーパス』 5,315 件
『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 4,165 件
『名大会話コーパス』 3,809 件
『現日研・職場談話コーパス』 3,981 件
『国語研日本語ウェブコーパス』 5,175 件
『日本語日常会話コーパス』 5,156 件
『日本語諸方言コーパス』 4,115 件
『昭和話し言葉コーパス』 4,184 件
9. 国立国会図書館主催 2020 年「NDL デジタルライブラリーカフェ」に専任職員 1 名登壇。

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
<p>（１）国際的協業に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. COVID-19 のために受け入れ延期。 2. 2020 年 5 月に Universal Dependencies 2.6, 2020 年 11 月に Universal Dependencies 2.7 を公開。 【項番 1.（２），項番 4.（１）再掲】 <p>（２）国際的発信に関する計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ジャーナル論文 4 件・国際会議発表 9 件。 【項番 1.（１）再掲】。 2. 国際会議 QUALICO 2021 の開催準備を進めた。 【項番 1.（１）再掲】。 3. 法律事務所に依頼し、コーパス有償契約の英文契約書を大幅に改定。 	

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

令和2年度は新型コロナウイルス感染症のために対面での会合が全面的に中止となる中で、分類語彙表の充実、国際的なツリーバンク構築の一翼を担う Universal Dependency の公開、複数コーパスの横断的検索のための包括的検索系「まとめて検索 KOTONOHA」の公開など、コーパスの構築と提供の活動を着実に進めるとともに、学術雑誌論文・国際会議発表に関しては計画を上回る成果を上げている。

学術利用を目的としたコーパスの無償提供に加えて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語話し言葉コーパス』の有償契約の実施、あるいは、言語資源協会を通じた機械学習自然言語処理のための基礎データの公開提供など、産業界に貢献する有償提供の拡大実施に取り組んでいることは高く評価できる。

さらに、リクルート社をはじめとする企業との共同研究を拡大し、その成果が着実に表れていることも評価される。大学共同利用機関法人内の他の研究組織との連携プロジェクトへの参画は今後の発展が期待される。

コーパスの開発とその利用普及を通じた学術研究の向上、社会発信、産業応用への寄与を目的とした活動を計画通り着実に実施していると判断される。

《評価項目》

1. 研究について

研究成果の公表に関しては、「自然言語処理」3編をはじめとする学術論文誌への論文発表、及び LREC をはじめとする言語処理・音声処理・言語資源構築技術に関する研究の国際会議発表を計画を上回って行っており、高い研究成果を上げていると判断される。

研究者向けの公開研究集会として、9月には「言語資源活用ワークショップ2020」をオンラインで開催し、400名以上の参加者を集めている。

国際シンポジウムとしては、国際計量言語学会大会(QUALICO2020)を招致し、2020年東京開催を予定して準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症のために2021年9月に開催延期となり、QUALICO2021として継続して開催準備にたずさわっている。

Universal Dependencies Consortiumの下で Universal Dependencies 2.6/2.7を公開、分類語彙表のデータ拡張、及び国語研のサイトからの検索系整備を進めており、大学との連携、共同研究を通じた研究機関支援の基盤構築に着実に貢献している。

2. 共同利用・共同研究について

データベース等の構築・公開については、「少納言」「中納言」「梵天」などの検索系の維持管理を継続して進め、文字列検索の累計検索数が200万件を超えている。また、包括的検索系については、複数のコーパスを横断的に簡便に検索可能な包括的検索系については「まとめて検索 KOTONOHA」を試験公開し、計画を大きく上回る利用を達成している。さらに包括的検索系の拡張を行い、その内容で LREC-2020 国際会議論文に採録されるなど学術的成果にも結びついている。

共同利用・共同研究を推進するための大学との組織的な連携の一環としては、大学の授業支援のために「中納言」の「授業用アカウント」発行の枠組を一般公開し、2020年度開催授業・セミナーで101件以上の利用を実現している。

データベースに関わる共同利用・共同研究については計画通り順調に実施していると判断される。

3. 教育について

プロジェクト非常勤研究員4名を雇用して人材育成を図るとともに、包括的検索系「まとめて検索 KOTONOA」など検索系の講習会を計画通り3回実施して若手研究者に対する教育機会を提供している。また、言語資源活用ワークショップ2020において若手向け優秀発表賞授与、「KOTONOA 検索コンテスト2020」開催時に優秀賞5件を授与など、若手研究者の研究奨励に努めていることは高く評価される。

4. 社会との連携及び社会貢献について

産業界や地域社会との連携に関しては、Universal Dependency や分類語彙表のデータ公開などの活動の着実な実施に加えて、複数の企業との間で共同研究を積極的に展開し、学会賞受賞や音声言語処理用のプログラム・データ公開につながっており、優れた活動と評価できる。

研究成果の社会への普及に関しては、分類語彙表や各種検索ツールの公開など、主に学術利用を目的とした無償提供に加えて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語話し言葉コーパス』の有償契約実施、あるいは、言語資源協会を通じた機械学習自然言語処理のための基礎データの公開提供など、産業界に貢献する有償提供を拡大実施している。言語処理学会大会でのスポンサーを含む・積極的な広報活動も各種コーパスの契約数の増加に結びついており、社会への普及活動は高く評価できる。

5. グローバル化について

新型コロナウイルス感染症のために海外研究者の受け入れ延期はやむを得ない。国際的ツリーバンク構築プロジェクトへの参画などの国際的協業活動、国際会議発表などの国際的発信活動はオンラインを利用することにより概ね計画どおり実施されている。

6. その他特記事項

大学共同利用機関法人内の他の研究組織(高エネルギー加速器研究機構及び自然科学研究機構)との連携プロジェクトへの参画は、研究の幅を広げ、新しい研究の発展や新しい研究知見へとつながる可能性がある。今後も積極的に取り組むことを期待する。

研究情報発信センター
センター長：石黒 圭

I. 令和2年度活動概要

令和2年度予算総額 35,850 千円

令和2年度 成果の概要

1. 研究に関する計画

本センターは、大学共同利用機関としての共同利用に供するため、各種研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、広く社会に発信することで、研究の向上に寄与することを目的として活動を行っている。研究に関しては、所蔵資料とそのデータベース構築・公開について学会で研究発表を行い、その普及に努めた。

2. 共同利用・共同研究に関する計画

共同利用・共同計画に関しては、データベースの開発・公開の推進、収蔵資料の共同利用体制の整備、公開データベースのオープンデータ化の三つが挙げられる。

一つ目として、「国立国語研究所学術情報リポジトリ」「日本語研究・日本語教育文献データベース」「研究資料室収蔵資料データベース」など、所管するデータベース類の開発・公開を推進した。

二つ目として、収蔵資料の共同利用体制を整備し、2020年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全13件中8件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して提供した。

三つ目として、公開データベースのオープンデータ化を進め、ライセンス付与の基本方針を定め、原則CC BY 4.0での公開を実施した。

3. 教育に関する計画

教育に関しては、研究発信業務強化のため、プロジェクト非常勤研究員3名を雇用し、その育成に努めた。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

社会との連携及び社会貢献に関しては、『国立国語研究所論集』を2回、オンラインと冊子体の両形態で発行するとともに、円滑な発行を維持できるよう、2019年度に引き続き編集体制の見直しを行った。

5. グローバル化に関する計画

グローバル化に関しては、2019年度に引き続き、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し（4点追加）、オープンアクセスで公開した（Pioneering Linguistic Works in Japan）。

6. その他

該当する活動なし。

令和3年度の実施予定

1. 所蔵資料のデータベース構築・公開について、学会で研究発表を行う。
2. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、国語研刊行物のデータ整備・登録を進めるとともに、オープンアクセス方針を踏まえ、研究成果の登録を推進する。
3. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」(Web) に新規データを追加する。
4. 社会調査のデータセット等の公開を行う。
5. 研究資料室収蔵資料の利活用を促進する。
6. 音源・映像資料の媒体変換（デジタル化）を進める。

II. 項目ごとの状況

1. 研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する計画 1. 所蔵資料とそのデータベース構築・公開について、学会で研究発表を2件行った。	
(2) 研究実施体制等に関する計画	

2. 共同利用・共同研究に関する計画

自己点検評価	計画を上回って実施した
(1) 共同利用・共同研究に関する計画 1. 「国立国語研究所学術情報リポジトリ」について、データ整備、登録、DOI付与を継続して実施するとともに、Web公開されているPDFのリポジトリ登録・DOI付与を促し、アクセシビリティを高めた。また、オープンアクセス方針の下、IR推進室と連携して情報を収集し、個人著作物の登録を推進した。追加470件、総件数2492件、ダウンロード回数は19.5万と昨年度比1.12倍であった。 2. 「日本語研究・日本語教育文献データベース」に新規データを2,767件追加した（全約273,500件）。大学学術機関リポジトリ及び学会誌掲載論文の本文PDFへのリンクを新規に2,912件設置した（全31,583件）。また、韓国及び台湾の現地学会・大学等の協力を得て、韓国及び台湾出版の文献情報の追加収録を行った。なお、直近5年間のアクセス数は、2016年度3.3万、2017年度4.0万、2018年度4.9万、2019年度8.1万、2020年度14万と増加傾向であった。 3. 「鶴岡調査データベース ver. 4.0」において、語彙・文法項目の回答データの追加を行い、公開した（2020年9月）。 「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」の回答データを公開した（2020年12月）。 4. 資料群3件を新規に公開し（来館閲覧利用を可とする）、「研究資料室収蔵資料データベース」を更新した。「研究資料室収蔵資料データベース」には新たに「研究課題一覧」（2021年3月）を追加し、検索性向上を図った。また、地図資料の専用保存箱を制作し、資料保全の劣化対策を行った。 5. 研究資料室収蔵の音源・映像資料について、1,344点の媒体変換（デジタル化）を進めた（カセットテープ691点、オープンリール録音585点、VHS等映像メディア68点）。また、所内専用試視聴システム「音声・映像データベース」にデジタル音源・映像を2,561点増補収録した（音声2,516点、映像45点）。 6. 研究資料室収蔵の調査票について、デジタル撮影を行った（29,082枚）。	

(2) 共同利用・共同研究の実施体制等に関する計画

1. 研究資料の共同利用体制を整備し、2020年度共同利用型研究（公募型）の採択課題（全13件中8件が研究資料室収蔵資料の活用研究）に対して研究資料を提供した。
2. 公開データベース23件のオープンデータ化を進め、ライセンス付与の基本方針を定め、原則CC BY 4.0での公開を実施した。

3. 教育に関する計画

自己点検評価	計画どおりに実施した。
--------	-------------

(1) 大学院等への教育協力に関する計画

(2) 人材育成に関する計画

1. 社会調査のデータセット等の整備・公開のため、プロジェクト非常勤研究員を1名の雇用を継続した。
また、「日本語研究・日本語教育文献データベース」の登録範囲拡張のため、プロジェクト非常勤研究員1名の雇用を継続するとともに、新たにプロジェクト非常勤研究員を1名雇用した。

4. 社会との連携及び社会貢献に関する目標を達成するための措置

自己点検評価	計画どおりに実施した
--------	------------

(1) 産業界や地域社会との連携に関する計画

(2) 研究成果の社会への普及に関する計画

1. 『国立国語研究所論集』第19号（2020年7月）と第20号（2021年1月）をオンラインと冊子体の両形態で発行した。また、論文の関連データを投稿できるよう規程を改正した。

5. その他の目標を達成するための措置

自己点検評価	計画を上回って実施した
--------	-------------

(1) 国際的協業に関する計画

(2) 国際的発信に関する計画

1. 2019年度に引き続き、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持ち、その評価がほぼ確立した日本語論文を英訳し、Pioneering Linguistic Works in Japanとして、オープンアクセスで4点追加公開した。

6. その他

該当する活動なし。

令和2年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施している

令和2年度は新型コロナウイルス感染症のために対面での会合が全面的に中止となる中で、国立国語研究所学術情報リポジトリ、日本語研究・日本語教育文献データベース、鶴岡調査データベースをはじめとする社会調査のデータセットなどの各種研究情報・資料の充実化とWeb上での公開を着実に進め、オンラインでの学会発表を行うなど、大学共同利用機関としての共同利用に供するため、各種研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、広く社会に発信することで、研究の向上に寄与することを目的とした活動を計画通り着実に実施していると判断される。

《評価項目》

1. 研究について

日本言語政策学会第22回研究大会における研究発表、台湾日本語・日本文学研究国際シンポジウムにおける基調講演など、国語研究所の所蔵資料とそのデータベース構築・公開の活動に基づく学会研究発表を行うなど、国語研究所の研究成果の発信および研究用データの普及を着実に進めている。

2. 共同利用・共同研究について

国立国語研究所学術情報リポジトリについて、国語研刊行物のデータ整備・登録を継続して進め、DOI情報付与によってアクセシビリティ向上を図るとともに、オープンアクセス化を進めた結果、リポジトリダウンロード件数が増加している。

日本語研究・日本語教育文献データベースについては、大学学術機関リポジトリ掲載論文及び学会誌掲載論文の情報追加を進めるとともに、韓国・台湾の学会・大学の協力を得て出版文献情報の登録を進めた。その結果、データベースアクセス件数が着実に増加している。

社会調査のデータセットについては、鶴岡調査データベース ver. 4.0、国民の言語使用と言語意識に関する全国調査の公開を行っている。

研究資料室収蔵資料についても、利活用促進のための資料目録整備、劣化対策、音源・映像資料のデジタル化などを着実に進めている。

また、2020年度共同利用型研究（公募型）の採択課題に対して、研究資料及び研究情報を提供するなど、研究資料の共同利用体制の整備を進めている。

研究情報、研究資料及び研究成果の収集・整理・管理・維持を行い、社会に発信し、国語研究の向上に資する活動を着実に実施していると判断できる。

3. 教育について

社会調査のデータセット等の整備・公開、日本語研究・日本語教育文献データベースの拡充のために、プロジェクト非常勤研究員2名の雇用継続に加えて新たに1名を雇用し、若手研究者育成を図っている。

今後は大学教育あるいは社会人教育向けの研究データ提供の取り組みを期待する。

4. 社会との連携及び社会貢献について

『国立国語研究所論集』の発行を継続して実施し、研究成果の社会への発信に着実に取り組んでいる。

令和2年度には第19号（2020年7月）と第20号（2021年1月）をオンラインと冊子体の両形態で発行している。

5. グローバル化について

英語による研究成果の発信に着実に取り組み、日本語学的・言語学的にパイオニア的価値を持つ日本語論文を英訳公開する活動を継続して実施している。令和2年度には論文4点を *Pioneering Linguistic Works in Japan* としてオープンアクセス公開している。

6. その他特記事項

特になし。

令和2年度「管理業務」に関する評価シート

業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

- ・第4期中期目標期間における共同研究プロジェクトについて、所内で出された次期研究プロジェクト案に対し運営会議・外部評価委員会の両構成員によるヒアリングを実施した。ヒアリングでいただいた意見及び助言は共同研究プロジェクト及び将来計画に反映させた。
- ・運営会議において、外部委員から研究所の研究活動について意見等をいただき、以下のとおり見直しを図った。
- ・所長候補者の選出方法について、オンライン投票における可用性確保の意見があり、検証の上マニュアルに反映した。
- ・テニュアトラック教員の選出及び採用指針について意見があり、選考及び採用手続きに反映させた。
- ・新型コロナウイルス感染防止対策についてマニュアル化の意見があり、所内にてマニュアル化の実施を行った。

2. 教育研究組織の見直しに関する目標を達成するための措置

【計画】

機関拠点型基幹研究プロジェクトの共同研究プロジェクトを研究系とセンターにより推進し、国際連携室において国際発信力を高めるために、チュートリアル事業等を推進し、国際学術機関等の連携を強化する。また、研究力向上に資するためにIR推進室において研究成果に関するデータの収集・管理・分析を行い、関係する委員会に情報提供を行う。

【実績】

- ・毎月開催している共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認するとともに、研究系とセンターの連携による機関拠点型基幹研究プロジェクトの研究成果として、「言語コミュニケーションの多様性」をテーマに、令和2年10月3日にシンポジウムをオンラインで開催した。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室が支援して、海外におけるチュートリアル授業（韓国）をオンラインにて令和2年10月10日、11日に実施した。
- ・国際発信力を高めるために、国際連携室では海外の研究機関と国際交流協定1件新規に締結し、1件を更新し出版覚書（1件）を締結した。新規締結を予定していた1件（天津外国語大学）は、新型コロナウイルスのため締結式が来年度以降に延期となった。またDe Gruyter Mouton社との出版協定に基づく新シリーズ（The Mouton-NINJAL Library of Linguistics）の出版企画を進めるとともに、危機言語の叢書シリーズ刊行についてBrill社およびハワイ大学と協議を重ねた。
- ・IR推進室では研究成果に関するデータを収集・管理し、機構のデータポストに活用するとともに、将来計画委員会及び自己点検・評価委員会等に情報を提供した。また収集したデータに基づき国立国語研究所年報を編集・刊行した。

3. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置

【計画】

機構内機関及び機構外機関との業務の共同実施

【実績】

- ・コピー用紙の調達について、機構内3機関（本部・国文研・国語研）と2機構6機関の計9機関で共同調達を実施した。
- ・立川地区（人間文化研究機構国文研、国語研及び情報システム研究機構極地研、統数研の2機構4機関）で、自販機設置運營業務を共同契約した。
- ・各種研修会を内外の機関と合同で開催することにより経費削減及び業務の効率化を図った。
 - ①西東京地区の国立大学法人等で運営される令和2年度文部科学省西東京地区生涯生活設計セミナーが開催され（R3.1.13～R3.2.2）、5名が参加した。
 - ②関東甲信越地区国立大学法人等主催の職員研修2件に職員を参加させた。
 - 1) 令和2年度東京地区及び関東・甲信越地区実践セミナー（広報の部）（R2.11.6開催、参加者2名）
 - 2) 令和2年度東京地区及び関東・甲信越地区実践セミナー（人事・労務・安全管理の部）（R2.12.10開催 参加者1名）
 - ③令和2年度公文書管理研修Ⅰ及び公文書管理研修Ⅱに各1名を参加させた。
 - ④I-URIC/SOKENDAI 連携の研修3件に職員を参加させた。
 - 1) 個人情報研修。（R2.10.22開催 参加者9名）
 - 2) 利益相反研修（R2.12.9開催、参加者8名）
 - 3) 知的財産・安全保障輸出管理担当者WG研修（R3.2.15開催、参加者6名）
 - ⑤人間文化研究機構本部主催による研修5件に職員を参加させた。
 - 1) 令和2年度人間文化研究機構新規採用職員研修（R2.6.30開催 参加者1名）
 - 2) 令和2年度ハラスメント相談員研修（R2.12.1開催 参加者3名）
 - 3) 令和2年度人間文化研究機構事務系職員の人事被評定者研修（R2.12.1開催、参加者1名）
 - 4) 令和2年度人間文化研究機構働き方改革（在宅勤務）研修（R2.12.14開催、参加者6名）
 - 5) 令和2年度人間文化研究機構育児・介護支援研修（R3.1.28開催、参加者14名）

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》

計画を上回って実施している

業務運営の改善及び効率化に関しては、計画を上回る積極的な取り組みが行われた。

組織運営の改善に関しては、第4期中期目標期間における共同研究プロジェクトについての次期研究プロジェクト案に対し運営会議・外部評価委員会の両構成員によるヒアリングを実施し、そこで得られた意見及び助言を共同研究プロジェクト及び将来計画に反映させた。また運営会議において外部委員から研究所の研究活動について意見等を生かして、所長候補者の選出方法、テニュアトラック教員の選出及び採用指針、新型コロナウイルス感染防止対策などについての見直しを図った。

研究組織の見直しに関しては、毎月開催の共同研究プロジェクト推進会議において基幹研究プロジェクトの進捗状況などを確認し、研究系とセンターの連携による「言語コミュニケーションの多様性」についてのシンポジウムをオンラインで開催するとともに、国際発信力を高めるために、海外におけるチュートリアル授業の実施、海外の研究機関との国際交流協定の締結、De Gruyter Mouton 社

との出版協定に基づく新シリーズの出版企画の推進、危機言語の叢書シリーズ刊行について Brill 社およびハワイ大学と協議などを行った。IR 推進室では研究成果に関するデータを収集・管理を中心に、国立国語研究所年報を編集・刊行するなどさまざまな活動を展開した。

事務等の効率化・合理化に関しては、コピー用紙の調達や自動販売機の設置・運営の業務委託で工夫が見られ、各種研修会を内外の機関と合同で開催することにより経費削減及び業務の効率化を図るなどした。

財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置

【計画】

常勤研究者の科研費への研究代表者もしくは研究分担者としての参加率を毎年度 80%以上にするため、競争的資金の申請に向けた説明会や研究計画書の作成支援等を実施する。

【実績】

- ・令和 2 年度に配分された科研費（新規及び継続課題）に研究代表者又は研究分担者として、常勤研究者 34 名のうち 33 名が参加した（参加率 97.1%，新規課題採択率 63.3%）。
- ・4 機関合同（国文研、国語研、極地研、統数研）科研費説明会（R2.9.29）を実施した（参加者 11 名）。また、人間文化研究機構科学研究費助成事業（科研費）説明会（R2.7.16）に 22 名参加させた。
- ・外部資金についての公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに、全研究者宛てに電子メールで周知した。特に、科研費については、科学研究費助成事業の採択率向上のために、申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う「科研費申請準備会議」（R2.10.6-7）を実施し、若手研究者の育成にも配慮しつつ科研費申請を奨励・支援した（令和 3 年度分申請 27 件）。（令和 3 年 3 月末現在）
- ・昨年度まで有償頒布していた『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』及び『日本語日常会話コーパス（モニター版）』に加え、今年度から新たに『日本語諸方言コーパス』の有償頒布を行い、総額 15,007 千円の収入を得た（※令和 3 年 3 月末日現在）。

2. 経費の抑制に関する目標を達成するための措置

【計画】

一般管理費の分析を行い、分析結果を基に教職員に対しコスト意識の啓発を図るとともに、契約方法の見直し等を実施する。

【実績】

- ・所内各室廊下やエレベータ前、トイレに電力節減、夏期には軽装励行のポスターを掲示し、教職員に対してコスト削減・省エネ推進の啓発を図った。また、例年どおり 4 階テラスにグリーンカーテンを設置し省エネを図った。
- ・複数年で契約締結している警備業務の期間満了に伴い、前回同様複数年契約による入札を実施し、業務の効率を図った。（財務課）
- ・従来実施している会議の合理化及び省力化については、他新型コロナウイルス感染拡大防止のため所内外の会議をオンライン会議に移行し、ペーパーレス化の推進の、会議にかかる施設利用料や旅費といった諸経費の節約と業務の軽減を図った。

【計画】

- （2）業務の外部委託等を促進させるとともに、職員の人件費や外部委託の状況を分析し、経費の抑制策を検討する。

【実績】

- ・働き方改革の一環として一部部署においてフレックスタイムを導入した。
- ・引き続き、施設管理業務及びネットワーク管理業務について外部委託を行い、業務の効率化を図った。

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》**計画を上回って実施している**

財務内容の改善に関しても、外部資金の獲得や業務の効率化で計画を上回る成果を達成した。

外部研究資金、寄付金その他の自己収入の増加に関しては、科研費への常勤研究者の参加率が97.1%に達し目標を大幅に上回った。外部資金獲得のための説明会や意見交換を積極的に行った。また当研究所作成コーパスの有償頒布で総額15,007千円（前年度比約300%）となる収入を得た。

経費の抑制に関しては、研究所内のさまざまな場所に電力節減・夏期の軽装励行のポスターを掲示しコスト意識・省エネ意識の徹底を図り、警備業務契約の入札でも業務の効率化を図った。新型コロナウイルス感染拡大防止のためのオンライン会議への移行、ペーパーレス化の推進に取り組んだ。またフレックスタイムの導入や施設管理業務及びネットワーク管理業務の外部委託による管理業務の効率化も図った。

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置**1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置****【計画】**

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

- ・所内に自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関することを目的とした自己点検・評価委員会（委員6人）と研究所が実施する共同研究プロジェクトの推進及び連携・調整を図ることを目的とした共同研究プロジェクト推進会議と連携して開催し、PDCAサイクルを管理している。
- ・自己点検及び評価の検証を行うための所外の専門家8名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置**【計画】**

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

【実績】

- ・国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加えて、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営の評価をまとめた外部評価報告書を、ウェブサイト及び『国立国語研究所年報』を通じて公開した。

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》

計画どおり実施している

自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関しては、計画通りの成果を達成した。

評価の充実に関しては、所内に自己点検・評価委員会と共同研究プロジェクト推進会議に設置し PDCA サイクルを管理し、さらに所外の専門家 8 名で構成される外部評価委員会による機関拠点型基幹研究プロジェクトの自己点検評価・外部評価を実施した。

情報公開や情報発信等の推進に関しては、国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書に加え、外部評価委員会による研究系・センターの実績及び組織運営についての外部評価報告書をウェブサイト及び『国立国語研究所年報』で公開した。

その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置

1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】

施設整備・既存施設の維持管理及び省エネルギー対策を実施する。

【実績】

- ・ 定期的な施設・設備の点検結果及び日常的な研究所内外の施設点検等（木の剪定、通路の補修等）により、計画的な維持管理を行い、職員及び利用者の適切な予防安全に努めた。
- ・ 研究所内の事務室内、廊下やエレベータ前、トイレに、電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示し、職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図った他、4階テラスに遮光及びグリーンカーテンを設置し、昨年度に引き続き省エネを図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】

危機管理に関するマニュアルに基づく訓練や研修等を実施する。

【実績】

- ・ 災害発生時など非常時における、情報システム・ネットワークの復旧・稼働維持に関する対応・情報等について集約する。「非常時における情報システム・ネットワーク 対応一覧表」を作成した。
- ・ 新型コロナウイルス感染防止の観点から研究所での消防訓練実施を変更し、12月21、22日の両日に、立川防災館でVR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練等を実施し24名が参加した。

3. 法令遵守等に関する目標を達成するための措置

【計画】

公的研究費の適正な使用に関する研修会等及び研究倫理教育等を実施し、受講者の理解度チェック及び受講状況の管理監督を行う。また、情報セキュリティに関する研修を実施する。

【実績】

- ・ 日本学術振興会が提供している研究倫理eラーニングコース[eL CoRE]を新規採用の研究者11名に受講させるとともに、採用時オリエンテーションを実施した。また、人間文化研究機構令和2年度コンプライアンス教育研修会及び研究倫理教育研修会（11月19日）に35名を参加させた（昨年比1.67倍）。
- ・ 人間文化研究機構本部主催の各情報セキュリティ研修・訓練を対象者に受講させた。
- ・ セキュリティインシデント発生時の対応フローの見直しを行い、周知した。

- ・コロナ禍における在宅勤務対応として、セキュリティ強度の高いリモートデスクトップサービスを導入するとともに、在宅勤務時のセキュリティ確保、標的型攻撃メールへの対応、Zoomの推奨セキュリティ設定等に関する注意喚起を行った。
- ・新たなセキュリティ分析・レポートツールを導入し、研究所ネットワークの監視機能を強化した。

自己点検評価

計画どおりに実施した

《評価結果》

計画を上回って実施している

その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき処置に関しては、計画を上回る成果が達成された。

施設設備の整備・活用等に関しては、定期的な施設・設備の点検が行われ、職員・利用者の適切な予防安全が図られた。研究所内のさまざまな場所に電力節減、夏期の軽装励行のポスターを掲示するなど、職員のコスト意識・省エネ意識の啓発を図るとともに、4階テラスにグリーンカーテンを設置し省エネを図った。

安全管理に関しては、災害発生時など非常時用の「非常時における情報システム・ネットワーク対応一覧表」を作成し、また立川防災館でVR防災体験や応急救護訓練等4種類の防災体験及び救護訓練等を実施した。

法令遵守等に関しては、新規採用の研究者に対して公的研究費の適正使用や研究倫理についての教育を施し、また35名をコンプライアンスや研究倫理の研修会に参加させた。情報セキュリティに関しては、情報セキュリティ研修への対象者の参加、セキュリティインシデント発生時の対応フローの見直し、コロナ禍における在宅勤務に対するさまざまなセキュリティ強化対策、また新たなセキュリティ分析・レポートツールの導入による研究所ネットワークの監視機能の強化などを行った。

【総合評価】

業務運営の改善及び効率化、財務内容の改善、自己点検・評価及び当該状況に係わる情報の提供、その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置のすべての項目にわたって、はほぼ計画通りか、計画を上回る成果を達成している。コロナ蔓延の困難な状況を考慮すれば、全体的にきわめて良好な管理業務が行われていると評価できる。

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 坂原 茂 東京大学名誉教授
専門： フランス語学，認知言語学
- 小野 正弘 明治大学教授
専門： 国語学・国語史
- 上山 あゆみ 九州大学教授
専門： 生成文法・日本語統語論
- 沖 裕子 信州大学名誉教授
専門： 談話，方言，日本語教育
- 片桐 恭弘 公立はこだて未来大学学長
専門： 情報科学，社会言語学
- 砂川 裕一 群馬大学名誉教授
専門： 哲学，比較文化基礎論，言語文化教育論，日本語日本事情教育論
- 橋田 浩一 東京大学教授
専門： 自然言語処理
- 森山 卓郎 早稲田大学教授
専門： 日本語学，日本語文法

任期：令和2年10月1日～令和4年9月30日（2年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所令和2年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、共同研究プロジェクト及び機関拠点型基幹研究プロジェクトにおける研究計画の実施状況について、プロジェクトの代表者が行った自己点検評価及び実績報告書の妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、令和2年度の計画及びその実施状況が記入された「2年度業務の実績報告書」（「プロジェクト・センターの研究活動」、「管理業務」）の内容を検証した。

「プロジェクトの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次のとおりである。

点検項目	観 点
研究成果 (研究) (共同利用)	研究業績の量的側面 ・ どれだけ論文等のアウトプットがあるか
研究水準 (研究) (共同利用)	研究業績の質的側面 ・ どれほど学術的意義や社会的意義があるか
研究体制 (研究) (共同利用)	研究推進にあたっての制度的側面 ・ どれだけ大学と組織的に連携し、大学の機能強化に貢献しているか
教育	研究過程及び研究成果の教育的普及 ・ どれほど大学等の機能強化に貢献しているか
人材育成	若手研究者の育成、及び社会人の学び直し ・ どれだけ受け入れて取り組んでいるか
社会連携	自治体・産業界との連携など社会との協業 ・ どれほど社会と連携しているか
社会貢献	研究成果の社会への普及 ・ どれほど社会に向けて発信しているか
国際連携	研究体制における国際的協業 ・ どれだけ海外の組織と連携しているか
国際発信	研究過程及び研究成果の国際的発信 ・ どれだけ国際的に発信しているか
その他特記事項	

機関拠点型基幹研究プロジェクト一覧

研究領域	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・対照研究領域	対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法	対照言語学	窪菌 晴夫
理論・対照研究領域	統語・意味解析コーパスの開発と言語研究	統語コーパス	プラシャント・パルデシ
言語変異研究領域	日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成	危機言語・方言	木部 暢子
言語変化研究領域	通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開	通時コーパス	小木曽 智信
音声言語研究領域	大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究	日常会話コーパス	小磯 花絵
日本語教育研究領域	日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明	学習者のコミュニケーション	石黒 圭

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日
国 語 研 規 程 第 7 号
改正 平成 28 年 4 月 1 日
改正 平成 31 年 4 月 1 日

(趣旨)

第1条 この規程は、国立国語研究所組織規程（国語研規程第1号）第16条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第2条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第3条 委員会は、10名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第4条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第8条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第9条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第10条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成21年10月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

国立国語研究所外部評価委員会【令和２年度実績評価】（第１回）

日 時： 令和３年８月５日（木） １０：００～１２：００

場 所： オンライン会議（ZOOM）

議 事：

- １． 前回議事概要（案）確認
- ２． 機関拠点型基幹研究プロジェクト評価について
- ３． 令和２年度共同研究プロジェクト評価について
- ４． 令和２年度「コーパス開発センター」及び「研究情報発信センター」の評価について
- ５． 令和２年度「組織・運営」，「管理業務」の評価について
- ６． その他
 - ・ 第３期中期目標期間（４年目終了時）に係る業務の実績に関する評価の結果について（報告）
 - ・ 大学共同利用機関の検証結果について（報告）

資 料：

- １． 国立国語研究所外部評価委員名簿（令和３年４月１日現在）
- ２． 国立国語研究所外部評価委員会規程
- ３． 前回議事概要（案）（令和２年９月１０日）
- ４． 国立国語研究所プロジェクト別 令和２年度評価担当
- ５． 機関拠点型基幹研究プロジェクト実績報告書及び評価報告書
- ６-１～６-６． 令和２年度共同研究プロジェクト自己点検報告書及び令和２年度共同研究プロジェクト評価結果
- ７-１～７-２． 令和２年度国立国語研究所２センターに関する実績報告書及び令和２年度国立国語研究所２センターに関する評価結果
- ８． 令和２年度「組織・運営」，「管理業務」に関する評価結果
- ９． 令和２年度業務の実績に関する外部評価報告書の構成について
- １０-１～１０-６． 第３期中期目標期間（４年目終了時）に係る業務の実績に関する評価の結果について自己検証結果
- １１-１～１１-３． 大学共同利用機関の検証結果

国立国語研究所 年報 2020 年度

2022 年 3 月 28 日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL: 0570-08-8595 FAX: 042-540-4333

<https://www.ninjal.ac.jp/>

